

漢書張禹傳に「新學小生、一誤人宜無信用」
また詩文の蕪穢なるをいふ、歐陽修の答、連職方簡に

【卯塔】 梵語の卒塔婆なり、文字禪に「白雲之衝、一已成」

【蘭亭】 王羲之の蘭亭集序に
永和九年、歲在癸丑、暮春之初、會于會稽山陰之蘭亭、

修禊事也、群賢畢至、少長咸集、此地有崇山峻嶺、茂林修竹、又有清流激湍、映帶左右、引以為流觴曲水、列坐其次、雖無絲竹管絃之盛、一觴一詠、亦足以暢敘幽情、是日也、天朗氣清、惠風和暢、仰觀宇宙之大、俯察品類之盛、所以游目騁懷、足以極視聽之娛、信可樂也、夫人之相與、俯仰一世、或取諸懷抱、悟言一室之內、或因寄所託、放浪形骸之外、雖趣舍萬殊、靜躁不同、當其欣於所遇、暫得於己、快然自足、曾不知老之將至、及其所之既倦、情隨事遷、感慨係之矣、向之所欣、俯仰之間、已為陳迹、猶不能不以之興懷、況脩短隨化、終期於盡、古人云、死生亦大矣、豈不痛哉、每覽昔人興感之由、若合一契、未嘗不臨文嗟悼、不能喻之於懷、固知一死生為虛誕、齊彭殤為妄作、後之視今、亦猶今之視昔、悲夫、故列敘時人、錄其

所述雖世殊事異、所以興懷、其致一也、後之覽者、亦將有感於斯文、明一統志に「一在山陰縣西南二十五里」

【藍鼎元】 字は玉霖、鹿洲と號す、清の福建漳浦の人、雍正の朝、薦を以て召試を得、知縣を授けらる、官に在りて政聲あり、程朱の學に通じ、詩文を善くす、兄廷珍の臺灣の賊朱一貴を討ずるや、鼎元その參謀たり、著すところ鹿洲初集二十卷あり、平臺紀略を參看せよ

【蘭亭ノ本】 駿臺雜話尤物人を移すに見ゆ、王羲之の蘭亭記の真本をいふ、この記は晉の穆帝の永和九年の暮春の初に、會稽山陰の蘭亭に會し、禊事を修せし時の景物感懷を述べたる文なり、前の(蘭亭)を見よ、この記の真本につきては、書言故事に「蘭亭真本傳、徵之、徵之傳、七世孫智永、智永傳、弟子辨才、辨才本貞觀中歸禁中、と見えたり、古今事類全書別集卷二に「唐太宗有大王真蹟三千六百紙、率以一丈二尺、為軸、寶惜者蘭亭為最、嘗附耳詔、高宗曰、吾千秋萬歲後與吾蘭亭將去、遂以玉匣貯藏、昭陵云云、この事書斷にも見ゆ、歐陽修の集古錄目序の沈德潛の評に「蘭亭殉葬殊為至情」

【鸞鳥】 廣雅釋鳥に「一風凰屬也、孝經援神經に「德

【蘭田】 蘭の「ハタケ」張協の洛禊賦に「停駕蕙渚、稅鶴一、蘭畹蘭疇、蘭苑蘭圃皆同じ、

【藍錠】 「アキゾメ」本草集解に「波斯青黛亦是外國一花」

【藍田】 縣の名、兩漢は京兆尹に屬す、晉北魏は雍州京兆郡に屬す、今の陝西西安府一縣の西三十清里に在り、南宋南齊のは、雍州華山郡に屬す、按ずるに當に湖北襄陽府の境に在るべし、隋唐以後のは今の一縣治これなり、

また美玉の名、穀梁傳に「此晉國之寶也」の注に「玉有美惡、出處不同、周有一、楚有和氏、宋有結綠、晉有垂棘、各是國之貴物、次條を參看せよ、

【藍田之玉】 藍田山は、玉の產地なり、班固の西都賦に「陸海珍藏、藍田美玉」

また人の父子を稱譽して、藍田生玉といふ、吳志諸葛恪傳に「恪少有才名、發藻岐嶷、辨論應機、莫與爲對、孫權見而奇之、謂其父瑾曰、藍田生玉、真不虛也」
また容貌の美なるを藍田出玉といふ、宋書謝莊傳に「莊韶令美容儀、太祖見而異之、曰、藍田出玉、豈虛也哉」
【蘭ニ秀テタルアリ】 (蘭秀)を見よ、

【蘭入】 蘭は安なり、符傳(シルシ)なくして安に入るをいふ、ハットノトコロヘイル、漢書成帝紀に「一尚方掖門、唐律に「諸一、大廟門及山陵兆域門者、徒三年」

【蘭若】 無諍また閑靜處などと翻す、寺または僧庵をいふ、韻會に「浮屠所居、西域謂之一、(阿一一)を見よ、

【欄ニ凭ル】 (凭欄)欄(テスリ)に「モタレヨル義、李中の句に「月在高樓、獨一一」また憑欄また倚欄に作る、同じ、

【蘭梅】 蘭と梅と、瓊娘記に「管夫人性嗜一一」下筆精妙、不讓水仙、

【爛敗】 「タダレテ、クサル」晉書に「帳下、甘果一一、令棄之、

【藍袍】 「アキイロ」の内衣(ナカキ)廣韻に「袍、長襦也」本草に「逸史云、唐高祖時、鍾馗應舉、不第、觸階而死、後明皇夢有小鬼、盜玉笛、一大鬼破帽一一、捉鬼、啖之上問之、對曰、臣終南山進士、鍾馗也、蒙賜袍帶之葬、誓除天下虛耗之鬼、乃命、吳道士圖象傳之天下、

【爛斑】 爛斑また爛爛に同じ、マダラにして色の純ならざる貌、後漢書南蠻傳に「衣裳一一、語言侏離、また

蘇軾の月華寺詩に「高巖夜吐金碧氣、曉得異石青爛斑、また柳宗元の詩に「食貧甘莽齒、被褐謝爛爛」

【爛畔】「テスリ」の「ホトリ」羅隱の柳詩に「一簇青煙鎖玉樓、半垂一一半垂溝」

【婪尾】最後の義なり、楊萬里の詩に「破除一景領、略打頭清、次條を見よ、

【藍尾】最後に飲む酒杯を「酒」といふ、藍は婪に通ず、食するなり、最後は得る所多く、貪婪の義あり、仇池筆記に「蘇鵬云、以酒巡匝、爲婪尾、一作「白居易の歳日家宴詩に「歲盡復推一酒春盤先勸膠牙餠」

【婪尾春】芍薬の異名、春時、百花に後れて開くに由りていふ、群碎録に「桑維翰云、唐末文人謂芍薬爲「一蓋婪尾酒乃最後之杯、芍薬殿春故名」

【懶婦】懶は怠る、「モノウシ」と訓す、「一」は「シゴトギラヒ」の妻、石林詩話に「槐花黃、舉子忙、促織鳴、「一」

【欄邊】「テスリ」の「ホトリ」薛能の詩に「一清酒落花多」

【鸞鳳霄ニ冲スルハ必ズ羽翼ヲ假ル】「鸞鳳冲霄、必假羽翼」鸞や鳳凰が高く天に上るは羽翼の助を假る、以て、天子の尊は良臣の輔に頼るに喩ふ、唐書馬周傳に

西曰、勝如卵、余翼而長之、とあるに本づく、勝は公孫勝、蘇轍の乞誅竄呂惠卿狀に「一之恩」とあり、唐書玄宗紀に「姚崇曰、魏知古微時、臣卵而翼之」

【鸞】瘠せたる貌、詩經檜風に「棘人「一」兮、棘は「スミヤカ」「セマル」

【爛爛トシテ巖下ノ電ノ如シ】目の光るに喩へていふ、爛爛は「キラキラ」と光る貌、晉書の王戎傳に「戎幼、穎悟、神彩秀徹、視日不眩、裴楷見目之曰、戎眼爛爛如巖下電」

【蘭陵】西漢東漢音北魏の縣名（北魏ハ郡名ニモアリ）今の山東兗州府嶧縣の東五十清里、明一統志に「一城在常州府城北八十里、萬歲鎮西南、歷朝同名異地あり、詳しくは地理志韻編卷十を見よ、李白の客中行に「一美酒鬱金香、玉腕盛來琥珀光」

【蘭陵王】舞曲の名、一に羅陵王に作る、北齊の「一長恭、常に假面を著けて戦ふ、嘗て周の師を金墪城下に撃つ、勇三軍に冠たり、齊人壯なりとしてこの舞を作り、以てその指麾撃刺の容に效ふ、これを「一入陣の曲」といふ、北齊書蘭陵王孝瓘傳を參看せよ、

【藍縷】敝衣（ヤブレゴロモ）なり、左傳宣十二年に「華路「一」以啓山林、また、筆路「一」以處草莽、孟郊の織

「帝嘗以飛白書賜周曰「一」「一」「一」「一」「一」股肱之寄、要在忠力」

【瀾漫】「ミダラル」貌、淮南子に「夏桀之時、王闔晦、而不明、道「一」而不修、張協七命に「一」狼籍」

【瀾漫】分散の貌、「チラバル」王延壽魯靈光殿賦に「流離「一」また莊子在宥篇に「大德不同、而性命「一」矣」

一解に光り輝く貌、また物の満ちて溢れんとする状をいふ、漫を煇に作るは、六朝後に、これを謬れるなり、

【鸞鳴】孫氏瑞應圖に「鸞鳥、鳳凰之佐也、鳴中、五音喜、則鳴舞、また、鸞識、鐘律、鐘律調、則鸞舞、以應之」

【籃輿】「アジロノコシ」正字通に「竹篋一名、編輿、晉以來謂之「一」云云、復輿に同じ、

【蘭輿】正字通に「一」即籃輿、「アジロノコシ」蘭は籃と通用す、

【鑾輿】天子の乘輿をいふ、鑾鈴を備ふ、故にいふ、鑾鈴は、鸞鳥の聲の和するに象る、班固の西都賦に「乘「一」備「法駕」一本に鸞を鑾に作る、

【卵翼】養ひ育てて長ぜしむる義、左傳哀十六年に「子

婦詩に「如何織、純素自著「一」衣」

【藍縷】「ヤブレゴロモ」揚子方言に「南楚凡人貧、衣被醜弊、謂之「一」藍は藍に通ず、前條を見よ、

【蘭露】蘭の「ツユ」陳普弟子清夜遊賦に「荷風「一」沐我以芳馨、梧月菊霜、粹我以潔白、蘇軾の茶詩に「香濃奪「一」色、嫩期秋菊」

【鸞路】天子の「ミクルマ」路は輅に同じ、禮記月令に「孟春之月、天子乘「一」駕蒼龍、後漢書輿服志の注に「賀循曰、車必有鸞、而春獨「一」者、鸞鳳類、而色青、故以名、春路也」

【鑾輅】天子の「ミクルマ」呂覽孟春に「乘「一」前條に同じ（鑾和）を參看せよ、

【羅文】文は紋に同じ、ウスギヌノアヤ、李羣玉の詩に「沉水「一」海燕回」

また硯の異名、蘇軾の萬石君「一」傳に「中書舍人「一」久典書籍、助成文治、厥功茂焉云云」

【蠶蠶】行列の貌、劉向九歌に「登長陵、而四望兮、覽芷圃之「一」

【羅倫】字は彝正、明の永豊の人、成化二年の進士、翰林修撰より南京供職に遷り、尋て疾を以て職を辭し、帷を下し徒に授け、注經を以て業とすること始と十年、

卒して奉訓大夫左春坊左諭徳を贈り、文毅と諡す、學者一峰先生と稱す、著すところ羅一峰集十卷あり、その靈星門記略の一篇は王守仁、稱して識見高明と爲す、簡明目録に、倫、孤高堅忍、一生輒語ヲ作ル能ハズ、其ノ文剛勁ノ氣、楮墨ニ溢ル、詩モ亦磊砢不凡ナリ、惟古義ヲ過執シ、變通スル所ロ少ク、舊文ヲ疊引スルニ、鎔化ヲ失スル者時時之レアリ、然レドモ其ノ宏旨ヲ害セザルナリ云云

【羅縷】「ツラネ、ノブル」次條に同じ、左思吳都賦に「難得而一」

【觀縷】觀は次序なり、羅に通ず、觀に作るを正とす、文選左思の吳都賦に「嗟難得而觀縷」柳完元の寄許孟容書に「雖欲乘筆一、神志荒耗」とあり、一は委曲といふが如し、

【羅列】「ツラナリ、ナラブ」韓愈の答竇秀才書に「一而進」

【騾驢】騾は羸に同じラバ、驢はウサギウマ、凡庸の人に喩へていふ、丁儀の勵志詩に「恨一之進庭、屏騾驢於溝壑」

書洛陽名園記後

李格非

洛陽處天下之中、挾二穀、冠之阻、當秦隴之襟、喉、而二趙、魏之走集、蓋四方必爭之地也、天下當無事則已、有事則洛陽必先受兵、余故嘗曰、洛陽之盛衰、天下治亂之候也、方唐貞觀、開元之間、公卿貴戚、開三館、列第於東都、者、號千有餘邸、及其亂離、繼以三季之酷、其池塘竹樹、兵車蹂躪、廢而爲丘墟、高亭大榭、煙火焚燼、化而爲灰燼、與唐共滅而俱亡、無餘處一矣、余故嘗曰、園園之興廢、洛陽盛衰之候也、且天下之治亂、候於洛陽之盛衰、而知、洛陽之盛衰、候於園園之興廢、而得、則名園記之作、余豈徒然哉、嗚呼、公卿大夫、方進於朝、放乎一己之私、自爲之、而忘天下之治忽、退欲享此得乎、唐之末路是已、

リ

【利】利得なり、論語子罕篇に「子罕言利、與命、與仁」一說ニ、子罕言利、與命、與仁ト讀ム、利ハ衆ノ求メテ惑フ所ロ、故ニ罕ニモ利ヲ言フトキハ、天命ト仁ト共ニ説キタマフ義ナリト、莊子駢拇篇に「小人以、身殉利」また禮記の坊記に「先、財而後、禮則民利」の註に「利ハ猶ホ貪ノ如キナリ」史記平原君列傳の贊に「鄙語曰、利令智昏」抱朴子に「不爲、利欲、動、不爲、囑託」屈、騶冠子に「臨利而後、可以見信、臨財而後、可以見仁」また己に都合よき義、漢書高帝紀に「徙、齊楚大族五姓關中、與、利田宅」註に「利ハ、便好ヲイフ」また廣韻に「吉也、宜也」と解す、易の賁卦に「利、有、攸往」また利益なり、鹽鐵論に「利、不、從、天來、不、從、地出」淮南子に「興、利、除、害、伐、亂、禁、暴、則、成、功」史記商君列傳に「利、不、百、不、變、法、功、不、十、不、易、器」また銳なり、堅甲利兵と連用す、漢書龜錯傳に「兵、不、完利、與、空手同」

リーリウ

【驪】説文に「馬深黑也」クロウマ、禮記に「仲冬之月、天子駕鐵一」また驪歌は離別の時に歌ふ歌なり、漢書儒林傳に「王式曰、聞之於師、客歌驪駒、主人歌客母庸歸」の注に「其辭云、驪駒在門、僕夫具存、驪駒在路、僕夫整駕」

【遷】斜めに連なる貌、吳質の書に「夫登東嶽者、然後知衆山一也」また連延と「ツヅク」義、杜牧の阿房宮賦に「鼎鑄玉石、金塊珠璣、棄擲一」

【嫠緯ヲ恤ヘズ】（嫠不恤緯）身を忘れて國を憂ふるをいふ、左傳昭二十四年に「鄭子大叔曰、抑人亦有言曰、一、一、一、而憂宗周之隕、爲將及焉、嫠は寡婦（ヤモメ）なり緯は（ヌキ）經（タテ）に錯へて織物となる、寡婦が己の業とする、ヌキイトの事を恤へずして、周室の隕亡せんことを憂ふるは、其禍の己の身に及ばんことを恐れてなり、寡婦すら此の如し、まして士大夫たるものは國事を憂へざるべからずとの意を寓せり、蒲生君平の著書、不恤緯は、この語に本づきて名づけたるなり、

【留】兩漢音、南宋、北魏隋の縣名、西漢は楚國に屬し、東漢音は徐州彭城國に屬し、南宋以後は、彭城郡に屬す、今の江蘇省徐州府沛縣の東南、

【柳暗】柳の茂りて暗きをいふ、歲華紀麗に「風暖カニヤ而ニ燕南雁北、日和而一花明カヲ」歐陽修の重贈劉原父詩に「新年花發見回雁、歸路一藏嬌鴉カ」陸游の詩に「山重水複疑無路、一花明又一村」

【劉安世】字は器之、航の子、進士に第し、官に就かず、司馬光に従ひて學び、心を盡し己を行ふの要を問ふ、光之に教ふるに誠を以てし、且つ妄語せざるより入らしむ、後仕へて臺諫となり、事を論ずるに剛直なりしかば、一時敬憚して、之を目して殿上の虎と曰ふ、安世儀狀魁碩、音吐鐘の如く、忠孝正直、家に居て未だ嘗て惰容あらず、嘗て曰く、吾元祐の全人となり、司馬光に地下に見えんことを欲するなりと、

劉氏人譜に「劉安世賓客ヲ見テ談論時ヲ踰ユト雖モ軀體ヲ歌側スルコトナク、肩背竦直ニシテ、身少シモ動カズ、手足ニ至ルマデ亦移ラズ」

また、宋時別に「一といふ人あり、字は平叔、安福の人、楊萬里之を師とす、卒して門人清純先生と私諡す、

【留意】(意ヲ留ム)心を或る事物に注ぐをいふ、史記樂毅傳に「敢獻書以聞、惟君王一焉留神に同じ、

【柳意】柳の「コロコロ」李商隱の向晚詩に「花情羞脈脈、一恨微微」

【柳陰】「ヤナギ」の「カゲ」司空圖詩品に「碧桃滿樹、風日水濱、一路曲流、鶯比鄰、楊萬里の聞鶯詩に「飛入一多處、去、數聲只許落花知」

【劉因】元の容城の人、天資穎悟人に絶す、而して心を性理の學に留む、家貧しと雖も、その義に非ざれば一介も取らず、隱居して教授す、至元間、徵されて右贊善大夫を授けられ、卒して翰林學士を贈られ、文靖と諡し、容城郡公に封じ、靜修先生と號す、

【劉禹錫】唐の詩人なり、柳宗元と同時に進士に擢てられ、博學鴻詞の科に登り、文章を工にす、累官して集賢直學士に至り、出でて蘇州の刺史となる、政の最たるを以て金紫服を賜ひ、太子賓客に遷る、晚年文章を以て自ら適す、白居易、推して詩豪となす、舊唐書に「一字夢得、彭城人、貞元末、王叔文於、東宮用事、後輩務進、多附麗之、禹錫尤爲、叔文、知獎、叔文敗、坐、貶、連州刺史、在道、貶、朗州司馬、元和十年召還、以詩語涉、譏刺、後出爲、播州刺史、裴度爲、言、之、乃授、連州刺史、會昌二年卒、贈、戶部尚書、禹錫、卒する年七十一、著、すところ劉賓客文集二十卷、外集十卷あり、

【柳營】細柳營の略、將軍の陣屋をいふ、漢書の周勃傳に「文帝ノ後六年ニ、匈奴大ニ邊ニ入ル、宗正劉禮ヲ以

夫は周勃の次子なり、李庚の賦に「依、榆關、以作、鎮、拒、一而開壁、李商隱の詩に「芙蓉王儉府、楊柳亞夫、

【柳腰】庾信の和人日晚景宴昆明池詩に「上林一細、新豐酒徑多、

また美人の腰をいふ、溫庭筠の南歌子詞に「轉盼如、波、眼、娉婷似、柳腰、

【柳葉】戰國策に「楚有養由基、者善射、去一者百步而射之、百發百中、

また眉に喩へていふ、劉禹錫の深春詩に「人眉新一、馬色醉桃花、次條を見よ、

【柳葉眉】柳の葉の如き細長き眉、梁元帝の詩に「柳葉生眉上、葛長庚の詩に「煙描一」楊維禎の詩に「湖上女兒一」

【柳煙】柳にこめたる煙、陸輔之の詞旨に「都負了、燕約、鶯期、更閑却、一花雨、

【劉惔】清風朗月ニ玄度ノナキヲ恨ム、十訓抄第五に見ゆ、晉書列傳に「劉惔字ハ眞長、沛國相人、少清遠、家貧、晏如、王導深器之、舊注云、惔夜在、簡文座、愀然歎曰、清風朗月、恨無、玄度、とあり、玄度は許詢の字、晉の高士なり、晉書列傳に詳かなり、

テ將軍トナシ、霸上ニ軍セシメ、祝茲侯徐厲ヲ將軍ト爲シ、棘門ニ軍セシメ、河内ノ守亞夫ヲ以テ將軍トナシ、細柳ニ軍セシム、以テ胡ニ備フ、上自ラ軍ヲ勞ヒ、霸上及ビ棘門ノ軍ニ至ル、直チニ馳セテ入ル、將ヨリ以下騎シテ出入送迎ス、己ニシテ細柳ノ軍ニ之ク、軍ノ士吏甲ヲ被リ、刃ヲ銳クシ、弓弩ヲ發リテ滿ヲ持ス、天子ノ先驅至ル、入ルヲ得ズ、先驅ノ曰ク、天子且ニ軍門ニ至ラントスト、都尉ノ曰ク、軍中ニテハ將軍ノ令ヲ聞キテ、天子ノ詔ヲ聞カズト、頃クアリテ上至ル、又入ルヲ得ズ、是ニ於テ上、使ヲシテ節ヲ持シテ將軍ニ詔シテ曰ク、吾軍ヲ勞ハント欲スト、亞夫適チ傳言シテ壁門ヲ開カシム、壁門ノ士、車騎ニ請ヒテ曰ク、將軍約スラク、軍中ニテハ驅馳スルヲ得ズト、是ニ於テ天子適チ轡ヲ按ジ徐行シテ中營ニ至ル、將軍亞夫揖シテ曰ク、介冑ノ士ハ拜セズト、請フ軍禮ヲ以テ見エント、天子爲メニ動キテ容ヲ改メ車ニ式シ、人ヲシテ稱謝セシム、皇帝敬ンデ將軍ヲ勞フト、禮ヲナシテ去ル、既ニ軍門ヲ出ヅ、群臣皆驚ク、文帝曰ク、嗟乎此眞ノ將軍ナリ、サキノ霸上、棘門ハ、兒戲ノ如キノミ、其ノ將固ヨリ襲ヒテ虜ニス可キノリ、亞夫ニ至リテハ、得テ犯スベクヤト、善ト稱スルモノ久之ス」とあるに本づく、亞

【劉駕】字は司南、唐の江東の人、大中六年の進士、國子博士に官す、古詩を以て時に鳴る、早行を參看せよ、

【流行】水の流れ去りて定位なきが如きをいふ、國語に「天殃一國家代有代は更なり、

また廣く「ユキワタル義、孟子公孫丑上篇に「德之、速於置郵而傳命、また俗に物事の「ハヤル義にも用ふ、

【劉孝綽】小字は阿士、南北の時の人、七歳能く文を

作る、神童の稱あり、辭藻世の宗とする所となる、時にその文を重んじ、一篇を作る毎に朝に成り暮に編し、好事者咸誦し、傳寫流聞す、河朔の亭苑の柱壁之を題せざるなし、文集數十萬言時に行はる、兄弟及び群從子姪當時七十人あり、竝に能く文を屬す、近古未だこれあらざるなり、齊の武帝の時秘書丞に累遷す、

【柳下惠】淮南子の注に「展禽之家、有柳樹、身行惠德、

因號「柳下惠」、一曰「邑名、展禽、一名は獲、字は季、魯に仕へて士師と爲る、卒して惠と謚す、孟子曰く「一、一ハ聖ノ和ナル者ナリ、

【柳下惠道ヲ直クス】論語微子篇に「一、一ハ爲士師、

三黜、人曰、子未可以去乎、曰、直道而事人、焉往而不三黜、枉道而事人、何必去、父母之邦、士師は

獄官なり、刑官を士といひ、その長を師といふ、道を直くして行ひ三たび黜けらるるを以て辱とせず、その人と爲りの和にして介なることを知るべし、

【柳下ニ鍛ス】晉書嵇康傳に「康性絶巧、而好鍛、宅中

有一柳樹甚茂、乃激水圍之、每夏月居其下以鍛、

【柳眼】「ヤナキノシンメ」元稹の生春詩に「何處生春

早、春生一、中、李商隱の二月二日詩に「花鬢一、各無頼、紫蝶黃蜂俱有情、

【隆寒】「ハダシキ、サムサ」嚴寒に同じ、魏志王昶傳に

「夫物速成、則疾亡、晚就、則善終、朝華之草、夕而零落、松柏之茂、一、不衰、

【龍眼】熱地に産する果の名、正圓にして六七分、皮に

微細紋あり、茶褐色なり、内空くして、正中に一核あり、枇杷の核の如し、その中の肉を「一、肉」といひ、薬用とす、後漢書和帝紀に「舊南海獻「一、荔枝、

【劉基】字は伯温、覆誡と號す、明の青田の人、博く經

史に通ず、元の進士、後ち官を棄てて、歸隱す、明の初召されて金陵に至り、時務十八策を陳す、是より太祖を佐けて天下を定む、慷慨にして大節あり、天下の安危を論ずるに、義氣色に形る、帝任ずるに腹心を以てし、常に老先生と呼びて名いはず、曰く、わが張子房な

りと、累遷して御史中丞兼弘文館學士を授けられ、誠意伯に封ぜらる、宋濂と並びに一代の文宗と稱せらる、著す所、郁離子、覆誡集、寫情集、犁眉公集等あり、

【誠意伯文集】を參看せよ、

【流求】柳文の嶺南節度使軍堂記に見ゆ、即ち今の琉球なり

【劉器之】(劉安世)を見よ

【劉謹至孝】劉謹は明の浙江山陰の人、明史に「洪武中

父法ニ坐シテ、雲南ニ戍ス、謹方ニ六歳、家人ニ問フ、雲南ハ何クニアルカト、家人西南ヲ以テ之ヲ指ス、輒チ朝夕之ニ向ヒテ拜ス、年十四、嬰然トシテ曰ク、雲南萬里ナリト雖モ、天下豈父ナキノ子アラランヤト、身ヲ奮ヒテ往キ、六月ヲ閲シテ、其ノ地ニ抵ル、艱苦萬狀ナリ、

父ニ逆旅ニ遇ヒ、相持シテ號慟ス、俄ニシテ父瘋痺ヲ患フ、謹官ニ告ゲ、身ヲ以テ代ラント乞フ、國法ニ、邊ヲ

戍ル者ハ、必ズ年十六以上ノ嫡長男ニシテ、始メテ代ルコトヲ許スト、時ニ謹未ダ成丁ナラズ、而シテ伯兄謙ハ先キニ京師ニ死セリ、是ニ於テ、家ニ歸リ、兄ノ子ヲ携ヘテ以テ往ク、兄ノ子モ亦弱クシテ、自立スルコト能ハズ、乃チマタ歸リテ、悉ク其ノ産ヲ鬻ギテ、兄ノ子ニ與ヘ、始メテ其ノ父ヲ奉ジテ以テ還ルコトヲ得

タリ、家貧シケレドモ、謹力メテ甘旨ヲ營ミテ以テ養フ、人其ノ孝ヲ稱セリ

【流金鑠石】暑の烈しきをいふ(金ヲ流シ)を見よ、

【流金焦土】大暑極熱をいふ、莊子の逍遙游篇に「大旱金石流、土山焦、

【劉向】字は子政、もとの名は、更生、楚の元王四世の孫、年十二にして父徳の任を以て韋郎となる、既に冠して行修飾を以て諫議大夫となる、宣帝名儒俊材を招選するや、向之にあづかり、賦頌凡そ數十篇を獻す、

元帝位に即きて、散騎宗正給事中となり、諍を以て官を免ぜらる、成帝の朝に復起ちて光祿大夫となる、上

しばしば用ひて九卿たらしめんと欲すれども、王氏位に居る者に沮せられて遂に遷らず、列大夫に居ること三十餘年、建平元年卒す、年七十二、唐の貞觀十三年、孔子の廟に從祀す、著すところ列女傳、洪範五行傳

說苑新序等あり、

【劉向新序】(新序)を見よ、

【榴花】「ザクロナハナ」酉陽雜俎に「衡山祝融峰下法華寺、有石一、春秋皆發、韓愈の「一、詩に「五月「一、照眼明、枝開時見子初成、

【流光】光陰の移るをいふ、李白の詩に「逝川與「一、

飄忽、不相待。

また、月光波に「ウツリ」て流るるをいふ、前赤壁賦に「擊空明兮、分滄海」

【柳貫】字は道傳、元の浦江の人、幼にして異質あり、經史百家の書、通ぜざる所をなし、至正間、江山教諭より翰林待制兼國史編修に至り、虞集、揭傒斯、黃潛と名を齊うす、人號して儒林の四傑と稱す、文集四十卷、字系一卷あり、

【劉寬、溫恕】後漢書に「劉寬入ト爲リ、溫仁、恕愛ナリ、倉卒ノ閉ニ在リト雖、未ダ嘗テ疾言遽色セズ、夫人試ニ寬ヲシテ悲ラシメント欲シ、將ニ朝セントシテ裝嚴已ニ訖ハルヲ伺ヒ、婢ヲシテ肉羹ヲ捧ゲ、翻ヘシテ朝衣ヲ汚サシム、寬神色異ナラズ、乃チ言ヒテ曰ク、羹汝ガ手ヲ爛ラスコトナキカト」

【流血川ヲ成ス】（流血成川）死傷の多きをいふ、戰國策に「屠四十餘萬之衆、一、沸聲如雷、沸聲は悲號の聲なり、また書經武成に「血流漂杵、賈誼の過秦論に「追亡逐北、伏尸百萬、流血漂杵」とあるも同じ、鹵一に櫓に作る、櫓なり

【劉麗】字は彦和、梁の東莞の人、天監中、東宮通事舍人と爲り、歩兵校尉に遷り、舍人を兼ぬ、後僧と爲り、慧

隆、興「サカンニ、オコル」後漢書來歙傳に「今陛下聖德、風俗通に「堯者、高也、饒也、言其一煥炳最高明也」

【柳公權】公綽の弟、唐の華原の人、博く經術に通ず、元和の初の進士、仕へて侍書學士となる、穆宗嘗て筆法を問ふ、對へて曰く「心正、則筆正」と、帝その筆諫たるを悟る、文宗の朝、累遷して學士承旨となり、太子太保を以て致仕せり、子の公度、攝生を善くす、

【柳骨】柳公權の書の骨法を得たる義、蘇東坡跋范文正公祭曼卿文に「曼卿之筆、顏筋、一、散落、人聞、寶爲、神物」

【劉昆】字は桓公、陳留東昏の人、易に深し、子弟を教授すること五百餘人、王莽位を篡ふや、昆河南の負積山中に匿る、光武の時、江陵令弘農太守を歴て、徵されて光祿勳となる、帝召し問うて曰く、前に江陵に在りし

地と名づく、初め文心雕龍五十篇を著し、古今の文體を論じ、定を沈約に取らんと欲するも、自ら達するに由なし、乃ち書を負ひ、約に車前に候ふ、狀貨鬻者の如し、約取りて讀み大に之を重んじ、謂へらく深く文理を得たりと、

【流言】無根の言をいふ、詩經に「流言以對、書經に「流言於國、荀子致士篇に「一、流說、また大略篇に「流九止、於、既、止、於、智者」

【劉炫】字は光伯、隋の河間景城の人、強記默識、與に儔を爲す莫し、左に方を畫き、右に圓を畫き、口誦し、目數へ、耳聽く、五事同じく舉げて遺失あるなし、吏部其の能くする所を問ふ、炫自ら狀を爲りて曰く、周禮禮記毛詩尚書公羊左傳孝經論語の孔鄭王何服等の注、凡そ十三家、義精粗ありと雖も、竝に講授するに堪へたり、周易儀禮穀梁は功を用ふる差少し、史子文集、嘉言美行、咸心に誦す、天文律曆、微妙を窮數す、公私の文翰に至りては未だ嘗て手を假らずと、吏部竟に詳試せず、然れども在朝知名の士炫の陳する所を諤らずと保明す、是に於て殿内將軍に除せらる、時に牛弘奏請して天下の遺逸の書を求む、炫遂百に餘卷を偽作し、題して連山易、魯史記等と爲し、錄上して官に送り、

時、風を反し火を滅し、後に弘農に守たりし時、虎北して河を度れりと聞く、何の德政を行ひて是を致すかと、昆曰く偶然のみと、帝歎じて曰く、長者の言なりと、命じて策に書せしむ、

【流澌】氷解けて流るるなり、楚辭に「一、紛、今將來、下」

【柳絲】柳の枝の「タヤカ」なるをいふ、駱賓王の詩に「梅花如雪、柳如絲、年去年來不自持、楊萬里の過臨平蓮蕩詩に「想得薰風端午後、荷花世界一、一、鄉、汪廣洋の詩に「自起持魚貫、一、一」

【聊啾】耳の鳴るをいふ、楚辭九歎に「耳一、一、而懼、一、一」

【柳氏家訓】唐の柳玭、字ハ直清、公綽ノ孫、嘗て家訓を作りその子弟を戒めて曰く「夫壞名災己、辱先喪家、其失尤大者五、宜深誌之、其一、自求安逸、靡甘澹泊、苟利於己、不恤人言、其二、不知儒術、不悅古道、三、前經而不恥論、當世而解頤、身既寡知、惡人有學、其三、勝己者厭之、佞己者悅之、唯樂戲談、莫思古道、四、聞人之善、嫉之、聞人之惡、揚之、浸漬頹弊、銷刻德義、譬樞徒在、厮養何殊、其四、崇好優遊、耽嗜麴糵、以銜杯爲高致、以勤事爲俗流、習之易荒、覺已難悔、其五、急於名宦、匿近權要、一資半級、雖或得之、

リウコ—リウシ

衆怒羣猜鮮有存者余見名門右族莫不由祖先忠孝勤儉以成立之莫不由子孫頑率奢傲以覆墜之成立之難如升天覆墜之易如燎毛言之痛心爾宜刻骨

【流人】浮浪の人をいふ莊子に越之—去國旬月【留心】(心ヲ留ム)心を或る事物に注ぐをいふ文子微明篇に「聖人常從事于無形之外而不留心於已成之内」次條に同じ

【留神】(神ヲ留ム)心を或る事物に注ぐをいふ留心留意皆同じ後漢書郎顛傳に「丁寧再三—于此」

【流觴曲水】荆楚歲時記に三月三日四民並出水渚爲—之飲—また王羲之の蘭亭集序に「此地有崇山峻嶺茂林脩竹又有清流激湍映帶左右引以爲—」—とあり晉書束皙傳に晉ノ武帝尙書郎摯虞ニ問ヒテ曰ク三日曲水其ノ義何ヲ指ス答ヘテ曰ク漢ノ章帝ノ時平原ノ徐肇三月ノ初ヲ以テ三女ヲ生メリ三日ニ至リテ俱ニ亡ブ一村以テ惟トナシ乃チ相携ヘテ水濱ニ之キテ盥洗ス遂ニ水ニ因リテ觴ヲ泛ブ曲水此ニ起レリト帝イフ若シ談ズル所ロノ如ク便チ好事ニアラズト尙書郎束皙曰ク(中畧昔周公洛邑ニ城キ流水ニ因リテ酒ヲ泛ブ故ニ逸詩ニ羽

觴隨波トマタ秦ノ昭王三日ヲ以テ河曲ニ置酒ス金人アリ水心ノ劍ヲ奉ジテ曰ク君ヲシテ西夏ヲ制有シテ乃チ諸侯ニ霸タラシメント此ニヨリテ立テテ曲水ト爲スト帝大ニ悅ブ

【劉焯】字は士元隋の新都昌亭の人なり劉智海の家素より墳籍多し焯劉焯と之に就きて書を讀む十年出でず衣食繼がずと雖も晏如たり遂に儒を以て名を知らる員外將軍に除す後ち飛章のために誘せられ名を除かれ民と爲る郷里に優游し専ら教授著述を以て務と爲す賈馬王鄭の傳ふる所の章句是非する所多し九章算術周髀七曜曆書十餘部日月を推歩するの經山海を量度するの術その根本を嚴かにしその秘奥を窮めざるなし稽極曆書五經述義を著し竝に當世に行はる劉焯聰明博學名焯に亞く故に時人二劉と號す論者以爲らく數百年已來博學通儒能くその右に出づるものなしと煬帝の大業六年卒す年六十七

【留守】留守居番なり史記呂后紀に呂后年長常—希見上書言故事に唐制ニ車駕京ニ在ラザレバ則チ留守ヲ置ク

【榴樹】「ザクロ」安石榴といふ元稹の詩に「紅艷猶存」

柳絮

【柳絮】柳の「ワタ」暮春の頃亂れ飛ぶこと雪に似たり臆乘に「柳花ト—トハ迴然同ジカラズ葉閉ニ生ジ穗ヲ成シ鵝黃ヲ作ス者ハ花ナリ花既ニ褪シ帶ニ就キ實ヲ結ブ其ノ實ノ熟シテ亂飛スル綿ノ如キ者ハ絮ナリ古今吟咏往往絮ヲ以テ花ト爲シ花ヲ以テ絮ト爲シ素ヨリ分別ナシ一笑ヲ發スベシ杜工部ノ詩ニ雀啄江頭黃柳花ノ句アリ又生憎—白於綿ノ句アリ則チ花ト絮ト同ジカラザル顯然見ル可シ又曰ク簷徑楊花鋪白氈ノ句アリ又一時鹵莽ニシテ然ルニ非ルヲ得ンヤ花と絮との別はこの説の如く差別あるは勿論なれども廣義に解釋するときは絮はもと花の餘なれば互に通用するも差支なかるべし本草にも「柳花一名ハ絮」とあり(柳)を參看せよまた雪の異名とす下の(柳絮之才)を見よ

【柳色】柳の色の青たるをいふ王粲の江南春賦に「遠客堪迷朱雀之航頭—雞人莫聽鳥衣之巷裏鶯聲劉長卿の詩に「—孤城裏鶯聲細雨中楊萬里の行路難に「人生馬耳射東風—桃花却長久」

【柳絮之才】女子の才藻を譽めていふ晉の謝安嘗て諸子姪と内集す俄にして雪下る安曰く白雪の紛紛

流

たるは、何の似る所ろぞと兄の子郎が曰く鹽を空中に撒く差擬すべしと道蘊曰く未だ柳絮の風に因りて起るに若かずとあるに本づく兄とは安の兄謝奕なり道蘊は奕の女にして王凝之の妻なり

【流水韻】樂音の美妙なるを稱す列子に「伯牙鼓琴志在流水鍾子期曰善哉洋洋兮若江河」また李白の詩に「愧非—一叨入伯牙絃」

【流水腐せず戸樞蠹せず】(流水不腐戸樞不蠹)華子に持養の道を説きて曰く「流水之不腐以其逝故也戸樞之不蠹以其運故也身體を運動すれば健康を保ち得るに喩ふ呂氏春秋には蠹を蝶に作る

【隆盛】「サカンナル」義漢書文三王傳に「漢家—百姓殷富」

【流歡】大飲なり飲むこと流るるが如く止まるを知らざる義禮記の曲禮に「勿放飯勿—」

【隆準龍顏】史記高祖紀に「漢ノ高祖ハ人ト爲リ—ニシテ—美鬚髯アリ左ノ股ニ七十二ノ黒子アリ」隆は高なり準は鼻梁なり「ハナバシラ」の「タカキ」をいふ一解に準は頰權(ホホボネ)なりと

【流涎】垂涎に同じ食欲の切なるにいふ(涎ヲ流ス)を見よ

【流蘇】「フサ」なり、張衡の東京賦に「飛—の騷殺」の註に「—ハ五采ノ毛、之ヲ雜ヘテ以テ馬ノ飾ト爲シテ之ヲ垂ル、凡ソ下ニ垂ルルヲ蘇ト爲ス、騷殺ハ垂ルル貌」

【柳宗元】字は子厚、唐の河東の人、進士に第し、博學鴻詞の科に中り、貞元十九年監察御史に拜す、王叔文の黨に坐し、永州司馬に貶せらる、元和十年柳州刺史に徙され、同十四年卒す、年四十七、宗元速進を求め、功業立るに就るべしと謂ふ、遂に坐し廢せられて、復振はず、因りて自ら山水の間に放にし、文名一時を蓋ふ、世に韓柳と并稱す、著すところ、柳河東集四十七卷あり、世に傳はる。

【劉宗周】字は起東、明の紹興山陰の人、學は朱子を宗とす、萬曆二十九年の進士、弘光元年、京師陥り諸臣難に殉ずと聞き、食はずして卒す、年六十八、著すところ、劉氏人譜問禮問學等あり。

【劉宗周口ヲ慎ム】劉氏人譜に「明ノ劉宗周曰ク、古人言ヘルコトアリ、曰ク造物ノ人ヲ生ズル、其ノ耳目ヲ兩ツニシ、其ノ手足ヲ兩ツニシ、而シテ獨其ノ舌ヲ一ツニス、其ノ意人ヲシテ多ク聞キ、多ク見、多ク爲シテ、而シテ言フコトヲ少クセシメント欲スルナリ、其ノ

舌ハ、又之ヲ口中ノ深奥ニ置キ、而シテ齒ヲ以テ城ノ如クシ、唇ヲ以テ郭ノ如クシ、鬚ヲ以テ戟ノ如クシテ以テ之ヲ重圍スルハ、其ノ藏スルコトノ固クシテ、輕シク出サンコトヲ恐ルル者ノ如シ、故ニ聖賢、人ニ教フルニ、唯言ヲ謹ムヲ以テ急トシ、之ヲ戒飭スル所以ノ者至レリ」

【流俗】「ナミナミ」の世俗の人、また世の「ナラハシ」禮記射義に「不從—」

【柳塘】柳の容態(スガタ)なり、杜荀鶴の詩に「風前—」

【柳塘】柳の「ツツミ」古今詩話に「梅聖俞曰、若嚴維—」

【劉知幾】唐人、字は子玄、藏器の子、博く羣書を覽、文辭を善くす、進士に擧げられ、風閣舍人に累遷す、國史を修し、史通内外四十九篇を著す、徐堅歎じて曰く「史氏タル者宜シク此ヲ座右ニ置クベキナリ」と、

【劉珍】後漢の南陽の人、少くして學を好む、永初中、

不能、流芳後世、不足復遺、臭萬載耶、一本に「不能流芳百世、亦當遺臭萬年」に作る

【流亡】亡命に同じ、禮記の射義に見ゆ、

【流氓】流民に同じ、氓は康熙字典に「按ズルニ氓ト民ト音別義同ジ、字亡ニ從フ者ハ民散ジ易ク、聚リ難キヲイフ」とあり、

【劉備】字は玄德、涿郡の人、その先は景帝の子、中山靖王勝の後に出づ、大志あり、語言少し、喜怒色にあらはれず、身の長ケ七尺五寸、手は垂るれば膝より下る、顧みて自らその耳を見る、江東の關羽、涿郡の張飛、備と相善し、備起る、二人之に従ふ、備遂に天下を三分して帝位に登る、蜀漢の昭烈帝是なり、

【柳玘】字は直清、公綽の孫にして、仲郢の子なり、唐の僖宗の時、御史大夫となる、家訓を述べて子孫を戒む(柳氏家訓)を見よ

【劉勉之】字は致中、宋の崇安の人、幼より強學、日に數千言を誦す、郷舉を以て大學に詣る、時に伊洛の學を禁ず、勉之潛に抄して日に誦す、譙定の楊時に師事し、歸りて艸堂を結び書を讀み、力耕して自ら給す、紹興の閒、召されて至る、秦檜と合はず、即ち病と謝して歸る、學者白水先生と號す、朱松の遺囑を受け、その子熹

謁者僕射となる、詔して東觀の五經諸子傳記百家藝術を校定し、及び建武以來の名臣の傳を作らしむ、侍中に遷り宗正に拜し、衛尉に轉じて卒す、著すところ、誅頌連珠凡そ七篇、又釋名三十篇を撰み、以て萬物の稱號を辨ずといふ、

【流暢】「スラスラ」と通達して滯らざる義、南史に「音辭—暢は通じて響に作る、

【隆寵】「テアツキ」寵愛をいふ、晉書傅咸傳に「虛忝—」

【流通】貨物の廣く諸方へ輸出せらるること、水の流るる如きをいふ、鹽鐵論に「大農開利、百脈萬物—、而縣官富實」

【柳堤】柳の「ツツミ」羅隱の詩に「江村柳覆堤」謝宗可の鶯梭の詩に「—暗捲絲千尺、花塢橫拋錦萬機」

【隆替】「サカンナル」と「オトロヘル」と、晉書王羲之傳に「觀政之—」

【隆冬】冬の最中をいふ、南史孝義傳に「王虛之庭中楊梅樹、—三實」唐太宗御製晉書王羲之傳贊に「獻之雖有父風、殊非新巧、觀其字勢疎瘦如—枯樹、嚴冬に同じ、

【流芳】美名を後世に傳ふる義、晉書の桓溫傳に「既

を誨ふること子の如くし、女を以て之に妻す。

【留夢炎】 宋の衢州の人、淳祐の進士、累遷して右丞相に至る。頗る質似道を庇ふ、終に左丞相に進む、後ち元に降り事を用ふ。

【劉夢得】 劉禹錫を見よ。

【流庸】 その故郷を去りて、人の爲めに庸作するをいふ。漢書昭帝紀に「民置子食、一未還」

【流浪】 浮浪に同じ、鮑照の詩に「一漸冉經三齡」

【流落】 流離零落なり、明皇雜錄に「李白杜甫孟浩然、雖有文名、一不偶、李白の與韓荆州書に「白隴西布衣、一楚漢、一江總の詩に「一今如此、杜甫の詩に「一、意無極」

【流覽】 見て通る、禮白岳記に「不敢遲曲、一入一小肆中、午餐」

【劉覽】 劉は陳なり、「シキツラネテ」覽るをいふ、通覽なり、淮南子原道訓に「一偏照、一解に回觀なり」と

【劉覽】 劉は劉に同じ、前條を見よ。

【流離】 詩經邶風旄丘篇に「瑣兮尾兮、一之子」の毛傳に「瑣尾ハ、少好ノ貌、一ハ、鳥ノ名、少クシテ好ク、長シテ醜シ、陸璣草木疏に「鼻關西謂之、一」

また一解に「一」は其の所を得ずして、漂散する義、ま

【留連】 淹留に同じ、「キツツケ」業を廢して、「ナマケアツツ」晉の羊祜の表に「不爾、一、必於外處有、關」淮南子本經訓に「愚夫蠢婦皆有、一之心」

【流連ノ樂】 遊に耽り、「キツツケ」して家に歸るを忘るるをいふ、孟子梁惠王下に「晏子曰ク、流ニ從ヒテ、下リテ反ルヲ忘ル、之ヲ流ト謂フ、流ニ從ヒテ上リテ反ルヲ忘ル、之ヲ連ト謂フ」とあり（荒亡）を見よ。

【李營丘】 李成を見よ。

【李衛公】 名は靖字は藥師、三原の人、初め隋に仕へ後、唐の高祖に従ひて功あり、太宗の時突厥を走らせ、吐谷渾を破る、代國公より衛國公に改封せらる、姿貌魁偉文武の才あり、貞觀二十三年薨す、年七十九、景武と謚し、形を凌烟に圖す、次條を見よ。

【李衛公問對】 舊本、唐李靖撰すと題す、靖衛國公に封ぜらる、此書は、靖が太宗と兵法を問答したる語を集めたるものなり、簡明目録に「陳師道何遜邵博ハ皆以テ阮逸ノ僞託スル所ト爲ス、然レドモ其ノ攻守ヲ

た憂るなり、前漢郊祀歌に「關、一」

また琉璃と通ず、魏略に「大秦國出赤白黑黃青綠縹紺紅紫十種、一」

【琉璃】 一を見よ。

【劉瀏】 風の疾く吹く貌、楚辭に「秋風、一」以蕭蕭、次條に同じ、また水清き貌、劉基の詩に「波光、一」

【劉瀏】 前條に同じ、文選吳都賦に「風之、一」

【粒粒皆辛苦】 唐の李紳の憫農といふ詩の句、曰く「鋤禾日當午、汗滴禾下土、誰知盤中飧、一、一」農夫暑に當り、耘耨して、汗禾下の土に滴る、人その粟を食ふことを知りて、農夫の辛苦此の如きを察せざるを歎ぜしなり。

【瀏亮】 清くして明かなる貌、文選陸機の文賦に「賦體物而、一」

【柳綠花紅】 柳ハ、緑を見よ。

【劉伶ガ酒ノ美ヲ知ル】 駿臺雜話の「鈴木某ガ歌」の條に見ゆ、晉の劉伶字は伯倫、沛國の人、容貌甚だ陋志氣曠放酒を好むを以て名あり、酒徳頌を著す、仕へて建威將軍となる世説の任誕に「劉伶病酒、渴甚、從婦求酒、婦捐酒、器、涕泣諫曰、君飲太過、非攝生之道、必宜斷之、伶曰、甚善、我不能自禁、唯當祝鬼神自誓、

指畫シ、主客ヲ變易スルコト、兵家ノ微意ニ於テ時ニ得ル所ロアリ、故ニ鄭瑗ノ井觀瑣言ニ謂フ、其ノ書、僞ナリト雖モ亦學識謀略アル者ノ手ニ出ヅルナリト」

【李益】 字は君虞、隴西姑臧の人、大曆四年の登第、太子賓客に遷り、禮部尚書を以て致仕す、詩に長じ、李賀と相埒し、一篇成る毎に、樂工争ひて之を求む、征人早行等の篇に至りては天下皆之を繪圖に施す、集二卷あり。

【梨園】 唐の明皇、俳優の技を學ばしめたる處、由りて轉じて俳優の稱とす、唐書の禮樂志に「明皇既知音律、又酷愛法曲、選坐部伎子弟三百、教于、一、聲有誤者、帝必覺而正之、號皇帝梨園弟子、馬祖常の驪山詩に「可憐繡嶺曉、春鳥猶似、一弟子歌」

【李延壽】 唐の相州の人、仕へて崇文館學士となる、嘗て父の志を追述し、南北史一百八十篇を作り、之を上つる、又太宗政典を撰ぶ、高宗之を觀て、咨美し、直筆もて帛を賜ひ之を褒す。

【李延年】 漢の中山の人、女弟幸を得て李夫人与號す、延年善く歌ふ、爲めに新聲を變じて協律都尉となる、（漢ノ李夫人）を見よ。

【梨園ノ弟子】 俳優をいふ（梨園）を見よ。

斷之耳、便可具酒肉、婦曰、敬聞命、酒肉於神前、請、俗祝誓、俗跪而祝曰、天生劉伶、以酒爲名、一飲一斛、五斗解醒、婦人之言、慎不可聽、便引酒進肉、隗然已醉矣。

【留連】 淹留に同じ、「キツツケ」業を廢して、「ナマケアツツ」晉の羊祜の表に「不爾、一、必於外處有、關」淮南子本經訓に「愚夫蠢婦皆有、一之心」

【流連ノ樂】 遊に耽り、「キツツケ」して家に歸るを忘るるをいふ、孟子梁惠王下に「晏子曰ク、流ニ從ヒテ、下リテ反ルヲ忘ル、之ヲ流ト謂フ、流ニ從ヒテ上リテ反ルヲ忘ル、之ヲ連ト謂フ」とあり（荒亡）を見よ。

【李營丘】 李成を見よ。

【李衛公】 名は靖字は藥師、三原の人、初め隋に仕へ後、唐の高祖に従ひて功あり、太宗の時突厥を走らせ、吐谷渾を破る、代國公より衛國公に改封せらる、姿貌魁偉文武の才あり、貞觀二十三年薨す、年七十九、景武と謚し、形を凌烟に圖す、次條を見よ。

【李衛公問對】 舊本、唐李靖撰すと題す、靖衛國公に封ぜらる、此書は、靖が太宗と兵法を問答したる語を集めたるものなり、簡明目録に「陳師道何遜邵博ハ皆以テ阮逸ノ僞託スル所ト爲ス、然レドモ其ノ攻守ヲ

【利ヲ見テ義ヲ思フ】(見)利思義(論語憲問篇に「一見利則亂、見義則靜、心之於利、猶天之於水、見利則爭、見義則讓、此天之所不能及也、是君子之所當察也、」)

【利ヲ見テ義ヲ思フ】(見)利思義(論語憲問篇に「一見利則亂、見義則靜、心之於利、猶天之於水、見利則爭、見義則讓、此天之所不能及也、是君子之所當察也、」)

【利ヲ牟ル】(牟)利(利)を貪り取る義、牟は蚌なり、苗根を食ふ蟲の名、故に貪り取るの義とす、史記平準書に「富商大賈、無所不牟、大利。」

【利ヲ以テ交ル者ハ、利窮マレバ則チ散ズ】(以)利交者、利窮則散(勢ヲ以テ)を見よ、

【李賀】字は長吉、昌谷に居る、七歳にして辭章を能くし、苦吟す、毎旦出でて弱馬に騎し、小奚奴をして古錦囊を背にし、後に隨はしめ、得る所あればその中に投ず、暮に歸れば、母囊を探り、書するところ多きを見れば即ち怒りて曰く、是の兒、心を嘔出して乃ち已むのみと、憲宗の朝、協律郎となる、一日晝、緋衣の人赤虬に駕し、一板書を持して、上帝の白玉樓成る、君を召して記を作らしむといふを見、ついで卒す、年二十七、著すところ、李長吉歌詩四卷、外集一卷あり、

【俚歌】「ダイゴウタ」田舎人のうたふ歌、蘇軾の詩に

「不惜陽春和」(一)送別の時にうたふ歌なり、また客に別るを驪駒を歌ふともいふ、大戴記に「驪駒ハ逸詩ナリ、客去ラントスル時、之レヲ歌フ」とあり、于志寧の詩に「賓筵未半醉、一不用催、(驪駒)を見よ、」

【利害ヲ知ラズ】(不知)利害(物)の利となり、害となるを判別する能はざる義、莊子、齊物論に「齧缺曰、子一則至人固不知利害乎、」

【李晦齋】朝鮮人名は迪、字は復古、性穎悟好みて書を讀む、年十八商山の朴貴に就いて論孟を受け、又松都に至り、牧隱、圃隱、陽村の諸先生に従ひて理學を修む、父母に事へて至孝なり、登第して官門下注書に至る、明の洪武庚午國の將に亡びんとするを知り、辭するに母の老を以てし官を棄てて隱居す、遠近の學徒四集す、學者稱して治隱先生といふ、

【李沆】字は太初、炳の子、太宗の時の進士、右補闕知制誥となる、上嘗てその風範端凝を稱す、眞宗の時、相に拜するの日、水旱盜賊を取り奏聞して曰く、人主少年當に四方の艱難を知らしむべし、然らざれば則ち意を土木禱祠の事に留めんと、王旦、初め以て細事と爲す、後ち果して驗あり、歎じて曰く、李文靖は眞の聖

人なりと、張詠曰く、吾、人を撈得する最も多し、謹重雅望は一に如くはなしと、故に宋初大臣の體を得たる者を論ずれば、沆を首稱となす、卒して文靖と諡す、

【李翱】字は習之、隴西成紀の人、文章當時に推さる、進士の第に中り、元和の初、勅士博士、史館修撰となる、性峭鯁、嘗て宰相李逢吉の過を面折し、出でて廬州の刺史となる、後ち諫議大夫に拜し、卒して文と諡す、著すところ、李文公集十八卷あり、唐書一百七十七卷に傳あり、

【李綱】字は伯紀、宋の邵武の人、少くして大志あり、政和の初、進士に擧げられ、徽欽高三朝に仕へ、官宰相に至り、忠定と諡す、綱天下の望を負ひ、一身の用舎を以て社稷生民の安危を爲す、嘗て曰く、吾、君に事ふるの道を盡すことを知る、不可なれば則ち進退の節を全うせん、禍患は恤へざるなりと、著すところ、易傳内外論語詳說文章歌詩奏議諸集百餘卷あり、

【履行】實地に履み行ふをいふ、說苑に「始誦之文、今履而行之、是學日益明也、」

【益降】皇女の降嫁なり、益は治なり、裝を治むるをいふ、書經堯典に「一女子嬀汭、二女は堯の女、娥皇

女英、嬀汭は舜の居る處の名、史記外戚世家に「詩始、關雎、書美、一」

【李行簡】字は易從、宋の同州の人、少くして苦學し、石に坐して六經を誦し、常に夜分に至る、寒暑と雖も滌らず、又木葉を聚めて書を學ぶ、筆法遒勁なり、進士に擧げられ、登第し、擢てられて龍圖閣待制に至る、眞宗數、閣に幸し易を講ず、因りて大臣の得否を訪ふ、行簡必ずその所長を稱す、人以て長者となす、仁宗位に即き、給事中に進む、疾を以て求めて河中府の知となり、虢州に徙る、卒する年七十一、集二十卷あり、行簡端重にして妄に交らず、一介もこれを人に取らず、諸子冠帶するにあらざれば敢て見る莫し、書を衆むる萬卷多くはその自録なり、人之を書樓といふ、

【李格非】字は文叔、宋の濟南の人、進士に擧げられ、累遷して禮部員外郎となる、嘗て洛陽名園記を著して謂ふ、洛陽の盛衰は天下治亂の候なりと、その後、洛陽陷る、世以て知言となす、格非辭章に工なり、嘗て言ふ文は苟も作るべからず、誠著はれざれば工なる能はずと、

【李下ニ冠ヲ正サズ】嫌疑を避くべき戒(瓜田ニ履ヲ)を見よ、

【李漢】字は南紀、少くして韓愈に事へ、古學に通ず、詞を屬する雄蔚、人となり剛、畧愈に類す、愈愛重して子を以て之に妻す、進士に第し、左拾遺に遷る、唐敬宗宮室を侈にす、舶買沈香亭の材を獻す、帝之を受く、漢諫めて曰く、沈香を以て亭となすは、何ぞ瑤臺瓊室に異らんやと。

【利眼】日の異名、陸機演連珠に「一臨雲不能垂照」

【里閉】説文に「閉ハ門ナリ」釋文に「閤ナリ」一ハ、里門に同じ、郷里の義に用ふ、後漢書に「順與光武同」

【離閉】兄弟族人などの閉を隔てて互に感情を害せしむる義、晉書王豹傳に「一骨肉」

【利器】英才に喩ふ、後漢書虞翻傳に「不遇盤根錯節、何以別」一「乎」又「スグレタル」器量をいふ、韓愈の送董邵南序に「懷抱一鬱鬱、適技士」また神器の義、潘岳の詩に「虞我國寶、窺我一」また權力を利刀に喩へていふ、老子に「民多」

【理氣】朱熹曰く「天地ノ閉、理アリ氣アリ、理ヤハ形而上ノ道ナリ、物ヲ生ズルノ本ナリ、氣ヤハ形而下ノ器ナリ、物ヲ生ズルノ具ナリ、是ヲ以テ人物ノ生ズル、必

ては別格を爲せり、参考書は

○李義山詩註 三卷補註一卷、清の朱鶴齡撰

○李義山文集箋註 十卷清の徐樹穀箋、徐炯註、

○李義山詩文集箋註 二十六卷清の姚培謙等撰

【李漁】字は笠翁、清の錢塘の人、一ニ蘭溪ノ人トモイフ、金陵に流寓し、一家言を著し、能く小説を作る、傳奇十種及び芥子園畫傳等の著あり、

【鯉魚】淡水に産する魚、コヒ、孔子家語に「孔子娶、於宋之开官氏、一歳、而生伯魚、魚之生也、魯昭公以賜孔子榮、君之祝、故因以名曰、鯉、而字、伯魚、神農經に「鯉爲魚王、無大小、脊旁鱗皆三十有六、鱗上有小黒點文、有赤白黃三種」

【鯉魚風】陰曆九月の風なり、提要録に見ゆ、梁簡文帝の艶歌篇に「燈生陽燧火、塵散」一「また李賀の詩に「一」起芙蓉老」

【驪駒】送別の時に歌ふ歌、漢書儒林傳の註に「逸詩云、一」在門、僕夫具存、一」在路、僕夫整駕、(驪駒)を見よ、

また驪は純黒色の馬、クロウマ、駒は二歳の馬、また五尺以上六尺以下の馬、

【六彝】彝は説文に「宗廟常器也」と、尊の總名なり、周

リギヨ——リクイ

ズ此ノ理ヲ稟ケ、然ル後ニ性アリ、必ズコノ氣ヲ稟ケ、然ル後ニ形アリ」と、又いふ、太極ハ理ナリ、動靜ハ氣ナリ、氣行ハルレハ則チ理モ亦行ハル、二者常ニ相依リ、未ダ嘗テ相離レザルナリ、

【離宮】常居の宮殿を離れて、別處に置く宮殿をいふ、漢書賈山傳に「起咸陽、而西至雍、一三百」

【犂牛ノ喙】太平記卷十九に見ゆ、論語雍也篇に「子謂仲弓曰、犂牛之子、騂且角、雖欲勿、用、山川其舍諸」と、犂は毛色の駁なるをいふ、騂は赤色なり角とは角の形正しきをいふ、周は赤を尙ふ、故に犧牲には、赤くして角の正しきを用ふ、以て仲弓の父、行惡しくして賤しきも、子の仲弓の賢なるが如き、必ず世に用ひらるることあるに譬ふ、

【離菊】「マガキ」の下なる菊、白居易の履道新居詩に「一黄金合、窗筠綠玉、欄趙殿の秋望詩に「紫豔半開、一靜、紅衣落盡、渚蓮愁」

【李義山】(李商隱)を見よ、

【李義山集】詩集三卷文集八卷、唐の李商隱撰す、その詩綺麗の中、寄託する所多し、宋初の楊億錢惟演等が西崑體の一派は、實に此に本づく、晩唐に在りて杜牧と並驅すべし、その駢偶の文は、婉約雅飭、唐人に於

禮に「小宗伯掌、一」之名物、雞彝、鳥彝、斝彝、黃彝、虎彝、

【陸游】字は務觀、仙の孫、宋の越州山陰の人、幼にして穎敏なり、十二にして詩文を能す、范成大、蜀に帥たり、游參議官たり、文字を以て交り、禮法に拘せず、人その類放を譏る、因りて自ら放翁と號す、夔嚴二州に知たり、皆令聞あり、累官して資章閣待制に至り、渭南伯に封ぜらる、詩集最も多し、蜀に居ること久しく、忘るる能はざるを以て、總てその稿に「署して劍南」といひ、以て志を見す、嘉定三年卒す、年八十五、劍南集の外に老學庵筆記、入蜀記の著あり、

【示兒】死去元知萬事空、但悲不見九州同、王師北定中原日、家祭無忘告乃翁、

これ放翁の絶筆なり、忠誠の情、字句の間に溢る、これその名家たる所以なり、

【六逸】(竹溪)を見よ、

【六一居士】宋の歐陽修の號、公の行狀に「公晚年自ラ一」一ト號ス、曰ク吾ガ集古録一千卷、藏書一萬卷、琴一張、棋一局有り、常ニ酒一壺ヲ置キ、吾ソノ閉ニ老ス、是ヲ六一トナス、歸田録にも見ゆ、

一三九九

【六一詩話】一卷、宋の歐陽修撰す、詩に關する説話を載す、蓋しこの種の書の嚆矢とす、我が國にては司馬光の續詩話、劉攽の中山詩話と合せ、宋三家詩話と題し、文化十三年刊行せり、

【陸羽ノ茶經】事文類聚續集卷の十二に「竟陵僧有於水濱得嬰兒者育爲弟子稍長自筮遇寒之漸絲曰鴻漸于陸羽可用爲儀乃姓陸氏字鴻漸名羽有文學恥一物不盡其妙茶術最著鴻漸嗜茶著經三篇言茶之原之法之具尤備天下益知飲茶矣唐書隱逸傳に「陸羽一名疾字季疵」

【陸雲】晉人字士龍機の弟六歳にして能く文を屬す機と名を齊うす清新は機に及ばずと雖も、而かも持論は之に過ぐ號して二陸といふ尙書閔鴻見て之を奇として曰く此の兒若し龍駒に非ざれば當に是れ鳳雛なるべしと後ち成都王穎雲を表して清河の内史となし大將軍右司馬に轉ず機と同じく害に遇ふ

【陸賈】楚の人客を以て漢の高祖に従ひ天下を定む口辨あり左右に居りまた常に諸侯に使す時に中國初めて定る尉陀南越を平げ因りて之に王たり高祖賈をして佗に説かしめ印を賜ひ侯に封じ臣と稱せ

しむ拜して中大夫となす賈時前んで詩書を説く帝慚づる色あり賈をして秦漢興亡の故を著さしむ賈凡そ十二篇を著す一篇を奏する毎に帝未だ嘗て善と稱せざるなし號して新語といふ

【陸海】漢書地理志に「秦ノ地號シテ一ト稱シ、九洲ノ膏腴ト爲ス」註に「其ノ地高陸ニシテ物産饒ク海ノ出サザル無キガ如キヲイフ」

【六行】人の身に修むべき六種の行(六徳)を見よ、
【六樂】周代に存せる黄帝以下六代の樂なり、即ち雲門黃帝ノ樂咸池堯帝ノ樂大韶舜帝ノ樂大夏(夏ノ禹王ノ樂)大濩殷ノ湯王ノ樂大武(周ノ武王ノ樂)をいふ、周禮大司徒に「以テ一防萬民之情而教之和」また大司樂に「凡一者文之以五聲播之以八音」小學紺珠には咸池を大成に作る

【六學】六ツの學科、國子學、太學、四門學、律學、書學、算學をいふ、舊唐書職官志に「國子監有一一」また六經をいふ、漢書儒林傳に「古之儒者博學、虛六藝之文一一者王教之典籍、先聖所以明天道正人倫致至治之成法也」また敘傳に「曠蕪亡秦滅我聖文、漢存其業一一析分」

【蓼莪之詩】孝子親を養はんとしても、養ふことを得ざるを悲む詩なり、詩經小雅蓼莪篇に「蓼莪者我、匪我伊蒿、哀哀父母、生我劬勞、又曰「父兮生我、母兮鞠我、拊我畜我、長我育我、顧我復我、出入腹我、欲報之德、昊天罔極、蓼莪は長大の貌、莪は美菜なり、蒿は賤草なり、宋史宗室傳に「惟吉性至孝、每誦詩至蓼莪篇、涕泗交下、宗室推其賢」

【蓼莪ノ篇ヲ廢ス】(廢蓼莪之篇)晉書王裒傳に「讀詩至蓼莪、父母生我劬勞、未嘗不三復流涕、門人受業者、竝廢蓼莪之篇」

【六合】初學記に「天地四方之ヲ六合トイヒ、又六極トイフ、易傳序に「遠在一一之外、近在一一身之中」史記秦始皇紀に「履至尊而制一一顏真卿の贈裴將軍詩に「大君制一一、猛將清九垓」次條を參看せよ、

【六合ヲ以テ家ト爲ス】(以六合爲家)天地四方を以て家とする義、天下を一統せしにいふ、賈誼の過秦論に「一一一一、殺函爲宮、殺函は函谷關、
【六紀】紀は理なり、大なるものを綱とし、小なるものを紀とす、上下を張理して人道を整齊する所以なり、白虎通に「一一者謂諸父兄弟族人、諸舅師長朋友也」また曰く「三綱法、天地人一一法、六合(三綱)を

參看せよ、
【六氣】左傳の昭元年に「天有一一云云、一一曰陰陽風雨晦明也、分爲四時、序爲五節、素問に「寒暑燥濕風雨爲陰陽之一一」唐書裴度傳に「夫頌義之道、當順適時候、則一一平和、萬壽可保」

【六義】毛詩の序に「詩有一一焉、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌」とあり、賦比興は、辭の上にていふ、すべて見聞したることを、有りの儘に言ふは、賦なり、比は譬喩を借りて言ひたきことを述べ、顯はすなり、興は起なり、わが意旨を物を以て言ひ起すなり、雅は正なり、政の有りの儘を正しくいふなり、大小の二あり、政の大事に關するを大雅といひ、小事に關するを小雅といふ、頌は宗廟祭祀に用ふ、人の徳を賞賛して作るなり、風は國風なり、風雅頌は、詩の體裁につきていふ、風雅頌共にその詩によりて、賦比興あり、一解に事を歌ふを風といひ、義を布ぶるを賦といひ、類を取るを比といひ、物に感ずるを興といひ、政事を雅といひ、成功を頌といふと、

【六儀】周禮地官に「保氏養國子以道教之一一」一曰、祭祀之容、二曰、賓客之容、三曰、朝廷之容、四曰、喪紀之容、五曰、軍旅之容、六曰、車馬之容」

また官名、舊唐書職官志に、「一六人、掌教、九御四德、率其屬、以贊后之禮儀。」

【陸機】字は士衡、太司馬抗の子、晉の吳郡の人、身の長七尺、その聲鐘の如し、少くして異才あり、文章世に冠たり、儒術を服膺し、禮にあらざれば動かさず、後ち人の爲めに譖せらる、歎じて曰く、華亭の鶴唳復聞くべけんやと、遂に害せらる、時に太安二年、年四十三、著す所る陸士衡集十卷あり。

【六宮】宮中の奥、ムキをいふ、周禮内宰に「内宰以陰禮教、一の鄭註に「皇后正寢一、燕寢五、是爲一也、夫人以下分居焉、禮記の昏義にも見ゆ、白樂天の長恨歌に「回眸一笑、百媚生、一粉黛無顏色、」

【陸九淵】字は子靜、宋の金谿の人、幼にして穎悟なり、乾道中の進士、嘗ていふ、東海に聖人出づるあらば、この心同じきなり、この理同じきなり、西海南北海に聖人出づるあるも、亦然らざるは莫し、千百世の上、千百世の下、聖人出づるも、この心、この理、亦同じからざるはなき也と、國子正に除し、諸生を教ふる、家に在るの時に異なるなし、郷に還るに及び、學者輻輳し、講席を開く毎に、戶外履滿つ、自ら象山翁と號す、學者象山先生と稱す、或人九淵に書を著はさんことを勸む、曰く

「六經註我、我註六經」と、また曰く「學苟知道、六經皆我註脚」と、九淵嘗て朱熹と鵝湖に會し、學ぶ所を論辯し、多く合はず、熹の南康に守たるに及び、九淵之を訪ふ、熹與に白鹿洞に至る、九淵爲めに君子小人義利に喻るの一章を講ず、聽く者泣下るに至る、熹以て切に學者の隱微深痼の病に中ると爲す、光宗の紹熙三年卒す、年五十四、文安と諡す。

【陸九齡】字は子壽、九韶の弟、宋の乾道の進士、全州の教授となる、嘗て弟九淵と學を鵝湖に講ず、詩文あり世に傳はる、没して直祕閣を贈られ、文達と諡す。

【六畜】牛馬羊豕犬雞の六の家畜をいふ、左傳に「爲一五牲三犧以奉五味、」文彦博の土牛賦に「土者五行之本、牛者一之宗、畜音チクの時は蓄に通じ、儲蓄の義とす、

【陸龜蒙】唐書に「一一字ハ魯望、長興ノ人、歌詩及賦ニ工ナリ、松江ノ甫里ニ隱ル、性茶ヲ嗜ム、或ハ時ニ舟ニ上リ、圖書茶竈筆床釣具ヲ齎シテ往來ス、初メ天隨子ト稱シ、後ニ自ラ江湖散人ト號ス、マタ甫里先生ト號ス、高士ヲ以テ召サルレドモ至ラズ、顔蕘、皮日休、羅隱、吳融ト益友タリ、吳興實錄四十卷、松陵集十卷、笠澤叢書三卷を著ス、(丈夫涙)を見よ、

【六郷】周の制度、王畿郊内に在り、小學紺珠に「百里内爲一、外爲六、遂、周禮地官に、比(五家)閭(五比)族(四閭)黨(五族)州(五黨)鄉(五州)を一一とし、鄰(五家)里(五鄰)鄕(四里)鄙(五鄕)縣(五鄙)遂(五縣)を六遂とせり、

【六逆】六の道に逆へる行をいふ、左傳隱三年に「賤妨貴、少陵長、遠閉親、新開舊、小加大、淫破義、所謂一也、君義、臣行、父慈、子孝、兄愛、弟敬、所謂六順也、去順效逆、所以速禍也云云、」加も亦陵くなり、淫は度に過ぐるの稱、

【六極】四方上下をいふ、莊子天運篇に「天有一一六合に同じ、また窮極せる惡事をいふ、書經洪範に「一曰凶短折、二曰疾、三曰憂、四曰貧、五曰惡、六曰弱、」

【六軍】天子の軍をいふ、周禮地官に「五師爲軍、の註に「二軍萬二千五百人、周制天子一一諸侯大國三軍、次國二軍、小國一軍」とあり、

【六花】陣法の名、握奇經に「非八陣一一所能盡也、」また雪の異名、梅堯臣の十五日雪詩に「寒令奪、春令一一侵、百花一一出)を見よ、

別解あれども、略す、

【六悔ノ箴】宋の寇萊公に六悔箴あり、曰く「官行私曲、失時悔、富不儉、用貧時悔、藝不_レ少、學過時悔、見事不_レ學、用時悔、醉發、狂言醒時悔、安不_レ調攝、病時悔、小學紺珠に載す、調攝一に將息に作る、また寶鑑には「藝不_レ少學を、勢不_レ少惜に作る、

【六卿】六郷(一郷ハ萬二千五百家)の長をいふ、書經の甘誓に「大戰于甘、乃召一一」

また周の官制、六人の大臣、六官ともいふ、書經周官に「一一分職、各率其屬、以倡九牧、阜成兆民、」漢書百官公卿表に「夏殷無聞焉、周官則備矣、天官冢宰、諸政を總ぶ、地官司徒(教化農商を掌る)、春官司伯(祭祀典禮を掌る)、夏官司馬(軍旅兵馬を掌る)、秋官司寇(獄訟刑罰を掌る)、冬官司空(水土を掌る)是爲一一、各有徒屬職分、用於百事、」

また春秋の世、宋國の官制にて一一といふは右師左師、司馬、司徒、司空、後チ武侯ノ名ヲ諱ミテ司城ト改ム)司寇なり、

【六經】詩書易春秋禮樂をいふ、このうち、樂經は秦火に亡びて傳はらず、韓詩外傳に「千舉萬變、其道不窮、一一是也、」陶潛の飲酒詩に「少年罕人事、游好

在、一陸游の冬夜讀書詩に「一萬世眼守此可」

【六藝】禮樂射御書數をいふ、史記の孔子世家に

「弟子三千人、身通一者、七十二人」

また六經の意にも用ふ、劉歆の七略に「一略あり、顔師古の注に「一ハ六經也、史記の伯夷傳に「夫學者載籍極博、猶考信一、詩書雖缺、然虞夏之文可知也」また滑稽傳の敘論に「一於治一也、禮以節人、樂以發和、書以道事、詩以達意、易以神化、春秋以道義」前條を參看せよ、

【六經我ヲ註ス】六經はすべて我が心の理を説明した

るものなりとの義、つまり天地萬物の道理は、皆我が心に備はりあるものなれば、その道理を説きたる六經は、即ち我が心を註解したるに同じきをいふ、宋史に「六經註我、我註六經」とあり(陸九淵)を見よ、

【六鶴退飛】鶴は水鳥、退飛するは大風に遇へる爲め

なり、左傳僖十六年に「春王正月戊申朔、隕石於宋、五、是月一過宋都、徐晉卿の春秋經傳類對賦に「五星隕墜而化石、一而遇風」

【六月霜ヲ飛バス】故事成語考に「鄒衍獄ニ下リ六月霜ヲ飛バス」史記列傳に「鄒衍、燕ノ惠王ニ事ヘ忠ヲ

盡ス、左右之ヲ譖ス、王之ヲ獄ニ繫グ、天ヲ仰ギ哭ス、

盛夏六月、天之ガ爲メニ霜ヲ降ス、

【六月秋】六月の土用中に於て、清涼にして秋の心地

せらるるをいふ、劉克莊の詩に「籬外蒼榕六月秋」

た謝宗可の詩に「自有冰霜六月秋」

【六言六蔽】論語陽貨篇に「子曰、由也女聞一、一矣乎、對曰、未也、居吾語女、好仁不好學、其蔽也愚、好知不好學、其蔽也蕩、好信不好學、其蔽也賊、好直不好學、其蔽也絞、好勇不好學、其蔽也亂、好剛不好學、其蔽也狂」とあり、夫子子路の失に由りて、六言の美德あれども、學を好まざれば、六蔽あるものぞとて、その蔽を救はんとて仰せられたるなり、蔽とは遮掩なり、物に「サヘギリ」掩はるる義、蕩とは徒に、高きをさほめ、廣きをさほめて止まる所なきをいふ、賊とは物を傷害するをいふ、絞とは迫切にして「ユルヤカナラズ」繩を絞りたる如きをいふ、

【六工】禮記の曲禮に「天子ノ六工、曰ク土工、金工、石

工、木工、獸工、草工、六材を見よ、

【六功】六種の「テガラ」小學紺珠に「一王功曰勳、國

功曰功、民功曰庸、事功曰勞、治功曰力、戰功曰多、

【六國】春秋戰國の時に割據せし諸侯の國、齊田姓楚

(羊姓燕、姬姓韓、姬姓魏、姬姓趙、嬴姓をいふ、秦を加へて七國、また七雄ともいふ、一に宋(子姓、衛(姬姓)中山を加へて九國ともいふ、戰國策に「一從親以擯秦」宋之問の過函谷關詩に「一兵同合、七雄勢未分」

【六穀】周禮膳夫の「凡王之饋食、用一」の注に「一

一稌、黍、稷、粱、麥、苽、苽、彫胡也、稌は稻なり、

【六材】禮記の曲禮に「天子之六工、曰土工、金工、石

工、木工、獸工、草工、典制六材」とあり、六材は六工の用ふる所の材料をいふ、

【六師】天子の「ミイクサ」六軍に同じ、書經周官に「司

馬掌邦政、統一平、邦國、宋書文帝紀に「上親率一西征」

【六詩】周禮春官に「太師教一、曰風、曰賦、曰比、曰

興、曰雅、曰頌、漢書禮樂志に「國子者、卿大夫之子弟也、皆學誦一(六義)を見よ、

【六辭】周禮に「大作一、以通上下、親疎遠近、一曰詞

辭、二曰命辭、三曰語辭、四曰會辭、五曰禱辭、六曰誄

辭、

【陸贄】字は敬輿、唐の蘇州嘉興の人、十八進士に第

し、博學宏辭に中り、翰林學士と爲る、德宗の時、幸に

奉天に從ふ、機務倥傯、遠近調發、奏請報下、詔書日に數百、贄初より思を經ざるが若くなるも、成るに及びて皆周盡し、事情衍釋人人曉るべし、旁史承寫給せず、嘗て帝に白す、今盜天下に徧し、宜しく痛く自ら咎悔し、以て人心を感ずべし、臣をして筆を持して忌む所ろなからしめば、庶くは叛者心を革めんと、帝之に從ふ、故に奉天にて下す所の制書、武人悍卒と雖も、感動流涕せざるなし、議者おもへらく興元戡難の功は、爪牙の士の力に由ると雖も蓋、贄も亦助ありと、奉天より以來、力を致すこと最も多く、事に隨ひて論諫し、懇到深切、人或は其の太だ過ぎたるを規す、對へて曰く、吾、上は天子に負かず、下は學ぶ所ろに負かず、他を恤ふるに遑あらんやと、同平章事となり、幾くもなくして諍せられ忠州別駕に貶せらる、既に荒遠に放たれ、謗を避けて書を著はさず、池瘴癘に苦しむ、ただ古今集驗五十篇を爲り、郷人に、示すといふ、今翰苑集あり、その奏議を纂録し、世に行はる、順宗の永貞元年卒す、年五十三(翰苑集)を見よ、

【六獸】周禮庖人の注に「一鹿、鹿、麋、麇、野豕、屯、

【陸秀夫】宋の鹽城の人、景定の初の進士、李庭芝の淮南を鎮するや、辟して幕中に置く、宴集毎に尊俎の閒

に坐し、於莊終日未だ嘗て合ふことを希ふあらず、徳祐の初、禮部侍郎を以て軍前に使し、和を議して就らず、二王温州に走る、秀夫追ひて之に従ふ、益王福州に立つ、端明殿學士僉書樞密院事に進む、時に君臣海濱に播越す、朝會毎に、秀夫儼然として笏を正して立つ、治朝に在るが如し、王殂す、又衛王を立つ、秀夫を以て左丞相と爲す、至元中崖山破る、秀夫妻子を驅り、先づ海中に入らしめ、尋て王を負ひ、海に赴きて死す。

【陸子靜朱熹ヲ訪フ】 宋史に「朱晦菴南康ノ守タリシトキ、春日ニ、陸子靜往キテ訪フ、晦菴與ニ舟ヲ泛ベテ樂メリ、曰ク、宇宙有リテヨリ以來、已ニ此ノ溪山アリ、還此ノ佳客有リヤ否ヤト、乃チ白鹿洞書院ノ講席ニ登リ、子靜ニ請ヒテ、君子義ニ喩ルノ章ヲ講ゼシム、聽ク者堵ノ如シ、説キ得テ痛快、座中涕ヲ流ス者アルニ至ル、晦菴深ク感動ス、時ニ天氣微冷ナレドモ、汗出デテ扇ヲ揮フ」(陸九淵)を見よ。

【六親和セズシテ孝慈アリ】 (六親不和有孝慈) 老子の語、曰く「大道廢有仁義、智慧出有大偽、國家昏亂有忠臣」——「六親とは、父子兄弟夫婦を

いふ、一家六親皆和らげるときは、何れを孝子と見分くべきこと無けれども、六親和せざるときに、始めて孝子を見分くべきなり、例へば舜と閔子騫とを孝子と稱するは、繼母にして六親和せざりしによるが如し、史記管晏傳の注に「正義ニ六親トハ外祖父母一、父母二、姉妹三、妻兄弟之子四、從母之子五、女之子六也、王弼云フ、父母兄弟妻子ナリ」

【六出】 雪の異名、雪に六瓣あり、故にいふ、韓詩外傳に「草木花、多五出、雪花獨一、其數屬陰也」埤雅に「雪一而成花、雹三出而成實」張正見の詠雪詩に「九冬飄遠雪、一表豐年」

また梔子花(クチナシ)の異名、酉陽雜俎に「諸花少一者、惟梔子花一、陶真白言、梔子翦花一、刻房七道、其花香甚、相傳、卽西域菴蔔花也」

【六順】 (六逆)を見よ。
【六書】 文字を造る本なり、周禮に「六書者、一曰、象形、二曰、指事、三曰、會意、四曰、假借、五曰、諧聲、六曰、轉注」漢書藝文志に「周官保氏掌、辨國子教之、一、謂象形、象事、象意、象聲、轉注、假借、造字之本也」とあり、象形は物の形象を摸して作る、日月山川等の如し、指事は象形を本として之に點畫を増刪して事物の性質

を見はす、一二三四、上下本末等の如し、會意は意義のすてに文を成せるもの二つ以上を合して意義を見はすもの、武信等の如し、假借はすてに言語音聲ありて未だそれに當る文字なき場合に其の音聲に符合する所の文字を借用するをいふ、竹節の節を節操の節に、竹管の管を管轄の管に假借するが如し、諧聲は、兩文を合して一字となし、一半は形質を見はし、一半は音聲を出だすもの、江河等の如し、轉注は、その義轉じて或る意味に注ぎ、遂にその音の轉化するものをいふ、音樂の樂が快樂の樂となり、尺度の度が、付度の度となるが如し、

また六種の書體をいふ、漢書藝文志に「六體者、古文奇字篆書隸書繆篆蟲書」とあり、古文は孔子壁中の書をいふ、奇字は古文の異體なるもの、篆書は小篆をいひ、隸書は今の楷書にて、繆篆は、その文屈曲纏繞するをいふ、印章等に用ふ、蟲書は蟲鳥の形を爲す、幡信に用ふ、(六體)を見よ。

【六遂】 (六郷)を見よ。
【六牲】 六の「イケニ」周禮天官膳夫に「膳用一

【六籍】 六經に同じ、後漢書班固傳の註に「一、ハ六

經ナリ」北史江式傳に「文字者一之宗、王教之始、前人所以垂今、今人所以識古、元好問の曲阜紀行詩に「天地有至文、一留聖謨」

【陸績橘ヲ懷ニス】 (陸績懷橘) 吳志に「陸績字ハ公紀、康ノ子、年六歲、袁術ニ九江ニ見ユ、術橘ヲ出ス、績三枚ヲ懷ニシ、去ルトキ拜持シテ地ニ墮ス、術曰ク、陸郎何ゾ乃チ賓客トナリテ橘ヲ懷ニスルヤト、績跪キテ答ヘテ曰ク、歸リテ母ニ遺シント欲スト、術之ヲ奇トセリ、既ニ長ジテ博學多識星曆算數、該覽セザルナシ、吳ノ孫權ニ仕ヘ、直道ヲ以テ憚ラル、出デテ鬱林ノ太守トナリ、偏將軍ヲ加ヘラル、軍事アリト雖モ、著述ヲ廢セズ」

【陸宣公】 宣公は唐の賢相、陸贄の諡なり(陸贄)を見よ。
【陸宣公奏議】 二十二卷、唐の陸贄撰す(モト翰苑集ト名ヅク)贄の文多く駢句を用ふ、蓋し當時の文體自ら然るなり、然れども眞意篤摯、反覆曲暢して復た排偶の迹を見ざるのみならず、經世の論、濟民の説取るべきもの少からず参考書は、

○陸宣公奏議注 十五卷、宋朗暉撰す、
【六宗】 六の「タフトビ」マツルべきもの、書經舜典

に「禮于一」傳に「宗尊尊ナリ、尊ビ祭ル所ノ者、ソノ祀六アリ、四時ナリ、寒暑ナリ、日ナリ、月ナリ、星ナリ、水早ナリヲ謂フ」と一解に「一」を以て乾坤の六子、水火雷風山澤と爲す（孔光劉歆等ノ説）また曰く、「一」は「天宗三、日月星辰、地宗三、河海岱なり」と賈逵ノ説、その他異説あれども略す、

【陸遜】字は伯言、康の從孫、始め吳の孫權に仕ふ、呂蒙、孫權に謂ひて曰く、遜は意思深長にしてその才、重を負ふに堪ふ、終に大に任すべしと、權乃ち召して偏將軍右都督に拜し、蒙に代り陸口に屯せしむ功を以て華亭侯に封ぜられ、進みて魯侯に封ぜらる、黃武の初、蜀漢の兵を夷陵に破り、輔國大將軍に拜し、荊州牧を領す、寵遇特に厚く、遂に相に拜す、

【六體】六書に同じ、周禮に「五曰、六書注に「書有二、一、形聲實多、

また書體の名、漢書藝文志に「一者、古文奇字、篆書、隸書、繆篆、蟲書」小學紺珠には「一書、大篆、小篆、八分、隸書、行書、草書」とあり（六書）を見よ、

【六發】發は韜に同じ、弓衣なり、又劔衣なり、漢書藝文志儒家に「周史一六篇、顏師古の注に「即今之六韜也」とあれども、この六發は當時別に一書を成した

るものにて現存の六韜とは異り、

【六韜】舊本、周呂望撰すと題す、然れどもその文義三代の作に類せず、蓋し莊子の金版六發の語に因りて附會して偽作せしものならんか、陸德明の莊子釋文に謂ふ、太公の「一」は文武虎豹龍犬なりと、則ちその偽作は陳隋以前に在るなり（瀟明目錄ノ説ニ據ル）耶律楚材の送王君玉西征詩に「五車書史豈勞力、六披三略無不通」

【六韜三略】六韜は、太公望呂尚の兵法なりと傳ふ、文韜、武韜、龍韜、虎韜、豹韜、犬韜、すべて六十篇、韜は藏なり、韜藏、ツツミヲサムの義なり、三略ハ上中下の三卷に分つ、略とは謀略なり、黃石公の書、張子房に圯橋に授くる者と傳ふれども、恐くは後人の偽作なるべし、

【六韜ノ十四變】太平記十三に見ゆ、六韜の六卷に、太公曰、夫欲擊者、當審敵、敵、人、十四變、變見、則、擊之、敵、人、必、敗、武王曰、十四變、可得聞乎、太公曰、敵人新集、可擊、人馬未食、可擊、天時不順、可擊、地形未得、可擊、奔走、可擊、不戒、可擊、疲勞、可擊、將離士卒、可擊、涉長路、可擊、濟水、可擊、不暇、可擊、阻難、狹路、可擊、亂行、可擊、心怖、可擊、

【陸探微】晉の吳の人、常に明帝の左右に在り、盡に六法あり、探微皆備具す、人物故實に妙にして、兼て山水草木を善くす、包前孕後古今獨立の稱あり、子の綏、又佛像人物を善くす、畫聖の稱あり、

【陸沈】水なくして沈むをいふ、國の亡ぶるにいふ、莊子の則陽篇に「方ニ且、世ト違ヒテ、而シテ心ト俱ニスルヲ屑シトセズ、是レ一スル者ナリ」とあり、賢人の隠れて俗間に潛み居るにもいふ、

【理窟】理の聚る所をいふ、晉書張憑傳に「勃窣爲理窟」とあるに本づく、

【六朝】三國の吳、孫氏、東晉、司馬氏、宋、劉氏、齊、蕭氏、梁、蕭氏、陳、陳氏の六國、皆建康（建業、金陵、秣陵）等ノ名アリ、明ノ南京應天府、今ノ江蘇省江寧府に都せり、これを「一」といふ、宋史の張守節傳に「建康自「一」爲「帝王都、江流險闊、氣象雄偉、章莊の臺城詩に「江雨霏霏、江草齊、一一如夢、鳥空啼、蔓草寒烟」を參看せよ、

【六典】典は法なり、經なり、周の制、邦を治むるに六の法則あり、治典、教典、禮典、政典、刑典、事典をいふ、詳しくは周禮を見よ、また禮記には、大宰、大宗、大史、大祝、大士、大卜を「一」といふ、

また唐明皇の唐一三十卷あり、唐の律令制度を記せる書なり、（唐六典）を見よ、

【陸佃】字は農師、宋の山陰の人、貧居苦學、月光に映じて書を読む、進士に擢てらる、嘗て經を王安石に受く、而かも新法を以て是となさず、徽宗の時、累遷して尙書左丞となる、著すところ、埤雅、春秋後傳、禮象等の書二百餘卷あり、

【六德】周禮地官大司徒に「以郷、三物、教萬民、而賓興之、一曰、一知、仁、聖、義、忠、和、二曰、六行、孝、友、睦、姻、任、恤、陸は九族に親くするをいひ、媮は外親に親しくするをいひ、任は朋友に信なるをいひ、恤は愛貧を賑すをいふ、三曰、六藝、禮、樂、射、御、書、數、

また小學紺珠には三種の「一」を擧ぐ、一に曰く、「一禮、仁、信、義、勇、智」また曰く、「一敬、老、慈、幼、救、疾、恤孤、賑貧窮、任失業」また曰く、「一柔、順、清、潔、不妬、儉、約、恭、謹、勤、勞、

【陸德明】名は元明、字を以て行はる、唐の吳縣の人、名理を善くす、學を周弘正に受く、大建中嘗て承光殿に入講す、貞觀中國子博士となり、後ち吳縣男に封ぜらる、論撰甚だ多し、太宗その書を悦び、その博辨を嘉し、布帛三百段を以て、その家に賜ふ、著すところ經

典釋文二十卷あり、

【六馬】 天子の車に駕する六頭立の馬、書經の五子之歌に「予臨兆民、凛乎若朽索之馭一」荀子勸學篇に「伯牙鼓琴而一仰秣六龍に同じ、

【六博】 博は籀に同じ、スゴクノ類、戰國策に「臨淄甚富、而實其民無不吹竽鼓瑟擊筑彈琴、鬪雞走犬一」踢鞠者史記蘇秦傳の注に「博ハ著ナリ、六棋ヲ行ル、故ニ云フ」陸游の衰甚、書感詩に「開卷思千載、閱世等一」

【六法】 六種の畫法、圖繪寶鑑に「謝恭云畫有一一曰氣韻生動、二曰骨法用筆、三曰應物寫形、四曰隨類傳彩、五曰經營位置、六曰傳模移寫、一精論萬古不移、また曰「顧愷之博學有才氣、丹青亦造其妙、筆法如春蠶吐絲、初見甚平易、且形似時或有失、細視之兼備」

また新論に「水火金木土穀、六府異物而皆有施、規矩權衡準繩一殊形而各有任」

【六飛】 六馬なり、疾きこと飛ぶが如きを取る、漢書袁盎傳に「陛下騁一馳不測山」

【六府】 府は天地の藏にて財用の出づる所、その屬六あり、書經大禹謨に「地平天成、一三事允治」傳に「

美好の貌とも解す、司馬相如の上林賦に「牢落一爛漫遠遷」

【六鱗】 鯉の異名、續博物志に「鯉魚大小竝三十六鱗、また草木子に「鯉ノ脊中ノ鱗、一道毎鱗小黑點アリテ、大小皆三十六鱗ナリ」

【六律】 禮記の樂記に「天下大定、然後正一和五聲、弦歌詩誦此之謂德音、德音之謂樂、孟子の離婁上篇に「師曠之聰、不以一不能正五音、十二律を見よ、

【陸梁】 亂れ走る貌、揚雄甘泉賦に「飛蒙茸而走一」また「ホシイママ」なる貌、張衡の西京賦に「怪獸一」また史記秦紀の「略取一地爲桂林」の正義に「嶺南之人多處山陸、其強梁故曰一」

【六呂】 沈一貫經筵賦に「訓六經、談衆史、氣諧八音、聲中一十二律を見よ、

【六龍】 天子の車に駕する六馬なり、易の乾卦に「時乘一以御天、李白の詩に「一西幸萬人歡、馬八尺以上を龍と爲す、

【六禮】 六種の主なる禮、禮記王制に見ゆ、冠婚喪祭、鄉飲酒、相見をいふ、

一ハ水火金木土穀ナリ、三事ハ正徳利用厚生ナリ、また六腑に通用す、六腑を見よ、

【六服】 侯服、甸服、男服、采服、衛服、蠻服をいふ、一解に蠻服を除きて畿内を加ふ、書經周官に「一羣辟、罔不承德、顔延之の猪白馬賦に「總一以收賢」

【六米】 小學紺珠に「一黍稷稻粱菽大豆」

【六夢】 列子に「夢有六侯、奚謂六侯、一曰正夢、二曰愕夢、三曰思夢、四曰寤夢、五曰喜夢、六曰懼夢」と、正夢とは平居自ら夢みるなり、愕夢とは、驚きて夢みるをいふ、思夢とは思ふに因りて夢みるをいひ、寤夢とは覺むるとき、之を道きて夢みるをいひ、喜夢とは喜悅に依りて夢みるをいひ、懼夢とは恐るるに依りて夢みるをいふ、周禮春官占夢にも見ゆ、愕を驚、懼を懼に作る、上に「以日月星辰占一之吉凶」とあり、(夢)を見よ、

【李羣玉】 字は文山、澄陽の人、詩を能くす、大中開裴休、入りて相たり、羣玉を薦む、詔して弘文閣校書郎を授く、一集あり、世に行はる、

【陸離】 猶ほ參差の如し、衆をいふ、楚辭に「高金冠之岌岌兮、長余佩之一一」また光輝散亂の貌とも、

是れなり、儀禮士昏禮に見ゆ、秦嘉述昏詩に「敬茲新昏、一不愆」

【陸隴其】 字は稼書、平湖の人、康熙九年の進士、嘉定縣に知たり、落職せし時、民市を罷むること三日、その學一に程朱を準とし、敬に居り理を窮むるを以て本となす、著すところ四書講義、困勉錄、讀禮志疑、讀朱隨筆、松陽講義、三魚堂文稿、等あり、康熙三十一年卒す、年六十三、雍正二年孔子の廟廷に從祀せらる、乾隆元年内閣學士兼禮部侍郎を追贈し、清獻と諡せらる、

【李花】 説文に「李ハ果ナリ、木ニ從ヒ、子ノ聲、杼ハ古文ノ李ナリ」西京雜記に「漢武、初メ上林苑ヲ修ス、群臣遠方ヨリ各名花ヲ獻ズ、樹ニ、朱李、黃李、紫李、綠李、青李、綺李、青房李、車下李、金枝李、顏回李、合枝李、羣李、燕李、猴李、アリ」と、漢武内傳に「李少君、武帝ニ謂フ、溟海ノ棗、大瓜ノ如ク、鍾山ノ李大瓶ノ如シ、臣之ヲ食フヲ以テ、遂ニ奇光ヲ生ズ」本草に「李皮ハ水ヲ以テ煎ジテ、之ヲ含メバ、齒痛ヲ治ス」楊萬里の詩

李花宜遠更宜繁、惟遠惟繁始足看、莫學江梅作疎影、家風各自一般般

【李華】 唐の贊皇の人、進士、博學宏詞の科に中り、吏

部員外郎に至る、嘗て宰相楊國忠の姻婭横暴の狀を按劾す、是に由りて州郡肅然たり、著すところ含元殿賦、弔古戰場文あり、姪の翰觀俱に文を以て名を知らる。

【梨花】 梨一に梨に作る、爾雅に「梨ハ山楡」魏志文帝詔に「眞定御梨大如拳、甘若蜜、脆如菱、可以解煩釋渴」南史に「宋張敷小名楂、父劭小名梨、宋文帝戲之曰、楂何如梨、敷對曰、梨是百果之宗、楂何敢比也」漢書に「淮北滎陽河濟之間、千樹梨、其人與千戶侯等」李白の詩に「一白雪香、蘇軾の詩に「一淡白柳深青、柳絮飛時花滿城、惆悵東欄一株雪、人生看得幾清明」陸游の詩に「粉淡香清、自一家、未容桃李占年華」馬祖常の詩に「香痕憐粉白、酒暈惜輕紅」(梨ニ主) (五臟ノ)を參看せよ、

【理會】 省察點檢する義、宋の俗語、呂氏童蒙訓に「後生初學、且須一氣象、氣象好時、百事是當」

【梨花一枝春雨ニ綻ブ】 太平記卷四に見ゆ、白居易の長恨歌に「玉容寂寞淚瀾干、一春帶雨」とあるに本づく、美人の愁容に比したるなり、

【六王】 六代の王をいふ詩經小大雅譜に「小雅大雅者周室居西都豐鎬之時詩也」疏に「二雅ハ正文武成

アリ、變ニ厲宣幽アリ、一皆居豐鎬ノ地ニ在リ、故ニ豐鎬ノ時ノ詩トイフ、また六國の王、史記秦始皇紀に「一威伏其辜天下大定」

【李廣】 漢書の列傳に「一ハ隴西成紀ノ人ナリ、世射法ヲ受ク、武帝ノ時、右北平太守ニ拜ス、匈奴號シテ漢ノ飛將軍トイヒテ之ヲ避ク、景帝ノ時、驍騎將軍トナル、前後匈奴ト大小七十餘戰、屢大功アリ、後チ匈奴ヲ撃チ迷ヒテ道ヲ失ス、長史廣ヲ責ム、廣遂ニ自殺ス、百姓之ヲ聞キテ、知ルト知ラザルト、老壯皆爲メ泣ク垂ル」とあり(瀟灑ノ)を參看せよ、

【李廣石ヲ以テ虎トナス】 漢書李廣傳に「李廣爲人長猿臂、其善射亦天性、廣出獵、見艸中石、以爲虎而射之、中石沒矢、視之石也、他日射之、終不能入矣」王充論衡にも「楚雄渠子、出見寢石、以爲伏虎、將去射之、矢沒其衝、或曰、養由基見寢石以爲兎也、射之矢飲羽」とあり、

【陸王之學】 宋の陸九淵(象山)と明の王守仁(陽明)との學なり、九淵は朱熹と同時の儒者なり、朱は事物に就きてその理を攷究す、陸は頓悟を貴ぶ、陽明良知を致すの説は、陸に本づく、故に併せて「一」と稱す【李郭ノ舟】 人品高き人の舟を同じくして乗るをい

ふ(舟)を見よ、

【李觀】 字は元賓、趙州贊皇の人、李華の從子なり、貞元八年の進士、校書郎を授けらる、年二十九卒す、善く文を屬し、前人時調を沿襲せず、韓愈と相上下す、李元賓文集六卷あり、唐書一百五十六卷に傳あり、

【李敬業】 勳の孫、少くして勳に従ひ征伐す、太僕少卿を経て、英國公を襲ぐ、嗣聖の初、賊に坐して柳州司馬に貶せらる、時に武后、中宗を廢し、廬陵王となし、諸武命を擅にして唐の子孫を誅戮す、天下之を憤る、敬業因りて兵を起さんことを謀り、檄を州縣に傳へ、武氏の過惡を疏し、廬陵王を天子の位に復せんとす、武后將を遣し撃ちて之を殺す、

【李嶠】 字は巨山、唐の贊皇の人、兒たりし時、人の雙筆を遺ると夢みる、これより文辭大に進む、張説いふ「嶠文如良金玉、無施不可」と、一時學者法を取る、武后の時、中書令に拜せらる、

【履屐之才】 履屐は微細のものなり、よりに才の微細のことをもて行届くをいふ、晉書謝玄傳に「雖履屐之閒、亦得其任」

【李謙庵先輩ヲ敬フ】 明史に「李謙庵、弟子ニ論シテ曰ク、汝ガ輩必ズ當ニ先輩ヲ敬重スベシ、余諸生タリシ

時、鄒南阜師ニ謁ス、時ニ座客、郷先生ノ別號ヲ擧ゲテ語ル者アリ、師曰ク、此ノ人ハ先達ナリ、宜シク先生ノ二字ヲ加フベシ、凡ソ人言語ニ謙讓ナラザル時ハ、心志放恣ニシテ德ニ進ムコト能ハズ、汝ガ輩先輩ヲ敬重セヨ、是レ德ニ入ルノ門ナリト、時ニ余モ亦誤リテ、前ノ邑大夫ノ別號ヲ擧ゲテ語ル、師曰ク、邑大夫ハ父母ノ如シ、吾等ノ祖父、嘗テ其ノ部下ニ在リテ撫育ヲ受ケタリ、然ルニ小子等輩ノ如ク之ヲ稱ス、豈學者ノ言フベキコトナランヤト

【李元紱】 (南山ハ移スベキモ)を見よ、

【李觀】 字は彦禮、宋の南陽の人、五經に通ず、生徒數百人あり、曾鞏、鄧潤甫皆その高弟なり、文章を爲るに自ら一家を成す、天下その名を知る、没して潤甫その退居類藁皇祐續藁並に後集を上つる、

【利口】 辯口の善き者をいふ、口辯捷給なる者を稱す、論語陽貨篇に「惡一覆邦家者」また東方朔非有先生論に「巧言一、以進其身」史記に「子貢一巧辭」

【李鴻章】 字は漸甫、少筮と號す、道光三年(文政四年)安徽省合肥縣に生る、道光二十七年の進士、累遷して文華殿大學士一等肅毅伯直隸總督となり、北洋大臣

を兼ね、光緒二十七年薨す、年七十九、侯爵を贈らる、

【李公擇】(李常)を見よ、

【李公麟】字は伯時、龍眠居士と號す、宋の舒州の人、熙寧中の進士、元祐ニ作ル泗州録事參軍となる、公麟學を好み博雅にして詩に長ず、多く奇字を識り、夏商以來の鐘鼎彝器皆能く考證し考古圖を爲る、丹青妙絶世に冠たり、王庭堅その風流古人に減せずといふ、宋史の傳に「元符三年致仕、既歸老、肆意於龍眠山、嶽壑間雅善畫自作山莊圖爲世寶、傳寫人物尤精、」

【理國】管子に「一之道、地德爲首、治國に同じ、鎮國)を見よ、

【離恨】離別のウラミ、別恨に同じ、李白の句に「一

滿蒼波」

【利根鈍根】利根は利發なる性、鈍根は魯鈍なる性、法華經に「正見邪見、一」

【離坐】連り坐する義、禮記曲禮に「一離立」

【理財】たからを整へ治むる義、易經に「一正辭」

【離騷】楚の屈平の辭賦を輯めたる書名、離は遭なり、騷は憂なり、屈原憂に遭ひて作る、故に名づく(楚辭)を見よ、馮贄の雲仙雜記に「錢芸生、好讀離騷、手不暇揭、忘其肉味、半月如齋」

【李斯】楚の上蔡の人、荀卿に従ひ、帝王の術を學び、

小精悍最も詩に名あり、時に短李と號す、元和の初、國子助教に補し、翰林學士に擢てらる、李德裕、元稹と時を同うす、號して三俊と爲す、官を累ねて同中書門下平章事に至る、

【里仁】論語里仁爲美、仁爲美、擇不處仁焉得、知、里は仁厚の俗あるを以て美となす、苟も擇んて仁厚の美里に居らざれば何ぞ知とするを得んやとの意、

【履新之慶】新年のヨロコビ、唐書の禮樂志に「一與公等同之」

【李常】字は公擇、宋の建昌の人、皇祐間、進士に擧げられ、熙寧中右正言となる、時に王安石方に法を更ひ、常その不便をいふ、哲宗の時、七事を上言し、御史中丞に拜す、少くして兄弟と書を廬山の白石僧舎に讀む、すてに及第し、抄する所の書萬卷を室に留め名づけて李氏山房といふ、蘇軾その仁者の用心たるを歎じて、その事を記す、官兵部尙書に至る、

【李商隱】字は義山、玉溪子と稱す、唐の懷州河内の人、開成二年の進士、累遷して檢校工部員外郎に遷る、詩文瑰邁奇古、尤も律詩に長ず、溫庭筠と名を齊しくし、溫李と稱せらる、後世その詩派を號して西崑

西秦王に説く、王以て客卿と爲す、始皇帝を佐け、天下を混一し、丞相に拜す、後ち腰斬せらる(秦ノ一)を參看せよ、

【離思】離別の思、潘岳の詩に「何以彼」

【李思訓】字は建見、唐の宗室、孝斌の子、好みて山水を畫く、筆格遒勁なり、その左武衛大將軍たりしを以て、世に大李將軍と稱す、彭國公に封ぜらる、弟姪五人、皆丹青に妙なり、北宗派の祖なり、畫史彙傳に「山水樹石、筆格遒勁、草木鳥獸皆ソノ態ヲ窮ム、時ニ第一ニ推ス、金碧輝映一家ノ法ヲ爲ス、後人著色、往往之ヲ宗トス、開元四年卒す、年六十六、」

【李士謙ノ陰德】隋書に「李士謙開府參軍タリ、家富ム、粟數千石ヲ出シテ以テ郷人ニ貸ス、歲ノ歉ナルニ値フ、各欠戸ヲ召ビ、酒ヲ設ケ券ヲ焚キテ其ノ償ヲ索メズ、來春又糧種ヲ出シテ分チテ貧乏ニ給ス、全活スル所口甚ダ多シ、或人曰ク、子ノ陰德大ナリト、士謙曰ク、陰德ハ耳鳴ノ如シ、己自ラ之ヲ聞キテ、人知ル者ナシ、今子已ニ知ル、何ゾ陰德ト爲サント、後チ壽百歲ニ至リ、子孫皆顯官トナル」

【李習之】(李翱)を見よ、

【李紳】字は公垂、敬玄の曾孫、唐の詩人、人と爲り短

體となす、大中十二年卒す、年四十六、著すところの雜纂は、わが邦人にも愛讀せらる(義山)を參看せよ、

【李將軍】(李廣)また(李思訓)を見よ、

【驪珠】千金の價する貴き、タマ、莊子列御寇篇に「千金之珠、必在九重之淵、而驪龍頷下」と、七啓に「綴以驪龍之珠、

【離朱之明】目のよく見ゆるをいふ、離朱の明ともいふ、孟子離婁上篇に「一、公輸子之巧、不以規矩、不能成方員、この註に「離婁、古ノ明目ノ者」とあり、莊子駢拇篇に「雖通如離朱、非吾所謂明、慎子には「一、一、一、察、毫末於百步之外、下水尺、不能見、淺深、非目不明、其勢難、視也」とあり、三善清行が菅公を諫めし文にも「離朱之眼、不見睫上塵、仲尼之才、難知匱中物、

【李嵩】宋の錢塘の人、李從訓の養子、山水人物道釋を畫くに工なり、從訓の遺意を得たり、光寧理三朝の畫院待詔たり、姪永年能くその學を世にす、

【李成】宋の吳の人、五代の末、詩酒を以て公卿の間に遊ぶ、善く山水を摹寫す、酒酣にして筆を落せば煙景萬狀、世傳へて以て寶となす、宋初、衛融、陳州に知り、その名を聞きて之を召す、成、族を擧へて往く

酒に酣するを以て卒す、聖朝名畫評に「一、字ハ威熙營丘ノ人、成ノ畫タル造化ニ精通ス、筆盡キテ意在千里ヲ咫尺ニ掃ヒ、萬趣ヲ指下ニ寓ス、峰巒重疊ノ開、祠壁ヲ露ス、此ヲ最佳ト爲ス、林木稠薄、泉流深淺ニ至リテハ眞景ニ就クガ如シ、思清ク格老ユ、古ニ其ノ人ナシ、宣和畫譜に「一、一、一、畫ク所、山林澤藪平遠險易、縈帶曲折、飛流危棧、斷橋絕澗、水石風雨晦明、烟雲霧霏ノ狀、一ニ皆ソノ胸中ヲ吐キ、而シテ之ヲ筆下ニ寓ス、凡ソ山水ヲ稱スル者、必ズ成ヲ以テ古今第一トナシ、名イハズシテ李營丘トイフニ至ル、

【李靖】(李衛公)を見よ、

【狸】(タヌキ)とイタチと、莊子に「騏驎驥一日而馳千里、捕鼠不如一、言殊、技也、

【李青蓮】(李白)を見よ、

【李昭道】唐の畫人、思訓の子、中書舍人、太原府會曹直集賢院に官す、山水鳥獸甚だ繁巧智慧多し、時に山水を言ふ者、稱して小李將軍と稱す、畫くところ層樓疊閣、界畫精細、寸人豆馬、鬚眉畢く具る、唐人の畫南北二宗に分つ、北宗は則ち昭道父子是れなり

【履】(クツ)連文釋義に「單底、爲履、重底、爲屨、

【離析】分裂の義、論語季氏篇に「邦分崩、一、而不能

【李勤姊ノ爲メニ粥ヲ煮ル】唐書に「李勤官僕射タリ、然レドモ其ノ姊病アルトキハ、必ズ親ラ火ヲ焚キテ粥ヲ煮ル、一日火適、勤ガ鬚ヲ焚ケリ、姊ノ曰ク、家ニ僮僕多シ、何爲ソ自ラ苦ムコト此ノ如クナルト、勤ガ曰ク、豈人ニ乏シキガ爲メナランヤ、願フニ今姊年老イ、勤モ亦老イタリ、今ヨリ後チ屢、姊ノ爲メニ粥ヲ煮ント欲スト、雖モ復得可ケンヤト、勤字は懋功、曹州の人、累遷して尙書左僕射となり、卒して貞武と謚す、

【梨雪】梨の花を雪に喩へていふ、白居易の落花詩に「桃飄、火焰焰、梨墮、雪漠漠、韋莊の詩に「隔牆、一、又玲瓏、

【李善】唐の江夏の人、雅行あり、今古を淹貫す、而かも辭を屬する能はず、故に人號して書簾といふ、顯慶中、沛王の侍讀を兼ね、文選の注を作る、汁鄭の間に居り、諸生に講授す、四方その業を傳ふるに至る、號して文選學と號す、

【鯉素】手紙をいふ、また尺素、魚書、雙鯉、雙魚ともいふ、文選の古詩に「客從、遠方來、饋、我、雙、鯉、魚、呼、童、烹、鯉、魚、中、有、尺、素、書、長、跪、讀、素、書、中、意、何、如、上、有、加、餐、飯、下、有、長、相、憶」とあり、素は生帛(キギヌ)なり、藝

文類聚に「呂望年七十涓涓ニ釣ル、三日三夜、魚食フ者ナシ、農人トイフ、農人ハ古ノ先賢人ナリ、望ニ謂ヒテ曰ク、子將ニ復タ釣ラントセバ、必ズ其ノ輪ヲ細クシ、其ノ餌ヲ芳クシテ徐徐トシテ之ヲ投ゼヨ、魚ヲシテ駭カシムルナカレト、望其ノ言ノ如クス、初メ下シテ鮒ヲ得タリ、次ニ鯉ヲ得タリ、腹ヲ裂キテ書ヲ得タリ、書ノ文ニ曰ク、呂望齊ニ封セラルト、望當ニ貴カルベキヲ知ル、

【利他】他人に利益を與ふる義、淨土論に「應、知、由、自、利、故、則、能、利、他、非、是、不、能、自、利、而、能、利、他、也、

【李太白集】三十卷、唐の李白撰す、その詩、杜甫と並稱して古今詩家の一大家と爲す(李白)を參看せよ、參考書は、

○分類補註李太白集 三十卷、宋の楊齊賢註、元の蕭士資刪補、

○李太白詩集註 三十六卷、清の王琦撰、

【李唐】唐朝をいふ、唐の高祖、姓は李、名は淵、故に一、一、一、猶ほ嬴秦、劉漢などといふが如し、また宋の畫人の名、圖繪寶鑑に「一、字ハ晞古、河陽三城ノ人、徽宗ノ朝、畫院ニ入ル、高宗雅ヨリ之ヲ愛シ、嘗テ長夏江寺ノ卷上ニ題シテイフ、一、一、可比唐李思

【李杜】後漢の李固と杜喬と、後漢書李固杜喬傳贊に「一司職、朋心合力、致主文宣、抗情伊稷」また杜密と李膺と、同書杜密傳に「黨事既起、免歸本郡、與李膺俱坐、而名行相次、故時人亦稱『一焉』」また唐の李白と杜甫と、唐書杜甫傳に「少與李白、齊名、時號『一』」

【狸奴】猫の異名、羅大經の猫詩に「陋室偏遭黠鼠欺、一雖小策、動奇畫史に「宋徽宗畫、一街魚圖」

【李侗】字は愿中、宋の南劍州劍浦の人、延平に住す、羅從彦に從學し、世故を謝絶すること四十年に餘る、飲食或は充たざるも、怡然として自得す、沙縣の鄧翹嘗てその冰壺秋月の如く瑩徹瑕なしと稱す、朱熹これに師事す、世に延平先生と號す、隆興元年卒す、年七十一、文靖と謚す、延平問答及び語錄あり、世に行はる、子の友直、信甫皆進士に擧げらる、信甫仕へて監察御史に至る、持立するを以て朝に容れられず、出でて衡州に知たり、

【李東陽】字は賓之、明の茶陵の人、四歳にして神童に擧げられ、天順八年進士に擧げられ、累遷して少師兼吏部尙書に至り、正徳十一年卒す、年六十八、大師を贈り、文正と謚す、東陽慧悟夙成、文章瀟灑、能く臺閣

體、永樂宣徳ノ際ニ流行セシ詩風ノ弊を矯めて唐宋の舊に復せしむるを得たり、著すところ懷麓堂集一百卷あり、

【李杜韓柳】李白と杜甫とは詩に長じ、韓愈と柳宗元とは文に長ず、この四人は共に唐代文學者の傑出せるもの、

【李杜沈溺】大家の終を令くせざるを稱していふ、杜甫未陽に客たり、一日江上を過ぎ、舟中に酒を飲めり、是の夕水の暴漲せるを以て、爲めに漂泛し去られ、其の屍の行く所を知らず、また李白は宮錦袍を著け、采石江中に遊ぶ、志素より自得して、旁に人なきが如くなりしが、沈酔して水中に入り、月を捉へんと死せり、

【李杜文章在、光燄萬丈長】李白と杜甫との文詞のすぐれたるを稱していふ、臨漢詩話に「元稹作、李杜優劣論、先杜而後李、韓退之以爲不然、詩曰、『一、一』、不知群兒愚、那用故、謗傷、蚍蜉撼大樹、可笑不自量、爲微之發也」と、この韓詩は調張籍と題し、唐詩別裁卷の四にも出せり、全文はそれに就きて見よ、

【利ニ放リテ行ヘバ怨多シ】（放於利而行多怨）放は

依なり、「ヨリツフ」義、論語里仁爲美に見ゆ、孔子の語、利は人の同じく欲する所るなれば己獨り專にすべからず、故に利欲によりて事を行ふときは人必ず害を蒙ることありて、己を怨むもの多からん、かくては己の利も長く保つこと能はざるべし、これを戒めよとの意、

【利ニ因リ便ニ乗ズ】（因利乘便）便利なる土地の形勢に從ひて國を定むる義、史記始皇紀に「一、一」宰割天下、分裂河山」

【利ノ在ル所ハ皆責ト爲ル】（利之所在皆爲責）諸利の在るところに趨くには、如何なる人も、孟賁、專諸の如き勇士となり、毫も畏れ避くる所るなきをいふ、韓非子に「鱷似蛇、蛇似蠍、人見蛇則驚駭、見蠍則毛起、漁者持鱷、婦人拾蠍、一、一」

【李梅】「一スモモ」と、「ウメ」と、鹽鐵論に「一多實者、來年爲之衰」

【李白】字は太白、青蓮と號す、唐の隴西成紀の人、或は曰く、山東の人、或は曰く蜀の人と、母、長庚星を夢みて生じ、因りて名づく、少くして逸才あり、志氣豪放、飄然として超世の志あり、天寶の初、長安に至り、

賀知章を見る、知章その文を見て歎じて曰く、子は謫仙人なりと、玄宗召し見て食を賜ひ、親ら爲めに羹を調す、詔あり翰林に供奉せしむ、白猶ほ酒徒と市に飲ひ、帝白を官にせんと欲す、楊貴妃之を沮止す、白自ら親近の爲めに容れられざるを知り、戀に山に還らんことを求む、帝金を賜ひて放還す、寶應元年卒す、年六十二、李太白集三十卷あり、玄宗の時詔して李白の歌詩、表曼の劔舞、張旭の草書を以て三絶と爲すといふ、左に白の傑作一首を録す、

蜀道難

噫嘘噓危乎高哉蜀道之難、難於上、青天、蠶叢及魚鳧、開國何茫然、爾來四萬八千歲、不與秦塞通人煙、西當太白有鳥道、可以橫絕峨眉巔、地崩山摧壯士死、然後天梯石棧相勾連、上有橫河斷海之浮雲、下有衝波逆折之回川、黃鶴之飛尚不能過、猿狖欲度、愁攀緣、青泥何盤盤、百步九折、縈巖巒、扪參歷井仰脅息、以手拊膺坐長歎、問君西遊何當還、畏途巖巖不可攀、但見悲鳥號、古木、雄飛呼雌、遊林開、又聞子規啼夜月、愁空山、蜀道之難、難於上、青天、使人聽此凋朱顏、連峯去、天不盈尺、枯松倒掛倚絕

壁、飛湍瀑流爭喧逐、砢崖轉石萬壑雷、其險也如此、嗟爾遠道之人、胡爲乎來哉、劔閣崢嶸而崔嵬、一夫當關萬夫莫開、所守或匪親、化爲狼與豺、朝避猛虎夕避長蛇、磨牙吮血殺人如麻、錦城雖云樂、不如早還家、蜀道之難難於上青天、側身西望長咨嗟、

按ずるに、この詩、蜀道の險阻艱難を論じ、興を托して世道人心の危嶮を諷りしなり、揚雄の蜀王本紀に「蜀王ノ先、蠶叢ト名ヅク、蠶叢ノ子ニ柏灌アリ、柏灌ノ後ニ魚臯氏アリ」と西方は正に太白星の分野に當る、鳥道あり至りて狹く至りて高し、昔蜀中路の秦に入るべきなし、秦の惠王蜀に五丁力士ありと聞き、乃ち鐵を以て牛を作り、その牛、金を糞すと詐稱す、蜀侯五丁壯士をして山を開き路を作り牛を取らしむ、後ち五丁死し、蜀は秦の爲めに滅ぼさる、左太冲の蜀都賦に「緣以劔閣阻、以石門、一夫守隘萬夫莫當」と、成都記に「府城呼ビテ錦官城トナス、江山明麗錯雜シテ錦ノ如キヲ以テナリ」

【履薄】「薄冰ヲ履ム」の略、後漢書楊終傳に「君位地尊重、四海所望、豈可不臨深一以爲至戒、潘岳西征賦に「心戰懼以驚悚、如臨深而一薄冰ヲを見よ、」

【李白時】名は公麟、龍眠山に歸老し、龍眠居士と號す、古を好み、博學詩に長ず、宋の有名なる畫家、山水佛畫を善くし、山水は李思訓に似て佛畫は吳道子に近し、鐵網珊瑚に畫評あり(李公麟)を見よ、

【李白天ニ問フ】(李白問天)搔首集に「李白、華山ノ落雁峯ニ上リテ曰ク、此ノ山最モ高シ、呼吸ノ氣、想フニ帝座ニ通ゼン、謝朓ガ人ヲ驚カスノ句ヲ携へ來リ、首ヲ搔イテ青天ニ問ハザルヲ恨ムト」

【李攀龍】字は子鱗、滄溟と號す、明の歷城の人なり、九歳にして孤家又貧なり、自ら奮ひて學を勤む、嘉靖二十三年の進士、性侃直にして依阿を屑しとせず、刑部主事となり、累遷して河南按察使に至り、隆慶四年卒す、年五十七、著すところ滄溟集あり、其の詩聲調を主とす、擬する所ろの樂府、或は古書の數字を更めて己が作となす、文は則ち聲牙戟口、讀むもの篇を終ふる能はず、攀龍かつて王世貞、謝榛、宋臣、梁有譽と詩社を結び、相和して古文辭を唱へ、五子と稱す、後ち徐中

行、吳國倫二人入るに及び、改めて七子と稱す、

【離披】「ハナレ」開く義、杜甫の詩に「露翻兼雨打、開拆漸一」李商隱の詩に「人世本來多聚散、紅葉何事亦一一」また花、雲などの「キラキラ」と、ホノメクをいふ、

【李白藥】字は重規、德林の子、唐の定州安平の人、七歳にして、文を能くす、奇童と號せらる、後ち文行天下の爲めに推重せらる、時に士を裂きて子弟功臣に與へんと議す、百藥封建論を上りて密に之を止む、累官して宗正卿に至る、好んで後進を奨薦し、祿賜多く親族に分與せり、貞觀二十二年卒す、年八十四、

【履冰】「薄冰ヲを見よ、」

【菱婦】「ヤモメ」寡婦に同じ、前赤壁賦に「泣、孤舟之」左傳昭二十四年に「菱不恤其緯、而憂宗周之危」詩經小雅巷伯篇の毛傳に「鄰人一」

【笠檐】「カブリガサ」の「ヒサシ」陸龜蒙の句に「一一菱」

【李夫人】後唐の畫人、もと西蜀の名家なれども、世系を詳かにせず、郭崇韜、蜀を伐つを以て之を得たり、夫人崇韜の武弁なるを以て常に鬱悒して樂まず、月夕南軒に獨坐す、竹影婆娑たり、意に隨ひて窓楮の上に

寫す、明日之を視るに生意具に足る、善く文を屬し書に工なり、

また明人、姓は范氏、名は道坤、東平州の人、倪迂の山水に倣ひ、清淑の氣を鍾む、亦竹石花卉を作る、北方畫を學ぶは李夫人より始る、

また(漢ノ李夫人)を見よ、

【李文靖】(李沆)を見よ、

【利病】利害に同じ、司馬光の諫院題名記に「天下之政、四海之衆、得失一一萃于一官、使言之、清の顧炎武の撰せし「天下郡國一書百二十卷」あり、

【離別】人と、ワカルルなり、説文に「遠クワカルルヲ離トイヒ、近キヲ別トイフ」古詩に「斟酒唱離歌」逸詩に「歌、驪駒、驪駒在門、僕夫具存、驪駒在路、僕夫整駕、(丈夫、涙)を參看せよ、」

【李夢陽】字は獻吉、明の慶陽の人、父に従ひ大梁に寓す、年十八、鄉試に擧げられ第一たり、弘治七年の進士、戸部主事より郎中を歴、後ち江西提學副使に遷さる、肯て往かず、嘉靖八年卒す、年五十八、著すところ空同集六十三卷あり、夢陽人となり氣高く節挺、孤立峻視、少しも屈下する能はず、故に再び奇禍に罹り坎壈その身を終る、天啓中に景文と證せらる、因にいふ李

東陽に嗣ぎて明代詩運の盛を致したる者を七子の徒とす、七子とは、一、何景明、徐禎卿、邊貢、康海、王九思、王廷相をいふ、この中李何二子を魁とし、徐邊二子之に次ぐ、故にまた四傑の目あり、明史に「明ノ一、江西ノ提學タリシトキ、中丞俞諫兵ヲ督シテ賊ヲ平グ、諸監司皆長跪シテ以テ見ユ、夢陽獨リ否ズ、諫怪ミ問ヒテ曰ク、足下ハ何ノ官ゾト、夢陽曰ク、公ハ天子ノ詔ヲ奉ジテ諸軍ヲ督シ、吾ハ天子ノ詔ヲ奉ジテ諸生ヲ督スト、語畢リテ遂ニ出ヅ、是ヲ以テ夢陽ガ名天下ニ高シ」

【李牧】趙の將となり代の雁門に居り、匈奴に備ふ、匈奴入寇する毎に、避けて戦はざる者數歳、匈奴以て怯と爲す、趙王怒りて他人をして之に代らしむ、匈奴と戦ひ、屢、利を失す、また牧を請ふ、牧門を杜ちて出でず、趙王之を強ふ、牧曰く王復た臣を用ひんと欲せば、臣前の如くし、乃ち敢て命を奉ぜんと、王之を許す、牧至る一に舊約束の如く、士日に賞賜を得て用ひられず、皆一戰を願ふ、是に於て匈奴と戦ひ大に之を破る、功を以て武安君に封ぜらる、秦王政之を患へ、反間を放ちて、牧の將に反せんと欲するを言はしむ、趙王他將をして之に代らしむ、牧命を受けず、王之を殺す、秦遂に王翦をして趙を伐たしめ、大に之を破り、邯鄲を陥れ、趙王遷を虜にす、

【李北海】(李邕)を見よ、

【李渤】字は滄之、唐の洛陽の人志を學に刻し、廬山に隠る、久之にして少室に徙る、元和の初、李巽、韋況、章を交へて之を薦む、詔して右拾遺を以て召す、謝して拜せず、洛陽令韓愈書を遣りて曰く「朝廷士引頸東望、若景星鳳凰爭先覩爲快」と、後ち著作郎を以て召さる、渤孤操自ら持し、苟も合はず、屢、直言するを以て斥けらるるも、その節を變ぜず、人之を尙ぶ、執政の惡む所るとなり、病を謝して東都に歸る、宋にまた同名の人あり、樂昌の人嘉祐の初、進士となる、

【李密】字は令伯、晋の犍爲武陽の人、父早く亡す、母更めて人に適く、祖母劉氏に養はる、武帝徵して太子洗馬となす、詔書屢、下る、密陳情表を上りて辭す(陳情表)を參看せよ、

また唐に同姓名の人あり、字は元邁、遼東の人、微なりし時、一黄牛に乗り、破るに蒲鞮を以てし、漢書一帙を角上に掛け、行、且つ讀む、楊素之を奇とす、才文武を兼ね、邢國公に封ぜらる、

【麟】孔叢子に孔子の獲麟歌といふもの出づ、曰く、唐虞世兮麟鳳遊、今非其時來何求、麟兮麟兮我心憂、

(麒麟)を參看せよ、

【淪漪】「サザナミ」水波なり、詩經魏風伐檀に「河水清且一漣漪に同じ、漪は漪に作る、同じ、

【綸音】天子の「ミコトノリ」貢奎の敬亭山詩に「増秩觀重典、一播明庭」(綸言)を見よ、

【霖雨】爾雅に「雨三日已上ナルヲ霖トイフ」

【林蘊ノ磨頭】死に至るまで、その節操を變ぜざるをいふ、唐書の儒學傳に「林蘊字ハ夢復、泉州ノ人ナリ、西川ノ節度使韋臯、其ノ賢ヲ聞キ、召シテ推官トナセリ、時ニ劉闢叛ヲ謀ル、蘊之ヲ諭スニ順逆ヲ以テセシニ、闢怒リテ蘊ヲ捉へ、枷ヲ加ヘテ獄ニ投ゼリ、將ニ刑ニ就カシメントスル時、闢潛カニ其ノ刀ヲ取ルモノニ告ゲテ曰ク、劔ヲ抽キテ其ノ頸ヲ磨シ、脊カシテ吾ニ歸服セシムベシト、刑ヲ加フルモノ其ノ言ノ如クス、蘊聲ヲ勵マシテ曰ク、殺サバ速カニ殺セ、我が頸何ゾ劔ヲ研グ砥石ナランヤト、闢己ニ與セザルコトヲ知り、遂ニ其ノ死ヲ宥セリ」

【林雲銘】字は西仲、清の福建侯官の人(一ニ閩縣ノ人

ニ作ル)順治戊戌の進士、徽州府通判に官す、挹奎樓集古文析義等の著あり、

【輪廻】流轉一ともいふ、佛經の語、人の生死、善惡の應報、事物の興亡など絶えず移り變りて休まず、車輪の廻轉して始終なきが如しとの意、心地觀經に「有情一一生六道、猶如車輪无始終、或爲父母、爲男女、生生世世互有恩」

【林樾】「ハヤシ」の「コカゲ」玉篇に「楚謂兩木交蔭之下曰樾」とあり、王勣の句に「遂披一」

【隣ヲ買フ】(買隣)書言故事の「擇隣曰一」の注に「南史ニ、宋ノ季雅、南康市宅ヲ罷メテ、呂僧彌ニ隣ス、僧彌宅ヲ買ヒシ價ヲ問フ、答ヘテ曰ク、一千一百萬ト、僧彌ソノ貴キヲ怪ム、曰ク、百萬ハ宅ヲ買ヒ、千萬ハ隣ヲ買フト」(隣ヲトス)を見よ、

【輪ヲ斷ル】(斷輪)を見よ、

【輪ヲ垂ル】(垂輪)魚を釣るをいふ、輪は、ツリイトなり、世説に「王弘之ノ性、魚ヲ釣ルヲ好ム、上虞江ニ一處アリ、三石頭ト名ヅク、弘之常ニ輪ヲ此ニ垂ル」

【隣ヲトス】(ト隣)美々隣を擇ぶなり、左傳昭三年に「非宅是ト」惟隣是ト」杜甫の詩に「李邕求識、面王翰願ト」(隣ヲ買フ)を見よ、

【臨海】 晉南宋南齊の揚州一郡一縣、唐の江南

道台州一縣、今の浙江台州府一縣治これなり、

【臨幸】 天子の「ミユキ」して或る場所に臨みたまふ

義、唐書儒學傳に「數一觀釋菜」

【麟閣】 麒麟閣の略稱、李白の塞下曲に「功成畫一」

獨有霍嫫姚（麒麟閣）を見よ、

【麟角】 極めて希に有る者に喩ふ、北史文苑傳に「學

者、如牛毛、成者如一」學に志す者は、牛の毛程多き

も、成業するものは、麒麟の角の如く少きをいふ、

【麟角ヨリ稀ナリ】 太平記卷三十九に見ゆ、極めて稀の

なるをいふ、前條を見よ、

【林開酒ヲ暖メテ紅葉ヲ燒ク】 唐の白樂天の送王十

八歸山寄題仙遊寺といふ律詩中の句にて、白氏文

集十四に出づ、曰く

曾於太白峰前住、數到仙遊寺裏來、黑水澄時

潭底出、白雲破處洞門開、林開暖酒燒紅葉、

石上題詩掃綠苔、惆悵舊遊無復到、菊花時節

羨君廻、

【臨沂】 西漢の東海郡一縣、東漢の徐州鄆邪國一

縣、今の山東沂州府蘭山縣の北五十清里、

【林希逸】 字は蕭翁、蘭齋と號す、宋の福清の人、端平

ク、要領ヲ全ウストハ、刑誅ヲ免ルルナリ」と、類書纂

要に「輪ハ以テ其ノ周圍ヲ美メ、奘ハ以テ其ノ散明ヲ

美ム、

【麟經】 春秋の異稱獲麟を見よ、

【臨月】 「ウミツギ」通鑑宋明紀に「少府劉暉妾孕一

子、註に「將ニ産セントスルノ月ヲ一トイフ」

【綸言】 天子の言なり、禮記の緇衣篇に「子曰、王言

如絲其出如綸、王言如綸其出如絳」とあるに出づ、綸

は綬なり、絳は棺を引く大索なり、王者の言、固と細

乙未の進士、第四人たり、初め平海軍節度推官とな

り、清白を以て稱せらる、累遷して中書舍人に至る、詩

書畫を善くす、著すところ、易講春秋傳老莊列口義

考工記解竹溪稿等の書あり、世に行はる、

【輪囷離奇】 屈曲盤戻の貌、マガリクネタルをいふ、

漢書の鄒陽傳に「蟠木根柢、一而爲萬乘器者、

何、則以左右先爲之容也、萬乘器は、天子の車輿

の類をいふ、爲之容とは、彫刻して飾を加ふるをい

ふ（先容を參看せよ、

【輪奐】 屋宇の高くして、華やかなるをいふ、禮記の

檀弓に「晉獻文子成室、晉大夫發焉、張老曰、美哉輪焉、

美哉奐焉、歌於斯、哭於斯、聚國族於斯、文子曰、武

也、歌於斯、哭於斯、聚國族於斯、是全要領、以從

先大夫於九原也、北面再拜稽首、君子謂之善頌善禱、

とある註に「大夫發ストハ、諸大夫禮ヲ發シ、往イテ

賀スルナリ、輪ハ輪囷高ナリ、奐ハ奐爛衆多ナリ、歌

ハ祭祀ニ樂ヲナスナリ、哭ハ死喪哭泣ナリ、國族ヲ聚

ムトハ、國賓ヲ燕集シ、宗族ヲ聚會スルナリ、頌ハ其

ノ事ヲ美メテ其ノ福ヲ祝ス、禱ハ以テ禍ヲ免ルルコ

トヲ祈ルナリ、張老ノ言ハ、頌ニ善シ、武子ノ答フル

所口ハ、禱ニ善キナリ、疏ニ曰ク、頌ハ頌ナリ、鄭注ニ曰

條を見よ、

【臨江】 兩漢以後元に至る縣名、今の四川忠州治、

また南宋南齊の南兗州海陵郡の一縣は、今の江蘇

通州如皋縣の南、

また唐の嶺南道武安州一縣は、今の安南國交州府

の地、

また宋の江南西路一軍は今の江西一府清江縣治

なり、

【臨邛】 兩漢晉南宋南齊隋唐宋の縣名、今の四川

邛州治、

【臨濟】 東漢晉南宋の青州樂安國の縣名、今の山東青

州府高苑縣の西北、北魏隋唐の一縣は、今の山東

濟南府章邱縣の西北二十清里、

また唐の高僧、名は義玄、曹州南華の人、姓は荆、黃檗

に師事して深く造詣するところあり、郷に還りて城

南の一院に住す、咸通七年四月十日寂す、勅して慧

照禪師と諡す、當時の緇徒之を仰尊す、その唱ふる所

ろを一一宗と稱す、

【淪喪】 淪は沒なり、滅亡の義、書經微子に「今般其一

【林慙澗愧】 北山移文に「其林慙無盡、澗愧不歇」とあ

るに本づく、孔德璋が周彦倫の偽行を、ソシリて、其のかつて隠棲せし林や湖に慙愧をおぼせて、その實は彦倫を、ハツカシメタルなり(北山移文)を見よ、

【臨淄】西漢の齊郡一縣、東漢、晉の青州齊國一縣、今の山東青州府一縣治、淄一に當るに作る

【麟史】孔子春秋を筆削し、筆を獲麟に絶ちたまふ、故に春秋を「麟」といふ、佩文韻府文部の元稹易家有歸藏判に「穆姜遇艮足徵、一之文、尼父得坤、亦驗、歸藏之首」

【臨深】至りて危き義、臨深淵の略、薄氷(氷)また履薄を見よ、

【輪人】「クルマダイク」戰國策に見ゆ、

【廩人】米倉の番人、周禮地官の序官に見ゆ、

【嚙响】山の「キリギシ」の「ソバダツ」貌、文選の魏都賦に見ゆ、

【臨春結綺】華美を極めたる二つの閣の名、南史に「陳後主於光昭殿前、建結綺臨春望仙三閣」とあり、皆沉檀香木を以てその彩麗を極め、張麗華及び龔孔二妃と之に居る、陳の後主は、かく土木を好み、酒色に耽りしによりて國亡びぬ、宋濂の閱江樓記に「彼一一非不華云云」とあるは、閱江樓の一一一と異

【臨池】後漢の張芝、字は伯英、池に臨みて書を學ぶ、池水盡く黒し、よりに習字の義に用ふ、王羲之の與人書に「張芝一學書、池水盡黒、韋仲將、芝を稱して草聖となす、

【鱗蟲】魚、蛇の如く鱗ある動物をいふ、法華經科註に「龍者是一一之長」

【林中疾風多シ】鹽鐵論に「林中多疾風、富貴多諛言」

【林中ニ薪ヲ賣ラズ】林には薪多し、故に賣ることをせざるなり、以て物は需用ある所に用ふべしとの義、淮南子齊俗訓に「林中不賣薪、湖上不鬻魚、所有餘也」

【輪蹄】車輪馬蹄なり、車馬の義、杜牧の贈別詩に「眼前迎送不曾休、相續一一似水流」

【臨洮】兩漢、晉隋の縣名、今の甘肅鞏昌府岷州治、晉

なる所以をあらはして明の太祖の徳を頌せしなり、

【林鐘】六月の律の名、よりに六月の異稱とす(十二律)を見よ、

【吝嗇】「ヤブサカ」シハシ漢書に「性實一一儉嗇に同じ、

【林處士】(林逋)を見よ、

【廩稍】「フチマイ」官より少しづつ分ち給する食料、儀禮聘禮の「惟稍受之」の註に「稍ハ廩食ナリ」疏に「其ノ稍稍ニ之ヲ給スルヲ以テ、故ニ米廩ヲ謂ヒテ稍ト爲ス」宋濂の送東陽馬生序に「今諸生學於太學、縣官日有一一之供」

【臨川】晉隋の郡名、揚州に屬す、今の江西撫州府一縣の西に當る、唐宋元明の縣名、今の臨川縣治に同

【凛然】威嚴を備ふる意、「リリシキ」貌、楊惲の書に「一一皆有節概」

【林藪】「ハヤシ」ヤブ轉じて物の多く、「アツマルトコロ」淵藪に同じ、文選の典引に「仁義之一一」

【廩粟】「クラ」の「モミ」宋史眞宗紀に「民飢、貸以一一」

【輪タリ彈タリ化ト往來ス】(爲輪爲彈與化往來)謝

以前は隴西郡に屬し、隋は一一郡に屬す、

【隣笛ノ聲】己の嘗て住みし舊宅を過ぎて隣人の笛を吹くを聞きて感奮の情に堪へざりし故事、文選の晉

其の向秀の思舊賦序に「余少與嵇康呂安居止接近、其人並有不羈之才、然嵇志遠而疎、呂心曠而放、其後各以事見法、嵇博綜技藝、於絲竹特妙、臨當就命、顧視日影、索琴而彈之、余逝將西邁、經其舊廬、于時日薄、虞淵、寒冰凄然、鄰人有吹笛者、發聲寥亮、追思曩昔遊宴之好、感音而嘆、故作賦云」この故事により亡友を懷ふを「山陽聞笛」といふ、山陽は秀の舊居の在りし地なり、詳しくは晉書列傳十九を見よ、

【輪番】「カハルガハル」に務に服すると、遼史に「毎日一一千人」

【林霏】霏は氛なり、一一は林に立つ、「モヤ」歐陽修の醉翁亭記に見ゆ、

【臨風】風に臨む、謝莊の賦に「一一歎分將焉歇」

【林深ケレバ鳥棲ム】(林深鳥棲)貞觀政要に「林深、則鳥棲、水廣、則魚游、仁義積、則物自歸之」とあり、言ふ

ところは、林深く茂るときは、鳥集まりて棲み、水廣く大なるときは、魚多く生ず、人仁義を積み畜ふると

【臨平】 西漢の鉅鹿郡一縣、今の直隸正定府晉州の東南

【林逋】 宋史に「一」字ハ君復、宋ノ錢塘ノ人、少クシテ孤ナリ、志ヲ刻シテ學ヲ爲ス、性恬淡古ヲ好ミ、榮利ニ趨ラズ、終ニ臨ミ詩ヲ爲リ、茂陵他日求遺稿猶喜會無封禪書ノ句アリ、仁宗證ヲ和靖先生ト賜ヒ、賻スルニ粟帛ヲ以テス、西湖ニ居ルコト二十年、足未ダ嘗テ城市ヲ履マズ、逋娶ラズ、子ナシ、畫史彙傳に「一」繪事ヲ善クシ、マタ行草書ヲ善クス詩ヲ爲ル、孤峭澄淡自ラ稿ヲ録セズ、(梅妻鶴子)を見よ

【臨摹】 手本を見て「マネテウツス」柳貫の句に「伸紙一筆鋒走」

【麟鳳】 麒麟と鳳凰と、以て「スグレタル」人物に喩ふ、元史の同恕傳に「自京還家居十三年、縉紳望之若景星一、鄉里稱爲先生而不姓」

【林莽】 草木の深く茂れるをいふ、揚雄の長楊賦に「羅千乘于一、列萬騎于山隅」

【臨命終時】 臨終に同じ、人の將に死せんとする時「イマハ」また末期、阿彌陀經に「一」阿彌陀佛與諸

聖衆、現在 其前

【麟兮】 詩經周南麟之趾に「于嗟一」孔子獲麟歌に「唐虞世兮、麟鳳遊、今非其時、來何求、麟兮麟兮我心憂」

また黃庭堅の麟趾贊に「麟有趾而不踞、仁哉麟哉、有定而不抵、仁哉麟哉、有角而不觸、仁哉麟哉」

【李夢陽】 (李夢陽)を見よ

【廩庾】 「クラ」廩は米藏、庾は倉の屋なきもの、史記文帝紀の「發倉庾」の註に「在、邑曰倉、在、野曰庾、史記平準書に「漢興七十餘年之間、國家無事、非遇水旱之災、民則人給家足、都鄙一皆滿、而府庫餘貨財」

【輪輿】 輪は輪人、輿は輿人、車工をいふ、孟子滕文公下篇に「子何尊梓匠一而輕爲仁義者哉」

【琳琅】 玉の「ヤヨラカ」に相撃つ聲をいふ、楚辭九歌に「撫長劍兮玉珥瑤鸞鳴兮一」

また一は一種の美玉、また文詞の「スグレタル」に喩ふ、文心雕龍に「陳思以公子之豪下筆琳琅竝、體貌英逸、故俊才雲蒸、柳宗元の答貢士沈起書に「覽所著文宏博中正富、我以琳琅瑤璧之寶」

【淋離】 長さ貌、楚辭に「劍一而縱橫」また大いな

る貌、揚雄の校獵賦に「一」廓落

【鄰里鄉黨】 鄰は隣に同じ、連文釋義に「五家爲鄰、五鄰爲里」また「萬二千五百家爲鄉、五百家爲黨」論語雍也篇に「一」

【鄰鄰】 多くの車の轟き「キシル」聲、詩經秦風車鄰篇に「有車一、有馬白顛」毛傳に「一」ハ衆車ノ聲ナリ通じて隣に作る、

【瀾瀾】 水清くして石見、る貌、詩經唐風揚之水篇に「揚之水、白石一」傳に「清激ノ貌、亦瀾ニ作ル」次條を參看せよ、

【磷磷】 瀾瀾に通ず、水の石間を流るる貌、また玉石の「カガヤク」貌にも用ふ、宋之問の詩に「卷雲山鱗鱗碎石水一」また道潛の詩に「塔泉激石齒照眼光一

【麟麟】 車の轟く聲、鄰鄰に同じ、新論に「衛靈公與夫人一夜坐、聞車聲一」至、闕而止、過、闕復有聲、この事、列女傳にも出づ、

【凛冽】 寒氣の「キビシキ」をいふ、李白の賦に「嚴冬慘切、寒氣一」

【亮陰】 天子喪に在るの稱、書經の説命の上に「王宅憂一三祀、既免、喪其惟弗言」の註に「亮亦諒ニ作ル、

リンリ—リヤウ

陰ハ古、闇ニ作ル、喪服四制ヲ按ズルニ、高宗諒陰三年、鄭玄の註に「諒ハ古梁ニ作ル、楯(ウツバリ)之ヲ梁ト謂フ、闇ハ廬ヲイフナリ、即チ倚廬ノ廬ナリ、宅憂亮陰トハ、言フコロハ憂ニ梁闇ニ宅ルナリ」次條を見よ、

【諒闇】 天子喪に在るの稱、禮記の喪服四制に「書曰、高宗一三年、不言、善之也、高宗者武丁、武丁者殷之賢王也、繼世即位、而慈良於喪、當此之時、殷衰、而復興、禮廢、而復起、故善之善、之故載之書中、而高之、故謂之高宗」と、漢書の元后傳に「陛下即位、思慕諒闇の顔師古の註には「商書ニイフ、高宗諒闇、諒ハ信ナリ、闇ハ默ナリ、言フコロハ、父ノ喪ニ居テ、信默シテ、三年言ハザルナリ」と、前條を見よ、

【良醫】 「ヨキクスシ」左傳定十三年に「齊高彊曰、三折、肱知爲一」荀子に「一」之門多病人、彙括之側多枉木、彙括は邪曲を正す器なり(三タビ肱)を見よ、

尙書大傳には「子貢對東郭子思曰、彙括之旁多枉木、一」之門、多疾人」とあり、以て不肖の人は賢人の教育を待つに喩ふ、

【量移】 通鑑綱目集覽に「一」トハ、罪ヲ得テ遠ク斥

ケラルル者、教ニ遇ヘバ則チ一セラレ、徒リテ近地ニ居ルヲ謂フ。この解日知録にも見ゆ、移は徒なり。唐朝人の用語、唐詩選に、李白の見、京兆章參軍一、東陽の詩あり。

【兩 曜】 日月をいふ、李白の詩に「浮雲隔一」。

【糧ヲ絶ツ】 (絶糧糧米を絶ちて食はざる義、論語衛靈公篇に「在陳一、從者病、莫能興」。

【梁ヲ繞ル】 (繞梁歌聲の美妙なるを稱していふ、餘音) を見よ。

【亮 籟】 「シャウジ訓蒙字會に「竹障俗稱一」。

【梁 桷】 梁は「ウツバリ」棟を負ひて屋宇を支ふる材、桷は「タルキ」方形なるを桷といひ、圓形なるを椽といふ、韓愈の新修滕王閣記に「棟楹一、板檻之腐黑撓折者」。

【兩 漢】 前漢、西漢、後漢(東漢)をいふ、北史袁翻傳に「一警於西北、魏晉備在、東南」。

【良 貴】 本然に善く貴き者をいふ、孟子告子上篇に「人之所貴者、非一也、趙孟之所貴、趙孟能賤之」。

【兩 儀】 天地なり、また陰陽をいふ、易の繫辭傳に「易有太極、是生一、一ニ舊唐書樂章に「經緯一」文化治、

前に曰く「大ナル哉聖人、言ノ至レルヤ、之ヲ開ケバ廓然トシテ四海ノ内ヲ見、之ヲ閉ヅレバ寂然トシテ牆垣ノ内ヲ見ズ」とあり、
【兩 句三年得、一吟雙淚流】 唐の賈島の自述詩なり、下に「知音如不賞、歸臥故人秋」とあり、これは「獨行潭樹影、數息池邊身」といふ一聯を、三年もかかりて得たり、かく苦心を経て「ヤット」考へつきたるなれば我ながら、一吟して雙淚の流るるを知らずとなり、古人の詩を作る苟もせざること此の如し、

【兩 君】 兩國の君なり、論語八佾に「邦君爲一之好、有反坫、管氏亦有反坫」荀子勸學篇に「事一」者不

【良 月】 陰曆十月をいふ、左傳莊十六年に「使以十月入、曰良月也、就一盈數焉」とあり、數は一に始り十に終る、故に盈數を一といふ、

【兩 臉】 臉は目の下、頰の上の處、李洞の贈龐鍊師詩に「一酒醺、紅杏妬、半宵酥嫩、白雲饒」。

【兩 虎相鬪】 兩雄相「タタカフ」に喩ふ、史記蘭相如傳に「一、一、勢不俱生」。

また兩強國の相戦ふに喩ふ、說苑に「一、一、而驚犬受弊」この語、史記春申君傳にも出づ、

削平方域、武功成、
【良 驥ノ足ヲ絆シテ、責ムルニ千里ノ任ヲ以テス】 (絆良驥之足而責以千里之任、賢者を束縛して、その才を伸ばさしめんとするは、無理なる注文なるに喩ふ、文選の吳季重の答東阿王書に「今處此而求大功、猶絆良驥之足而責以千里之任」の註に「良馬ノ足ヲ絆サバ、何ヲ以テカ千里ノ道ヲ行カン」とあり、

【兩 脚 書厨】 齊の陸澄、學極めて博し、而るに易を讀みて、文義を解せず、王儉曰く、陸公は書厨(ホンバコ)なりと、今人書を讀むこと多くして用ふることは、能はざるものを「一」といふは之に本づく、と駭餘叢考、卷四十三に見ゆ、

【良 禽ハ木ヲ相テ棲ム】 三國志の蜀志に「良禽ハ木而棲、賢臣擇主而事」とあり、良禽は、雜木に止まらざる如く、賢者も身を立て、名を顯はさんと欲すれば賢主を擇びて事ふ、然らざれば、却りて身を害し名を失ふに至る(鳥ハ則チ)を參看せよ、

【良 金玉】 文章のすぐれて妙なるに喩ふ(李嶠)を見よ、

【良 玉】 「ヨキタマ」揚子に「一不雕、美言不文」この

【兩 虎 爭 フ】 兩雄相たたかふに喩ふ、戰國策に「一、一、人而鬪、小者必死、大者必傷」。

【梁 鴻】 字は伯鸞(孟光)また(案ヲ舉ゲ)また(五憶)を見よ、

【良 工苦心】 名人が技藝に對する用心の深切なるをいふ、杜甫の詩に「更覺良工用、心苦」。

【良 工ハ人ニ示スニ樸ヲ以スセズ】 (良工不示、人以樸後漢書馬援傳に見ゆ、技藝の名人は必ずその物を仕上げる内、之を人に示すことなし、これその名を重んずるためなり、

【良 賈ハ深ク藏メテ虚シキガ若クス】 (良賈深藏若虚) 善きアキウドは、その貨(タカラ)を藏めて、店頭に出し示さず、以て君子は盛徳あるも、見かけは愚人の如くなるに喩ふ、史記老子傳に「吾聞一、一、君子盛徳、容貌若愚、去子之驕氣與多欲、泰色與淫志、是皆無益於子之身、大戴禮曾子制言篇にも見ゆ、

【兩 造】 爭訟者なり、原告被告の兩者なり、造は至るの義、兩爭者皆至るの意なり、書經の呂刑に「兩造具備」とあり、周禮に「以兩造、聽民訟」。

【兩 造具備】 原告と、被告との詞證皆具備する義、書

經の呂刑に「師聽五辭」註に「師ハ衆ナリ、五辭トハ、五刑ニカカルノ辭ナリ」

【良死】「ヨキシニザマ」天命を全うして死する義、通鑑梁武紀に「彭城王勰妃李氏曰、高肇枉理殺人、天道有靈、不得一」

【涼颺】「スズシキ風、潘岳の懷縣詩に「自遠集、輕襟隨風吹」謝朓の詩に「珍箴清夏室、輕扇動」陸游の詩に「虛堂雨過生」

【糧食】「カタ」また兵糧(ヘウラウ)漢書食貨志に見ゆ、後漢書吳漢傳に「諸郡甲卒、俱坐費」

【涼州】唐の隴右道に屬す、今の甘肅涼州府武威縣治これなり、また樂曲の名、容齋隨筆に「今樂府所傳、大曲、皆出北唐、而以州名者、五、伊涼、熙石、渭也、唐以後涼を誤りて梁と爲すは非なり、この樂もと西涼府より來りしによりて涼州といふ、

涼州詞

唐 王 翰
葡萄美酒夜光杯、欲飲琵琶馬上催、醉臥沙場君莫笑、古來征戰幾人回、

【領袖】衆人の主位に立ちて儀表となること衣の—あるが如し、衣の領と袖とは、人の目に付く所るなり、

柔則象淵、可觀不可入、去如收電、可見不可得、留如山岳、可瞻不可動、

【糧饒】糧食をいふ、カタ漢書食貨志に「男子力耕、不足—女子紡績、不足衣服」

【梁上ノ君子】盜賊の異稱なり、後漢書陳寔傳に「太丘ノ長ニ除ス、德ヲ修メテ清靜、百姓以テ安シ、時ニ歲荒ル、盜アリテ夜其ノ室ニ入り、梁上ニ止マル、寔陰カニ見ル、子孫ヲ呼ビ、色ヲ正シ、之ニ訓ヘテ曰ク、夫レ人自ラ勉メザルベカラズ、不善ノ人、未ダ必ズシモ本ト惡ナラズ、習ヒテ以テ性ト成リ、遂ニ此ニ至ル、梁上ノ君子是レナリト、盜大ニ驚キ、自ラ地ニ投ジ稽顙シテ罪ニ歸ス、寔曰ク君ガ狀貌ヲ視ルニ、惡人ニ似ズ、當ニ貧困ニ由ルベシト、絹二匹ヲ遺ラシム、是ヨリ一縣盜ナシ、後チ累命セラルルモ起タズ、家ニ卒ス、海内赴ク者三萬餘人、衰麻ヲ服スル者數百人、文範先生ト諡ス、陳寔を見よ、

【靈鷲山】耆闍崛山の譯語、略しては靈山ともいふ、峯の形、鷲に似たるによりて—といふ、佛この山にて八箇年を費して法華經を説けりといふ、

【兩手ノ汗ヲ握ル】(兩把ノ)を見よ、

【梁書】五十六卷、唐の太宗の貞觀三年、姚思廉勅を

り、故に人の儀則となるに喩ふ、晉書魏舒傳に「文帝深器重之、每朝會罷、目送之、曰、魏舒、堂堂人之—也」成語考に「晉裴秀八歲能屬文、人語曰、後進—有裴秀秀字は季彥、河東聞喜の人、

【良人】儀禮の註に「婦人夫ヲ稱シテ—トイフ」詩經唐風綢繆篇に「今夕何夕、見此—、又孟子離婁下篇に「其妻告其妾曰、—出、則必鑿酒肉而後反、

【良心】本然の善心なり、孟子告子上篇に「雖存乎人者、豈無—仁義之心哉、所以放其—者、亦猶斧斤之於木也、且且而伐之、可以爲美乎、

【良辰美景】良き時節と、ウツクシキ景色と、文選の謝靈運の擬魏太子鄴中集詩序に「天下—、賞心樂事、四者難并」北齊書段榮傳に「—、未嘗虛棄、

【良匠】「ヨキ大工、淮南子に「—不能斷金、巧冶不能鑠木、金之勢不可斷、而木之性不可鑠也、鑠は銷トカスなり、(明王ノ人)を見よ、

【良將】「ヨキタイシヤウ、黃石公上略に「—之統、軍也、知己治人、推惠施恩、士力日新、淮南子に「—之用、兵常以積德、擊積怨、以積愛、擊積憎、何故而不勝、抱朴子に「—剛則法、天可望不可干、

奉じて撰す、本紀六卷、列傳五十卷に分つ、志表なし、思廉は梁の史官姚察の子なり、篇末に「陳ノ吏部尙書姚察」と題せるもの凡そ二十有六、蓋し此の書その父の遺業に因りて成りたればなり、梁陳二書、古文を用ひて事を敘す、頗る六朝四六の弊を脱せり、

【兩制】書言故事に「宋、翰林學士謂之内制、中書舍人知制誥、謂之外制、内制は制誥の文を掌り、外制は軍國の政令を掌る、宋史竇儼傳に「兄弟同日拜命、分居—、時人榮之、

【兩舌】「ニマイジタ、ウソツラツク」兩者の間に立ち相互を離閉せしむる言をいふ、十惡の一、四十二章經に「—惡口、妄言、綺語、

【兩全】兩ながら全き義、晉書周處傳に「忠孝之道、安得—、韓愈の送許州監軍俱文珍詩に「誰言臣子道、忠孝—難、

【糧道】糧は糧に同じ、次條を見よ、

【兩端】「ヘウロウ」を送る道、史記の蘇秦傳に「韓絕其—、南史張興世傳に「遏其—、賊飢餓、饒道皆同、

【兩端】議論の二極端をいふ、中庸に「執其—、用其中於民、注に「過ト不及トナリ」論語子罕に「存

鄙夫問於我空空如也我叩其一一而竭焉疏に「一一ハ終始ナリ」

【兩端ヲ持ス】(持兩端)二心を抱くをいふ、史記鄭世家に「晉聞楚之伐鄭發兵救鄭其來一一故遲」

【兩端ヲ叩ク】論語子罕篇に見ゆ(其ノ兩端を見よ、諒足ラズシテ談餘リアリ)諒不足而談有餘漢書の杜鄴傳の贊に「可謂諒不足而談有餘者」とあり、諒は信(マコト)なり、

【良知】學ばずして知る所のもの、孟子盡心上篇に「人之所不學而知者一一也」

【掠治】「ムチウチ」て罪を治むる義漢書に「下獄一一」

【掠管】「ムチウツ」なり、管掠とも用ふ、史記張儀傳に「楚相亡璧門下意張儀共執一一數百、不服乃釋之」

【梁塵ヲ動かス】(動梁塵)歌聲の善さを稱す(聲梁塵)を見よ、

【兩杖鼓】「カツコ」通典に「羯鼓正如漆桶兩頭俱擊以出羯中故號羯鼓亦謂之一一」文獻通考に「羯鼓中世俗亦謂之一一」

【良知良能】良とは、天然自然の善をいふ、人の思慮

せずして知るを、良知といひ、學ばずして能くするを良能といふ、孟子盡心上篇に「人之所不學而能者其良能也、所不慮而知者其良知也」

【良圖】善き謀をいふ、左傳に「敢不一一」また左思の詠史の詩に「夢想騁一一」

【梁棟】「ウツバリ」「ムナギ」轉じて重任に勝ふる材器をいふ、魏書陸倕等傳に「爲時一一(棟梁ノ)を見よ、

【兩豆耳ヲ塞グモ雷霆ヲ聞カズ】(一葉目ヲ)を見よ、

【兩得】一事を爲して兩益を得る義、晉書束皙傳に「一舉一一、外實內寬」唐書段平仲傳贊に「聖王屈己從諫、君臣一一其美、知道之本歟(一舉一一)を參看せよ、

【涼德】涼は薄なり、薄徳をいふ、左傳莊三十二年に「號多一一」

【兩都賦】漢の班固の西都賦(長安)東都賦(洛陽)を合稱す、文選に載せたり、晉書左思傳に「班固兩都、理勝其辭、張衡二京、文過其意」

【梁肉】美味をいふ、梁は粟の「スグレテ」美なるものなり、列子に「衣則衣錦、食則一一居、則連輿出、則結駟」とあり、史記の孟嘗君傳に「孟嘗君曰、文聞將門必有將、相門必有相、今君後宮、蹈綺縠、而士不

【涼棚暑ヲ避ク】(涼棚避暑)開元遺事に「長安ノ富人暑伏中ニ至ル毎ニ、各、林亭内ニ於テ、畫柱ヲ植テ、錦ヲ以テ結ビテ涼棚ヲ爲リ、坐具ヲ設ケ、名姝ヲ召シ開坐シ、遞ニ避暑ノ會ヲ爲ス」

【梁伯鸞】(梁鴻)を見よ、

【兩把ノ汗ヲ握ル】(握兩把汗)兩手に「アセ」を「ニギル」アブナキ場合に「オソレキヅカフ」にいふ、姜南投壘雜筆に「今世人旁觀人涉險而濟者輒曰爲爾捻兩把汗、按、元史憲宗召趙璧問曰、天下何如、而治對曰、請先誅近侍之尤不善者、憲宗不悅、璧退、世祖曰、秀才汝渾身都是膽耶、吾亦爲汝握兩手汗也」

【兩眉】兩方の「マユ」黃帝内景經の「天庭地關列斧斤」の注に「一一ノ間ヲ天庭ト爲ス」王暉の小園卽事に「深院日長、須細履也勝愁坐一一攢雙眉に同じ、

【良弼】良き輔佐の臣をいふ、書經の説命に「帝夢賚予一一」

【兩髻】兩方の「ピン」髻は鬢に同じ、陶潛の責子詩に

【得短褐、僕妾餘一一、而士不厭糟糠】
【良二千石】良き太守をいふ(二千石)を見よ、
【量入爲出】(入ルヲ量ツテ)を見よ、
【良農】「ヨキ、ヒヤクシャウ」荀子に「一一不爲水旱一」
【梁ノ孝王ハ鄒枚トキコエシ二人ノ臣云云】十訓抄第五に見ゆ、前漢書列傳に「梁孝王、文帝子也、招四方豪傑、山東游士、莫不至、齊人羊勝、公孫詭、鄒陽之屬皆游梁云云」とあり、詳くは同書を見よ、鄒陽は齊人枚乘字は叔、淮陰の人、共に文學を以て名あり、その作る所ろは文選に出てたり、二人は初め吳王濞に事へしが、後去りて孝王に従ふ、西京雜記に「梁孝王、好營宮室苑囿之樂、作曜華之宮、築兔園、日與宮人賓客弋釣其中」と見えたり、また漢書列傳に「孝王大治宮室、爲複道、自宮連屬於平臺三十餘里、註に「平臺ハ大梁ノ東北ニ在リ、離宮ナリ」
【梁ノ惠王】魏侯鎰なり、大梁に都し、僭して王と稱し、諡して惠といふ、史記に「惠王三十五年、卑禮厚幣、以招賢者、而孟軻至梁」とあり、梁惠王、孟子に利國を問ふこと、孟子の卷首に見ゆ、
【兩髦】幼者の髪を剪りて、眉の邊まで垂れたるを髦

【白髮被】肌膚不復實。白居易の晚春酩酊酒詩に「百
花落如雪、一一垂作絲」

【兩府】治平類纂に「中書省與樞密院爲一一君臣
政要に凡、文事は中書に出で、武事は樞密に出づ」

【兩部ノ鼓吹】南史孔珪傳に「孔稚珪、字ハ德璋、會稽
山陰ノ人、齊ノ明帝ノ時、南郡ノ太守トナル、珪、風韻
清疎、文詠ヲ好ミ、酒ヲ飲ムコト七八斗、世務ヲ樂マ
ズ、居宅盛ニ山水ヲ營ミ、凡ニ憑リテ獨酌ス、傍ヲ雜
事ナシ、門庭ノ内、草萊翦ラズ、中ニ蛙鳴アリ、或人之
ニ問ヒテ曰ク陳蕃タラント欲スルカト陳蕃庭宇蕪
穢人之を問ふ、答へていふ、大丈夫當に天下を掃除す
べし、安ぞ一室を事とせんと」珪曰ク、我此ヲ以テ兩
部ノ鼓吹ニ當ツ、何ゾ必ズシモ蕃ニ效ハン（樂に坐部
立部あり故に兩部といふ）王晏嘗テ鼓吹ヲ鳴ラシテ
之ヲ候ス、群蛙ノ鳴クヲ聞キテ曰ク、此レ殊ニ人耳ニ
聒シト、珪曰ク、我鼓吹ヲ聽クニ殆ド此ノ蛙鳴ニ及バ
ズト、晏慙色アリ蘇軾の詩に「已遣亂蛙成兩部、
更邀明月作三人」

作盆池養科斗數十戲作 宋陸游
小小盆池不畜魚 題詩聊記破苔初 未聽兩部
鼓吹樂 且看一篇科斗書

【良平】漢の高祖の謀臣、張良と陳平とをいふ、共に
智略に長ぜし人、蘇軾の潮州韓文公廟碑に「一一失其
智」

【梁甫】東漢の侯國、兗州泰山郡に屬す、今の山東泰
安府泰安縣の南六十清里、また泰山の「ソバ」の山名、
白虎通封禪の注に見ゆ、

【梁甫ノ吟】甫一に父に作る、諸葛亮の詩なり、曰ク
步出齊城門、遙望蕩陰里、里中有三墳、累累
正相似、問是誰家塚、田疆古冶氏、力能排南山、
文能絕地理、一朝被讒言、二桃殺三士、誰
能爲此謀、相國齊晏子、
齊の景公、勇士陳開疆、顧冶子、公孫捷一本ニ公孫接
田開疆古冶子ニ作ル三人あり、晏嬰曰ク、大王三桃
を摘み、自らその一を食ひ、各功を説かしめ高き者
に一顆づつを賜へと、陳顧二人之を食ふ、公孫自刎す
而して陳顧慙を懷き、亦從ひて刎ぬ、諸葛孔明歩して
三墳を見、この詩を作りて之を嘆ぜしなり（二桃三士）
を參看せよ

【良夜】深夜なり、後漢書祭遵傳に「帝（光武）幸遵營
勞享士卒、一一乃罷」
また「ヨキ」夜の義、蘇軾の後赤壁賦に「月白風清、如此

【良冶】巧みなる鍛冶なり、禮記の學記に「一一之子、
必學爲裘、良弓之子、必學爲箕（箕裘ノ）を見よ、

【良藥ハ口ニ苦シ】說苑正諫篇に「孔子曰、良藥苦於
口、利於病」とあり、以て忠言は耳に逆へども、行に利
あるに比す、この語、孔子家語にも見ゆ、下に「忠言逆
耳利於行」とあり、

【兩用】兩ながら併せ用ふる義、戰國策に「宣王謂樛
留曰、吾欲一一公仲公叔、其可乎」

【兩立セズ】（不兩立）兩者の勢、並び立つこと能はざ
る義、戰國策に「楚強、則秦弱、楚弱、則秦強、此其勢

【利益】「タメニナルコト」法華經に「恒求善事一一
一切利益は漢音エキ

【略約】獨木橋をいふ、約ハ廣韻ニ「木ヲ横ヘテ水ヲ
渡ンナリ」蘇軾の詩に「一一橫秋水、浮屠插暮煙」

【略賣】人をカドハカシ賣る、漢書外戚傳に「家貧
爲人一一」

【龍樹】菩薩の名、馬鳴菩薩の弟子迦毘摩羅尊者に
從ひて修道士、法苑珠林に「有大大士名曰一一、天聰

奇悟、事不再問、建立法幢、摧伏異道、託生南天竺國、

出梵志種、隋書經籍志に「一一菩薩和香法二卷」あり、

【龍涎】香の名、香譜に「一一于香品最貴、出大食國
海傍、多亦不過數兩、上品曰「泛水」、次曰「滲沙」

【龍腦】香の名、本草に「一一香南番諸國皆有之、乃深
山窮谷中、千年老杉樹、其枝幹不啻損動者、則有香、
若損動、則氣洩無腦、また支那より舶載し來りて藥
品となす一一は樟腦を精煉せしものなりといふ、

【菱】菱一に菱に作る、その實の外皮に兩角ある、「ヒ
シ」菱は音キ四角若くは三角ある、「ヒシ」共に水草、根
は水底にありて、葉は水面に叢生す、形平たく蝶の翅
の如し、夏、小白花を開く、秋、實熟すれば黒く、仁白
くして食ふべし、呂氏春秋に「夏食一冬食橡栗」

【菱】前條を見よ、

【李龜】字は泰和、善の子、唐の廣陵江都の人、早く名
あり、義を重んじ士を愛す、李嶠の薦によりて左拾遺
に拜す、玄宗の初、御史中丞となり、出されて北海の
太守となる、時に李北海と稱す、龜の文章書翰皆人に
過ぐ、李林甫その盛名を疾みて之を害す、卒する年七
十、時に天寶六年なり、著すところ李北海集あり、

【李膺】字は元禮、後漢の潁川襄城の人、孝廉に舉げ
られ、青州の刺史に至る、守令風を聞き印綬を解きて

去る、後ち司隸校尉となる、その容接を被るれば、名づけて登龍門と爲す、後ち黨錮に坐して官を免せらる。

【陵夷】 陵は丘陵、夷は平なり、すべて事の始は盛にして終は衰へ、その類替、オトロフル、すること丘陵の漸くに平かなるが如きに喩ふ、漢書成帝紀に「帝王之道、日以—と、晉書儒林傳に「昔周德既衰、諸侯力政、禮經廢缺、雅頌—陵遲に同じ、

【稜威】 神靈の威をいふ、威稜に同じ、南史梁武帝紀に「—直指、勢踰風電、李白の大獵賦に「稜威耀、乎雷霆、稜一音ロウ

【凌雲觀】 三國史に「魏文帝立—、誤、先釘榜、乃以龍盤、韋誕、輓轡、引上書、之、去地二十五丈、既下、鬚髮皓然、とあり、卓氏藻林にも「魏曹丕築凌雲臺、在洛陽孟津、臺上樓觀極其精巧、とあり、十訓抄第九に「凌雲の忽ち雪をけける頭に變じける」とあるはこれを斥す、韋誕字は仲將、太僕端の子、文辭を善くし、最も書法に工なり、魏に仕へて光祿大夫に至る、

【凌雲之志】 高く世外に超脱する志をいふ、漢書の揚雄傳に「標標、有—、また天寶遺事に「張象科ニ登リテ華陰ノ薄ト爲ル、而シテ守令ノ爲メニ

精、段志玄、蕭瑀、張亮、劉弘基、屈突通、柴紹、殷開山、侯君集、長孫順德、唐儉、張公謹、程知節、虞世南、劉政會、李勣、秦叔寶の二十四人なり、

【龍】 龍ヲ視ル猶ホ蠅蟻ノ如シ、(視龍猶蠅蟻、淮南子に「禹南省方濟于江、黃龍負舟、舟中之人、五色無主、禹乃熙笑、而稱曰、我受命于天、竭、力而勞、萬民、生、寄也、死、歸也、何足、以滑和、—、顔色不變、龍乃耳、耳掉、尾而逃、この事、呂氏春秋知分にも載すれども、—の句なし、

【龍】 攀テ鳳ニ附ク、(攀龍附鳳、龍鱗ニ)を見よ、

【凌駕】 人をシノギテ、其の上に立たんとする義、宋書恩倖傳に「憑籍世資、用相—」

【菱歌】 「ヒシ」を採る者の「フナウタ」李德裕の靈泉賦に「聽—、而夜起、李白の蘇臺覽古に「舊苑荒臺、楊柳新、—、清唱不勝春、

【菱荷】 「ヒシ」と「ハチス」と、宋史河渠志に「種植—」

【菱荇】 「ヒシ」と「アサザ」と、荇は一名「ハナジユンサ

抑ヘラル、嘆ジテ曰ク丈夫雲ヲ陵ギ世ヲ蓋フノ志アリテ、下位ニ拘セラレ、身ヲ矮屋ノ下ニ立テ、人ヲシテ頭ヲ擡グルヲ得ザラシムルガ如シト、乃チ官ヲ棄テテ去ル」とあり、陵は凌と通ず、

【菱葉】 「ヒシ」の葉、劉孝威の釣竿詩に「鉤利、斷、蕪絲、帆舉、牽—、儲光羲の采菱詞に「濁水—肥、清水—鮮、

【陵園】 「ミササギ」晉書瑯琊王煥傳に「營起—、功役甚衆、

【陵園ノ配妾ガ、月ニ徘徊セシ松ノ扉ノ中】 十訓抄第一に見ゆ、晉の武帝の宮人、美男の聞、高かりし潘岳(字ハ安仁)に通ぜしとの事によりて、陵園の墓守に配せられたるを、陵園の配妾といふ、白氏文集四に「陵園妾、憐幽閉也」の古詩に「陵園妾、顔色如花命如葉、命如葉薄將奈何、一奉、寢宮、年月多、中畧、山宮一閉無開日、此身未死不令出、松門到曉、月徘徊、柏城盡日風蕭瑟、松門柏城幽閉深、聞蟬聽燕感光陰、眼看菊蕊重陽淚、手把梨花寒食心、云云、

【凌煙閣ノ勳臣】 資治通鑑の、唐の太宗貞觀十七年に「功臣ヲ凌煙閣ニ圖畫ス」とあり、勳臣は長孫無忌、趙郡王李孝恭、杜如晦、魏徵、房玄齡、高士廉、尉遲敬德、李

イ池澤に生ず、葉は水面に浮び、根は水底に生ず、莖細く、葉の形蓴菜の如くにして稍圓く、一方に缺ありて、面縁に背紫なり、夏五瓣の黃花を開く、詩經周南關雎篇に「參差、荇菜」とあるは是れなり、一名は接余、晁補之の跋林逋薦士書に「—魚鳥可樂、

【龍】 天子の御顔を稱す、史記高祖紀に「高祖爲人、隆準、而—とあるに本づく、

【龍】 領ヲ探ル、(探龍領)危險を犯すに喩ふ、莊子列禦寇篇に「千金之珠必在九重之淵、而驪龍領下、子能得珠者、必遭其睡也、使驪龍而寤之、子尙奚微之有哉、劉知幾の思慎賦に「探龍領以獲奇、

【菱菱】 「ヒシ」連文釋義に「兩角者菱、四角者菱、列子に「夏日則食—、晉の采蓮童曲に「西湖采—、菱は菱に同じ、

【龍旗】 交龍を畫く旗なり、旗は倚なり、龍旗に同じ、兩龍依倚するあるなり、禮記に「—九旗、天子之旌也、

【龍旗】 天子の「ハタ」前條に同じ、滕彥將旗銘に「—所指、八表澄清、

【龍駒鳳雛】 兒童の俊秀なるものを稱す、晉書の陸雲傳に「雲六歲能ク文ヲ屬ス、兄ノ機ト名ヲ齊クス、文章、

機ニ及バズト雖モ、而モ持論ハ之ニ過キタリ、二陸ト號ス、幼時吳尙書閔鴻、見テ之ヲ奇トシテ曰ク此ノ兒若シ龍駒ニアラズンバ、當ニ是レ鳳雛ナルベシト、年幼なるが故に龍駒といふ。

【菱花】「ヒシ」の花、史記司馬相如傳に「外發芙蓉、菱華、内隱、鉅石白沙、三柳軒雜識に「一爲水客」

また鏡の異名、飛燕外傳に「七尺一鏡一奩、駱賓王の王昭君詩に「古鏡一暗、愁眉柳葉、楊達の明妃怨に「匣中縱有、一鏡、羞向、單于、照、舊顏」

【龍光】龍光に同じ、詩經小雅蓼蕭篇に「既見君子、爲龍爲光」の註に「龍龍也、爲龍爲光、光喜其德」之詞也

また風采の義にも用ふ、後漢書高彪傳に「彪遣馬融書曰、承服風問、從來有年、故不待介者、而謁見大君子之門、冀一見、一以敘、腹心之願」

【鞍鞴】車の大きいをいふ、王褒の洞蘭賦に「其武聲則若雷霆」

【龍華下生三會ノ曉】太平記卷十二に見ゆ、祖庭事苑七に「龍華樹也、其樹有華、華形如龍故名、龍華彌勒下世經曰、當來彌勒於此樹下、說法度人、而有三會、初會先度釋迦所未度者、次度其餘、凡六十八億

【龍虎榜】名士の同時に及第して揭示せられしをいふ、榜は試験に及第せし者の姓名を揭示する義、榜に同じ、唐書歐陽詹傳に「與韓愈李觀李絳崔羣王涯馮宿聯第、皆天下選、時稱「一」

【龍山帽落ツ】(孟嘉)を見よ、

【龍舟】天子のミフネ、隨書食貨志に「楊帝造、一」

【陵寢】「ミササギ」宋史樂志に「孫皓先封、烏程侯、即改葬和於烏程西山、號曰明陵、置園邑二百家、於烏程、立、一、陵園に同じ、

【龍車】天子のミクルマ、金史に「道路儀衛、紅羅傘、一、龍輿、龍駕に同じ、

【龍驤虎視】驤は擧なり、遠なり、龍の擧るが如く、虎の視るが如く、威勢の盛なるをいふ、蜀志諸葛亮傳に「亮之素志、進欲、一、苞括、四海、漢書韓彭敘傳に「雲起龍驤、化爲侯王」

【龍種】爾雅に「馬八尺ナルヲ龍トナス」一は、駿駒をいふ、

また賢子の義にも用ふ、襄陽記に「龐德公子、字、世

人、第二會、六十六億、第三會六十四億、故曰龍華三會

【陵戸】「ミササギ」を守る家、唐書禮樂志に見ゆ(陵墓)を參看せよ、

【龍虎】易乾卦の文言に「雲從龍、風從虎、聖人作、而萬物覩」史記項羽本紀に「范增說項羽曰、沛公入關、其志不在小、吾令人、望其氣、皆爲、一、成、五采、此天子氣也、急擊、勿失」

應璩の與尙書諸郎書に「以、一、之、姿、遭、風雲之會」

【利用厚生】利用とは、工の器を作り、商の貨を運する類をいひ、厚生とは、帛を衣、肉を食ひ、飢ゑず、寒えざる類をいふ、書經大禹謨に「正德、一、一、一、惟和」

【陵谷處ヲ易フ】(陵谷易處)高下位を易へ、尊卑序を失ふに喩ふ、漢書劉向傳に「一、一、一、列星失行」

また詩經に「高岸爲谷、深谷爲陵」とあるも、同じ、

【陵谷之變】世事の變遷するをいふ、晉書に「杜預好爲後世名、常云、高岸爲谷、深谷爲陵、刻石爲碑、紀其勳績、一沈、萬山之下、一立、岷山之上、曰、焉知此後不爲、陵谷乎、元寂の詩に「但見衣冠成、古丘、不見江河變、陵谷、前條を見よ、

【龍骨車】「ミツグルマ」三才圖會に「翻車、今ノ人、一

文、晉太康中爲、祥柯、太守、去官、歸、鄉、居、白沙里、鄉人宗敬之、相語曰、我家池中、一、歸、矣、杜甫の哀王孫詩に「高帝子孫盡、隆準、一、一、自、與、常人、殊」

【龍鍾潦倒】癡老をいふ、反切の語なり、湘素雜記に「古語ニ、聲合シテ、一字ト爲ル者アリ、不可ヲ巨トナシ、何不ヲ盡トナスガ如シ、西域ニ合ノ音ニ從フ、切字ノ元ナリ、龍鍾潦倒ノ、正ニ二合ノ音ナルガ如シ、龍鍾ノ切ハ、癡ノ字、潦倒ノ切ハ、老ノ字、老羸癡疾、即チ龍鍾潦倒ヲ以テ之ニ目クル者正ニ此ノ義ナリ(潦倒)を參看せよ、

【龍生日】陰曆五月十三日をいふ(竹醉日)を見よ、

【凌霄花】和名、ノウゼンカヅラ、古名、ノセウ、蔓生して樹にまとい、高きに、ノボル、葉は對生して藤の葉に似て粗き鋸齒あり、夏の末に枝を出すこと一尺許、兩對して花開く、形、アサガホ、の花の如く、本は筒にて、末は圓瓣五出し、内は赭黃にして外は淡黃なり、一名は若、詩經小雅に「苕之華、芸、其黃矣」とあり、羣芳譜に「一名紫葳一名陵苕一名女葳一名菱華一名武威一名罌陵一名鬼目、處處皆有、多生山中、人家園圃亦栽之、野生者蔓纒數尺、得木而上、即高數丈云云、三柳軒雜識に「一、一、一、勢客ト爲ス」花史に「富鄭公園中、一

文、晉太康中爲、祥柯、太守、去官、歸、鄉、居、白沙里、鄉人宗敬之、相語曰、我家池中、一、歸、矣、杜甫の哀王孫詩に「高帝子孫盡、隆準、一、一、自、與、常人、殊」

【龍鍾潦倒】癡老をいふ、反切の語なり、湘素雜記に「古語ニ、聲合シテ、一字ト爲ル者アリ、不可ヲ巨トナシ、何不ヲ盡トナスガ如シ、西域ニ合ノ音ニ從フ、切字ノ元ナリ、龍鍾潦倒ノ、正ニ二合ノ音ナルガ如シ、龍鍾ノ切ハ、癡ノ字、潦倒ノ切ハ、老ノ字、老羸癡疾、即チ龍鍾潦倒ヲ以テ之ニ目クル者正ニ此ノ義ナリ(潦倒)を參看せよ、

【龍生日】陰曆五月十三日をいふ(竹醉日)を見よ、

【凌霄花】和名、ノウゼンカヅラ、古名、ノセウ、蔓生して樹にまとい、高きに、ノボル、葉は對生して藤の葉に似て粗き鋸齒あり、夏の末に枝を出すこと一尺許、兩對して花開く、形、アサガホ、の花の如く、本は筒にて、末は圓瓣五出し、内は赭黃にして外は淡黃なり、一名は若、詩經小雅に「苕之華、芸、其黃矣」とあり、羣芳譜に「一名紫葳一名陵苕一名女葳一名菱華一名武威一名罌陵一名鬼目、處處皆有、多生山中、人家園圃亦栽之、野生者蔓纒數尺、得木而上、即高數丈云云、三柳軒雜識に「一、一、一、勢客ト爲ス」花史に「富鄭公園中、一

文、晉太康中爲、祥柯、太守、去官、歸、鄉、居、白沙里、鄉人宗敬之、相語曰、我家池中、一、歸、矣、杜甫の哀王孫詩に「高帝子孫盡、隆準、一、一、自、與、常人、殊」

【龍鍾潦倒】癡老をいふ、反切の語なり、湘素雜記に「古語ニ、聲合シテ、一字ト爲ル者アリ、不可ヲ巨トナシ、何不ヲ盡トナスガ如シ、西域ニ合ノ音ニ從フ、切字ノ元ナリ、龍鍾潦倒ノ、正ニ二合ノ音ナルガ如シ、龍鍾ノ切ハ、癡ノ字、潦倒ノ切ハ、老ノ字、老羸癡疾、即チ龍鍾潦倒ヲ以テ之ニ目クル者正ニ此ノ義ナリ(潦倒)を參看せよ、

【龍生日】陰曆五月十三日をいふ(竹醉日)を見よ、

【凌霄花】和名、ノウゼンカヅラ、古名、ノセウ、蔓生して樹にまとい、高きに、ノボル、葉は對生して藤の葉に似て粗き鋸齒あり、夏の末に枝を出すこと一尺許、兩對して花開く、形、アサガホ、の花の如く、本は筒にて、末は圓瓣五出し、内は赭黃にして外は淡黃なり、一名は若、詩經小雅に「苕之華、芸、其黃矣」とあり、羣芳譜に「一名紫葳一名陵苕一名女葳一名菱華一名武威一名罌陵一名鬼目、處處皆有、多生山中、人家園圃亦栽之、野生者蔓纒數尺、得木而上、即高數丈云云、三柳軒雜識に「一、一、一、勢客ト爲ス」花史に「富鄭公園中、一

文、晉太康中爲、祥柯、太守、去官、歸、鄉、居、白沙里、鄉人宗敬之、相語曰、我家池中、一、歸、矣、杜甫の哀王孫詩に「高帝子孫盡、隆準、一、一、自、與、常人、殊」

【龍鍾潦倒】癡老をいふ、反切の語なり、湘素雜記に「古語ニ、聲合シテ、一字ト爲ル者アリ、不可ヲ巨トナシ、何不ヲ盡トナスガ如シ、西域ニ合ノ音ニ從フ、切字ノ元ナリ、龍鍾潦倒ノ、正ニ二合ノ音ナルガ如シ、龍鍾ノ切ハ、癡ノ字、潦倒ノ切ハ、老ノ字、老羸癡疾、即チ龍鍾潦倒ヲ以テ之ニ目クル者正ニ此ノ義ナリ(潦倒)を參看せよ、

【龍生日】陰曆五月十三日をいふ(竹醉日)を見よ、

【凌霄花】和名、ノウゼンカヅラ、古名、ノセウ、蔓生して樹にまとい、高きに、ノボル、葉は對生して藤の葉に似て粗き鋸齒あり、夏の末に枝を出すこと一尺許、兩對して花開く、形、アサガホ、の花の如く、本は筒にて、末は圓瓣五出し、内は赭黃にして外は淡黃なり、一名は若、詩經小雅に「苕之華、芸、其黃矣」とあり、羣芳譜に「一名紫葳一名陵苕一名女葳一名菱華一名武威一名罌陵一名鬼目、處處皆有、多生山中、人家園圃亦栽之、野生者蔓纒數尺、得木而上、即高數丈云云、三柳軒雜識に「一、一、一、勢客ト爲ス」花史に「富鄭公園中、一

一無因附一而特起、歲久成、大樹、高數尋、朱弁曰、是非草木中豪傑乎、所謂不待文王而興者也、陸游の詩に、高花風墮赤玉盞、老蔓烟濕蒼龍鱗、

【龍潛】 潛龍に同じ、天子未だ位を踐まざる時の稱、易の乾卦に、初九、潛龍勿用、任防書に、臣早奉一、

【龍泉太阿】 龍泉太阿は、共に古の名劍の名なり、越絶書に、楚王召、風胡子、命之、吳越、見、歐冶子干將、使之爲、鐵劍三枚、一曰、龍泉、二曰、太阿、三曰、上市、ま

た圓機活法に、晉ノ雷煥初メ吳ノ未ダ滅ビザルヤ、斗牛ノ閉、常ニ紫氣アリ、張華、雷煥ニ問フ、煥曰ク、寶劍ノ精、上天ニ徹スルノミト、華即チ煥ヲ補シ、豊城令ト爲ス、煥獄屋ノ基ヲ掘リ、一石函ヲ得タリ、中ニ寶劍二有リ、刻題シテ、一ヲ龍泉トイヒ、一ヲ太阿トイ

フ是ノ夕、斗牛ノ閉、氣復タ見エス、煥南昌ノ西山下ノ土ヲ以テ之ヲ拭フ、光芒艶發ス、使ヲ遣ハシ、一ヲ送リ華ニ與ヘ、一ヲ留メ自ラ佩フ、華曰ク、此レ干將ナリ、莫邪復タ至ル可シヤ、否ヤ、然リト雖モ、天神物ヲ生ズル、終ニ當ニ合スベキノミト、華誅セラルルニ及ビ、劍ノ所在ヲ失ス、煥卒ス、子華、劍ヲ持シ行キ、延平津ヲ經、劍忽チ腰間ヨリ躍リ出デテ水ニ墮ツ、人ヲシテ水ニ没シ之ヲ取ラシム、但ダ兩龍蟠紫、文章アルヲ

見ル、須臾ニシテ光彩水ヲ照シ、波浪驚キ沸ク、華嘆ジテ曰ク、先君化去ノ言ト、張公終合ノ論ト、此レ其レ驗アリシ乎ト、

【龍孫】 箭の異名、釋贊寧箭譜に、俗呼、箭爲一、陸游の詩に、萬林無數長、一、また竹の一種、東齋紀事に、辰州有一種小竹曰、一、竹、生山谷間、高不盈尺、細如鍼、

また駿馬を稱してもいふ、

【龍蛇】 易の繫辭傳に、一、之蟄、以存、身也、韓非子に、慎子曰、飛龍乘雲、騰蛇遊霧、雲罷霧霽、而一、與蛟螭同矣、則失其所乘也、(深山大澤)を參看せよ、また佛經にて、龍を聖者に喩へ、蛇を凡夫に喩ふ、佛印語錄に、凡聖同居、一、混雜、

【龍韜】 六韜に、一曰文韜、二曰武韜、三曰一、四曰虎韜、五曰豹韜、六曰犬韜、轉じて兵書または兵法の義とす、李泌の句に、良弓摧折久、誰識、是、一、鄭俠の送周如京詩に、一、虎略何處藏、却、向、吟、筆、呈、鋒、

【龍團】 上品の茶をいふ、成語考に、一、雀舌、香茗の註に、茶ノ品ハ、龍鳳團ヨリ貴キハナシ、餅上ニ、龍鳳紋ヲ印スルヲイフ、供御ノ者、金ヲ以テ龍鳳ヲ粧

ス、餅毎ニ重サ一斤ナリ、慶曆ノ間、蔡君謨福建ノ運使ト爲リ、始メテ小片龍茶ヲ造ル、ソノ品精絶、之ヲ小一トイフ、二十餅毎ニ重サ一斤値金一兩、大觀茶論に、本朝之興、歲修、建溪之貢、一、風餅名冠、天下、

【陵遲】 陵は丘なり、山阪の次第に慢く下り低くなる義、淮南子に、河逶迤故能遠、山一、故能高、荀子の宥坐篇に、三尺之岸、而虛車不能登也、百仞之山、任、負車登焉、何、則陵遲、故也とあり、轉じて事の漸漸に衰退するをいふ、毛詩の序に、禮義一、

【陵替】 下、上を陵ぎて、上の威權廢替するをいふ、左傳に、下一上、能無、亂乎、梁武帝の令公卿入、陳時政詔に、晉氏一、虛誕爲、風、また陵夷に同じく、丘陵替の義にも解く、

【龍頭鷓首】 龍は水を得て靈活し、鷓は風を得て疾飛す、故に軸先に龍頭又は鷓首を彫りて飾とす、淮南子本經訓に、龍舟鷓首、浮吹以娛、とありて、高誘の注に、鷓ハ水鳥ナリ、ソノ象ヲ畫キテ船首ニ著ケ、以テ水患ヲ禦グ、龍舟は龍文を刻みて飾とする大船、

【龍頭蛇尾】 始は盛にして、終は衰ふる義、傳燈錄卷二十一に、可惜、龍頭翻、成、蛇尾、

【陵ニ襄ル】 (襄陵)襄は上なり、水の陵上に、ノボルを

見ル、須臾ニシテ光彩水ヲ照シ、波浪驚キ沸ク、華嘆ジテ曰ク、先君化去ノ言ト、張公終合ノ論ト、此レ其レ驗アリシ乎ト、

【龍孫】 箭の異名、釋贊寧箭譜に、俗呼、箭爲一、陸游の詩に、萬林無數長、一、また竹の一種、東齋紀事に、辰州有一種小竹曰、一、竹、生山谷間、高不盈尺、細如鍼、

また駿馬を稱してもいふ、

【龍蛇】 易の繫辭傳に、一、之蟄、以存、身也、韓非子に、慎子曰、飛龍乘雲、騰蛇遊霧、雲罷霧霽、而一、與蛟螭同矣、則失其所乘也、(深山大澤)を參看せよ、また佛經にて、龍を聖者に喩へ、蛇を凡夫に喩ふ、佛印語錄に、凡聖同居、一、混雜、

【龍韜】 六韜に、一曰文韜、二曰武韜、三曰一、四曰虎韜、五曰豹韜、六曰犬韜、轉じて兵書または兵法の義とす、李泌の句に、良弓摧折久、誰識、是、一、鄭俠の送周如京詩に、一、虎略何處藏、却、向、吟、筆、呈、鋒、

【龍團】 上品の茶をいふ、成語考に、一、雀舌、香茗の註に、茶ノ品ハ、龍鳳團ヨリ貴キハナシ、餅上ニ、龍鳳紋ヲ印スルヲイフ、供御ノ者、金ヲ以テ龍鳳ヲ粧

ス、餅毎ニ重サ一斤ナリ、慶曆ノ間、蔡君謨福建ノ運使ト爲リ、始メテ小片龍茶ヲ造ル、ソノ品精絶、之ヲ小一トイフ、二十餅毎ニ重サ一斤値金一兩、大觀茶論に、本朝之興、歲修、建溪之貢、一、風餅名冠、天下、

【陵遲】 陵は丘なり、山阪の次第に慢く下り低くなる義、淮南子に、河逶迤故能遠、山一、故能高、荀子の宥坐篇に、三尺之岸、而虛車不能登也、百仞之山、任、負車登焉、何、則陵遲、故也とあり、轉じて事の漸漸に衰退するをいふ、毛詩の序に、禮義一、

【陵替】 下、上を陵ぎて、上の威權廢替するをいふ、左傳に、下一上、能無、亂乎、梁武帝の令公卿入、陳時政詔に、晉氏一、虛誕爲、風、また陵夷に同じく、丘陵替の義にも解く、

【龍頭鷓首】 龍は水を得て靈活し、鷓は風を得て疾飛す、故に軸先に龍頭又は鷓首を彫りて飾とす、淮南子本經訓に、龍舟鷓首、浮吹以娛、とありて、高誘の注に、鷓ハ水鳥ナリ、ソノ象ヲ畫キテ船首ニ著ケ、以テ水患ヲ禦グ、龍舟は龍文を刻みて飾とする大船、

【龍頭蛇尾】 始は盛にして、終は衰ふる義、傳燈錄卷二十一に、可惜、龍頭翻、成、蛇尾、

【陵ニ襄ル】 (襄陵)襄は上なり、水の陵上に、ノボルを

九萬里、得龍伯之國、人長四十丈、生萬八千歲、始死云云、また列子湯問篇に「龍伯之國、有大人、舉足不盈數

步、而暨五山之所、一釣連六鰲、合負而歸、越其國」

【龍蟠】 豪傑の士の野に潛み居るに喩ふ、魏志杜襲傳

の字面、李白の鄴中贈王大詩に「恥學瑯琊人、一

事躬耕、瑯琊人は諸葛亮をいふ、

【龍蟠虎踞】 地形の要害險固なるをいふ、六朝事迹に

「諸葛亮論金陵地形、曰、鍾阜龍蟠、石城虎踞、眞帝王

之宅、この語、寰宇記にも見ゆ、

【龍蟠鳳逸之士】 非凡の才ありて未だその志を伸ぶ

るを得ざる士をいふ、李白の與韓荆州書に「一一

一一、皆欲收名定價於君侯」

【龍飛】 天子の即位をいふ、易の乾卦に「九五飛龍在

天利見大人」

【龍飛鳳舞】 山形の「スグレテ」靈異なるに喩ふ、吳越

備志に「郭璞撰臨安志云、天目山前兩乳長、一一

到錢塘、海門山起橫爲案、五百年生異姓王、至是果

驗、蘇軾の表忠觀碑に「天目之山、若水出焉、一一

萃于臨安」

【陵悔】 「シノギアナドル」晉書齊王攸傳に「子蕤性强

暴、使酒、數一一弟回、回以兄故容之、北史柳述傳に

「楊素方貴重、朝廷莫不讐憚、述每一一之、數於上前、

面折素短」

【菱米】 「ヒシ」の實を米に代へて食ふによりていふ、

南史魚弘傳に「道中乏食、緣路採菱、作一一飯、本草に

「菱葉浮水上、花黃白色、花落而實生、有瘦皮而紫色者、

謂之浮菱、食之尤美、江淮人暴其實、以爲米代糧」

【陵廟】 天子の「オタマヤ」後漢書陳忠傳に「河間託叔

父之屬、清河有一一之尊」

【龍標】 唐の縣の名、江南道敘州に屬す、今の湖南沅

州府黔陽縣治、李白の開王昌齡左遷一一尉遙有此

寄に「楊花落盡、子規啼、聞道一一過、五溪」

【陵墓】 天子の「ミササギ」宋史禮志に「詔先代帝王載

在、祀典、或廟貌猶在、久廢、牲牢、或一一雖存、不禁

樵采、其太昊炎帝黃帝高辛唐堯虞舜夏禹成湯周

文王武王漢高帝光武唐高祖太宗各置守陵五戶、歲

春秋祠以一一太牢」

杜甫の諸將詩に「漢朝一一對南山」

【龍鳳】 人品の高きに喩ふ、南史王僧虔傳に「王家門

中優者一一劣、猶虎豹」

【龍鳳團】 茶の最上品なるもの、書言故事に「茶之品、

莫貴於一一、八餅重一斤、慶歷間、蔡君謨、爲福建

魚龍門ノ下ニ集ル者數千、上ルコトヲ得ズ、上レバ即チ龍トナルトイフ、三級トハ、瀑布三層トナリテアルナリ

【龍門扶風】 漢書に「司馬遷居龍門、後漢書に「班固扶

風人、佩文韻府風字の條に「後世良史ヲ言フモノ、一一

一一ヲ推ス」良史を言ふもの司馬遷の史記と班固の

漢書とを推すといふ義

【龍陽】 魏王の幸臣の名、戰國策に「魏王與一一君共

船而釣、一一君得十餘魚、而涕下、王曰、何爲、曰、臣

爲所得魚也、臣之始得魚也、臣甚喜、後得又益大、

今臣直欲棄、臣前之所得、矣、今以臣之惡、而得

爲、王拂枕席、四海之内美人亦甚多矣、聞臣之得、幸

於王也、必棄、愛而趨、大王、臣亦猶臣前之所得魚也、

臣亦將棄、矣、安能無、涕出乎、魏王於是布令、於

四境之内、曰、有敢言美人者、族、後世以て變童の稱

とす、變童とは「カゲマ」男色を賣る者をいふ、猶ほ

辟陽侯審食其が、呂后に嬖せられたるを以て女主の

嬖臣を辟陽といふが如し、

【綾羅】 「アヤ」ウスキヌ、宋史食貨志に「東川湖南一一

緇七萬匹、張華の輕薄篇に「童僕餘、梁肉、婢妾陷一一

【龍鱗】 松の幹に喩ふ、王維の訪呂逸人詩に「閉戶

運使、始造小片龍茶、其品絶精、謂之小龍團、凡二十餘餅、重一斤、直金一兩、每南郊致齋、中書樞密各賜一餅、宮人往往綴金其上、貴重如此

【龍鳳之姿】 姿容の「スグレテ」貴きなり、唐書太宗紀

に「太宗生、四歲、有書生見之、曰、一一、天日之

表、必能濟世安民、晉書嵇康傳に「人以爲龍章鳳姿

天質自然」

【龍逢比干】 關龍逢は、夏の桀王の臣、比干は、殷の紂

王の臣、皆忠諫を以て殺さる、漢書朱雲傳に「朱雲樂

殿檻檻折、雲呼曰、臣得下從、一一遊於地下、足

矣

【龍眠居士】 (李伯時)を見よ、

【龍門】 一名河津、禹が河水を鑿通せし處、廣さ八十

歩ありといふ、禹貢に「導河積石、至于一一、隋書地

理志に「一一、河東郡ニ屬ス」三秦記に「江海魚集、一

一、下、登者化龍、不登者、點額暴腮、白樂天の題元少

尹集詩に「一一原上土、埋骨不埋名」の句あり(登一一

一)を參看せよ、

【龍門三級】 太平記卷十四に見ゆ、鈔に「龍門ハ、黃河

ノ水ノ下ル所、口ナリ、絳州ノ龍門縣ニ在リ、水險

ニシテ通ゼズ、魚鼈ノ屬、能ク上ルコトナシ、江海ノ

著書多、歲月種松皆老、作リヨク次條を參看せよ、
 【龍鱗ニ攀テ、鳳翼ニ附ク】(攀龍麟附鳳翼)龍鳳は天子に比す、英主に附隨して功業を立つる義なり、後漢書耿純傳に「諸將請、即尊位、不聽、耿純進曰、天下士大夫捐親戚、棄土壤、從大王於矢石之間者、固望リヨク、以成、其所志耳、大王は光武帝をいふ、また漢書敘傳に「攀龍附鳳、竝乘天衢、杜甫の詩に「攀龍附鳳勢莫當、天下盡化為侯王、この語また聖人に從ひてその徳を成さんと冀ふにもいふ、法言淵齋篇に「或曰、淵齋曷不寢、曰、一、一、巽以揚之、勃勃乎其不可及乎、淵は顔淵、齋は閔子騫、竝に孔門の高足なり、
 【稜 稜】 寒氣の「ハダ」に「シミトホル」をいふ、文選の蕪城賦に「霜氣、蕪蕪、風威」すべて「カドカドシキ」状にいふ、氣骨リヨクの如し、
 【陵 嶮】 「シノギ、キシル」義、史記の孔子世家に「楚靈王兵圍リヨク、次條を見よ、
 【鞍 轡】 踏踐輕棄するをいふ、鞍或は陵に作る、陵リヨク、侵すなり、漢書灌夫傳に「宗室、侵犯骨肉、前條を見よ、
 【閔 闕】 二字皆里中の門なり、閔闕なき賤しき里人を

いふ、史記の李斯傳に「斯以リヨク、歷諸侯、入事秦、隋書高祖紀に「秀異之士、鄉曲博雅之儒、言足以佐、時、行足以勸、俗、
 【呂希哲】 字は源明、公著の子、少くして孫復、石介、胡瑗に從ひて學ぶ、また二程張載に從ひて遊ぶ、聞見益、廣く、躬行實踐を務む、元祐中崇政殿説書となり、人主を勸導するに正心誠意を以て本と爲す、徽宗の時、曹相邢三州に歴知たり、人となり樂易にして至行あり、遠近皆師として之を尊ぶ、榮陽公に封ぜらる、
 【臚 句】 上の語を傳へて下に告ぐるを臚と爲し、下の語を傳へて上に告ぐるを句と爲す、史記叔孫通傳に「大行設九賓、傳リヨク、九賓とは、公侯伯子男孤卿大夫士をいふ、臚一音ロ、
 【綠 漪】 綠の「サザナミ」張率詠躍魚應詔に「繁藻、頌首承リヨク、碧漪に同じ、
 【綠 衣黃裏】 貴賤所を易ふる義、詩經邶風綠衣篇に「綠兮衣兮、心之憂矣、曷維其已」とあり、綠は蒼、黃に勝つの閉色、黃は中央土の正色なり、閉色は賤さも衣と爲り、正色は貴さも裏と爲る、皆其所を失ふ、以て賤妻の尊顯にして、嫡妻の幽微なるに比す、綠衣黃裳も亦同じ、上を衣とし、下を裳とす、衣は正

色にして、裳は閉色なるべきに、今之に反す、また楚辭に「反表以爲裏兮、顛裳以爲衣」とあるも、亦貴賤所を易ふるの義、
 【綠 衣使者】 鸚鵡(アウム)の異名、天寶遺事に「長安ノ豪民、楊崇義ノ妻劉氏、隣舍ノ兒李翕ト私通シ、同ジク謀リテ崇義ヲ害シ井中ニ埋ム、劉氏官府ニ訴フ、縣官所居ニ詣リテ檢校ス、架上ノ鸚鵡忽然トシテ曰ク、家主ヲ殺シシ者ハ李翕ナリト、遂ニ執ヘテ實ヲ得タリ、明皇鸚鵡ヲ封ジテリヨクト爲ス、
 【綠 筠】 「ミドリノタケ」筠はもと竹の青皮をいふ、轉じて竹の義とす、綠竹に同じ、白居易の詩に「廣砌羅紅藥、疎窗蔭リヨク、紅藥は芍藥なり、
 【綠 陰】 「ミドリ」の「カゲ」白居易の詩に「步、月、清、景、眠、松、愛リヨク、來、鶴、の、病、起、詩に「春、初、一、臥、到、秋、深、不、見、紅、芳、與リヨク、
 【綠 陰幽草勝花時】 夏初綠陰の幽趣は、春日百花の「ミダレ」開く時に勝るをいふ、王安石の初夏即事に「石梁茅屋在灣碕、流水澌澌度兩陂、晴日煖風生麥氣、
 【綠 芋】 「サトイモ」沈約の竹園詩に「紫茄紛、爛熳、一、鬱、參差」王維の田家詩に「夕雨紅榴拆、新秋リヨク、肥

また美人の黒髮に喩ふ、杜牧の阿房宮賦に「リヨク、道安期名、
 【綠 葉陰ヲ成シ子枝ニ滿ッ】 (綠葉成陰子滿枝)麗情集に「杜牧湖州ニ遊ブ、刺史崖君ハ、素ヨリ厚ウスル所ロノ者ナリ、悉ク名姝ヲ致ス、殊ニ意ニ愜ハズ、牧曰ク願クハ水嬉ヲ張リ、人ヲシテ畢ク觀シメヨ、牧當ニ開行シテ目ヲ寓スベシト、使君其ノ言ノ如クス、觀ル者堵ノ如シ、忽チ老姥アリ、髻髻ノ女ヲ引ク、年十餘歳、眞ノ國色ナリ(中略)牧曰ク、且ツ即チ納レズ、當ニ後期ヲ爲スベシ、吾十年ノ後、此ノ郡ヲ爲メン、若シ來ラザレバ即チ他ニ適クニ從カスト、因リテ重幣ヲ以テ之ヲ結ブ、後チ十四年ニシテ郡ニ至ル、約スル所ロノ姝、已ニ人ニ從フ、三年ニシテ二子ヲ生メリ、之ヲ召サシム、母曰ク向ニ十年ヲ約シテ來ラズ、而シテ後チ之ヲ嫁ス、已ニ三年ナリト、牧首ヲ俛シテ曰ク、其ノ辭直ナリ、之ヲ強フルハ不祥ナリト、乃チ之ヲ遣ル、恨別ノ詩ヲ爲リテ曰ク、自是尋春去較遲、不須惆悵怨芳時、狂風吹盡深紅色、
 【力 行】 實行を力ひる義、力は勉なり、史記儒林傳に

【爲】治者不在多言願—何如耳魯の申公の言、
 【緑眼】「ミドリノマナコ」岑參の胡笳歌送顔眞卿使赴河隴に「君不聞胡笳聲最悲紫髯—胡人吹」
 【緑蟻】「ヨキサケ」の異名、謝朓の在郡臥病詩に「嘉飭聊可薦—方獨持」白居易の詩に「—新醅酒紅泥小火爐」

【虜獲】連文釋義に「生得曰虜斬首曰獲」
 【緑髮】「ミドリノワゲ」鬢は總髮なり、白居易の閨婦の詩に「斜憑繡牀愁不動紅綃帶緩—低」
 【緑溪】「ミドリノタニ」岑參の詩に「瓜田傍—」
 【緑蓑衣】「アヲキ、ミノ」にて、漁者の服をいふ、書言故事に「唐張志和詩、西塞山邊白鷺飛、桃林流水鱖魚肥、青箬笠綠蓑衣、斜風細雨不須歸」蕩一に若に作る、韋莊の桐廬縣作に「白羽鳥飛嚴子瀬、綠蓑人釣季鷹魚」

【力士】勇力ある人、韓非子に「少室周者、古之貞廉潔怒者也、爲趙襄王—」
 【驛驛】周の穆王の名馬、轉じて駿馬の義とす、史記の趙世家に見ゆ、蘇軾の詩に「瘦馬識—」枯桐得雲和—驛—に耳に作る、史記秦本紀に見ゆ、
 【力士石敢當】姓源珠璣に「五代劉智遠爲晉祖押衝、

潞王從珂反、愍帝出奔過于衝州、智遠遣—、袖鐵槌侍、晉祖與愍帝議事、智遠擁入、石敢當格鬪而死、智遠盡殺帝左右、因燒傳國璽、石敢當生平逢凶化吉、禦侮防危、後人故凡橋路衝要之處、必以石刻其形、書其姓字以捍民居、この説によれば五代の時の力士の名とす、されども異説あり(石敢當)を見よ、

【力人】力ある人、左傳に「秦之—也」
 【緑酒】「ヨキサケ」陶潛の詩に「清歌散新聲、—開芳顏、梁武帝の碧玉歌に「碧玉奉金杯、—助花色」
 【緑綬】緑色の印綬、綬ハ官人ノ帶ブル印ノ環ヲ承ケ繫グ「ヒモ」漢官儀に「二千石以上銀印—亦曰艾綬」
 【緑樹】「ミドリノキ」王勃の益州淨惠寺碑に「飛泉瀑溜、蕩滌崩崖、—玄藤、網羅丘壑、許渾の閑居孟夏即事詩に「—蔭、青苔、柴門、臨水開」

【緑珠】梁氏の女、晉の石崇の愛妾、晉書石崇傳に詳かなり、庾信の春賦に「—捧琴至、文君送酒來」(晉ノ石季倫ガ)を見よ、
 【緑珠井】劉恂の嶺表錄異記に「—在、白州雙角山下、昔梁氏之女有容貌、石季倫爲交趾採訪使、以眞

珠三斛買之、梁氏之居、舊井存焉、者老云、汲此井者、誕女必多美麗」
 【緑水】「ミドリノミヅ」阮修上巳會詩に「澄澄—、澹澹其波、劉長卿の酬李侍御詩に「—瀟湘闊、青山郭杜深」

【力政】武力を以て政を爲し、相攻伐するなり、漢書五行志に「天子弱、諸侯力政」とあり、また禮記に「五十不從—」とあるは力役の義なり、
 【緑蘚】「ミドリノコケ」古今注に「苔或紫、或青、一名員蘚、一名—、梁元帝の詠細草詩に「依塔疑—」傍、洛若、青苔」

【緑窓】貧女の住家をいふ、紅樓を見よ、また緑色にて塗りたる「マド」にて、貧富に關せず、婦女の室の窓をいふ、李商隱の詩に「秦人昔富家、—聞妙旨」
 【緑窗前ニ滿チテ草除カズ】(緑滿窗前草不除、朱熹の詩の句、四時讀書を參看せよ、十八史略に「周惇頤茂叔、雅有高趣、廳前草不除、曰、與自家意思一般、また劉氏人譜に「明道先生窗前草茂、覆砌、或勸之變、明道曰不可、欲常見造化生意」とあるに本づく、

【緑尊】「ミドリイロノサカダル」幽怪録に「—翠杓、爲君斟酌、今女不飲、何時歡樂」
 また「ヨキサカダル」の義とす、王勃の郊興詩に「山人不惜醉、惟畏—」
 【緑苔】「ミドリノコケ」拾遺記に「靈帝起館千間、采—而被、塔、虞世南の怨歌行に「鏡前紅粉歌、塔上—侵、緑蘚に同じ、
 【緑竹】「ミドリノタケ」詩經衛風淇奥篇に「瞻彼淇奥、—猗猗、猗猗は始めて生じて柔弱にして美盛なる貌、淇水の上は多く竹を産す、左思三都賦序に「班固曰、賦者古詩之流也、先王採焉、以觀土風、如—猗猗、則知、衛地淇澳之産、杜甫の詩に「—半含籜、新梢纔出牆」
 【緑天】唐の僧懷素、零陵に居る、性書を嗜む、紙なし、芭蕉數萬本を種、葉を取りて書に供す、居る所をを號して「—と曰ふ、と清異録に見ゆ、
 【緑波】「ミドリノナミ」曹植の洛神賦に「迫而察之、灼、若、芙蕖出—」
 【緑醅】「ヨキサケ」醅は、廣韻に「酒未ダ漉サザルナリ、韓翃の詩に「鮪下玉盤紅縷細、酒開金甕—濃」また水の緑色に喩ふ、楊萬里の詩に「一夜鳴春雨、諸灘漲

【緑髮】李白の古風に「中有緑髮翁、披雲臥松雪、熊皎の贈胥尊師詩に「一童顏羽服輕、天台玉屋幾、經行」

【緑蘋】「ミドリノウキクサ」カタバミモ青蘋に同じ、楚辭に「一齊葉兮白芷生、白居易の池上清晨詩に「池幽、一合、霜潔、白蓮香」

【緑毛】龜の一種「ミノガメ」蕪州志に「本州西河井産、龜、甲上有、茸如海苔」

また身に「一」の生ずる仙をいふ、皮日休の詩に「劉根昔成道、茲鳩四百年、姦姦被其體、號爲「一」仙」

【緑茗】「ヨキチャ」朱慶餘の詩に「一香醒酒寒燈靜、照人」

【緑楊】「ミドリノヤナギ」王融の古意詩に「巫山綵雲沒、淇上一稀、崔櫓の詩に「一如髮、雨如煙」

【緑野堂】唐の裴度の別荘の名、舊唐書裴度傳に「度以年及懸輿、王綱版蕩、不復以出處爲意、東都立第於集賢里、築山穿池、竹木叢萃、有風亭水榭、梯橋架閣、鳥嶼洞環、極都城之勝概、又於午橋創別墅、花木萬株、中起涼臺、暑館名曰「一」、引甘水貫其中、醴引脈分、映帶左右、度視事之際、與詩人白居易劉禹

錫酣宴終日、高歌放言、以詩酒琴書自樂、當時名士皆從之游、

【緑蘿】「ミドリノツタ」郭璞の遊仙詩に「一結高林、蒙籠蓋一山」

また山の名、洞天福地記に「一山在武陵縣」

【緑林】盜賊の異稱、漢書王莽傳に「南郡張霸、江夏羊牧、王匡等起、雲杜「一」號曰「下江之兵」、後漢書劉聖公傳に「諸ノ亡命、綠林山中ニ聚リ藏ル」とあり、通俗編に「劉元傳ノ注ニ謂フ、「一」ハ地名、荊州當陽縣ニ在リ、李涉ニ「一」豪客夜知聞」ノ句アリテヨリ後人竟ニ此ノ輩ヲ稱シテ「一」ト爲ス」

【緑醞】美酒をいふ、左思吳都賦に「飛輕軒而酌「一」方、雙鸞而賦珍羞」次條に同じ、

【醞醞】美酒ヨキサケなり、歲華紀麗に「一激醞於壽杯」注に「晉咸康四年十二月丙子正旦、會百寮、增賜醞醞酒人、二升、醞一に醞に作る同じ、醞醞ともいふ、

【呂刑】書經の周書の篇名、呂侯、周の穆王の司寇たり、贖刑の法を作る、之を「一」といふ、呂は姓、甫國の侯たり、故に「一」に甫刑ともいふ、

【閭巷】「マチヤカ」閭は里門、巷は曲りてせまき「マチ

「一」之人、欲「一」行立、名者、非附、青雲之士、安能施于後世哉、

【旅次】「タビノヤドリ」易の旅卦に「六二、旅即次」とあり、杜甫の句に「一兼百憂」

【呂氏春秋】二十六卷、一に呂覽ともいふ、秦の呂不韋撰す、題す、實は其の賓客中智略の士の集むる所

なり、凡そ十二紀八覽六論に大別す、細分すれば一

百六十篇となる、不韋の人物は道ふに足らざれども、この書羣言を裏合し、大抵儒書に據るもの十の八九

參するに道家墨家の理に近き者を以てするもの十の

一二、諸子に較ぶれば頗る醇となす、高誘の註亦多く古義を明にせり(呂不韋)を參看せよ、

【旅進旅退】旅は衆なり、衆と共に進退する義、禮記の樂記に「今夫古樂、進旅退旅、註に「旅ハ猶ホ俱ノ如シ」王禹偁の待漏院記に「有無毀無譽、一」竊位而苟祿、備員而全、身者亦無所取焉」

【呂尙】史記の周紀に「一トイフ者アリ、東海上ノ人、窮困シテ年老イ、漁釣シテ周二至ル、西伯(文王)將ニ獵セントス、之ヲトスルニ、曰ク、龍ニアラズ、彫ニアラズ、熊ニアラズ、羆ニアラズ、獲ル所ロハ霸王ノ輔ナラント、果シテ「一」ニ渭水ノ陽ニ遇フ、與ニ語リ

テ大ニ悦ビテ曰ク、吾ガ先君太公ヨリシテ曰ク、當ニ聖人ノ周ニ適クアルベシ、周因リテ以テ興ラント、子ハ眞ニ是カ、吾ガ太公、子ヲ望ムコト久シト、故ニ太公望ト號シ、載セテ與ニ俱ニ歸リ、立テテ師トナス、之ヲ師尙父トイフ」とあり、十訓抄第三に「一」が周文の車の右に乗りし、即ち世を治むる器たりき」とある

はこの事をいふ、渭水は渭州渭源縣鳥鼠山に出て、同州馮翊縣に至り河に入る、陽とは水北なり、

【呂祖謙】字は伯恭、夷簡の六世の孫、祖の好問、高宗に隨ひて南渡し、仕へて尙書右丞に至り、居を金華にトす、祖謙早く高第に擢てられ著作郎直祕閣に歴官し道を藝に倡へ、一代の宗師たり、東萊と號す、著すところ左氏博議、大事記、文集等並に世に行はる、淳熙八年卒す、年四十五、成と諡す、

【呂大臨】字は與叔、大忠の弟、程頤に學ぶ、謝良佐游酢、楊時と程門に在りて四先生と號す、六經に通じ、尤も禮に達し、著すところ克己銘諸篇あり、元祐中祕書正字となる、

【呂東萊】東萊博議の著者(呂祖謙)を見よ、

【閭ニ式ス】(式閭)式は車前の横木、敬する所ろあれば、俯して式に憑る、これより轉じて式を以て敬の義

とす、閭は里門なり、その人の里門を過ぐるとき、敬禮を施すをいふ、書經武成に「式商容閭」

【閭ニ倚リテ望ム】(倚閭而望) 戰國策に「王孫賈年十五、事閔王、王出走、失王之處、其母曰、女朝出而晚來、則吾倚門而望、女暮出而不還、則吾倚門而望、女今事王、王出走、女不知其處、女尚何歸」とあり、閭は里門なり、家を出てて里門に倚りて、子の歸るを望み待つ義

【呂不韋】 陽翟の人、秦の莊襄王元年丞相となり、文信侯に封ぜらる、士を致して、食客三千人に至る、不韋乃ち客をして聞くとくところを著さしめ、十二紀八覽六論と爲す、名づけて呂氏春秋といふ、以爲らく天地萬物古今の事を備ふと、千金を市に懸け一字を増損する者には之を與へんと、始皇十年相國を免ぜられ、蜀に徙されて自殺す

【呂本中】 字は居仁、公著の曾孫にして、好問の子なり、宋の宣和六年樞密院編修官となる、紹興六年、特に進士出身を賜ふ、累官中書舍人兼侍講に至る、本中、性情清約、詩詞に工なり、かつて曰く「大抵後生ノ學ヲ爲スニハ、先ヅ須ラク學ヲ爲ス所以ノ者ハ、何事ナルカヲ理會スベシ、一行、一住、一語、一默、須ラク盡ク道理

ニ合ハントコトヲ要スベシ」と、秦檜のために黜けらる、卒して文清と諡す、著すところ師友淵源錄、春秋解童蒙訓等の書あり

【呂蒙正】 字は聖功、宋の河南の人、太宗の時進士第一に擧げらる、三たび相位に居り、許國公に封ぜらる、子の行簡、龍圖閣直學士に至る、劉氏人譜に「呂蒙正初メテ參知政事トナリテ、朝堂ニ入ル、朝士籬内ニ在リテ之ヲ指シテ曰ク、此ノ小子モ亦參政カト蒙正聞カザル爲シテ之ヲ過グ、同列怒リテ蒙正ヲ詬ル者ノ官位姓名ヲ詰ラントス、蒙正遽ニ之ヲ止ム、朝罷ンデ同列猶ホ不平ナリ、皆究メ問ハザルヲ悔ユ、蒙正曰ク然ラズ、一タビ其ノ姓名ヲ知ルトキハ、終身忘ルルコト能ハズ、固ヨリ之ヲ知ルコトナキニ如カズト、咸其ノ大量ニ服セリ」

【閭門】 里門なり、漢書于定國傳に「始定國父于公、其一壘、父老方共治之、于公謂曰、少高大、一壘、令容駟馬高蓋車、我治、獄多陰德、未嘗有所冤、子孫必有興者、至定國、爲丞相、永爲御史大夫、封侯、傳世云」

【呂覽】 (呂氏春秋)を見よ、
【閭里】 「マチナカ」史記袁盎傳に「與一浮沈、里門を

閭といふ、

【呂梁】 莊子に「懸水三十仞、流沫九十里、水經の注に「呂縣對泗水、泗水之上有石梁焉、故曰一、懸澇瀾澗、實爲泗險」

また金の山東西路徐州呂梁鎮は、今の江蘇徐州府銅山縣の東南六十清里、

【管カ】 説文に「管ハ脊骨ナリ」玉篇に「古與呂同」書經に「番番良士、一既愆」セボネノチカラ

【離落】 人心の「ソムキサルコト」離畔に同じ、國語の吳語に「民人一」

【離落】 「マガキ」柳宗元の田家詩に「一隔煙火、農談四鄰夕」劉禹錫の深春詩に「菜園一短、遙見桔槔斜」

【理亂】 治亂に同じ、唐人高宗の諱を避け、治の字、皆易へて理と爲す、韓愈の送李愿歸盤谷序に「一不知、黜陟不聞」抱朴子に「量一以卷舒審、去就以保身者、知人也」

【離離】 秀でて垂るる貌、詩經王風黍離篇に「彼黍一」また小雅淇奥篇に「其桐其椅、其實一」また裂けみだるる貌、楚辭に「曾哀、悽歎、心一兮」また親まざる貌、荀子の非相に「一然」

【李良年】 字は武曾、秋錦と號す、詩文は朱竹垞と名

を齊らし、朱李と稱せらる、また尺牘に工なり、秋錦山房集あり、

【李陵】 字は少卿、廣の從子、初め臨沅令となる、邑人之を思慕す、後ち匈奴と戦ひ、矢盡きて降る、司馬遷以て國士の風あり、古名將と雖も之に過ぎずとなす、

【李陵悲】 胡曾の詩に「塞北草生蘇武泣、隴西雲起一

驪龍、領下ノ珠」止觀に「明月神珠、在九重淵内驪龍領下、驪珠を見よ、

【李龍眠】 (李伯時)を見よ、
【李令伯】 (陳情ノ表)を見よ、

【履歷】 由緒(ユキシヨ)の義、また來歴の意、封氏聞見録に「朝廷百司諸廳、皆有壁記、原、其作意、蓋欲著前政、一發、將來健羨也」

【離婁之明】 離婁は古(或ハイツ)黄帝ノ時ノ人の目のよく見ゆる人の名(離朱之明)を見よ、

ル

【誄】死者の生前の功徳を稱述するなり、またその文詞をいふ、劉熙の釋名に「誄ハ累ナリ、ソノ事ヲ累列シテ之ヲ稱スルナリ」左傳哀公十六年に「夏四月己丑孔丘卒、哀公誄之曰、昊天不弔、不慙遺一老、云云」文體明辨に「周官誄ヲ讀ンデ以テ誄ヲ定ム、蓋シ古ノ誄ハ本誄ヲ定ムルガ爲メニシテ、今ノ誄ハ唯哀ヲ寓スルガ爲メナリ貴賤長幼ヲ論ゼズ、其ノ體ハ先ツ世系行業ヲ述ベテ末ニ哀傷ノ意ヲ寓ス、所謂傳ノ體ニシテ始ヲ榮ニシ、終ヲ哀ニスルナリ」

【墨尉】障壁の事をつかさどる官名、後漢書に「時有長人巨無霸、長一丈、大十圍、以爲墨尉」

【累葉】葉は代なり、世代の義、一は累代に同じ、後漢書耿弇傳に「耿氏一以功名自終」

【類ヲ絶チ倫ヲ離ル】絶類離倫「ナカマ」より特に優れるをいふ、韓愈の進學解に「一ハ一ハ、優入聖域ニ墨ヲ摩ス」(摩墨を見よ、)

【類ヲ以テ聚ル】(以類聚善惡各、その類を以てあつ

まる義、易の繫辭上傳に「方以類聚、物以群分、方とは事情の向ふところをいふ、

【累葉】「アヤフキ」に喩ふ、累卵に同じ、劉向說苑に「晉靈公作九層臺、荀息曰、臣能累十二博葉、加九卵其上、公曰、危哉、息曰、復有危於此者、九層之臺、三年不成、國用空虛、社稷將亡也、靈公即壞其臺」

【墨塊】胸中の不平をいふ、世説に「晉阮籍胸中一、故須酒以澆之」

【淚痕】「ナミダ」の「アト」李白の怨情詩に「美人捲珠簾、深坐嚙蛾眉、但見一濕、不知心恨誰」

【類聚】類似せる者をついに聚むるなり(類ヲ以テ)を見よ、

【累臣】囚繫せらるる者なり左傳僖三十三年に「不以一之聲鼓」

【淚珠】美人の「ナミダ」に喩ふ、黃滔の閨怨の詩に「一流盡、玉顏衰」

【累世ノ通家】(通家)を見よ、

【縲紲】縲は黒き索(ナハ)なり、紲は「ツナグ」なり、經に同じ、古は獄中にて黒索を以て罪人をつなげり、故に囚獄の義とす、論語公冶長篇に「雖在縲之中、非其罪也」

【累重】妻子財産をいふ、漢書匈奴傳に「悉遠其一於余吾水北」

【累帝】累は「カサナル」義、一は世世の天子をいふ、列聖に同じ、晉書赫連載記に「長安一舊都」

【累徳】善行のさまたげとなる義にて、悪しき行をいふ、莊子に「惡欲喜怒哀樂六者一也」

【累卵之危】卵をかさねたる如く、危きをいふ、司馬相如の喻巴蜀檄に「去一、就永安之計、豈不美與(危キコト累卵)を參看せよ」

【累纍】羸(ツカレ)ヨワルとして意を失ふ貌、禮記の玉藻に「喪容一」

【累纍トシテ喪家ノ狗ノ若シ】(累纍若喪家之狗)纍纍は志を得ざる貌、喪家は新に人を喪ひ、家人哀み荒みて、犬に飲食を與へず、故に累纍然と、志を得ざるなり、史記孔子世家に「東門有人、其類似堯、其項類臯陶、其肩類子產、然自腰以下、不及禹三寸一」

【縲解】細かに分解する義、唐古今注序に「凡歷代之史百代之書、釐、錙、析、鉄、冰、渙」韓愈の貞曜先生墓誌に「其爲詩、劇目、鈍心、刃迎」云云、縲析に同じ

【屢空】(屢空)貧しくして「タビタビ」家財の空乏になる義、論語先進篇に「子曰、回也其庶乎、一庶は近きなり、道に近く、殆ど道と一となるの意、

【鑿山】山を鑿ちて路を通ずる義、漢書司馬相如傳に「鑿靈山」

【僂指】僂は一音ロウ屈なり、指を折り「カガメ」て數ふるなり、荀子儒效に「雖有聖人之智、未能一也」

【盧遮那】毘一一の略、毘は徧なり、遮一に舍に作る、梵語、光明徧照の義、即ち大日如來をいふ、徧一切處とも譯す、即ち煩惱の體淨く、衆徳悉く備り、身土相稱ひ、一切處に徧きこと日光の照さざる處なきが如き義、

【縲述】「コマカ」に陳述する義、宋史天文志に「一而申言之」

【留守】(留守)を見よ、

【縲析】細かに「ワケル」王誼柱礎賦の字面、

【縲切】「サシミ」などを細かに「キル」潘岳の西征賦に「華飭躍、鱗素、鱗揚、鬣、雍人一一、鸞刀若飛」

【流轉】人の生死、事物の興亡等斷えず轉變して休まざるをいふ、輪廻と運用す、華嚴經に「一切衆生界、一

生死海」

【縷冰】氷は碎け易く、融け易し、氷に縷むるは徒に勞して功なきに喩ふ、鹽鐵論に「内無其質、而外學其

文、若畫脂鏤冰、徒費日工耳」

【流布】水の流れ布く如く、普く「ユキワタル」法華經に「五百歲中、廣宣」

【流浪】浮浪に同じ「ブラブラスル」鮑照の詩に「漸冉、經三齡」

【琉璃】玉の類、七寶の一、漢書西域傳に、流離に作る晉書王濟傳に「性豪侈、帝嘗幸其宅、供饌甚豐、悉貯

一器中、魏略に「大秦國多赤白黑綠黃青紺縹紅紫十種」權德輿の石帆山靈泉記に「淨如醜醜、瑩若」杜陽雜編に「德宗時、吳明國貢鸞蜂蜜、其蜜色碧、貯白玉椀、表裏如碧琉璃、食之長壽、李涉の詩に「水似晴天天似水、兩重星點碧琉璃」孟郊の詩に「忽驚紅琉璃、千艷萬艷開、白居易の詩に「雙瓶白琉璃」

野客叢書

唐人詩句、有採取前人之意、亦有偶然暗合者、如李白詩、河陽花作縣、秋浦玉爲人、武元衡詩、河陽縣裏玉人間、姚合詩、文字當酒杯、賈島詩、燈下南華卷、嵇愁當酒杯、許渾詩、百年便作千年計、李後主詩、人生不滿百、剛作千年畫、柳子厚詩、歌乃一聲山水綠、張文昌詩、離琴一聲罷、山水有餘暉、姚合詩、賈石得花饒、王建詩、賈石得饒饒、王維詩、瑯琊丹陛、儲光羲詩、瑯琊文陛、杜牧之詩、乞酒綬愁、武元衡詩、歌酒換離愁、劉媛詩、侍兒能勸酒、賈客解彈琴、玉無功詩、老妻能勸酒、少子解彈琴、杜子美詩、試吟青玉案、莫弄紫羅囊、劉夢得詩、學堂青玉案、綵服紫羅囊、孟東野詩、種稻耕白水、負薪斫青山、許渾詩、雨中耕白水、雲外斷青山、此類甚多、



【禮】人の履み行ふべき、外形上の秩序品節をいふ、説文に「ハ履ナリ、神ニ事ヘ福ヲ致ス所以ナリ」釋名に「ハ體ナリ、其ノ事體ヲ得ルナリ」五禮は吉凶軍

賓嘉をいふ、呂氏春秋に「禮煩、則不莊、業繁、則無功」史記の自序に「禮禁未然之前、法施已然之後、

論語八佾篇に「禮與、其奢、也寧儉、喪與、其易、也寧戚」淮南子に「禮者所以救淫也、樂者所以救憂也、

また曰く「禮豊、不足以效、愛、而誠心可以懷、遠、鹽鐵論に「禮義立、則耕者讓於野、禮義壞、則君子爭

於朝、禮は古文なり、(禮記)を見よ、

【令愛】人の女を稱していふ、剪燈新話に「今則謹携、

一、同此歸寧(愛玉)を參看せよ、

【禮豈我ガ爲メニ設ケンヤ】(禮豈爲我設邪)禮法は、我輩のために設けたるにあらずとて、禮を輕んじてい

へるなり、晉書阮籍傳に「籍嫂嘗歸寧、籍相見與別、或譏之、籍曰「一、一、一、一(白眼)を見よ、

【靈囿】文王の臺を靈臺といふ、その臺下の囿を

といふ、詩經靈臺篇に「始、始、靈臺、經之營之、庶民攻之、不日、成之、經始勿、亟、庶民子來、王在、一

一、應鹿攸伏、應鹿濯濯、白鳥鶴鶴、云云、

【令尹】周代に於ける、楚の國の卿相の、トナヘ尹は正なり、論語に「一、子文」

【零雨】零は落なり、徐雨をいふ、詩經幽風に「零雨其濛、濛は微雨なり、

【靈雨】降るべき時に降る善き雨なり、詩經の邶風定之方中篇に「一、既零」

【嶺雲】「タウゲノクモ」柳宗元の詩に「凝情江月落、屬思一、飛」

【靈曜】日の異名、陸機の演連珠に「一、朝觀、稱物、納照」

【靈液】露をいふ、張彦勝賦に「露者天地之一」

【藜杖ツク】(杖藜藜は「アカザ」葉は茹、とし、莖は杖とす、即ち「アカザ」の杖をつく義、史記留侯世家の注に「黃石公鬚眉皆白シ、丹藜ヲ杖ツキ、赤烏ヲ履ム」

杜甫の詩に「明日看雲還、一、一」

【領ヲ引ク】(引領首を延ばして遙に望む、切に希望する事ある義、孟子梁惠王下に「天下之民、皆一、一、一、一而望之矣」領は「ウナジ」クビ)

【體ヲ設ク】(設體賓客を待遇するに厚く意を用ふる義、漢書楚元王交傳に「元王敬禮申公等、穆生不嗜酒、元王每置酒常爲穆生設體」體は甘酒なり、【蠶ヲ以テ海ヲ測ル】(以蠶測海見る所の極めて淺薄なるに喩ふ、蠶は瓠瓢なり、漢書東方朔傳に見ゆ、文選の註には「蠶ハ蚌蛤ナリ」と、一解に、蚌の殻なりと、(管ヲ以テ天ヲ窺フ)を見よ、

【厲階】階は梯なり、「ハシゴ」厲は怨なり、怨を招く階梯をいふ、詩經大雅桑柔篇に「誰生」一、至今爲梗、梗は病なり、また禍端の義、詩經大雅瞻卍篇に「婦有長舌、維一之」

【藜羹】「アカザ」の「アツモノ」粗食をいふ、韓愈の詩に「一尙如此、肉食安可嘗」蘇軾の初秋寄子由詩に「一對書史、揮汗與子同」

【厲鵲】字は太鴻、樊榭と號す、清の錢塘の人、康熙五十九年の舉人、乾隆元年博學鴻詞に擧げらる、最も詩に長ず、幽雋孤澹一家を成す、著すところ樊榭山房集あり、乾隆十七年卒す、年六十二、

【禮樂】禮は行を制して身を修めしむる所以のもの、樂は心を和らげしむる所以のものなり、孝經に「移風易俗、莫善於樂、安上治民、莫善於禮」禮記

徒ヲ領録シテ、禁禦スルナリ」とあり、風俗通に「夏ニハ夏臺トイヒ、商ニハ羨里トイヒ、周ニハ囹圄トイフ」

【囹圄草生ズ】(草、囹圄ニ)を見よ、

【囹圄空シ】罪を犯す者なきをいふ、管子に「倉廩實而一、賢人進而奸民退、王褒の頌に「周公躬吐握之勞、故有囹圄之隆」(天下太平)を見よ、

【藜藿】藜は「アカザ」藿は豆の葉、粗食をいふ、漢書司馬遷傳に「糲糲之食、一之藜、淮南子に「糲糲藜之飯、一之藜、阮籍の詠懷詩に「甘彼一食、樂是蓬蒿廬」

【冷官】卑き職をいふ、杜甫の贈鄭廣文詩に「諸公袞袞登臺省、廣文先生官獨冷」また張籍の詩に「年長身多病、獨宜作一」

【俗官】樂官なり、新五代史記に「一傳」あり(俗人)を見よ、

【令兄】己の兄をいふ、後世は人の兄を稱す、詩經小雅角弓篇に「此令兄弟、綽綽有餘裕」令は善なり

【厲揭】水を渉るをいふ、衣を以て水を渉るを厲といひ、衣を裹けて渉るを揭といふ、詩經の衛風匏有苦葉篇に「深則厲、淺則揭」論語憲問篇に「鄙哉硜硜乎、莫己知也、斯已而矣、深則厲、淺則揭」とあるは、世の中を渡るは、水を渡るに、深くは渾子(フンドシ)

の樂記に「樂者天地之和也、禮者天地之序也、和故百物皆化、序故群物皆別」

【禮勝テバ則チ離ル】(禮勝則離)禮記に「樂者爲同、禮者爲異、同則相親、異則相敬、樂勝則流、一、一」と註に「流トハ、合行シテ敬セザルヲイヒ、離ハ、析居シテ和セザルヲイフ」

【令甲】法令の首章、漢書宣帝詔に「一死者不可復生」注に「令ニ先後アリ、故ニ一令乙、令丙トイフ、今第一第二第三篇ノ如シ」因りて廣く政令の義とす、宋史の楊時傳に「凡元祐之政事、著在」

【令儀】威儀の善きをいふ、詩經に「豈弟君子、莫不令儀」豈は愷に同じ、

【黎祁】豆腐の異名、陸游の詩に「拭盤堆連展、洗甌煮一」自注に「連展、淮人以名麥餅、一蜀人以名豆腐」

【冷肌ニ透ル】(冷透肌)冷氣が肌に透るをいふ、司馬光の中秋の詩に「烏皮几穩、風侵髮、白玉樓高」

【厲禁】「キビシク、サシトメル」嚴禁に同じ、周禮の司禮の字面

【囹圄】牢獄なり、爾雅に「囹圄、領ナリ、圄、觀ナリ、囚るなり、

【黎元】庶民をいふ、史記文帝紀の注に「古ハ人ヲ謂ヒテ善人トイフ、善ニヨリテ元トナス、故ニ一トイフ」一解に「黎ハ黒ナリ、元ハ首ナリ、黔首ト同ジ」と、漢書郊祀志に「大路所歷、一不知」潛夫論に「天之立君、蓋以誅暴除害利一也」

【黎獻】獻は賢なり、一は、庶民中の賢き者をいふ、書經益稷に「萬邦一、共惟帝臣」

【黎元資】人民どもの頼みとする、タカラ、舊唐書李父傳に「江南水郷、採捕爲業、魚鼈之利、一所資」

【鶴原之情】兄弟の情愛をいふ(鶴、鶴原ニ)を見よ、

【冷齋夜話】十卷、宋の釋惠洪(字ハ覺範、筠州ノ人)撰す、この書己の見聞せし所を雜記す、就中詩話十中八九に居る、和版あり、

【麗藻】美しき文を稱す、文選の陸機の文賦序に「嘉一一之彬彬」

また書名、明の鄧百拙の原選、金石絲竹匏土草木に分ちて典故詞藻を類記す、安永三年の和版あり、

【令子】類書纂要に「人ノ子ヲ稱シテ一トイヒ、又

【令嗣令郎トモイフ】「ゴシツク」

【荔子】 荔枝の實なり、韓愈の羅池廟碑に「丹兮蕉黃」蘇軾の新年作に「幾時熟、花頭今已繁」次條を見よ。

【荔枝】 熱帯地方の喬木に生ずる果、素乾して舶來す、形小さき雞卵の如く外皮に初生の松毬の如き皺あり、色赤し、皮の厚さ肉核共に龍眼に似たり、廣志に「樹高五六丈、大如桂樹、綠葉蓬蓬、冬夏榮茂、青華朱實、大如鷄子、核黃墨似、熟蓮子、實白如肪、甘而多汁、似安石榴、云云」本草經に「通神益氣、多食亦不傷人」後漢書章帝紀に「南海獻龍眼、一十里一置、五里一候、奔騰阻險、死者繼路」唐書貴妃楊氏傳に「貴妃蜀ニ生レ、一好ム、南海ノ一ハ蜀ニ勝レリ、必ズ之ヲ生致セント欲ス、乃チ驛傳ヲ置キ、馳載スルコト七日夜、京ニ至ル、人馬俱ニ路ニ斃ル百姓之ヲ苦ム」蔡襄に「譜あり、蘇軾の詩に、羅浮山下四時春、盧橘楊梅次第新、日啖一二三百顆、不妨長作嶺南人、

【麗辭】 「ウルハシキ」コトバ、皇甫謐の三都賦序に「引而申之、故文必極美、觸類而長之、故辭必盡麗」

【靈時】 「マツリノニハ」時は止なり、神靈の依り止ま

るところなり、司馬相如の句に「遊彼一」

【靈芝】 菌の一種、山中樹下石間に生ず、松茸に似て莖の色、紫赤にして、光あり、蓋の面は黒褐に、背は淺褐微白にして、刻なし、蓋多く並びかさなりて雲の如くなるなり、莖に枝あるもあり、皆堅くして食ふべからず、和名「サイハイダケ」「マンネンダケ」説文に「芝ハ神草」古瑞命記に「王者慈仁、則芝草生」班固の「芝ハ歌に「因露寢兮産一」象三德兮應瑞圖、延壽命兮光此都」古今注に「一名壽潛、一名希夷、金芝紫芝、絳芝、玉芝、神芝、華芝、祥芝、瑞芝等と連用す、拾遺の（紫芝）を參看せよ、

【樞案】 樞音ラツ（樞案）を見よ、

【伶人】 左傳成九年の註に「黃帝ノ世、伶倫音樂ヲ造ル、故ニ樂官ヲ伶人伶官ト稱ス」晉書戴逵傳に「逵對使者、破琴曰、戴安道不爲王門伶人」

【麗人】 麗は醜惡なり「キハメテ、ミニクキ」人、莊子天地篇に「麗之人、夜半生、其子、遽取火而視之、汲汲然、唯恐其似己也」

【麗人】 美人をいふ、杜甫の麗人行に「三月三日天氣新、長安水邊多一」

【靈辰】 人日をいふ、正月七日の節句、人は萬物の靈

なればいふ、李嶠の詩に「三陽徧應節、七日最一」

【靈車】 「ヒツギ」を載せたる車、文公家禮に「一至輜輻車、喪車皆同じ、

【嶺上】 「ダウゲ」の上、陶弘景の詩に「山中何所有、一多白雲」

【醴酒】 「アマザケ」「ヒトヨザケ」説文に「一ハ一宿シテ熟スル也」禮記に「始飲酒者、先飲一」蘇軾の詩に「穆生責一、先見我不如」

【醴酒設ケズ】 (醴酒不設) 人を待遇するの禮貌、衰ふるをいふ、漢書楚元王世家に「初、楚ノ元王申公等ヲ敬禮ス、穆生酒ヲ嗜マズ、元王置酒スル毎ニ、常ニ爲メニ醴ヲ設ク、王戊位ニ即クニ及ビ、常ニ設ク、後チ設クルコトヲ忘ル、穆生退キテ曰ク、以テ逝クベシ、醴酒設ケズ王ノ意怠ル」(醴ヲ設ク)を見よ、

【隸書】 楷書をいふ、漢書藝文志に「秦時、始造一、起於官獄多事、苟趣省易、施之於徒隸也」玉海に「唐ノ六典ノ書學ノ注ニ、字體六アリ、五ニ曰ク、一、典籍表奏公私ノ文書ニ用フルトコロ、庾肩吾曰ク、一ハ今ノ正書ナリ、張懷瓘イフ、一ハ秦ノ程邈造ル、字皆真正、亦眞書トイフ、唐ヨリ以前、皆楷字ヲ謂ヒテ一トナス、歐陽修ノ集古錄、誤リテ八分ヲ以テ一ト

ナス」と我が國にても、この誤を承けて一は即ち楷書たることを知らざるもの少からず、

【令色】 論語學而篇に見ゆ(巧言一)を見よ、

【瓶水】 「カメノミヅ」史記高祖紀に「秦形勝之國、帶河山之險、縣隔千里、持戟百萬、秦得百二焉、地勢便利、其以兵下於諸侯、譬猶居高屋之上、建一也」

【醴水ノ交】 醴は、甘酒なり、一宿して成る者なり、濃厚なれども、飽き易し、君子の交は、水の如く淡けれども、久しくかはることなきに喩ふ、禮記の表記に「君子之接、如水、小人之交、如醴、君子淡以成、小人甘以壞、莊子山木篇に「君子之交、淡若水、小人之交、甘若醴、君子淡、以親、小人甘、以絶、彼無、故以合者、則無、故以離」

【禮數】 名位に相應する所の禮儀をいふ、左傳に「名位不同、禮亦異數」また易の節卦に「君子以制數度、議德行」とある疏に「數度ハ、尊卑禮命ノ多少ヲイフ」唐書裴耀卿傳に「李林甫驚曰、班爵與公同而一異ハ

何也」また韓愈の桃源圖詩に「爭持酒食來相餽、一一不同樽俎異」

【令正】人の妻を稱す、類書纂要に「人ノ妻ヲ稱シテ、尊關トイヒ、又一一令眷尊正相正トモイフ」

【答答】釣に用ふる「チイサキカゴ」字彙に「一一ハ小籠ナリ、大唐新語ニ漁具スベテ一トイフ」唐書元結傳に「能帶一一皮日休の一一詩に「朝空一一去暮實一一歸」

【冷笑】冷は冷遇の冷なり「アザワラヒ」南史齊樂預傳に「人笑褚公、至今齒冷」とあるは、久しく口を開いて笑ひ、齒の冷かなるを覺ゆる義、

【麗譙】遠を望み敵を「ウカガフ」ために門上にたてたる高樓を譙といふ、莊子徐無鬼篇に見ゆ、史記の陳涉世家の註に「樓一ニ譙ト名ヅク、故ニ美麗ノ樓ヲ謂ヒテ一トナス」と「ヤグラ」をいふ、白帖に「魏武有一樓」釋名に「魏ニ一アリ、越ニ飛翼アリ、漢ニ井幹アリ、云云」

【礪石】「トイシ」の一種「アラト」山海經中山經に「陰山多一一」

【冷然】清らかなる貌にも「ヒヤヤカナル」貌にも用ふ、水又は風の聲に用ふ、轉じて輕妙の義とす、莊子

逍遙遊に「列子御風而行一一善也」晉書裴綽傳に「善言玄理、音詞清暢一一若琴瑟」冷洽に同じ、

【醴泉】「アマザケ」の如き味する泉をいふ、禮記の禮運に「故天降膏露、地出一一」錦字箋に「朝廷清明ナレバ一一出ツ、漢ノ宣帝三年ノ詔ニイフ、一一流澗、枯稿榮茂ト、光武ノ時一一京師ニ出ツ、飲ム者痼疾皆愈ユ」六帖に「一一ハ美泉ナリ、水ノ精ナリ」(中略)黃帝ノ時、一一ヲ以テ漿トナス、堯ノ時、德茂ンニ清平ナレバ一一出ツ、夏后ノ時、俊父官ニ在レバ、一一出ツ」漢書王莽傳に「甘露從天下、一一自地出」白虎通の封禪に「一一美泉也、狀若醴酒、可以養老也」

【靈臺】精神の「アリドコロ」靈府に同じ、莊子庚桑楚篇に「不可一内於一一」

また文王の臺をいふ、詩經大雅靈臺篇に「經始一一、經之營之」とあるは、民が文王の靈德を樂みて稱せしなり、また廣く天子の臺をいふ、左傳に「衛侯爲一一于藉圃」服虔の注に「天子ニ一一トイヒ、諸侯ニ觀臺トイフ」

また天文雲氣などを望む臺の名、後漢書馬融傳の注に「一一望氣之臺也」

【藜杖】「アカザノツエ」漢書劉向傳に「有老人黃衣植青一一、叩閣而進」王維の詩に「悠然策一一、歸向桃花源」

【藜杖】「アカザノツエ」ラシカハノオビ」儉素なる「サマ」にいふ、陳書の宣帝紀に「湯禹爲君、一一」

【茶通】茶は零に同じ、猪糞なり、通は馬糞なり「ツマラヌ」賤むべきものに喩ふ、王安石の詩に「人閒榮願付一一」

【令弟】己の弟をいふ、後世は人の弟を稱す、謝靈運の酬從弟惠連詩に「末路值令弟、開顏披心胸」(令兄)を見よ、

【伶仃】一に跲、また伶仃に作る、獨行の貌、また失志の貌、零丁に同じ、

【零丁】志を失ひ「オチブルル」貌、晉書李密傳に「一一孤苦、至於成立」伶仃に作る同じ、伶仃は獨り「オチブル」レテアル」貌、柳貫の詩に「萬里滄江雲一去、欲將孤影寄一一伶仃」

【零糶】米の「コウリ」説文に「糶ハ出穀ナリ」閩書に「凡遇凶年、減價一一」

【麗澤ノ契】文學道義を以て交るをいふ、易の兌卦の象傳に「麗澤、君子以朋友講習」麗澤とは相附麗し、交、相浸潤滋益するの象あり、故にいふ、麗正音リ

【靈龜之鼓】「スグレタル」靈龜は鱗に同じ、蜥蜴に似て長丈餘、鏡の如き甲あり、鱗の類なり、その革にて張りたる太鼓をいふ、李斯の諫逐客書に「建翠鳳之旗、樹一一」

【靈蛇ノ珠ヲ握ル】(握靈蛇之珠)すぐれたる文才を有するに喩ふ、靈蛇之珠は隋侯之珠の一名なり(隋侯ノ王)を參看せよ、

【荔丹】荔枝の子の丹きをいふ、蘇軾の潮州韓文公廟碑に「於榮一一與蕉黃」(荔枝)を見よ、

【犁旦】史記の南越傳に「一一城中皆降」伏波註に「犁ハ黒ナリ、天未ダ明ケズシテ尙ホ黒キナリ」犁一に黎に作る、

【冷暖自ラ知ル】(冷暖自知)言説を用ひずして自ら心に知るをいふ、傳燈錄に「今蒙指授、入處如人飲水、冷暖自知」

【戻蟲】虎の異名、戰國策の秦策に「虎者一一戻は、ムサボリ」て暴惡なる義、

【令長】連文釋義に「漢法、縣萬戸以上爲令、以下爲

【禮ト云ヒ禮ト云フモ玉帛ヲ云ハンヤ】(禮云禮云玉帛云乎哉) 論語陽貨篇 孔子の語、下に「樂云樂云、鐘鼓云乎哉」とあり、玉や幣帛やは、相見の時に敬意を表する禮物とはすれども、それは禮の末なり、禮の本は先方の人を敬ふといふ心、是れなりとの意。

【令徳】「ヨキ徳なり、令は善なり、詩經小雅湛露篇に「顯允君子、莫不令徳」。君子、莫不、一ニ。禮ノ用ハ和ヲ貴シト爲ス。(禮之用、和爲貴) 論語學而篇、有子の語、下に「先王之道、斯爲美、小大由之」禮儀作法の用(ハタラキ)は和從容トシテ迫ラザル義をたふとふ、心を抑へて「キウクツ」にすること勿れとの意。

【零賣】「コウリ」「キリウリ」晁氏客語に「荆公托人賣金、一了、銖兩不足甚怒、元澤云、銖銖而較、之至、兩必差、遂解、零賣は米の「コウリ」零賣は「コガヒ」。

【令望】善き人望なり(令聞)を見よ。【禮貌】禮容もて人を敬ふなり、孟子の告子下篇に「一未衰、言弗行也、則去之、趙註に「禮ハ之ニ接スルニ禮ヲ以テスルナリ、貌ハ顔色和順ニシテ賢ヲ樂ムノ容アルナリ」。【領ハ蟾蜍ノ如シ】(領如蟾蜍)美人の「ウナジ」の美く

しきに喰ふ、蟾蜍は木の中に生ずる蟲、潔くして白きもの(膚凝脂)を見よ。

【禮ハ其ノ奢ランヨリハ寧ロ儉セヨ】(禮與其奢也、寧儉)禮は過不及なく中を得たるを貴ぶことなれども本末を分つときは奢は文にして末なり、儉は質にして本なりされば奢靡にして、唯その文に馳せんよりは寧ろ儉朴にして唯その質に従ふに若かずとの義、論語八佾篇孔子の語、魯人林放が禮の本を問ひたるに答へたまひたるにて、下に「喪與其易、也寧戚」とあり。

【禮賓】通鑑の注に「唐ニ一院アリ、凡ソ胡客入朝スル、宴ヲ此ニ設ク、元和九年一院ヲ長興里ノ北ニ置ク」と、一院は鴻臚寺に屬す、韓愈の論佛骨表に「一一一設」。【靈府】精神の宅なり「タマシヒ」の「アルトコロ」莊子徳充符に「不可入於一靈臺に同じ」。【禮部員外郎】六典に「一一一ハ、從六品上、尙書侍郎ニ貳シ、其ノ儀制ヲ舉ゲ而シテ其ノ名數ヲ辨ズルコトヲ掌ル」とあり。

【麗風】西北の風、淮南子の墜形訓の注に見ゆ。【令聞】善き譽なり、詩の大雅卷阿篇に「一一一令望令

望は威儀の望みて法るべきなり、次條を參看せよ。【令聞令望必ズ此ノ山ト俱ニ傳ハラシ】晉書の羊祜傳に「祜樂山水、每風景、必造觀山、置酒言詠、嘗慨然歎息、顧謂鄒湛等曰、自有宇宙、便有此山、由來賢達勝士、登此遠望、如我與卿者多矣、皆湮滅無聞、使人悲傷、湛曰、公德冠四海、道嗣前哲、令聞令望必與此山俱傳、至若湛輩、乃當如公言耳」。【俗傍】行くこと正しからざる貌、鈴鐺に作る、同じ、一解に、流落の貌とも解けり、文選の潘岳の寡婦賦に「少俗傍、而偏孤兮」。【靈廟】「オタマヤ、續高僧傳に「勅起一一於扶南臨淄之地」。また萃塔婆の一名、西域記に「浮圖此翻方墳、亦翻圓塚、亦翻高顯、義翻一一」。【翎毛】翎は羽なり、鳥をいふ、毛は獸なり、畫譜に「崔白畫ニ工ナリ、敗荷鳥雁ヲ以テ名ヲ得タリト雖モ、然レドモ猶ホ花竹一一ニ精シ」。【黎民】黎は黒なり、民の首皆黒し、故にいふ、庶民に同じ、書經堯典に「一一於變時雍」。【令名】「ヨキホマレ」令聞に同じ、孝經に「身不離於一一」。

【黎明】史記の呂后紀の字面、註に「徐廣曰ク、黎ハ猶ホ比ノ如シ、將ニ明ケナントスルノ時ナリ」黎且に同じ、黎一に黎に作る、次條を見よ。

【黎明】黎は黒なり、黒と明と交り、明けんと欲して未だ明けざる意、味爽に同じ、成語考に「一一味爽皆將曙之時也」と、爽は明なり。

【羚羊】羊の一種、カモシカその角に圓くめぐれる鬘文あり、埤雅に「一一似羊而大角」とあり、麋羊に同じ。

【隸也力メズ】(隸也不力)奴隸どもが君國の爲めに力を盡さずといふ義、文天祥の正氣歌に「隸也實不力」林西仲いふ「一一」四字、乃チ楚公子微服出亡スルトキ、其僕之ヲ罵ルノ詞、借リテ以テ轄スル所ノ將士肯テ力戰セズ、己ノ執ヘラルルコトヲ致スヲ罵ル」。【禮容】禮儀正しき容貌、史記に「孔子爲一兒嬉戲常陳俎豆習一一」。【令郎】人の子を稱していふ(令子)を見よ。

【玲琅】「キョラカナル」玉の聲、劉子暉の聽彈琴歌に「一一一鼓萬象春、鐵面霜鬢不枯槁」。【零落】楚辭の離騷に「惟草木之一一兮」の註に「一一」。

ハ皆墮おつるナリ、草ニ零トイヒ、木ニ落トイフ轉じて人のオチブレタルにいふ、管子に「五穀以削士民」白居易の琵琶行に「門前—鞍馬稀」

【醴酪】「アマミアルサケ」禮記の祭義に「躬秉未以事天地山川社稷先古以爲—齊盛」また乳汁を煮てつくりたる漿ノミモノをいふ、

【伶俐】「リコウモノ」康熙字典に「今方言、謂黠慧、曰—品字箋に「人之快便者曰伶利」

【零陵】兩漢晉の縣名荆州ニ屬ス今の廣西桂林府全州の西南七八清里、また郡名、今の湖南永州府—縣の北二清里、

【醴醪】美酒なり、抱朴子に「寒泉旨於—醴醪」を參看せよ、

【冷洽】清涼の貌、古樂府に「山溜何—」一解に水の聲なりと、陸機の文賦に「音—而盈耳」一解に音聲なりと、冷然に同じ、莊子逍遙遊に「御風而行、冷然善也」冷然は輕妙の貌、一解に風の聲なりと、要するに水聲音聲風聲すべて清らかなる聲を狀する語、

【零露】「ツユ」の「オリル」義、詩經野有蔓草篇に「—薄兮」(中庭地白ク)を見よ、

【遼史】百十六卷、元の順帝の時、托克托等撰す、本紀三十卷、志三十三卷、表八卷、列傳四十五卷あり、遼の制、國人の著作隣境に傳ふるを得ず、故に五京の兵燹に史書蕩然として存するなし、故に此書を撰するにあたりて史料に乏しく、頗る疎略に失す、附する所の國語解一卷は、古人音義の意に仿ふ、その例甚だ善しと雖も、謬舛亦多し、遼史拾遺二十四卷、清の厲鶚撰す、參考すべし、

【聊爾】博雅に「聊、苟且也」とあり、カリソメ、晉書阮籍傳に「聊復爾耳」

【蓼穗】「タデ」ハナ「穗狀を成す、故にいふ、韋莊の詩に「來時楚岸楊花白、去日隋堤—紅」(蓼花)を見よ、

【蓼蟲ハ苦ヲ知ラズ】(蓼蟲不知苦)「たて食ふ蟲もすさず」といふ諺は、これに本づく、鶴林玉露に「冰蠶不知寒、火鼠不知熱、蓼蟲不知苦、蝨蛆不知臭、王僧孺の初夜文に「蓼蟲習苦、桂蠹喜甘」王粲七哀詩に「—去來勿與語、白居易の自詠の詩に「何異食蓼蟲、不知苦是苦」

【遼東】兩漢の郡名東漢ノ幽州ニ屬ス晉の平州—國、今の盛京省奉天府遼陽州の北七十清里、

【遼東ノ豕】「ミダリ」に自ら奇異なりとして誇るも、

レウシ—レウシ

【玲瓏】金玉の聲なり、班固の東都賦に「和鑾—」また陸游の詩に「詩和—韻」また「竝簷幽鳥語—」とあり、又明かなる貌にも用ふ、李白の詩に「却下水精簾—望秋月」白居易の詩に「樓閣—五雲起」また柳宗元の詩に「橘柚—透夕陽」

【僚友】「オナジツトメナカマ」禮記曲禮に「—稱其弟」

【了解】明らかに「サトル」(了)を見よ、

【料簡】「ハカリ」撰ぶ義、張湛の列子序に「—世所希有者」

【蓼花】「タデ」の花、温庭筠の東歸有懷詩に「驚眠、葉折、魚靜、—垂」黄庚の江村詩に「十分秋色無人管、半屬、蘆花半—」朱德潤の沙湖晚歸詩に「橋聲歸去浪痕淺、搖動—灘紅—」

【寥廓】虚空をいふ、ホガラカにして大なること、楚辭遠遊に「下崢嶸、而無地兮、上—而無天」又司馬相如の難蜀父老文に「猶、鶴鵬已翔、乎—之宇、而羅者猶視乎、藪澤」

【燎原ノ火】惡の長じ易きは、火の原野を「ヤク」如く、「ハゲシキ」に喩ふ、左傳隱六年に「商書曰、惡之易也、如火之燎于原、不可、火ノ原ニ)を見よ、

他人より之を見れば、凡庸たるを免れざるに喩ふ、後漢書の朱浮傳に「漁陽ノ太守彭寵、自ラ功ヲ負ミ滿ッルコト能ハズ、幽州ノ牧朱浮、書ヲ與ヘテ曰ク、伯通自ラ伐リテ以爲ラク、功天下ニ高シト、往時遼東ニ豕アリ、子ヲ生ム、白頭ナリ、異トシテ之ヲ獻セントシ、行キテ河東ニ至ル、群豕ノ皆白キヲ見テ、慙ヲ懷キテ還リヌ、若シ子ノ功ヲ以テ朝廷ニ論ゼバ、則チ遼東ノ豕ナラント」伯通は彭寵の字、

【僚ノ丸ニ於ケル】(宜僚ノ丸)を見よ、

【遼東遼來】小兒の啼を止むるにいふ、わが國にて「レロレロ」といふはこの語の轉か、蒙求に「魏志ニ、張遼字ハ文遠、雁門馬邑ノ人、武力人ニ過ギ、數、戰功アリ、前將軍ニ累轉ス、舊注ニ曰ク、江東ノ小兒啼クトキ、之ヲ怖シテ—ト曰ヘバ、止マラル者ナシ」

【寥落】空しく靜かにして、見る所の希なるをいふ、謝朓の詩に「曉星正—」

【料理】事を「ハカリ、ヲサムル」義、處理に同じ、晉書王徽之傳に「當相—」また周旋して相謀るをいふ、世説に「汝若爲、選官、當好—此人」

【了了】慧なり、曉解なり、一分明なる義、後漢書孔融傳に「融年十二聰慧、陳煒曰、小、而—、大、未、

必奇

また明白なる義、世説に「鍾士季目王安、阿戎—
解人意」

【遼遼】 遼は遠なり、遠き貌、楚辭に「山修遠、其—
兮」

【遼陽】 西漢の遼東郡—縣、東漢の幽州玄菟郡—
縣、遼の東京道—府—縣、金の東京路—府—
縣、元の—省—路—縣は今の盛京奉天府—
州治なり、晉、北魏の并州樂平郡—縣は今の山西遼
州の北三清里の地、

【歴階】 階段を「ノボル」に、一階毎に兩足を集むべき
に「インギノボル」故に「シカセザル」義、穀梁傳定十年
に「孔子—而上」註に「踰越シテ上ルナリ」と、王肅
曰く「階ニ登ルニ足ヲ聚メザルナリ」と、史記平原君
傳にも「毛遂按劍—而上」

【曆象】 曆は數を紀する所以の書、象は天を觀る所
以の器なり、曆象は即ち曆を推し、象を觀るをいふ、
書經堯典に「—日月星辰敬入時」時は耕稼の候を
いふ、また日月星辰の稱とす、易の革卦に「—謂日
月星辰也」

【櫟樹】 和名クヌギ、櫟に同じ、莊子に不材の木とす

水經注に「若邪溪上、有—、謝靈運、與從弟惠遠、
常遊之、作聯句、題刻樹側、櫟、櫟を見よ、

【歷代地理志韻編今釋】 二十卷、清の李兆洛字ハ申者、
江蘇武進ノ人、嘉慶十年ノ進士、撰す、この書は漢書、
續漢書音書宋書以下元史、明史に至る地理志中の地
名を韻にて排列し、小注を下し、時代の前後を以て次
を爲しその所屬の州郡を詳にし、現今の某地たるこ
とを示せり、

【鄴道元】 涿郡の人、北魏に仕へて御史中尉となり、法
を執る清刻、時のために忌まる、遂に遣はして關右大
使となす、平生學を好み、奇書を歴覽し、水經の注四
十卷を作る、北史に傳あり、(水經)を參看せよ、

【櫟】 無用の材、以て才の劣れるに喩ふ、司馬光の
洛中耆英會の詩に「自愧—非遠器、(櫟)を見よ、
【櫟馬籠禽】 世事に拘束せらるるに喩ふ、唐詩に「櫟馬
苦蹉跎、籠禽念退征、退征とは遠く飛び行くをいふ、
【歴覽】 「ヘメグリ」見る義、謝靈運の詩に「江南倦—
江北曠周旋」後漢書明帝紀に「—館邑會郡縣
吏、
【歴歷】 一一分明なる義、李白の詩に「分明楚漢事、
—王霸道」

【列缺】 楚辭に「上至—」の註に「列缺ハ天際ノ
電照ナリ」また司馬相如の賦に「貫倒景之—」揚雄
の賦に「霹靂—吐火施鞭」の註に「—ハ電ナリ」

【列子】 八卷、道家の書、周の列禦寇の撰と傳ふ、然れ
ども後世の竄入多く、記事も亦雜駁なり、されば列子
の人物に就きては、有無を疑ふ者あり、簡明目録に「書
中禦寇以後ノ事アリ、故ニ柳宗元ノ列子辨ニ其ノ後
人ノ増竄ヲ經タリトイヒ、高似孫ノ子略ニ、遂ニ以テ
莊周ノ寓言トナシ、竝ニ其人無シトナス、然レモ爾
雅ノ疏ニ、尸子ノ廣澤篇ヲ引クニ據レバ、當日實ニ列
子アルヲ知ル、特書ハ門人ノ追記セシ所タルノミ、
晉ノ張湛ノ註スル所、具サニ名理アリ、亦向郭ノ莊
子ノ註ニ肩隨スベシ」列子の説、略、老子と同じ、唐の
玄宗列子を稱して冲虚真人といひ、宋の眞宗、至徳の
二字を加へて、この書を冲虚至徳眞經と稱す、

【烈士】 義烈の行ある士なり、史記伯夷列傳に「貧夫
狗財—殉名、夸者死權、衆庶馮生、—は伯夷を
斥す、(老驥伏櫪)を見よ、

【列聖】 前朝の諸帝をいふ(先帝)を看よ、

【列女傳】 七卷、漢の劉向の撰なり、これを古—と
いふ、續傳一卷、誰の作たるを知らず、或は班昭の作

といひ、或は項原の著といへども確據なし、舊、合して
一編とす、宋王回乃ち頌ある者と頌なき者とを以て
その文を離析し、今の本と爲す、凡そ七目に分つ、曰く、
母儀、賢明、仁智、貞慎、節義、辨通、嬖孽是れなり(簡
明目録ニ據ル)

【列女】 二夫ヲ更ヘズ (忠臣ハニ)を見よ、

【裂帛聲】 「キヌ」を裂く如き聲をいふ、白居易の琵琶
行に「四絃一聲如裂帛」

【列眉】 戰國策に「蘇代自齊獻書于燕王曰、王謂臣
曰、吾必不聽衆口與讒言、吾信汝也、猶列眉也」

【烈風枯葉ヲ掃フ】 兵勢の強くして容易に敵を攻め破
るに喩ふ、後漢書鄭太傅に「以膠固之衆、當解合之勢、
猶以烈風掃枯葉」

【烈烈】 高大の貌、詩經小雅蓼莪に「南山—」また詩
經四月に「冬日—」とあるは、猶ほ栗烈の如し、

また憂ふる貌、詩經小雅采芣に「憂心—」

【獵較】 較は角に通ず、相競ふなり、競ひて獵するを
いふ、一解に田獵して獲る所の多少を較するをい
ふと、この解に従へば較音カウ、孟子萬章下篇に「魯
人—、孔子亦—」

【獵師】 「カリウド」西陽雜俎に「—數日、方獲」白居易

易の詩に「鄙語不可棄、吾聞諸一」

【躡等】 躡一音ラフ、踰越なり、順序を「トビコエル」禮記の學記に「學不_レ一_レ也」

【獵獵】 動く貌、鮑照の詩に「_レ一_レ 晚風適」

【漣漪】 風水上を行きて文を成すを漣といふ、猗は水波なり、初學記に「水波如_レ 錦文曰_レ 漪」一に倚に作る、詩經の魏風伐檀に「河水清且_レ 一_レ 王維の詩に「青翠漾_レ 一_レ 趙孟頫の詩に「萬柳堂前數畝池、平鋪雲錦蓋」

【簾帷】 「スダレ」ノ帷は幃に同じ、祖詠の秋日開_レ 百舌鳥詩に「秋天開_レ 好鳥驚起出_レ 一_レ 劉禹錫の詩に「雨餘獨坐卷_レ 一_レ 便得_レ 詩人喜霽詩」

【連引】 連及と同義、史記陳豨傳に「多_レ 一_レ 稀」

【練銳】 よくネリて「スルドキ」兵士、吳子に「此五者軍之_レ 一_レ 也、有此三千人、内出_レ 可以_レ 潰圍、外出_レ 可以_レ 屠城矣」

【蓮葉】 「ハチスノハ」史記龜策傳に「余至_レ 江南、觀其行事、問_レ 其長老、云龜千歲乃游_レ 一_レ 之上_レ 宋書樂志に「江南可_レ 采_レ 蓮、一_レ 何田_レ 田、張籍の春別曲に「長江春水綠堪_レ 染、一_レ 出_レ 水大_レ 如_レ 錢」

【漱澗】 水溢るる貌、また水動く貌、木華の海賦に「漱澗」

易の詩に「秋燈夜寫_レ 連句詩」また二句づつ作る例もあり、舊唐書の柳公權傳に「文帝夏_レ 日學士ト_レ 一_レ ス、帝曰ク、人皆苦_レ 炎熱、我愛_レ 夏日長ト、公權續_レ ギテ曰ク、薰風自_レ 南來、殿閣生_レ 微涼」

【廉隅】 廉は稜なり、隅は角なり、角には必ず稜あり、故に_レ 一_レ といふ、猶ほ方正といふが如し、禮記の儒行に「砥礪_レ 一_レ ことあるは、切磋琢磨の益を求め、守る所あり、方を削りて圓と爲さざるなり、南史宋武帝紀に「帝雄傑有_レ 大度、不_レ 事_レ 一_レ 小節、角立ちたる行爲をいふ、

【棟花】 「アフチ」の花、樹の高さ丈餘、葉の形は南天に似て「キザミ」あり、また「ツヤ」あり、夏日長と穂をなして五瓣の淡紫花あつまり開く、大さ錢の如し、一名「センドン」苦棟とも書く、林景熙の道中詩に「遠水平_レ 菰葉、春風足_レ 一_レ」

【蓮華】 「ハチスノハ」華は花に同じ、南史の齊東昏侯紀に「鑿_レ 金爲_レ 一_レ、以_レ 帖_レ 地、令_レ 潘妃_レ 行_レ 其上_レ、曰_レ 此步步生_レ 一_レ 也、大寶積經に「猶如_レ 一_レ 生_レ 於_レ 汚泥、行無_レ 增損、梁元帝の采蓮曲に「一_レ 亂臉_レ 色、荷葉雜_レ 衣香_レ、荷花_レ を見よ、

【簾外】 「スダレ」の「ソト」薛奇童の楚宮詞に「不堪_レ 深

淡_レ 一_レ 浮_レ 天無_レ 岸、澗は澗の俗字、

【攀腕】 手足の曲りて伸ぶること能はざる病、柳宗元の捕蛇者説に「已_レ 大風_レ 一_レ 癩病_レ 去_レ 死肌_レ 殺_レ 三蟲_レ」

【葦】 同ジクスルコトヲ辭ス、(同葦)を見よ、

【連枷】 「カラサヲ」麥稻などの穂を打つ具、「マヒギネ」ともいふ、三才圖會に「釋名曰_レ 架_レ 加_レ 也、加_レ 杖_レ 於_レ 柄頭_レ、以_レ 搗_レ 穗_レ 而_レ 出_レ 穀_レ 也、枷_レ 一_レ に枷_レ に作る、輪棒また稻枷ともいふ、

【連衡】 衡一_レ に横に作る、韓魏趙燕楚齊の六國共に秦に服従するをいふ(合従)を見よ、

史記蘇秦傳に「蘇秦説_レ 趙肅侯_レ 曰_レ、六國爲_レ 一_レ 并_レ 力_レ 西郷而攻_レ 秦、秦必破_レ 矣、衡人者皆欲_レ 割_レ 諸侯_レ 之地_レ、以_レ 予_レ 秦、衡人とは_レ 一_レ を唱ふる人をいふ、

【廉悍】 心、イサギヨクシテ、ツヨシ、韓愈の句に「俊傑

【奩具】 嫁入道具をいふ、類書纂要に見ゆ、奩籠に同

【練句】 詩文の句をねる義、練字)を見よ、

【聯句】 聯は一_レ に連に作る、二人以上集り甲一句を作れば乙一句をつぎ、丙又一句をつぎて一篇をなすもの、わが連歌は、この一_レ に本づきたるならん、白居易

殿裏、一_レ 欲_レ 黃昏_レ」

【簾幌】 「スダレ」と「タレギ」を、幌は「トバリ」帷幔なり、張漸朗月行に「朗月照_レ 一_レ、清夜有_レ 餘姿」

【棟花風】 歳時記に「江南梅花風最先、一_レ 最後、凡二十四番花信風、何夢桂の詩に「白首相逢歎_レ 暮年、一_レ 一_レ 後草連_レ 天_レ、(二十四番)を見よ、

【蓮花六郎ニ似タリ】 舊唐書楊再思傳に「張昌宗以_レ 姿貌見_レ 寵_レ 倖、再思又説_レ 之_レ 曰_レ、人言_レ 六郎面似_レ 蓮花、再思以_レ 爲_レ 蓮花似_レ 六郎、非_レ 六郎似_レ 蓮花也、其傾巧取媚也如此、

【濂溪先生】 (周敦頤)を見よ、

【連鷄ハ俱ニ棲ニ止マル能ハズ】 (連鷄不能_レ 俱止於棲)連は繩にて繋ぐをいふ、棲は鷄の「トヤ」なり、繋ぎたる鷄は、一の時に棲む能はず、以て群雄並び立つ能はざるに喩ふ、戰國策に「諸侯不可_レ 一_レ、猶連鷄之不能_レ 俱止_レ 於_レ 棲、亦明矣、

【連翹】 和名、イタチハゼ、灌木、高さ丈餘、幹細く直上す、春四瓣の黄花を開く、桔梗の花に似て小し、花落ちて葉を生ず、形橢にして尖り鋸齒あり、三葉或は五葉節に對して生ず、實熟して黄なり、二ツに裂く、藥用とす、一種藤本(ツルダチ)のものあり、枝長く垂る花

あれども實を結ぶこと稀なり、多く庭際に植う、連若、連喬皆同じ、

【廉潔】「ムサボラズして心の、イサギヨキをいふ、南史郭祖深傳に「一者、自進無途、貪苛者、取入多徑、廉者は自ら街ひて、活ることを求めず、故に自ら進むに途なし、貪者は百万之を得んとつとむ、故に取り入る、コミチ多しとなり、

【蓮華峯】華山記に「華山頂上有「一一」、山有千葉、蓮花、服之羽化、

【連蜷】連蹇に同じ、進まざる貌、楚辭に「騭一一」以驕驚、また長く「ワダカマル」貌、揚雄の甘泉賦に「蛟龍一一于東厓、兮」次條を見よ、

【連蹇】蹇連に同じ、難みて進まざる義、また困頓の貌、揚雄解嘲に「孟子雖一一、猶爲萬乘師、

【蓮花漏】翻譯名義集に「廬山遠公門有僧慧要者、患山中無刻漏、乃於水上立十二葉芙蓉、因波輪、以定十二時、晷景無差、今日遠公一一是也、蓮漏を參看せよ、

【聯互】連りわたる義、唐書に「第舍一一互は互と異り、互は音セン求むる義、音クワン桓に同じ、

【簾鉤】「スダレカケ」陳慥問月樓賦に「忽霜月之飛來、

傍欄角兮窺一一」杜甫の落日詩に「落月在一一」溪邊春事幽、

【輦轂】天子の車輿をいふ、故に天子の居る所の都を輦轂の下といひ、略しては輦轂といひ、また輦下、轂下などともいふ、司馬遷報任安書に「僕願先人緒業、得待罪一一下、二十餘年矣、また晉書劉毅傳に「毅獨遭聖明、不離一一」また漢書王尊傳に「賊數百人在轂下、

【連坐】「マキゾ」へ史記商君傳に「令民爲什伍、而相收司一一、

【蓮座】蓮華座ともいふ、佛像の座の蓮華の形を作りたるもの、華嚴經に「一切諸佛世界悉見、如來坐、蓮華寶師子之座、王勃の觀佛跡寺詩に「一」神容儼、松崖聖跡餘、

【廉察】廉は明かに視察する義、後漢書魯恭傳に「親往廉之」とあり、後世の廉訪使の廉に同じ、

【連山】山の連りたるをいふ、

また夏の易をいふ、今は亡びて傳はらず、周禮春官に「掌三易之法、一曰、一一、二曰、歸藏、三曰、周易、

【連枝】兄弟をいふ、兄弟は木の枝を連ねて本を同じくするが如し、卓氏漢林に「連枝會、兄弟ノ燕スル

ヲイフナリ、唐詩ニ、東樓喜奉連枝會、千文字の「同氣一一」の註に「同ジク父母ノ氣ヲ受クル、樹ノ枝アリテ相連リテ生ズルガ如シ、」文選に「斷腸憶一一」ニ【廉士】「慾少くして、イサギヨキ、サブラヒ、孟子に「陳仲子豈不誠一一哉、」説苑に「一一不辱名、信士不惰行、

【練士】兵士を訓へて「ネル」をいふ、道德指歸論に「選練士、

【練字】詩文の文字を善くねる義、葛常之詩話に「作詩在子一一、如老杜飛星過、水白、落月動、沙虛、是練中閒一字、地坼江帆穩、天清、木葉聞、是練末後一字、珊瑚鈎詩話に「詩以意爲主、又須篇中練句、句中一一、乃爲工、

【孿子】一乳兩子なり「フタゴ」戰國策に「夫一一之相似、者惟其母知之而已、夫利害之相似者、唯智者知之而已、孿一音サン孿に作る、同じ、

【練絲ニ悲ム】「悲練絲」白き「ネリイト」を見て悲む、阮籍の詩に「楊朱泣岐路、墨子一一」(墨子絲ニ)を見よ、

【練習】「ネリナラフ」音書に「一一兵馬、

【蓮社】釋氏要覽に「昔晉ノ慧遠法師、雁門ノ人、廬山

ノ虎溪ノ東林寺ニ住ス、賢士劉遺民宗炳雷次宗張野張詮周續之等ヲ招キテ會ヲ爲シ、西方ノ淨業ヲ修ス、彼ノ院ニ、多ク白蓮ヲ植ウ、又彌陀佛國ハ蓮華ヲ以テ、九品ノ次第ヲ分チ人ニ接ス、故ニ一一ト稱ス、コノ社ヲ嘉スル人、名利淤泥ノ爲メニ汚サレズ、喻ヘバ蓮華ノ如シ、故ニ之ヲ名ヅク云云、白虎通に「王者所以有社何、爲天下求福報土人非、土不食、土廣不可逼敬、故封土以立社、今釋家結募繙白、建法祈福求生、淨土淨土廣多、遍求、則心亂、乃確指安養淨土、爲棲神之所、故名一一淨社爾、(白蓮社)ヲ參看せよ、

【輦車】「テグルマ」漢書淮南厲王傳に「以一一四十乘、反谷口、師古の註に「一一ハ人輓キ行キテ以テ兵器ヲ載スルナリ、

【廉讓】心が清くして欲すくなく、己をおきて人に譲るをいふ、潛夫論に「世人之論也、靡不貴一一、而賤財利焉、及其行也、多釋廉而甘利、

【連城ノ璧】成語考に「惠王之珠、光能照乘、和氏之璧、價重、連城」とあり、史記に「魏惠王曰、寡人有徑寸之珠、照車前後各十二乘者十枚云云、(和氏ノ璧)を見よ、

【連珠】 辭句を對比し、連續して諷諭假托を主とする一種の文體なり、文選演連珠の注に「所謂一者與于漢章之世、班固賈逵、傅毅三子受詔作之、中略合于古詩諷興之義、欲使歷歷如貫珠、易看而可悅、故謂之連珠」詳しくは文體明辨を見よ。

【聯珠詩格】 二十卷、元の干濟撰し、蔡正孫補ふ、この書、録する所る唐宋人の七言絶句にして、四句全對格より、用後身字格に至る、凡て三百二十餘格に分ち録せり、足利氏の中葉以後五山僧侶の間に於て行はれて今に至る、和版あり、精選唐宋千家一、二十卷、朝鮮徐居仁注、参考すべし。

【連署】 二人以上の者が姓名を連ね書く義、俗にいふ連名なり、通鑑唐憲宗紀に「自今奏事、必取崔群一、然後進之」

【連如】 涙の「サメザメ」と滴る貌、易經の屯卦上六に「泣血——」

【連帥】 周の時、十國連合せる所ろの長なり、禮記の王制に「十國以爲連、連有帥」唐の節度使觀察使は、古の——に似たり、故に韓文に往往この稱を用ひたり。

【連逮】 逮は、オヨブなり、連及して俱に捕へらるる

をいふ、史記秦紀に「以罪過——少近官三郎、三郎は中郎、外郎、散郎、

【戀著】 戀ひ慕ふ情の執著する義、詞欲經に「女色者、世閉之枷、凡夫——不能自拔」

【連筒】 「カケヒ」三才圖會に「——ハ竹ヲ以テ水ヲ通ズルナリ、云云、篋、椀、架槽皆同し、

【練若】 寺院の異名、僧伽藍若の轉なりといふ、祖庭事苑に「——亦云、蘭若」

【廉頗】 史記の本傳に「廉頗者、趙之良將也、廉頗年七十餘にして善く戰ふ、同書に「一飯二斗米、肉十斤、被甲上馬以示尙可用」とあり、

【連薨】 薨は屋棟の瓦、イラカ——は多くの「ムナガハラ」の連なるをいふ、蜀都賦に「比屋——」

【簾箔】 「スダレ」箔もまた簾なり、三輔黃圖に「未央宮漸臺西、有桂宮、中有光明殿、皆金玉珠璣爲——」

【簾幕】 「スダレ」と「マク」と、白居易の葺池上舊亭詩に「向暖窗戶開、迎寒——合」劉禹錫の深春詩に「畫堂——外、來去燕飛斜」

【連府】 大臣の「ヤシキ」を稱していふ、南史に「王儉、唐果之ヲ以テ長史トナス、蕭緝、儉ニ書ヲ與ヘテ曰ク、盛府元僚實ニ其ノ選ヲ難ンズ、庚景行、綠水ニ泛ビ、芙蓉

ニ依ル、何ゾ其レ麗ナルヤト、時人儉ノ府ヲ稱シテ蓮花池トイフ、盧綸の送從叔程歸西川幕詩に「群鶴棲——」諸戎拜柳營

【廉問】 廉は察治なり、尋問して、事情を察するをいふ、史記秦紀に「吾使人——或爲妖言、以亂黔首」

【廉平】 廉は心深くして貪らざるなり、平は公平にして私なきなり、史記の吳起傳に「吳起善用兵、——盡得士心」

【連袂】 「タモト」をつらぬる、舊唐書睿宗紀に「正月上元日、夜上皇御安福門觀燈、出內人——踏歌」

【練兵】 兵を練る、崔禹錫の送張說巡邊詩に「——宜雨洗、臥鼓候風涼」

【連璧】 書言故事に「二客同シク至ル者ヲ——賁臨トイフ、晉ノ潘岳、夏侯湛ト、竝ニ姿容ニ美ニ、且ツ友トシ善シ、行止スル毎ニ與ヲ同ジクシ、茵ヲ接ス、京都之ヲ——トイフ」と、茵は褥なり、詳しくは晉書の夏侯湛傳を見よ

【連篇累牘】 多くの文章をいふ、成語考に「——總謂多文」の註に「隋ノ李諤上書シテ云フ——、不出月露之形、積案盈箱、盡是風雲之狀、この語もと隋書李諤傳に出づ、宋史選舉志に「寸晷之下、惟務貪

【蓮步】 美人の歩するをいふ、孔平仲の觀舞詩に「雲鬟應節低、——隨歌轉」(金蓮ノ)を見よ、

【連峰】 連れる峯、孫統の蘭亭集詩に「時禽吟、長澗、萬籟吹——」

【蓮峰】 蓮華峰の略、華山志に「華山頂上有蓮華峰、山有千葉蓮花、服之羽化」李白の詩に「黃山四千仞、三十二——」

【連綿】 長く「ツヅク」貌、莊子大宗師の注に「——長貌」

【濂洛關閩ノ學】 周茂叔及び二程子張橫渠、朱晦庵の學をいふ、周子は濂溪の人、二程子は洛陽、張子は關中、朱子は閩中の人なればなり、駁臺雜話の「異說」に「まちの條に、鄒魯の學とて濂洛にたがふべからず、(鄒魯ノ)を參看せよ、

【濂洛風雅】 六卷、元の金履祥撰す、濂溪は周茂叔、洛は程明道の住せし地なれば、その學派を濂洛といふ、この書は濂洛學派に屬する人(周子程子ヨリ王柏王偁ニ至ル四十八人)の詩を輯めて國風及び雅に擬す、故に風雅といふ、

別に清の張伯行の編せし一—九卷あり、周子二程子邵子張子游酢尹焞楊時羅仲素李侗朱子張栻真德秀許衡薛瑄胡居仁羅洪先十七家の詩を收む、二書共に和版あり、

【連理ノ御契】太平記卷四に見ゆ、搜神記に「宋ノ大夫憑ノ妻何氏美ナリ、宋ノ康王之ヲ奪フ、憑王ヲ怨ム、王之ヲ囚フ、因リテ自殺ス、妻王ト青陵臺ニ登リ、自ラ投ジテ死ス、王怒リテ之ヲ埋ム、二塚相對ス、宿ヲ經テ木アリ、二塚ノ上ニ生ズ、根交リ枝連ル」と、白樂天之、長恨歌に「在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝」唐の明皇が貴妃と誓ひたる辭なり、

【漣漣】涙の「ナガレクダシク」貌、詩經の衛風淇篇に「泣漣漣」三才圖會に「有古制一、今制一、圖漣漣」漣漣を參看せよ、

【簾櫳】「スダレ」と「マド」櫳は藥に同じ、小を窓と曰ひ、閨を櫳といふ、謝惠連の詩に「升月照一、張泌の詞に「燕飛鶯語隔一」

禮賢五條

周公、大聖、以賈下賤、吐哺握髮、禮於失人、

越石父賢、在縲紲中、晏子解左、顧之、弗謝、入圍、久之、越石父請絕、曰、君子禮於不、知己、而信於知己、知己而無禮、固不如在縲紲之中、晏子於是延入爲上賓、

當爲人、折節下士、門無留客、時人皆稱而附之、

管攻、古人用兵成敗之跡、著前古論、郡守周葵得之、相與論難、奇之、曰、他日國士也、請爲上客、

陳仲舉爲豫章、大守至、便問徐孺子所在、欲先看之、主簿白、孺情欲、府君先入、陳曰、武王式商容之閭、席不暇暖、孺、吾之禮賢、有何不可、



【鷓鴣】字彙に「船ヲ進ムル所以、櫂ニ似テ長シ」集韻に「通ジテ櫂、櫂ニ作ル」

【樓】説文に「重屋ナリ」タカドノ吳融の詩に「園密、花藏、易、樓深、月到艱」張翥の宿山寺詩に「鐘定遙聞水、樓高、別見星」

【隴】西漢天水郡一縣、今の甘肅秦州清水縣の北、唐五代宋元明の州名、今の陝西鳳翔府隴州治、

【櫳】「オホマド」小を窓といひ、閨を一といふ、通じて藥に作る、房櫳は「ハヤ」の「マド」班婕妤の賦に「房櫳虛、兮風冷冷、雕一巖一朱一翡翠一等の語あり、

【漏甕ヲ奉グ燂釜ニ沃グ】(奉、漏甕沃燂釜)底の漏る水「ガメ」を以て、やけたる釜にそそぐに「グヅグヅスル」ときは、皆甕の水漏れ盡くるなり、故に之を用ふること、急速ならざれば、其の効なきに喩ふ、戰國策に「救趙之務、宜若一、一、一、一」

【隴ヲ得テマタ蜀ヲ望ム】(得隴復望蜀)利を「ムサホリ」て、足ることを知らざるを「ム」三國志の魏志に

「司馬懿曹操ニ言ヒテ曰ク、今漢中ニ克チ、益州震動ス、兵ヲ進メテ之ニ臨マバ、勢必ス瓦解セン、操曰ク、人足ルコナキニ苦シム、既ニ隴ヲ得テ復タ蜀ヲ望ムト、後漢書岑彭傳には「人苦不知足、既平隴復望蜀」とあり、

【漏屋】雨の「モル」アバラヤ荀子儒效篇に「彼大儒者、雖隱於窮閭一、無置錐之地、而王公不能與之爭名」

【樓ヲ下ル時】(下樓時)李白の醉起作に「阿誰扶下馬、不省一、一」

【弄ヲ好マズ】(不好弄)書言故事に「見不喜戲曰、一、一、一、左傳僖九年に「夷吾弱、一、一」とあり、弱は、幼小にして力なき義、弄は戲なり、

【隴ヲ平ゲ蜀ヲ望ム】(平隴望蜀)前の「隴ヲ得」を見よ、

【樓下】「タカドノ、ノシタ」後漢書王純傳に「殺妾家十餘口、埋、在、一、杜甫の越王樓歌に「一、長江百丈清、山頭落日半輪明」

【弄吭】鳥の啼するをいふ、文選の左思の蜀都賦に「雲飛水宿、一、清渠、弄一に既に作る、

【萋萋】「ヨモギ」萋は萋の屬(シロヨモギ)本草に「白萋」

とあり、野菜譜に「一春采、苗葉熟食、蘇軾の惠崇春

江晚景詩に「一滿地蘆芽短、是正河豚欲上時」

【樓角】「タカドノ、ノカド」杜甫の詩に「一臨風迴、城陰帶水昏」

【樓閣】「タカドノ」後漢書呂強傳に「今外戚四姓貴倖之家、及中官公族無功德者、造起館舍、凡有萬數、相接、丹青素壁、雕刻之飾、不可單言、迷樓記に「一高下、軒窗掩映、姚合の題山寺詩に「千重山曉裏、一影參差」

【蝮蟻】「ケラ」とアリと、賈誼の弔屈原賦に「橫江湖之鱧鯨兮、固將制於一」以て微力の人に喩ふ、

【籠禽】「カゴノトリ」籠鳥に同じ、身の束縛せられたるに喩ふ、韋應物の送劉評事詩に「一羨歸翼、遠守懷交親、白居易の歲暮詠懷詩に「七年囚閉作一、但願開籠便入林」

【樓居】「タカドノ」に住居する義、史記孝武紀に「公孫卿曰、仙人可見、仙人好一、於是上令長安、則作蜚廉柱觀、甘泉、則作益壽延壽觀、使卿持節設具而候、神人」

【聾聵】左傳僖二十六年に「耳五聲ノ和ヲ聽カザル

て他壺より水漏り滴りて入り、其の水の溜るに隨ひて箭次第に上りて、刻み見はる、一晝夜四十八刻にして、一時を四刻とす、一時の初刻を一點と呼び、以下次第に二點三點など呼ぶ、或はこれを「ヒトツ」「フタツ」「ミツ」ともいふ、例へば、寅の一點「午の二點」「子一ツ」「丑三ツ」の如し、別に夜漏あり、一夜を戌亥子丑寅の五更とし、一更を五刻、また五點とす、鼓を撃つに九易ノ陽數に始まり、時毎に相倍して撃つ、後世子午の時を九ツといひ、丑未を八ツ、寅申を七ツ、卯酉を六ツ、辰戌を五ツ、巳亥を四ツといふは、九を相倍し、二九十八、三九二十七なるを、各十位を捨てて、其餘を撃つに因るといふ、潛確類書に「梁刻漏經ニ、漢制冬至晝漏四十五刻、冬至之後日長、九日加一刻、以至夏至、晝漏六十五刻、夏至之後日短、九日減一刻、或秦之遺法、漢代施用云云、また刻漏經にいふ「軒轅黃帝ノ時ニ始リ、夏商ノ代ニ宣フ、周ニ至リテ挈壺氏コレヲツカサドル」と、また古今原始には、黃帝の時、車區といふ人、一を創むとあり

【隴山】隴州の西北に在り、即ち天水大阪なり、その阪九回す、秦州記に「隴山東西百八十里、山東人行役升、此而願、則莫不悲思」

【弄姿】「姿ヲ弄ス」容姿を飾りて媚を呈するをいふ、後漢書李園傳に「胡粉飾貌、搔頭」

【陋室銘】唐の劉禹錫の「一」に「山不在高、有仙則名、水不在深、有龍則靈、斯是陋室、惟吾德馨、苔痕上階綠、草色入簾青、談笑有鴻儒、往來無白丁、可、以調素琴、閱金經、無絲竹之亂耳、無案牘之勞形、南陽諸葛廬、西蜀子雲亭、孔子云、何陋之有、」

【樓車】車上に望櫓を設け敵城を下瞰するもの、左傳宣十五年に「登諸一、使呼宋人而告之」南史の侯景傳に「設百尺一」

【樓上】「タカドノノウ」史記晉世家に「從一觀而笑之」韋莊の長安春詩に「家家一如花人、千枝萬枝紅豔新」

【弄璋之喜】男子を生みたる喜をいふ、詩經小雅斯干篇に「乃生男子、載寢之牀、載衣之裳、載弄之璋、璋は半圭なり、その徳を尚び、臣たるの職を示すなり、また識林に「姜度誕子、李林甫作手書、慶之曰、聞有弄璋之喜、客視之掩口」とあるは、璋字をあやまり寫したるを笑ふなり、

ヲ聾トイフ」と、また國語の晉語に「一不可使聽」の註に「生ナガラニシテ聾ナルヲ聾トイフ」

【弄瓦之喜】女子を生みたる喜をいふ、詩經小雅斯干篇に「乃生女子、載寢之地、載衣之褐、載弄之瓦、」

【樓觀】「タカドノ」モノミ、禮記月令に「仲夏之月、可、以居高明」の註に「高明謂一也」白居易の寄王質夫詩に「一水潺潺、龍潭花漠漠」

【樓月】「タカドノ」の月、白居易の「新秋喜涼詩に「一織織早、波風裏裏新」

【蝮蟻】土に住む一種の蟲、短き翅と四足とあり、雄は鳴き、又飛べども、雌は腹大きく、羽小にして飛ぶこと能はず、爾雅の疏に「一名天蝮、一名碩鼠、和名ケラ」中華古今注に「一有五能、而不成、伎術」

【陋巷】「イブセキ」ヲマタをいふ、論語雍也篇に「賢哉回也、一簞食、一瓢飲在、一、人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也」

【漏刻】「ミヅドケイ」刻漏ともいふ、古時を測る器、銅壺あり、漏壺といふ、蓋に孔あり、箭を挿し立つ、漏箭といふ、箭の幹に四十八の刻みあり、是れ漏刻なり、さ

【弄姿】「姿ヲ弄ス」容姿を飾りて媚を呈するをいふ、後漢書李園傳に「胡粉飾貌、搔頭」

【陋室銘】唐の劉禹錫の「一」に「山不在高、有仙則名、水不在深、有龍則靈、斯是陋室、惟吾德馨、苔痕上階綠、草色入簾青、談笑有鴻儒、往來無白丁、可、以調素琴、閱金經、無絲竹之亂耳、無案牘之勞形、南陽諸葛廬、西蜀子雲亭、孔子云、何陋之有、」

【樓車】車上に望櫓を設け敵城を下瞰するもの、左傳宣十五年に「登諸一、使呼宋人而告之」南史の侯景傳に「設百尺一」

【樓上】「タカドノノウ」史記晉世家に「從一觀而笑之」韋莊の長安春詩に「家家一如花人、千枝萬枝紅豔新」

【弄璋之喜】男子を生みたる喜をいふ、詩經小雅斯干篇に「乃生男子、載寢之牀、載衣之裳、載弄之璋、璋は半圭なり、その徳を尚び、臣たるの職を示すなり、また識林に「姜度誕子、李林甫作手書、慶之曰、聞有弄璋之喜、客視之掩口」とあるは、璋字をあやまり寫したるを笑ふなり、

【漏箭】「ロウコク」の矢、杜詩に「五夜漏聲催曉箭」漏刻を見よ。

【樓船】「ヤカタブネ」漢武帝の秋風の辭に「泛樓船」度、汾河、類書纂要に「大船上ニ樓ヲ施スヲ、號シテ一トイフ」樓航ともいふ。

【樓前】「タカドノマ」薛稷の春日登樓野望詩に「野外煙初合、一花正飛」元稹の連昌宮詞に「樓上一盡珠翠、炫轉燄燈照天地」

【樓臺】「タカドノ」ウテナ史記天官書に「海旁蜃氣象、一廣野氣成宮闕」元亨涉筆に「一寸一蜂窠也」鄭谷曲江の詩に「一在煙杪、鷓鴣下沙中」

【龍斷】岡夔の、斷ち、キリシ如くに、聳えて高さ處なり、孟子の公孫丑下篇に「賤丈夫アリ、必ず龍斷ヲ求メテ、而シテ之ニ登リ、以テ左右ニ望ミテ而シテ市ノ利ヲ罔ミス」とあり、龍は龍に通ず、これより獨り市の利を專占するに用ふ、書言故事に「利ヲ網スルノ人ヲ言ヒテ、一ノ徒ト曰フ」とあり。

【樓中】「タカドノ」ナカ、羅隱の早秋詩に「雨過晚涼生、一枕簟清」

【籠鳥雲ヲ戀フ】「籠鳥戀雲身を束縛せらるる者の自由を得んと欲するに喩ふ、鵬冠子に「籠中之鳥、空窺不

行に「輕搗慢撥、復挑」とあり、李群玉の句に「煩君玉指輕一一」

【樓煩】史記項羽本紀に「項王令壯士出挑戰、漢有善騎射者一一、楚挑戰三合、一一、轍射殺之、項王大怒、乃自被甲持戟挑戰、一一、欲射之、項王瞋目叱之、一一、目不敢視、手不敢發、遂走還入壁、不敢復出、漢王使人問之、乃項王也、漢王大驚」

【鏤膚】文身に同じ、肌膚を刺して、丹青を涅するをいふ、文選の左思の魏都賦に「或一一而鑽髮、鏤一音ル、エル」チリバム

【聾盲】「ツンボ」と「メクラ」と、莊子に「豈惟形骸有一一哉、夫知亦有之」心の聾盲なる者あるをいふ。

【瘰癧】瘰は「クビノハルル」病、一説に、久しく瘧をさる創なりと、瘰は惡瘡「カツタキ」の類、柳宗元の捕蛇者説に見ゆ。

【籠絡】その「ナカマ」に入り込む義、宋史胡安國傳に「中丞許翰曰、蔡京得政、士大夫無不受其一一、超然遠舉不爲所汚、如安國者實鮮」

また樹木などの深く茂りて「マキツク」義、曹組良嶽賦に「珍叢幽芳古木一一長藤蔽虧、高低相層」

【樓蘭】漢書西域傳に「鄯善國、本名樓蘭、王治扞尼

出蘇軾の詩に「鳥囚、不忘飛、馬繫、常念馳」

【籠鳥水萍】身束縛せられ「アチラコチラ」と「サマヨヘル」に喩ふ、鶴林玉露に「或ヒト問フ杜陵ガ詩ニイフ、日月籠中鳥、乾坤水上萍、トハ何ゾヤ、余曰ク此レ自ラ歎ズルノ詞ノミ、蓋シ拘束セラレテ以テ日月ヲ度ル、鳥ノ籠中ニ在ルガ若シ、乾坤ノ閉ニ漂汎スルコト、萍ノ水上ニ浮ベルガ若シ、本ト是レ凄凉ノ意ヲ形容シテ、乃チ翻リテ壯麗ノ語ト作ル、云云」

【漏斗】「ジャウゴ」三才圖會に「一一、鈞升皆出入、權伯之器也、升用以挹、斗用以注、不知始於何時、疑起、自近代、漏鉢、酒漏、注碗皆同じ」

【樓ニ登リ清嘯ス】「登樓清嘯」晉書の劉琨傳に「嘗爲、胡騎所圍、數重、城中窘迫無計、琨乃乘月一一、賊聞之皆悽然長歎」

【樓ニ上リテ空ク望ム往來ノ船】「上樓空望往來船」白樂天の春江と題する詩中の句、曰く、

炎涼昏曉苦推遷、不覺忠州已二年、閉閣只聽朝暮鼓、一一、鶯聲誘引來花下、艸色勾留坐水邊、唯有春江看未厭、紫沙遠石綠潺湲、

【擁爐】「トリヒネル」指にて「ヒネル」義、白居易の琵琶

城、去陽關千六百里、梁昭明太子七契に「一一、面縛而革音、鄭倍の塞外詩に「漢家征戍客、年歲在一一、王昌齡從軍行に「黃沙百戰穿金甲、未破一一終不還」

【樓櫓】「ヤグラ」櫓は玉篇に「城上守禦望樓」とあり、上に覆屋なきモノミヤグラ、後漢書公孫瓚傳に「一一千里」

【瓏瓏】金玉の聲、玲瓏に同じ、孔翁歸の詩に「雷聲聽隱隱、車響絕一一」

【露營】「ノデン」をする、晉書顧榮傳に「一一野次」とあり、

【魯衛之政兄弟也】論語子路篇、孔子の語、魯の國の先祖は周公旦、衛の先祖は康叔なり、康叔は能く周公の教を受けたる人なり、故にその政は兄弟の如く能く相似たりとの意、

【魯衛毛聾】四國の名、韓愈の毛穎傳に見ゆ、左傳僖二十四年に「管蔡鄭霍一一、部雍曹滕畢原鄭郟文之昭也」と、この十六國は皆文王の子なりとの義、文王は世次に於て穆たり、故にその子は昭たるなり、

【爐煙】「ロノケムリ」白居易の詩に「一一凝、麝氣、酒色

【駐鵝黃】「サギ」と「カモメ」と、韓維の登城樓詩に「樓上清風簾箔靜、田開白水一輕」

【櫓ヲ搖カス】「搖櫓」船の櫓を推し進む、通鑑漢紀に「呂蒙至尋陽、盡伏其精兵艤艦中、使白衣一」

【鹵ヲ漂ハス】「漂鹵」激戦して流血盾(タテ)を、タダヨハス、鹵は櫓に通ず、大盾なり、漢書項籍傳に「流血一」(漂杵)を參看せよ、

【露氣】「ツユケ」杜甫の翫月詩に「夜深一清、江月滿江城」

【露葵】「露葵」蕪菜の一名、顔氏家訓に「蔡朗父諱蕪、遂呼蕪菜、爲一、また露を帯びたる葵なり、葵は説文に「菜ナリ、爾雅翼に「葵ハ百菜ノ王、味尤モ甘滑」宋玉諷賦に「爲臣蕪一之葵」

【盧橘】「枇杷」枇杷の異名、三都賦に「夏果則有、一楊梅、閩粵の間に於ては、枇杷を呼びて一」となす、白居易の詩に「江果嘗一、山歌聽竹枝」范成大の三月十六日石湖書事詩に「一梅子黃、櫻桃桑椹紫、枇杷を見よ、」

【鱸魚】和名「スズキ」明一統志に「一、出松江府、者獨四腮、隋煬帝謂金壺玉脍、東南佳味、戴復古の詩に「功名未必勝一」

【鱸魚脍】「スズキ」の「ナマス」晉の張翰が鱸脍を思ひ、官を辭して歸郷せし事、晉書張翰傳に出づ(張翰、蕪ヲ)を見よ、

李白の秋下荆門に「霜落荆門江樹空、布帆無恙挂秋風、此行不爲一、一、自愛名山入剡中」

【魯魚ノ謬】文字の誤りをいふ、事文類聚に「張鷟曰ク、亥ト豕ト、涇ト渭ト分ツチシ、魯ト魚ト、溜ト灑ト、辨ズルナシト、マタ云フ、簡帙磨滅、以陶爲陰、以魚爲魯、抱朴子にも「諺ニイフ書三寫、魯爲魚、鹿爲虎」

【臚句】(一)を見よ、

【祿位】俸祿と爵位と、周禮の家宰に「以八則治都鄙、四曰、一以馭其士」

【鹿ヲ逐フ者ハ兎ヲ顧ミズ】「逐鹿者不顧兎」(逐鹿マ)た鹿ヲ逐フ者を見よ、

【祿ヲ干ム】(干祿)仕へて俸米を求むるをいふ、干は「コチラ」から進み出て求むる義、論語爲政篇に「子張學一、一また天佑を求むる義にも用ふ、詩經大雅旱麓篇に「愷悌君子、一不」

【勒花】(花ヲ勒ス)寒氣が花を止めて開かしめざるをいふ、勒は抑なり、寒勒、牡丹などと用ふ、

【六根清淨】六根は、眼耳鼻舌身意なり、この六根の

欲なく清さをいふ、智度論に「一、一善欲心生」

【祿山鳳翔ニ亡ブ】「祿山亡鳳翔」太平記の序に見ゆ、安祿山は、唐の玄宗の寵臣、後、遂に叛きて兵を擧げ、東京洛陽を陥れ、僭して大燕皇帝と號す、顔真卿等義兵を興して之を討つ、かくて祿山は子の安慶緒に弑せらる、自立せしより僅に一年にて亡ぶ、鳳翔は陝西省に在り即ち扶風郡の地、

【祿賜】「ロク」と「クダサレモノ」と、漢書食貨志に「租稅一皆以、布帛及穀、使百姓、壹、意農桑、吳志嚴峻傳に「峻不畜一、皆散之親戚知故、家常不充」

【六十左右】六十歳「バカリ」左右は前後の義、左傳僖四年の杜註に「一、一時、子在十歳」

【六十四卦】伏羲氏、易の八卦を作り、周の文王廣めて一、一となす、曰く「乾坤屯蒙需訟師比、小畜、履泰否同人、大有謙豫、隨蠱臨、觀噬嗑、賁剝復、無妄、大畜、頤、大過、坎、離、咸、恒、遯、大壯、晉、明夷、家人、睽、蹇、解、損、益、夬、姤、萃、升、困、井、革、鼎、震、艮、漸、歸妹、豐、旅、巽、兌、渙、節、中孚、小過、既濟、未濟」

【鹿車】小車(ラグルマ)をいふ、後漢書趙壹傳に「泥塗、婦面載、以一、註に「窄小ニシテ載スルニ一鹿ヲ以テス」

【祿爵】「ロク」と「クラキ」と、禮記に「王者之制一、公侯伯子男凡五等」

【漉酒巾】晉書陶潛傳に「酒熟スル毎ニ、頭上ノ角巾ヲ取リテ酒ヲ漉シ、畢リテ復之ヲ著ク漉は漉なり、」

【鹿茸】藥艸の名、本草に「一ハ味甘温ニシテ毒ナシ」また和名「フクロゴゾ」にこの字を充て用ふ、袋角は夏月鹿の角落ちて更に新角の生ぜしものをいふ、

【六道】六趣に同じ、佛教の語、天上人間修羅地獄餓鬼畜生道をいふ、翻譯名義集に「三世猶若環旋、一、一、如輪轉」

【六道錢】死者冥土の旅費に充つる意なり、釋書鈔註に「喪家埋錢於壙中、以爲充死者之用、支那昏寓錢也」

【六塵】佛經の語、眼耳鼻舌身意の六根より「イロ」の煩惱を「ヒキ」起して心を汚すをいふ、即ち色聲香味觸法を「一」といふ、金剛經註に「於此一、起憎惡心、昭明太子の詩に「塵、茲、柱、入、倒、冀、此、遣、一」

【勒住】止むる義、范成大の詩に「隔年寒力凍、芳塵、一、東風、寂寞濱」

【鹿ノ死スル音ヲ擇バズ】「鹿死不擇音」鹿の聲は美に

【鷺鷥】「シラサギ」圖繪寶鑑に「裴逸善——并牛」林逋の詩に「蒼茫沙嘴——眠、片水無痕浸碧天」

【鷓鴣】水鳥、色黒く喙は曲りて鉤の如し、「ミヅカキ」廣く、善く水に入りて魚を捕ふるによりて鳥鬼ともいふ、一名水老鴉、また慈老人、和名「ウ」シマツドリ、變州圖經に「——捕魚」陸游の秋興詩に「道心已熟機心盡、寄語——莫苦猜」

【鷺洲】明一統志に「——書院、在吉安府白鷺洲上、宋淳祐間、知吉州江萬里建、延歐陽守道、以教、俊秀、守道作記」

【路寢】天子諸侯の正殿をいふ、路は大なり、君の所在、故に大の義に取る、公羊傳に「薨于——路寢、何正寢也（路馬）を參看せよ」

【露刃】「スキミ」元紀綱目に「燕帖木兒率其黨十七人、兵皆——」

【廬舍】住屋なり、連文釋義に「在野曰廬、市居曰舍」

【露珠】「ツユ」を「タマ」に喩へていふ、王涯の秋思詩に「一夜清風蕪末起、——翻盡滿池荷」劉威の早春詩に「冰消、泉脈動、日暖、——晞」

【魯酒】魯國の酒、次條の故事によりて薄き酒の義、莊子の胠篋篇に「魯酒薄、而邯鄲圍」

【魯酒薄クシテ邯鄲圍マル】思ひがけ無き禍を被るをいふ、淮南子に「楚諸侯ヲ會ス、魯趙俱ニ酒ヲ獻ズ、酒吏趙ヲ怒ル、乃チ魯ノ薄酒ヲ以テ、趙ノ厚酒ニ易ヘテ之ヲ奏ム、楚王趙ノ酒薄キヲ以テ、遂ニ邯鄲ヲ圍ム」と、邯鄲は趙の都なり、莊子の胠篋篇に「魯酒薄、而邯鄲圍、聖人生、而大盜起」と、轉じて薄酒を魯酒といふ、

【魯肅】字は子敬、東城の人、家財に富む、周瑜嘗て往いて之を見、且つ資糧を求む、肅米兩困あり、困毎に三千斛あり、乃ち一困を指して之に與ふ、後ち吳に事へて戰功を累ね、横江將軍となる、肅人と爲り、方嚴、軍陣に在りと雖も、手に卷を釋かず

【露宿】「ノジユク」後漢書王渙傳に「境内清夷、商人——於道」

【蘆錐】「アシ」の芽の初めて出でたるをいふ、その形錐に似たるよりいふ、唐の元稹の寄樂天詩に「冰消田地——短、春入柳條、柳眼低」

【櫓聲】船を走る、「ロ」の聲、白居易の河亭晴望詩に「晴虹橋影出、秋雁——來、雁の聲を櫓聲に喩へていへり、

【盧生之夢】（邯鄲ノ）を見よ、

【盧照鄰】字は昇之、唐の幽州范陽の人、高宗の時、王

勃楊炯、駱賓王と文章を以て名を齊うす、天下號して四傑となす、風疾を病み、その苦に耐へず、自ら頰水に投じて死す、著すところ盧昇之集七卷あり、

【露臺】屋なき「ウチナ」（中人）を見よ、

【魯仲連】（東海ノ波）を見よ、

【蘆荻】「アシ」と「ラギ」と、何れも水邊に生じて形も相似たり、白居易の浦中夜泊に「暗上、江隄、還獨立、水風霜氣夜稜稜、回看、深浦、停舟處、——花中一點燈」

【露電】人生の「ハカナキ」に喩ふ、金剛經偈に「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、當作如是觀」陸游の感事詩に「若悟、死生均——、未應富貴勝漁樵」

【盧仝】唐の濟源の人、玉川子と號す、學を好みて博覽、詩に工なり、嘗て月蝕の詩をつくり元和の逆黨を讒る、韓愈その工を稱せり、性茶を好み、謝孟諫議名ハ簡惠茶歌あり曰く、

日高丈五睡正濃、軍將扣門驚周公、口傳諫議送書信、白絹斜封三道印、開緘宛見諫議面、首閱月團三百片、開道新年入山裏、熱蟲驚動春風起、天子須嘗陽羨茶、百草不敢先開花、仁風暗結珠蓓蕾、先春抽出黃金芽、摘鮮焙芳旋

封裏、至精至好且不奢、至尊之餘合王公、何事便到山人家、柴門反關無俗客、紗帽籠頭自煎喫、碧雲引風吹不斷、白花浮光凝碗面、一碗喉吻潤、二碗破孤悶、三碗搜枯腸、惟有文字五千卷、四碗發輕汗、平生不平事、盡向毛孔散、五碗肌骨清、六碗通仙靈、七碗喫不得也、唯覺兩腋習習清風生、蓬萊山在何處、玉川子乘此清風欲歸去、山上群仙司下土、地位清高隔風雨、安得知百萬億蒼生受命墮、願崖受辛苦、便從諫議問蒼生、到頭合得蘇息否、

【墟ニ當ル】（當墟）酒肆を守るをいふ、酒を賣る處、土を累ねて墟とし、以て酒瓮を居く、四邊隆起し、其の一面高く、形鍛爐の如し、故に墟と名づく、漢書司馬相如傳に「盡買車騎、買酒舍、乃令文君——」李白の詩に「胡姬貌如花、——笑春風」

【路馬】路は大なり、君の車馬をいふ、左傳桓二年の「大路越席」の疏に「路ノ訓ハ大ナリ、君ノ在ル所、大ヲ以テ號トナス、門ヲ路門トイヒ、寢ヲ路寢トイヒ、車ヲ路車トイフ」禮記に「下、公門、式——」

【驢背】「ウサギウマ、ノセナカ」北夢瑣言に「鄭繁云、詩思在灞橋風雪中驢子背上」

【魯侯ノ錢神論】(錢神論)を見よ、

【露版】「カチイクサ」の「カキアゲ」通鑑齊紀に「上馬能擊賊下馬作」唯傳修期耳注に「一ハ捷ヲ獲タルノ狀ヲ書シ、一ハ上開ス、天下ヲシテ悉ク之ヲ知ラシムルナリ」露布を見よ、

【露盤】承一の略、曹植の承一頌に「固若一」長存永貴王逢の宮中行樂詩に「一迎月早宮漏出花

【魯般ガ雲梯】太平記「千劔破城軍事の條に引けり、淮南子に「楚欲攻宋、墨子聞而悼之、見楚王曰、臣見

大王之必傷義而不得宋、王曰公輸天下巧士、作爲雲梯之械、設以攻宋、易爲弗取、墨子曰、令公輸般設攻、臣請守之、於是公輸般設攻、宋之械、墨子不攻公輸魯般也」とあり、雲梯とは梯の高くして雲中に入るをいふ、この故事墨子にも「公輸般爲雲梯、將以攻宋、墨子聞之、見般、以帶爲城、以牒爲械、般九設機變、墨九距之、般之械盡、墨之守有餘」とあり、【魯般之巧】「サイク」の「スグレタル」に用ふ、孟子離婁上篇に「離婁之明、公輸子之巧、不以規矩、不能成方員」の註に「公輸子名ハ班、魯ノ巧人ナリ」とあり、淮

南子にも「魯般以木爲燕而飛之」と見ゆ、前條を見よ、

【盧誦】扁鵲と俞跗と、共に古の良醫、左思蜀都賦に「神農是嘗一料」注に「扁鵲ハ盧人、跗ハ俞跗ナリ」

【露布】文體の名なり、文體明辨に「按ズルニ、一ハ軍中捷ヲ奏スルノ辭ナリ、辭ヲ帛ニ書シテ、コレヲ漆竿ノ上ニ建ツ、劉勰ノ所謂「露」板不封、布諸視聽ト、此レ其ノ義ナリ、任昉イフ、漢ノ賈弘、馬超ノ爲メニ曹操ヲ伐チ、一ハ作ルト、而シテ世説ニ亦イフ、桓溫北征シテ、袁宏ヲシテ馬ニ倚リテ一ハ撰セシムト、則チ一ハ作、魏晉ニ始マル」品字箋に「一ハ捷書ノ名」蘇軾の詩に「一朝馳玉關塞、捷書夜奏甘泉宮」露版に同じ、

【函簿】天子の行列をいふ、類書纂要に「車駕行ケバ羽儀雙ビ導ク、之ヲ一トイフ、中丞制史皆一アリ、羽儀トハ天子ノ車前、羽ヲ負ヒテ侍衛スルナリ、胡三省曰ク、導從ノ次第ヲ一トイフ」事物紀原に「函ハ大楯ナリ、敵ヲ扞グ所以、部伍ノ次、皆之ガ簿儀ヲ著ク、其ノ五兵獨リ楯ヲ以テ名ト爲ス者ハ、道ヲ行クノ時、甲楯外ニ居リ、餘兵内ニ在リ、故ニ但ダ一トイフ」五禮精義に「函ハ大楯ナリ、大楯ヲ以テ一部ノ人

ヲ領ス、故ニ一ト名ツク

【函莽滅裂】函莽は、粗畧にして、心を用ひざるなり、滅裂は、輕易にして分破するなり、書言故事に「作事不精曰一」あり、莊子の則陽篇に「長梧封人問、子牢曰、君爲政焉勿函莽、治民焉勿滅裂」昔、予爲禾、耕而函莽、之則其實亦函莽、而報予、芸、而滅裂、之、其實亦滅裂、而報予」とあり、藝林伐山に「函ハ剛函ノ地、莽ハ草莽ノ地ナリ、其ノ剛函ヲ治メズ、其ノ草莽ヲ変ラズ、是ヲ函莽ノ耕トイフ」

【露眠】「ソト」にて眠る、冷齋夜話に「覺範詩一不管牛羊踐、我是鍾山無事僧」

【論】文の一體なり、文體明辨に「按ズルニ字書ニ云フ、論ハ議ナリ、劉勰云フ、論ハ倫ナリ、詳言ヲ彌綸シテ、一理ヲ研ク者ナリ、論ノ名ヲ立ツルハ、論語ニ始マル、六韜二論ノ若キハ乃チ後人ノ追題カト、今分チテ八品トス、一ニ曰ク理論、二ニ曰ク政論、三ニ曰ク經論、四ニ曰ク史論、五ニ曰ク文論、六ニ曰ク諷論、七ニ曰ク寓論、八ニ曰ク設論、ソノ題或ハ某論トイヒ、或ハ論某ト曰フハ、則チ各作者ノ之ニ命ズルニ隨フ、異義ナシ」また佛教にて、佛の説を經といひ、菩薩の説を論とい

【論衡】三十卷(八十五篇)漢の王充撰す、充字は中任、會稽上虞の人なり、其の自記に曰く「係ニ在リテ

稼功曹ト爲リ、都尉府ニ在リ、太守ニ在リテ亦功曹ト爲リ、元和三年(孝章帝)家ヲ揚州ニ移シ丹陽九江廬江ニ辟サレ、入リテ治中ト爲ル、章和二年、州ヲ罷メテ家居ス」と其の世に在る坎坷不遇の態以て見るべし、後漢書の本傳に曰く「充嘗テ班彪ニ師事シ、博覽ニシテ章句ヲ守ラズ、家貧シクシテ書ナシ、嘗ニ雒陽ノ市肆ニ遊ビ、賣ル所ノ書ヲ閱シ、一見シテ輒チ能ク誦憶ス、遂ニ博ク衆流百家ノ言ニ通ゼリ、充論說ヲ好ミ、始メハ詭異ナルガ如ク、終ニ理實アリ、俗儒ハ文ヲ守リテ多ク其ノ真ヲ失フト爲シ、乃チ門ヲ閉チ思ヲ潛メ、戶牖牆壁ニ各、刀筆ヲ置キ、論衡八十五篇二十餘萬言ヲ著ス、物類ノ同異ヲ釋キ時俗ノ嫌疑ヲ正シ、百氏ノ浮虛ヲ訂シ、九流ノ拘誕ヲ詰ル」と、此れ其の書の大略なり、篇末に自記の一篇あり、充が著書の大旨を言ふこと太だ詳かなり、其の言に曰く「充ガ書ハ俗ニ違詭ス」又曰く「充仕途不遇ニシテ、徒ニ書ヲ著ハシテ自ラ紀ス」と其の發憤激亢の言たる、以て見るべし、其の篇卷の太だ多く、文辭の繁縟なるは、自記に

曰く「充ガ書、世用ト爲ル者ハ百篇モ害ナシ、用ヲ爲サザル者ハ一章モ補ナシ、皆用ヲ爲サバ、即チ多キ者ヲ上ト爲ス、世人ハ一卷ナシ、吾ハ百篇アリ」と、又曰く「書ノ文重ナルト雖モ、論ズル所ロ百種、古ニ太公望、近クハ董仲舒、書篇ヲ作ル百有餘、吾ガ書ハ亦纔ニ百ヲ出ヅ而ルヲ太ダ多シトスルカ」と、この文に據れば、原書本と百餘篇あり、八十五篇なるは、已に其の舊に非ず、大氏充ガ人と爲りは剛愎にして自らはとし、偏隘にして自ら肆なる、其の意に中らざれば聖賢も亦彈擊して忌憚するなきに至る。

充の本傳に曰く「充論衡ヲ作ル、中土未ダ傳フル者アラズ、蔡邕吳ニ入り始メテ之ヲ得テ以テ譚助ト爲ス(高氏引ク所ロ)袁宏(後漢書)王朗蔡邕ニ詣リ、捜求シテ隱處ニ至レバ、果シテ論衡ヲ得、數卷ヲ抱持シテ將ニ去ラントス、邕曰ク惟、我ト爾ト共ニセン、廣クスルコト勿レト、朗其書ヲ得テ許下ニ還ルニ及ビテ、時人其ノ才進ムト稱ス、或ハ曰ク、異人ヲ見ザレバ異書ヲ得ルナラント、之ヲ問ヘバ果シテ論衡ノ益アリ是ニ繇リテ四方ニ流傳セリ」と、是の書の一時學者の貴重する所と爲りしを想ひ見るべし、されども是の書の辯論は、多くは無用に屬し、人に補益ある者

鮮し、但祿命に係る數言は、人をして警發せしむるに足る者あり、蓋し坎珂不遇の際に自得する所ありて發せしが爲めか、

【論語】漢書の藝文志に「論語ハ孔子ガ弟子時人ニ應答シ、及ビ弟子相トモニ言フトコロノ語ヲ録シタルナリ、當時弟子各記スル所ロアリ、夫子既ニ卒シ、門人相トモニ輯メテ論撰ス、故ニ之ヲ「一トイフ」と、四書に列するは宋の朱熹の集註にして、十三經に列するは魏の何晏の集解にして、宋の邢昺の疏なり、別に皇侃の疏あり、彼に佚して我に傳存したり(魯論)を參看せよ、參考書は、

- 論語集解 十卷、魏の何晏等註、
 - 論語義疏 十卷、梁の皇侃疏、
 - 論語正義 二十卷、宋の邢昺疏、
 - 論語集註 十卷、朱熹撰す、
 - 論語古義 十卷、伊藤維楨撰す、
 - 論語古義標註 四卷、伊藤長胤撰す、
 - 論語徵 十卷、荻生茂卿撰す、
 - 論語欄外書 四卷、佐藤坦撰す、
 - 論語集說 六卷、安井衡撰す、
 - 論語集說 六卷、安井衡撰す、
- 【論語】言論の篤實なるをいふ、論語先進篇に「子曰、

——是與、君子者乎、色莊者乎、色莊とは外面は莊嚴なる君子の如く見ゆれども、内にその實なき者をいふ、人の言語の篤實なるを見て、容易に之に許與して、彼は有徳者なり、君子なりと思ふときは鑒定を誤ることあるものなり、故に其の人果して眞の君子なりや、或は色莊の徒なりやと、その心と行事とに就きて、仔細に觀察すべしとの意、

【論列】事の是非を、ツラネ論ずる、司馬遷の報任安書に「仰首伸首、——是非」

【魯陽】兩漢の縣名南陽郡ニ屬ス(晉の荊州——國、北魏の廣州——郡、今の河南汝州魯山縣治これなり、魯陽日ヲ「揚ク」(魯陽揚日)淮南子に「魯陽公韓ト難ヲ構ヘ、戰酣ニシテ方ニ暮レントス、戈ヲ援キテ之ヲ揚ク、日之ガ爲メニ反ヘルコト三舍、揚一に麾に作る、

【盧綸】字は允言、唐の河中の人、徳宗の時、韋渠牟その才を表し、召し見る、帝作るところあれば廣和せしむ、綸、吉中孚、韓翃、錢起、司空曙、苗發、崔峒、耿湋、夏侯審、李端と皆詩を能くし名を齊うす、太暦十才子と號す、四子を生む、皆文學ありて進士に第せり、

【鹵掠】鹵は虜に同じ、略奪するをいふ、漢書高祖紀に「所過毋得——」

【廬陵】兩漢の縣名(豫章郡)今の江西吉安府——縣の西、また晉以後隋に至るまでの郡名(隋ハ縣名ニモアリ)今の吉安府吉水縣の東北三十清里、また唐宋以後の縣名、今の吉安府——縣治これなり、歐陽修「文天祥等の生地、

【魯論】論語の異稱、論語は秦火の後、齊論・古論——の三種の異本を生ぜり、——は二十篇魯人の傳ふる所、齊論は二十二篇、齊人の傳ふるところ、古論二十一篇は景帝の時、魯の共王が孔子の舊宅を壊ちて得たるもの(蝌蚪ノ古文ニテ記ス、故ニ古論トイフ)その後齊論古論は亡佚して傳はらず、今の論語は即ち魯論なれども、これ亦古書の眞面目を存せず、宋の宇文虛中の時習齋詩に「未厭平生習氣濃、更將餘事訓兒童、——二萬三千字、悟入從初一句中(論語)を參看せよ、

ワ

【倭】古昔、筑紫の一部を、支那人の稱せし名、ヤマト、漢書地理志に「樂浪海中有一人、分爲百餘國、師古の註に「ハ帯方ノ東南大海中ニ在リ、山島ニ依リテ、國ヲ爲ス云云」

【歪】「ユガム」字彙に「不正也」とあり、不正二字を合せてつくれる俗字、

【淮陰】西漢の臨淮郡—縣、東漢の徐州下邳國—縣、晉の徐州廣陵郡—縣、唐の淮南道楚州—縣、今の江蘇淮安府清河縣の東南五里に在り、史記—侯

傳に「—侯韓信者—人也、溫庭筠の贈少年詩に「酒酣夜別—市月照高樓一曲歌」

【矮屋】「ヤネノ、ヒクキイヘ」また己の家を謙してもいふ、楊萬里の句に「—炎天不可居」

【淮海】書經禹貢に「—惟揚州」の傳に「北據淮、南距海」

【根闌居楔】根は戸樞、クルル闌は門中の楔、居は戸柱「トザシ」楔は門の兩旁の木、一名は根「ホコダチ」

【矮子看戲】劇場にて「セイ」の低き者が、長大なる人の背後に在りて戲を見るを得ず、唯、前なる人の批評を聞きて之に雷同するをいふ、人の見識なきに喩ふ「ヤジウマ」矮人觀場ともいふ、朱子語類に「如—」

相似「見人道好、他也道好」

【矮人】「セイビク」漢書田儼傳に「—不忘起、盲者不忘視」—に矮子ともいふ、

【淮水】水の名、水經に「—出南陽平氏縣胎簪山、東北過桐柏山、釋名に「淮、圍也、圍繞揚州分界、東至於海也、劉禹錫の石頭城詩に「—東邊舊時月、夜深還過女牆來」

【淮南】晉北魏隋の郡名、揚州に屬す、今の安徽鳳陽府壽州治これなり、南宋南齊の郡名、今の安徽太平府當塗縣の南三十八清里に當る、韋應物の開雁詩に「—秋雨夜、高齋聞雁來」

また豆腐の異名、山堂肆考に「淮南王安始磨豆爲乳脂、名曰豆腐、自是爲豆腐異稱」

【和韻】他の作りし詩に廣和して作るをいふ、次韻、用韻、依韻の三體あり、次韻は原韻のままに和して先後易ふることなきなり、用韻は原韻を用ふるも、先後に拘泥せざるなり、依韻は原作と同韻中に在る文字を

用ひ、必ずしも原韻の字を用ひざるなり、また用韻、依韻の二を合せて和韻といひ、以て次韻に對する説もあり、和韻は唐の白居易と元稹との唱和より盛行するに至れり、珊瑚鉤詩話に「前人未始—、自元白爲—、二浙觀察、往來置郵筒、相唱和、始依韻而多至、千言、篇章甚富」

【淮陽】西漢の國名、隋の郡名、今の河南陳州府淮寧縣治これなり、また南宋北魏東楚州の郡名、隋の縣名、徐州下邳郡今の江蘇淮安府清河縣の西南、また北魏の郡縣名、睢州なるは當に今の安徽鳳陽府の境に在りたるなるべし、また宋の京東東路—軍は今の江蘇徐州府邳州の東三清里、

【煨栗】火中に入れて「ヤキタル」栗、また栗をやく義、張澄の句に「火爐—話親情」

【賄賂】賄は正音クワイ非義の贈物をいふ、左傳に「亂獄滋豐、—竝行」南史陳張貴妃傳に「閹宦之徒、内外交結、轉相引進、—公行」

【王安石】字は介甫、半山と號す宋の撫州臨川の人、文を作るに筆を動かし飛ぶが如し、既に成れば、見る者皆その精妙に服す、議論高奇能く辨博を以てその説を濟す、慨然として矯世變俗の志あり、神宗之を信任

し、用ひて參政とし、その建議せし所ろの新法を行はしむ、尋て相となり、荆國公に封ぜらる、政を執ること六年、怨議紛起して皆新法を咎む、安石自ら安んぜしと引き去る、元祐元年卒す、年六十八、太傅を贈られ文と諡す、著す所ろ周禮新義、毛詩義、臨川集等あり、

【王安石ノ新法】宋は遼及び西夏に毎年多額の歳幣を贈りしと、國初以來功臣を優待せしとにより、財政困難を極めしかば、王安石、まづ國庫を充實し、而る後強硬なる對外政策を取らんとて、左の新法を創む、

- 一、青苗法 至りて、資金に二割もしくは三割の利子を添へて還納せしむ、人民に相當の税を納めしめて、服役の義務を免し、政府は別に無職の民を募りて役に充つ、
- 二、募役法 京師に市易務といふ官省を置き、市場に賣れざる物品を官に購買し、若く
- 三、市易法

四、方田均税法

は官物と交換し、また商人に資金を貸與して規定の利子を納めしむ、方千歩の地を一步となし、地の肥瘠を檢して五等となし、稅數を均足するなり、

五、保甲法

一種の民兵制度にして、十家を保とし、五百家を都保とし、都保に正副二人を置き、其の部下の保丁をして、弓箭を貯へ、武藝を講習せしむ、

六、保馬法

保丁に、官の馬を貸與し、其の病死するときは、相當の辨償をなさしむ、

乙、強兵策

【王維】字は摩詰、唐の太原の人、九歳にして辭を屬することを知り、草隸に工に、畫を善くす、開元九年進士第一に擢かる、尙書右丞に遷る、その別墅輞川に在り、詩を賦し、自ら樂む、乾元二年卒す、年六十一、その詩神韻を主とし、措辭も亦苟もせず、論者之を妙品

上乘とす、畫も亦逸趣多く、山水平遠、雲勢石色、皆天機の到る所にして、學びて能すべしにあらざ、東坡維の詩畫を評して「詩中有畫、畫中有詩」といへり、名畫錄に「維輞川ノ圖ヲ畫ク、山谷鬱盤、雲水飛動、意塵外ニ出デ怪筆端ニ生ズ、秦太虚云フ、予病アリ、高符仲、輞川ノ圖ヲ携ヘ予ニ示ス、予之ヲ閱シテ恍トシテ維ト輞川ニ入ルガ如ク、數日ニシテ病愈ユト」

【王禕】字は子充、明の義烏の人、幼にして秀爽奇敏なり、黃潛に師事す、洪武の初、江西儒學提舉司校理を授けられ、起居注、同知南康府事に遷る、召されて元史を修し、總裁官となる、書成りて翰林待制兼國史編修に擢てらる、洪武五年使を雲南に奉じ、梁王把都の爲めに害せらる、年五十二、その遺文、華川集、玉堂雜著等あり、正統開翰林學士を追贈し、忠文と諡せらる、
【王右軍】晉の王羲之をいふ(王羲之)(二王)を見よ、
【王右丞】(王維)を見よ、
【王猷定】字は于一、軫石と號す、清の江西南昌の人、明の太僕卿止敬の子、貢生たり、詩古文詞を以て自負す、書を善くし、李北海の筆法を得たり、亂に遭ひ廣陵に居り、西湖に客死す、四照堂集あり、
【王育】晉の京兆の人、少くして孤貧なり、人の爲め

に羊を牧す、小學を過ぐる毎に必ず歎歎流涕す、暇あれば、卽ち蒲を折りて書を學ぶ、一日忘れて羊を亡ふ、羊主之を責むること甚し、育將に身を勞し以て償はんとす、同郡の許子章聞きて之を嘉し、育に代りて羊を償ひ、その衣食を給し、その子と同じく學ばしむ、遂に博く經史に通ず、後に武陽令と爲る、政を爲すこと清約なり、并州督護に遷り、破虜將軍に累官す、
【王偉時弊ヲ論ズ】明史に「漳州ノ通判王偉、上書シテ曰ク、人君徳ヲ修ムル要ニアリ、忠厚ヲ以テ心トシ、寛大ヲ以テ政ヲスルナリ、昔、周家忠厚ナリ、故ニ八百年ノ基ヲ垂ル、漢室寛大ナリ、故ニ四百年ノ業ヲ開ク、蓋シ上天、物ヲ生ズルヲ以テ心トシ、春夏長養シテ秋冬收藏ス、其ノ開雷電霜雪、時アリテ薄擊肅殺ス、然レドモ皆暫クニシテ常ナラズ、モシ雷電霜雪ヲシテ時ニ有ラザルコトナカラシメバ、上天生物ノ心息マン、臣願クハ陛下天ノ道ニ法ランコトヲト、帝之ヲ嘉納ス、時ニ嚴厲ヲ尙ブ、故ニ偉以テ言ヲ爲シシナリ」

【王禹偁敏慧】王禹偁字は元之、鉅野の人なり、宋の太宗の朝進士に擧げられ、翰林學士に累遷す、著すとてころ文集五十餘卷あり、劉氏人譜に「王禹偁生レテ敏慧ナリ、七歳ニシテ文ヲ能クス、父ハ本ト磨家ナリ、畢

文簡公州ノ從事タリシトキ、禹偁父ニ代リテ劄ヲ輪シテ庭下ニ立テリ、文簡方ニ諸子ニ命ジテ句ヲ屬セシム、イフ鸚鵡能言爭似鳳ト、禹偁聲ヲ抗ゲテ曰ク、蜘蛛雖巧不如蠶ト、文簡嘆ジテ曰ク、經綸ノオナリト、留メテ子弟ト與ニ學ヲ講ゼシム、一日、磨ノ詩ヲ作ラシム、禹偁思ハズシテ對ヘテ曰ク、但存心理正、何愁眼下遲得人輕借力、便是轉身時ト、文簡聞キテ大ニ之ヲ奇ナリトシ、遂ニ加フルニ衣冠ヲ以テシ呼ビテ小友ト爲セリ、太平興國八年、進士ト爲リ、後チニ知制誥ニ擢デラレ、竟ニ内相ト爲レリ

【王衍】晉書の—傳に「衍盛才美貌アリ、明悟神ノ如シ、自ラ子貢ニ比シ、空言ヲ喜ミ、准老莊ヲ談ズルヲ事ト爲スノミ」(聖尾)を見よ、
【汪琬】字は茗文、鈍翁と號す、長洲の人、晩に堯峯に居り、因りて自ら號とす、順治十二年の進士、戶部主事に官す、康熙十八年鴻博に擧げられ、編修を授けらる、詩は王新城と名を齊うす、時に汪王と稱す、文は經史に根柢し、清朝三家の一たり、康熙二十二年卒す、年六十五、鈍翁前後類稿、堯峯文鈔等の著あり、
【往ヲ彰カニシテ、來ヲ察ス】(彰往而察來)既往の事跡を顯彰し、將來の得失を明察するをいふ、易の繫辭

の語

【王應麟】字は伯厚、宋の鄞縣の人、九歳にして六經に

通じ、學問該博、文を作るに敏捷なり、淳祐の初めの進士、翰林學士禮部尚書となる、元の元貞二年卒す、年七十四、著す所、漢制考、困學紀聞、地理考、四書考異、易

經考異、詩經考異、玉海、三字經、小學紺珠等あり、

【往ヲ告ゲテ來ヲ知ル】(告諸往而知來)往とは既にいふ所の者をいひ、來とは未だ言はざる所の者をいふ、即ち一を告げて二を知るの謂なり、論語學而篇に、告諸往而知來者、また淮南子に、聖人察其所以往、則知其所以來者、とあるも、畧相似たり、

【往ヲ觀テ以テ來ヲ知ル】(觀往以知來)過去の事を觀察して、未來の事を推知するをいふ、列子に、聖人見出以知入、一見一應、

【王駕】字は大用、唐の河中の人、昭宗の大順の初の進士、仕へて尚書禮部員外郎に至る、自ら守素先生と稱す、司空圖、鄭谷と詩友たり、詩六卷あり、

【枉駕】(駕ヲ枉グ)「ノリモノ」を枉げて來り臨むといふ義、枉屈に同じ、三國志、蜀志、諸葛亮傳に、徐庶謂先主曰、諸葛孔明臥龍也、此人可就見、而不可屈致、將軍宜一顧之、

の大家たり、惲南田と名を齊らす、世に惲王と稱す、

【横議】「ホシイママ」に政事を論議するなり、孟子滕文公下に、聖王不作、諸侯放恣、處士一一、

【王季友】唐の豐城の人、博く羣書を極む、貞元の進士、文甚高古なり、仕へて御史中丞となる、杜甫の詩に、丈夫正色動引經、豐城客子一一、羣書萬卷常暗誦、孝經一通看在手、豫章太守高帝孫、引爲賓客敬頗久、

【王微之】(王子猷)を見よ、

【王羲之】晉書に「一一」字逸少、年十三、嘗謁周顛、顛異之、時重牛心炙、坐客未暇、顛先割啖、羲之於是知名、及長、辨瞻以骨鯁稱、尤善隸書、爲古今之冠、爲右將軍會稽內史、有七子、知名者五人、玄之、凝之、徽之、操之、獻之、子敬、工草隸、善丹青、七八歲學書、羲之密從、後掣其筆、不得、歎曰、此兒後當復有大名、以選尚、新安公主、拜中書令、

【横逆】「ホシイママ」にして理に順はざるをいふ、孟子離婁下に「有人於此、其待我以一一、則君子必自反也、自反とは自ら反省するをいふ、

【王恭】字は孝伯、少くして美譽あり、清操人に過ぐ、自ら才地の高華を負ひ、恒に宰輔の望あり、嘗ていふ名士は必ずしも奇才を須ひず、但常に無事にして痛

【王懿】(明ノ王懿)を見よ、

【横行】「ホシイママナル」行を爲すをいふ、史記の伯夷傳に、盜跖聚黨數千人、一一天下、漢書季布傳に、臣願得十萬衆、一一匈奴中、また横は一一に衡に作る、孟子梁惠王下篇に、一人衡行於天下、武王恥之、

【横行介士】蟹の異名、事類全書に、師ヲ出シ、若ヲ下スノ際、忽チ蟹ヲ見レバ、則チ呼ンデ、一一トナシ、權ヲ以テ衆ヲ安ンズ、

【王翰】字は子羽、唐の晉陽の人、進士の第に擢てられ、昌樂尉に調せらる、張説の政を輔くる、召して正字と爲す、開元中、道州の司馬に貶せられて卒す、集十卷あり、

【皇侃】南北朝の時、吳郡の人、少くして學を好み、三禮、孝經、論語に明かなり、梁に仕へて國子助教となり、禮記講疏五十卷を撰す、書成り、詔して秘閣に付す、召して壽光殿に入り、禮記を説かしむ、武帝之を善しとし、員外散騎侍郎を加ふ、

【王畿】王都に近き地をいふ、周禮に「職方氏辨九服之邦國、方千里曰一一」

【王暉】字は石谷、耕煙と號し、また烏目山人と號す、晩に清暉老人と稱す、清の常熟の人、山水を畫き、一代

飲し酒熱して離騷を讀むを得しめば便ち名士と稱すべしと、著作郎と爲る、歎じて曰く、仕へて宰相と爲らずんば志何ぞ聘するに足らんと、晉書に「一一美姿容、人多悅之、或目之曰、濯濯如春月之柳」

【横渠先生】(張載)を見よ、

【王漁洋】(王士禛)を見よ、

【枉屈】身を屈して來り臨むといふ義、諸葛亮の出師表に、先帝不以臣卑鄙、猥自一一、三顧臣於草廬之中、

【王瓜】「カラスウリ」春、舊根より生ず、蔓、長じて線稜あり、葉と共に深緑にして黒みあり、葉は互生し、圓くして厚く三五尖をなし、鋸齒ありて毛刺あり、夏の半に白花を開く、後ちに瓜を結ぶ、小鶏卵の如く熟すれば朱紅色となる、一名は栝樓、淮南子時則訓に「一一生」

【横禍】「ハカラザル」慘禍をいふ、淮南子詮言訓に「内修極而一一至者天也、非人也」

【注瀦】「ユタカ」に多くあるをいふ、漢書禮樂志に「澤一一輯萬國」輯は和なり、一解に深廣の貌、瀦一音ワ

【王化之基】王者の教化の根本をいふ、詩經の大序に「周南召南正始之道——」盧照隣の詩に「萬國淳風王化基」

【王珪】字は叔玠、唐の太原祁縣の人、太宗の時、諫議大夫と爲る、忠直敢言す、上嘗て謂ふ、卿識鑑精通、又談論を善くす、玄齡以下の數子と就若ぞと、對へて曰く、汝汝として國に報じ知りて言はざるなきは、臣、房玄齡に如かず、才文武を兼ね、入りては相、出ては將たるは、臣、李靖に如かず、敷奏詳明出納惟れ允なるは、臣、溫彥博に如かず、煩に居て劇を治め、衆務畢く擧るは、臣、戴胄に如かず、君の堯舜の如くならざるを恥ぢ、諫諍を以て己が任と爲すは、臣、魏徵に如かず、濁を激し清を揚ぐるに至りては、臣、數子に於て亦微長ありと、爵を郡王に進め禮部尚書に拜し、魏王の師を兼ねしむ、卒して吏部尚書を贈られ、懿と諡す、子敬公主に尙す、詳しくは唐書の本傳を見よ、十訓抄第十に「唐の太宗の臣、——申して曰く云云」とあるは貞觀政要の崇儒學篇に「王珪曰、人臣若無學業、不能諫、前言往行、豈堪大任云云」とあるを引きたるなり、宋の時、また——あり、慶曆中の進士、その文、典麗にして西漢の風あり、尙書左僕射兼門下侍郎に累遷し、

卒して太師を贈られ、文恭と諡す、

【王建】字は仲初、唐の潁州の人、大曆十年の進士、大和中陝州司馬となる、韓愈張籍と同時にして、尤も相友とし善し、工に樂府歌行を作る、王司馬詩集十卷あり、

【王言絲ノ如シ】(綸言を見よ、)

【王獻之】義之の子にて、徽之の弟なり、高邁不羈、閉居終日と雖も、容止怠らず、太元中、中書令に至る(二王)を參看せよ、

【王元章】(王冕)を見よ、

【王彥章】(王鐵槍)を見よ、

【枉顧】類書纂要に「謝入訪及、曰、蒙——ことあり、註に「少者、長者ニ調スルハ、理順ナリ、長者少者ヲ顧ルハ、理逆ナリ、尊者ノ顧盼ヲ枉屈スルヲイフ」漢書淮南王傳に「子高乃幸左顧の注に「左顧ハ猶ホ——ノ如シ」とあり、古は長者右に居り、少者左に居る、故に長者、少者を顧るを左顧といふ、

【王侯將相寧口種アラシヤ】王侯將相になる人は、別に種類あるにあらず、匹夫にても、志さへあれば、かかる地位にもなることを得べしとの義、史記の陳涉世家に「壯士不死即已、死即舉大名耳、王侯將相寧有種乎」

【王侯大人】身分の高き人をいふ、史記老聃傳に「自——不能器之」

【王侯ニ事ヘズ、其ノ事ヲ高尚ニス】(不事王侯、高尚其事)易の蠱卦の上九の語、隱居して志を高くし世事の煩を受けざるをいふ、

【黃金卿ガ身ヲ周飾ス】(黃金周飾卿身)元史牀兀兒傳に「大德七年秋入朝、帝親諭之曰、卿鎮北邊、累建大功、雖以——猶不足、以盡朕意」

【黃金ノ術】駿臺雜話の「壬子試筆の詞」に見ゆ、神仙金丹の術をいふ、通鑑卷の二十漢武帝紀に「樂成侯丁義、薦方士藥大ニ云、與文成將軍、同師(中畧)臣之師曰、黃金可成、而河決可塞、不死之藥可得、仙人可致也云云」とあり、また史記封禪書に「丹砂可化爲黃金、黃金成以爲飲食器、則益壽」とあり、

【黃金滿籠ヲ遺スハ、一經ニ如カズ】(子ニ黃金)を見よ、

【橫草之功】跋涉の勞といふが如し、草の中を行けば、草をして偃臥せしむ、故にいふ、漢書終軍傳に「無——得列宿衛食祿」

【橫槩】南史榮桓祖傳に「曹操曹丕、上馬——下馬談論、槩はホコ、消に同じ、長サ一丈八尺ある「ナガキホコ」(槩ヲ横ヘ)を見よ、

【王佐之才】王者の輔佐たるに足る才をいふ、漢書の董仲舒傳の贊に「劉向、稱董仲舒、有——、雖伊呂亡、以加三伊は伊尹、呂は呂尙なり、成語考に「孔明有——、嘗懸草廬之中」

【王粲】字は仲宣、三國の時の魏の人、襲の子、暢の孫、博物多識、問ひて知らざるなし、蔡邕その才略を奇とす、蔡の門に在りと聞き則ち屣を倒にして之を迎ふ、後ら魏に仕へ、累官して侍中に至る、曹植の輿、楊脩書に「今世作者、可略而言、昔仲宣獨歩於漢南(荊州なり)孔璋(陳琳の字)鷹揚於河朔、偉長(徐幹の字)擅名於青土(禹貢の青州)公幹(劉楨の字)振藻於海隅、幹は東平寧陽の人、齊に邊す、故に海隅といふ)德璉(應瑒の字)發迹於大魏、足下高視於上京、當此之時、人人自謂、握靈蛇之珠、隋侯の珠の一名、家家自謂抱荆山之玉也」

【枉死】不正の死をいふ、南史陸襄傳に「襄爲鄱陽內史、枉直無濫、人歌曰、人無——賴陸君」

【王子猷】名は徽之、義之の子、性放達、官を棄てて東山陰、夜雪初霽、月色清明、獨酌酒、詠左思招隱詩、忽憶戴逵、逵時在剡縣、便夜乘小船詣之、經宿方至、

造門不前而反、人間其故、曰、本乘輿而行、輿盡而反、何必見安道邪」とあり(安道ハ戴逵ノ字、剡縣ハ會稽ニ在リ)子猷性竹を愛す、嘗て空宅中に寄居す、便ち竹を種多しめて曰く「何ゾ一日モ此君ナカルベケンヤト」官黃門侍郎に至る、

【王充】後漢書に「一」字ハ仲任、會稽上虞ノ人ナリ、班彪ニ師事ス、家貧ニシテ書ナシ、常ニ洛陽ノ市肆ニ遊ビ、賣ル所ノ書ヲ閱シ、一見輒チ誦憶ス、遂ニ衆流百家ノ言ニ博通シ、郡ニ仕ヘテ功曹ト爲ル、充論說ヲ好ム、始ハ詭異ナル若ク、終ニ理實アリ、以爲ラク、俗儒文ヲ守リテ多ク其ノ眞ヲ失フト、乃チ門ヲ閉チ思フ潛メ慶弔ノ禮ヲ絶チ、戶牖牆壁、各ノ刀筆ヲ置キ、論衡八十五篇ヲ著シ、物類ノ同異ヲ釋キ、時俗ノ嫌疑ヲ正ス、刺史辟シテ從事ト爲シ、治中ニ轉ズ、自ラ免シテ家ニ還ル、肅宗詔シテ公車ニ徵ス、行カズ、永元中卒す(論衡)を見よ、

【王十朋】字は龜齡、宋の樂清の人、幼にして穎悟日に數千言を誦す、紹興中廷對忠鯁なりしかば、高宗親しく擢いて第一と爲す、太子詹事に至り、龍圖閣學士を以て致仕す、卒して忠文と謚せらる、朱熹嘗て之を稱して曰く、光明正大磊磊落落君子人なりと、子二人皆

篤學にして自立す、聞詩は光州に知たり、聞禮は常州に知たり、

【王士禎】清朝の詩人、字は貽上、阮亭また漁洋と號す、山東新城の人、順治乙未の進士、官は刑部尚書に至る、康熙五十年卒す、年七十八、詩を以て海内に鳴ること五十餘年、一代の大家たり、乾隆中特旨を以て文簡と謚せらる、その詩神韻を以て主となす、嘗て唐賢三昧集を編してその意を示せり、著すところ、帶經堂集漁洋三十六種等あり(精華錄)を參看せよ、

【王詵】宋史に「一」字ハ晉卿、太原ノ人、詩ヲ能クシ、畫ヲ善クス、英宗ノ女、蜀國公主ニ尙シ、利州防禦使

【王晉卿】(王詵)を見よ、

【王慎中】字は道思、晉江の人なり、明の嘉靖五年の進士、戶部主事となり、尋いで禮部祠祭司に改めらる、時に四方の名士、唐順之陳東李開先等みな部曹にあり、慎中相與に講習し、學大に進む、後ち驗封郎中に進み幾ばくもなくして讒にあひ、爲めに貶せらる、久ラシて山東提學僉事に擢んでられ、河南參政侍郎に進む、後ちまた、大に用ひられんとせしが、大學士夏言先の疾む所るとなり落職す、慎中、文を爲るに、初め秦漢を

主とす後ちその非を悟りて歐曾を宗となす、唐順之と名を齊らし、世に稱して王唐といふ、慎中初め遵嚴居士と號し、後ち南江と號す、嘉靖三十八年卒す、年五十一、詳くは明史文苑傳を見よ、

【王事監】キコトナシ(王事靡盬、監は音コ堅牢ならざる義、王事は堅固ならざるべからず、故に王事に執掌して暇なきをいふ、詩經唐風に「一」字、不能執、黍稷、また小雅四牡篇に「一」字、不遑將父、將は養なり、

【王者】帝王をいふ、史記酈生陸賈列傳に「一」以人民爲天、民人以食爲天、この語もと管子に見ゆ、また霸者に對して王道(仁德ヲ以テ民ヲ治ムル道)を行ふ君をいふ、下の(王者ノ)を見よ、

【横斜】「ナナメ」林逋の梅の詩に「疎影——水清淺、暗香浮動月黃昏」

【往者諫ム可カラズ】過去の事は、すでに諫めても止められぬ義(來者猶ホ)を見よ、

【王城】天子の都城をいふ、周禮匠人職に「匠人營國、方九里、旁三門、國中九經九緯、經塗九軌、左祖右社、面朝後市」——は四方に三門あり、合せて十二門なり、國中とは城内なり、皇城の中をいふ、宮城をいふに

あらず、南北の道を經といひ、東西を緯といふ、一門毎に三筋の道あり、是を九經九緯といふ、

【王祥】字は休徵、晉の臨沂の人、性至孝、繼母に事へて極めて恭謹なり、母生魚を欲す、天寒くして冰凍す、祥冰を剖きて之を求む、冰忽ち解けて雙鯉を得たり、嘗て徐州の別駕となり、兵を率ゐて寇を討つ、州郡清淨、政化大に行はる、晉初、太保に拜し、公爵に進む、

【往生】佛經の語、淨土宗にて彌陀如來の願力によりて極樂界に化生するをいふ、淨土論に「普共諸衆生、

——安樂國」
【王昌齡ガ宮詞】駿臺雜話「詩文の評品」の條に見ゆ、昌齡字は少伯、唐の京兆の人、開元十五年の進士、詩に工にして殊に宮詞を善くす、集六卷あり、左にその宮詞二首を示す、長信宮秋詞に、
眞成薄命久尋思、夢見君王覺後疑、
知夜飲、分明複道奉恩時、
又夜宮曲に、
昨夜風開露井桃、未央前殿月輪高、
承寵、簾外春寒賜錦袍、
平陽歌舞新

【王者香】蘭の異名、佩文韻府に「琴操云、孔子自衛反魯、幽谷中見薝蘭獨茂、歎曰、蘭當爲王者香、今乃與

衆草爲伍、乃止車、援琴鼓之、託辭於香蘭云。

【王翦林】(王翦)を見よ。

【王者ノ師】帝王の師範たるをいふ、孟子に「有王者起、必來取法、是爲一師也」また漢書張良傳に「老父一編ノ書ヲ出シテ曰ク、之ヲ讀マバ則チ王者ノ師トナラント」

【王澍】字は翦林、虛舟と號す、金壇の人、康熙壬辰の進士、吏部員外郎に官す、書は歐陽率更の室に入る、篆書は、李斯を法とし、一代の作手たり、古碑刻を鑒定すること最も精し、著すところ竹雲題跋あり、

【王肅】朗の子、三國の時魏に仕へ、官、崇文觀祭酒に至る、景初の間、宮室盛んに興る、上疏して極諫し、出されて廣平の太守となる、徵され還りて散騎常侍光祿勳に遷りて卒す、景侯と諡せらる、著す所諸經傳註あり、

【王叔明】(王蒙)を見よ。

【王守仁】(王陽明)を見よ。

【王春之月】正月なり、春秋に「元年春王正月」と書す、漢書律歷志に「春秋正次、王、王、次、春、春者天所爲也」

【王曙】宋の河南の人、進士に登り、また賢良方正の科に中り資政殿學士、知陝州を歴て同平章事に至る、方

に卒す、年六十五、李攀龍と共に文を作るに秦漢以上を主とし、つとめて模擬剽襲を事とす、世に之を李王の古文辭と稱す、拾遺の(兪州山人)を參看せよ。

【王昭君】漢の元帝の竟寧元年に呼韓邪單于來朝し、漢に婿たらんことを求む、帝後宮の女多くして悉く見る能はざるを以て、畫工毛延壽をして宮女の容貌を畫して進めしめ、その中にて醜なる者を遣らんとす、宮女争ひて毛延壽に賂をまくり、己の像を美しく畫かしむ、然るに王昭君名ハ嬌、齊國王穰ノ女ハ天成的美人なりしを以て賂をまくらざりしによりて醜く畫かれたれば、遂に匈奴に嫁することなれり、宮を出づるに臨み、帝一見して絶世の美人たるを知り、悔ゆれども、信を匈奴に失はんことをおそれて、之を賜ひぬ、昭君匈奴に在り、帝を怨みて怨思の歌を作る、後ち藥を飲みて死す、胡地の草色皆黄なり、唯昭君墓上の草、獨り青しといふ、事は西京雜記に見ゆ、白氏文集に「昭君怨」の詩あり、參看せよ、また「明妃」を見よ。

【王績】唐の人、字は無功、通の弟、隋の大業中、孝悌廉潔に擧げられ、祕書正字を授けらる、郷に還り黍を種多藥を蒔き、酒を醸して自ら供す、自ら東臯子と號す、武徳の初、門下省に待詔せしむ、官、酒を給すること日

嚴簡重大臣の體あり、卒して中書令を贈り、文康と諡す、集四十卷あり、また嘗て冊府元龜を修するに與る、

【王承】晉書列傳四十五に「一」字ハ安期、汝南内史湛ノ子、東海ノ太守ト爲ル、政清静ヲ尙ビ、細察ヲ爲サズ、小吏池中ノ魚ヲ盜ム者アリ、綱紀、之ヲ推(ぎんみ)する(ス)、承曰ク、文王ノ圍ハ、衆ト之ヲ共ニス、池魚何ゾ惜ムニ足ランヤト、夜ヲ犯ス者(夜行の禁を犯すを)いふ(ム)アリ、吏ノ爲メニ拘セラル、承其ノ故ヲ問フ、答ヘテ曰ク、師ニ從ヒテ書ヲ受ケ、覺エズ日暮ルト、承曰ク、寢越(呂氏春秋に見ゆ、古の苦學せし人)ヲ鞭撻シ以テ威名ヲ立ツルハ、政化ノ本ニ非ズト、吏ヲシテ送リテ家ニ歸ラシム、其ノ從容寬恕此ノ若シ、江ヲ渡リ、元帝ノ鎮東府ノ從事中郎ト爲リ、甚ダ優禮セラル、承少クシテ重譽アリ、而シテ誠ヲ推シ物ニ接ス、衆咸親愛ス、名臣王導、衛玠、周顛、庾亮ノ徒、皆其ノ下ニ出ヅ、中興第一タリ、

【横政】法度に「シタガハザル」暴政をいふ、孟子萬章下篇に「一」之所出、横民所止、不忍居也、

【王世貞】字は元美、鳳洲また兪州山人と號す、明の太倉の人、穎悟、書、目を過ぐれば忘れず、嘉靖二十六年の進士、累遷して南京兵部侍郎に至る、萬曆十八年家

に三升、或人間ふ待詔何をか樂しきと、答へて曰く、良醞樂むべしと、侍中陳叔達之を聞きて、日に一斗を給す、時に斗酒學士と稱す、飲ひと五斗に至るも亂れず、五斗先生傳及び醉鄉記を著す、貞觀中隋書を撰す、

【横截】「ヨコサマ」に斷ち切ることを、晉書に「以鐵鎖、一」之に

【横説堅説】縦横自在に説くをいふ、事苑に「一」猶未知、向上關候子、

【王誥】(一)を見よ、

【汪然】水の廣く深きが如く、奥深き貌、淮南子俶眞訓に「一」平静、寂然清澄、

また「サカン」に涕を流す貌、柳宗元の捕蛇者説に「一」流涕、

【王素】字は仲儀、宋の仁宗、御筆親しく四諫官を除す、素はその一人なり、工部尙書を以て致仕す(獨擊)鶻を見よ、

【王孫】王者の子孫の義、抱朴子に「一」公子、優游貴樂、目倦于玄黃、耳疲于鄭衛、鼻饜蘭麝、口爽于膏粱、また廣く貴公子の義とす、漢書韓信傳に「大丈夫不能自食、吾哀一」進食云云、蘇林の註に「一」ハ猶ホ公子トイフガ如シ、

【王導】字は茂弘、覽の孫、少くして風鑒あり、識量清遠なり、晋の元帝瑯琊王たりし時、導と素より相親み善し、帝下邳に鎮するに及び、導を以て安東司馬と爲す、軍謀密策知りて爲ざるなし、後ち東遷して官を累ねて太傅に至り、始興公に封ぜらる、兄敦反す、大義を以て之を滅す、出入將相となり、力を戮せて王室を佐く、晋の中興、導の功を多しと爲す、初め帝の即位するや、百官陪列す、導に命じて御牀に升りて坐せしむ、導固辭して曰く、若し太陽下りて萬物と同くせば、蒼生何に由りて照を仰がんと、帝乃ち止む、

【王輅】字は紫鉉、天南遼東と號す、清の吳郡長洲の人、上海に住す、明治十一年、わが國に來遊し、扶桑遊記三卷を著す、別に普法戰記、海陬雜誌、瀛嶼雜誌等の著あり、

【横長】横物にて、細長き圖をいふ、芥子園畫傳に、その畫式あり、參看せよ、

【王適】字は里闕、唐の幽州の人、初め陳子昂の感遇詩を見て、乃ち交を陳に請ふ、集二十卷あり、

【王鐵槍】五代史死節傳に、梁ノ王彥章、字ハ子明、鄆州壽張ノ人、驍勇絶倫ナリ、能ク跳足ニテ棘ヲ履ミ、行クコト百歩ス、戰フ毎ニ鐵槍ヲ用フ、皆重サ百斤、一ハ

鞍中ニ置キ、一ハ手ニ在リ、騎シテ馳突ス、奮疾飛ブガ如ク、向フ所口前ナシ、軍中王鐵槍ト號ス、彥章ハ武人書ヲ知ラズ、嘗テ俚語ヲツクリテ曰ク、豹死留皮、人死留名ト、ソノ忠義蓋シ天性ナリ、唐ノ將ノ爲メニ擒ニセラルルニ及ビ、莊宗多方之ヲ諭シ降ラシメントスレドモ、屈セズシテ殺サル

【王通】字は仲淹、隋の河東龍門の人、幼にして篤學、慨然として蒼生を濟ふの志あり、長安に至り太平十二策を奏す、用ひられず、退いて河汾に居り教授す、古に倣ひて經を作り、又中說(文中子トモイフ)を著し、以て論語に擬す、大業の初、徵せらるれども起たず、大業十三年卒す、年三十四、門人謚して文中子といふ、

【王ノ懐スル所ロニ敵ス】(敵愾)を見よ

【王霸】王道と霸道と、王道とは仁義の道を以て國を治むるをいひ、霸道とは武力を以て民を服し、表面に仁義をよそへども、内實は己の利益を謀るをいふ、孟子公孫丑上篇に、以力假仁者霸、霸必有、大國、以德行仁者王、王不待大、湯以七十里、文王以百里、

【王哀】字は偉元、儀の子、哀少くして志操あり、父の非命を痛み、隱居して教授す、累りに辟さるれども就

かず、墓側に廬して旦夕拜跪し、柏を攀ぢて悲號し、涕淚樹に著き、樹之が爲めに枯る、母存する日雷を畏る、母没せし後ち、雷する毎に、輒ち墓に至りて曰く、哀此に在りと、詩を讀みて、哀哀父母、生我劬勞、といふに至り、未だ嘗て三復流涕せずんばあらず、門人爲めに蓼莪の篇を廢す、家貧しくして躬耕し、口を計りて田し、身を度りて蠶す、或は助け遺る者あれば、皆受けず、司馬氏魏を纂ふに及びて、哀終身西向して坐せず、以て晋に臣たらざるを示す、詳しくは晋書列傳五十八を見よ、

【王弼】字は輔嗣、晋の山陽の人、少くして老子の説を好み、通辨にして能く言ふ、時に裴徽吏部郎たり、何晏吏部尙書たり、皆之を奇とし、乃ち弼を以て臺郎に補す、曹爽に謁す、爽左右を屏け、與に道を論じて時を移す、弼、鍾會と善し、會その高致に服す、嘗て曰く、聖人の人より茂んる者は神明なり、人に同じき者は五情なり、神明茂んる者、故に能く冲和を體して以て無に通ず、五情同じ、故に哀樂の以て物に應ずるなきこと能はずと、周易及び老子に注す、

【王父】祖父をいふ、爾雅の釋親に、父ノ考ヲ一ト爲シ、父ノ妣ヲ王母ト爲ス、王父ノ考ヲ曾祖王父ト爲シ、

王父ノ妣ヲ、曾祖王母ト爲ス、曾祖王父ノ考ヲ、高祖王父ト爲シ、曾祖王父ノ妣ヲ、高祖王母ト爲ス、また、母ノ考ヲ、外一ト爲シ、母ノ妣ヲ、外王母ト爲シ、母ノ王考ヲ、外曾王父ト爲シ、母ノ王妣ヲ、外曾王母ト爲ス、註に「王トハ王者ノ如ク之ヲ尊ブ」とあり、

【横分】身分れ離るるをいふ、漢書梅福傳に「雖伏質、一臣之願也」質は鎖なり、キリダイ

【王文成公全書】三十八卷、明の王守仁撰す、凡そ語録三卷、文錄五卷、別錄十卷、外集七卷、續編六卷、附するに年譜五卷、世徳記二卷を以てす、初の語録三卷は傳習録にして、朱子晚年定論を附す、門人徐愛の輯むるところ、文錄以下は陽明の歿後、門人德洪等の編するところ、守仁の學、陸象山に出て、知行合一の説を唱ふ、一再傳して猖狂横決、流弊少なからずと雖も、守仁に在りては確然自得の處あり、亦確然自立の處あり、その文博大昌明、詩も亦秀逸なり、文成は陽明の諡なり(王陽明)を參看せよ、

【王冕】元の畫人、字は元章、諸暨の人、宋濂の潛溪集に「科擧ノ業ヲ棄テ去リ、舟ヲ買ヒ東吳ニ下リ大江ヲ渡リ、淮楚ニ入り、名山川ヲ歴覽シ、北燕都ニ游ブ、既ニシテ越ニ歸リ、妻子ヲ攜ヘテ九里山ニ隱ル、畫梅ヲ

善クス、楊補之ニ減ゼズ、求ムル者肩背相望ム、繪幅ノ短長ヲ以テ米ヲ得ルノ差ヲ爲ス、人之ヲ譏ル、曰ク吾是ニ籍リテ以テ口體ヲ養フ、豈好ンデ人家ノ爲メニ畫師ト作ランヤト、皇帝婺州ヲ取リ、將ニ越ヲ攻メントス、物色シテ冕ヲ得、幕府ニ貢キ、授クルニ諸議參軍ヲ以テス。

【王母】 祖母なり(王父)を見よ、

【王鳳洲】 (王世貞)を見よ、

【王勃】 字は子安、唐の絳州龍門の人、隋末の大儒王通の孫なり、六歳にして文辭を善くし、九歳にして顔師古の註せし漢書を讀みてその疵瑕を摘發せしといふ、その號州參軍に補せらるるや、才を負ひて驕傲なりしかば、忽ち僚吏に嫉惡せられ死罪に處せられんとせしが、幸に赦されて名を除かる、父の福時は坐せられて交趾令に左遷せらる、勃上元二年の秋、往いて父を省せんとし、道洪州に出て、閩都督のために、滕王閣序を作る、舟洋海に入るや、水に墜ちて死す、年二十九、その文を作るに、先づ墨數升を磨したる後に、酣飲して被を引き面を覆ひて臥し、寤むるに及びて直ちに筆を下し篇を成し、一字を易へず、時人之を腹藁といふ、著す所の詩文甚だ多く、尤も詩賦に工なり、

楊炯盧照隣駱賓王と併稱して初唐の四傑といふ、而して勃はその冠たり

【王猛】 字は景略、晉の人、華山に隱居し、佐世の念を懷く、桓溫關に入る、猛褫袍を衣て之に見え、虱を捫り自若として當世の事を談す、旁ら人なきが如し、溫之を異とす、後ち尙書右丞となる、

【王鳴盛】 字は鳳喈、禮堂と號し、また西莊と號し、晚に西泚と稱す、江蘇嘉定の人、乾隆甲戌、第二人に及第す、官内閣學士に至り、禮部侍郎を兼ね、光祿寺卿に改めらる、嘉慶二年卒す、年七十八、尙書後案三十卷を撰す、専ら鄭注を宗とし、亡逸せし者は、馬融・王肅の注を采りて之を補ふ、また十七史商榷百卷、蛾術編百卷を撰す、詩文重名を負ふ、耕養齋集、西泚居士集あり、

【王蒙】 元の畫人、聽雨樓諸賢記に、「一」字ハ叔明、吳興ノ人、黃鶴山樵ト號ス、趙松雪ノ外孫ナリ、素ヨリ畫ヲ好ミ、外氏ノ法ヲ得タリ、然レドモ妍ヲ時ニ求メズ、タダ筆墨ヲ假リテ以テソノ天機ノ妙ヲ寓スルノミ、文章ヲ爲ルニ矩度ヲ尙バズ、頃刻ニシテ數千言就ルベシ、畫史會要に、「一」ノ山水、巨然ヲ師トシ、甚ダ用墨ノ法ヲ得タリ、秀潤喜ブベク、亦人物ヲ善クス、ま

た都穆の鐵網珊瑚にその畫評あり、また淵鑑類函三百二十七に、妮古録を引きて曰く、倪迂畫、可稱逸品、元之能者雖多、然率承宋法、稍加蕭散耳、吳仲圭、大有神氣、黃子久、特妙風格、王叔明奄有前規、而三家未洗、縱橫習氣、獨雲林古澹天然、米癡後一人而已、とあり、倪迂は即ち倪雲林なり、潛確叢書に「元ノ趙孟頫、字ハ子昂、松雪ト號ス、吳鎮字ハ仲圭、梅花道人ト號ス、黃公望字ハ子久、大癡ト號ス、又一峯道人ト號ス、王蒙字ハ叔明、黃鶴山樵ト號ス、畫ヲ以テ世ニ名アリ、元ノ四大家ト爲ス、」

【横目】 人の眼を稱す、莊子に「夫子無意于一一之民乎」

【王門ノ俗】 次の故事によりて、富貴の人に諂ふ者を冷評するに用ふ、

【王門ノ俗人タル能ハズ】 (不能爲王門俗人) 人の役を受くるを恥づるにいふ、晉書戴逵傳に「戴逵字安道、博學能鼓琴、武陵王暕召之、逵對使者「打破琴」曰、戴安道一「一」一「一」俗人は樂人なり、

【王陽明】 明の大儒、名は守仁、字は伯安、陽明はその號、浙江省餘姚の人、弘治乙未の進士、幼時朱子格物の學を講ず、正徳年間、事を言ふを以て、貴州の龍場驛丞

に謫せらる、窮荒書なく、日に舊聞を釋ぬ、忽ち格致はこれを心に反求すべく、事物に求むべからざるの理を悟り、喟然として歎じて曰く、道此に在りと、その教たる、専ら良知を致すを以て主となす、その友人門下と問答せし語を輯めて傳習録といふ、十五年寧王宸濠反す、守仁討ちて之を平ぐ、大學士桂萼等その功を阻む、嘉靖元年その功を追録し、新建伯と爲す、七年兵部尙書を以て安南に卒す、年五十七、隆慶の初め、侯を贈り、文成と諡す、著すところ王文成公全書あり、

【王餘魚】 爾雅の注に「比目魚、河東呼爲王餘、吳都賦に「雙則比目、片則王餘」の注に「越王餘魚、未盡、因以殘半、棄水中、化爲魚、遂無其一面、故曰王餘也」

【往來】 「ユキツ、キタリツ」禮記の曲禮に「禮尙一」

【王覽】 晉の人、字は玄通、王祥の繼母朱氏の子なり、母祥に遇すること無道なり、覽年數歲、祥の殿杖せらるるを見て、輒ち涕泣抱持す、成童に至りて、毎にその母を諫む、その母少しく凶虐を止む、丹柰あり實を結ぶ、母祥に命じて之を守らしむ、風雨毎に祥則ち樹を抱いて泣く、覽また祥と俱にす、また祥の妻を虐使すれば、覽の妻も亦趨りて之を共にせり、朱之を患へて乃ち止む、覽孝友恭恪の名、祥に亞ぐ、後ち仕へて大中

大夫に至る。

【王履】 明の崑山の人、字は安道、列朝詩集に「博ク群籍ニ通ジ、郷里ニ教授シ詩文ヲ能クシ繪事ニ工ナリ、華山ニ遊ビ、圖四十幅ヲ作ル、安道ノ畫ハ少クシテ夏圭ヲ師トス、評者謂ヘラク行筆秀勁布置茂密、作家ノ士氣咸備ル云云」

【横流】 その「スチ」道に由らずして、「ホシイママ」に流るるをいふ、孟子滕文公上篇に「洪水—」

【王良造父】 孟子滕文公に「昔者趙簡子、使王良與嬖奚乗、列子周穆王篇に「主車則造父爲御、按ずるに造父は始めて管子に見ゆ、衡父造父を生むこと、始めて秦紀趙世家に見ゆ、梁玉繩曰ク、韓子ニ造父爲齊王駟駕ト、蓋シ凡ソ後ノ善ク御スルモノ、亦造父ノ名ヲ襲グ也、韓愈の送石處士序に「若、駟馬駕輕車、就熟路、而—爲之先後也、二人は共に古の善く馬を御せし人なり、

【王陵】 漢書に「王陵ハ、沛ノ人、高祖ノ起ルヤ、陵モ亦黨數千人ヲ聚ム、高祖ノ項羽ヲ撃ツニ及ビ、酒チ兵ヲ以テ漢ニ屬ス、羽、陵ノ母ヲ取り軍中ニ置ク、陵ノ使至レバ、則チ東向シテ陵ノ母ヲ坐セシメ、以テ陵ヲ招カシム、陵ノ母私カニ使者ヲ送り、泣イテ曰ク、妾ノ爲ノ

ニ陵ニ語レ、善ク漢王ニ事ヘヨ、漢王ハ長者ナリ、老妾ノ故ヲ以テ、二心ヲ持スル母レ、妾死ヲ以テ使者ヲ送ルト、遂ニ劔ニ伏シテ死ス、羽怒リテ陵ガ母ヲ烹ル、陵卒ニ漢ニ從フ」

【横歴】 横行に同じ、戰國策に「伏軾搏衝、—天下ニ（横行）を參看せよ、

【汪汪】 水の廣く深き貌、後漢書黃憲傳に「叔度—若千頃波」

【往往】 處處といふが如し、文選の西都賦に「神池靈沼、—而在其中」

【窩家】 「ヌスビトヤド」幼學須知に「—窩藏盜賊者」窩は窟穴なり「ムロ」「アナ」窩主ともいふ、

【和諧】 「ヤハラギ、カナフ」晉書摯虞傳に「施之金石、則音韻—」

【吾家千里駒】 圓機活法に「崔昂母ニ事ヘテ孝ヲ以テ聞ユ、崔林曰ク、此ノ兒ハ、終ニ當ニ遠至ルクベシ、是レ吾ガ家ノ千里ノ駒ナリト（千里ノ駒）を見よ、

【吾家之明珠】 梁書の劉孺傳に「七歲能屬文、十四居父喪、毀瘠骨立、宗黨咸異之、叔父瑛携以之官、常置座

側、謂賓客曰、此兒—也」

【和羹鹽梅】 羹アツモノハ、鹽梅の鹹酸に由りて味を爲す、以て人君が良相の輔導を得て、其の徳を成すに喩ム、書經の説命に「若作酒醴、爾惟麴蘖、若作和羹、爾惟鹽梅」とあり、爾は傅説を斥す、王起の木從繩賦に「補袞惟勳、和羹克正」

【我が后ヲ後ツ、后来ラバ其レ蘇セン】（後我后、后来其蘇）孟子梁惠王下篇に引く、商書仲虺之語の文なり、後は待なり、后は君なり、蘇は復生なり、他國の民、皆夏の桀王の虐政に苦み、湯王を以て我が君と爲し、その來りて己をして蘇息するを得しめんことを待つと

【吾毅中ニ入ル】（入吾毅中）毅は弓弩を張るなり、射て我が手に落つる義、我が掌中に歸するをいふ、撫言に「唐太宗曰、天下英雄、—詳しくは英雄吾毅中）を見よ、

【我心石ニ非ズ轉ズベカラス】（我心匪石不可轉）心の確乎として、動かすべからざるをいふ、詩經の邶風柏舟に「我心匪石不可轉也、我心匪席不可卷也」の註に「石ハ轉バスキモ、我が心ハ轉バスキモ、また説席ハ卷クベキモ、我が心ハ卷クベカラス」と、また説

苑に「詩ニイフ、我が心石ニ匪ズ、轉ズベカラス、我が心席ニ匪ズ、卷クベカラス、己ヲ失ハザルヲイフナリ、能ク己ヲ失ハズシテ然シテ後ニ與ニ難ヲ濟フベシ、此レ士君子ノ衆ニ起ユル所以ナリ」とあり、

【我が心ヲ獲タリ】（獲我心）人の爲したる事が、我が心に思ふ所ると、よく合するをいふ、詩經邶風綠衣篇に「結兮紛兮、凄其以風、我思古人、實—」

【吾心悲】 家語に「曾子曰、吾及親三釜而心樂、後仕、三千鍾而—」

【我心秤ノ如シ】（我心如秤）心に私なき喩なり、揚升庵文集に「諸葛孔明ガ語ニイフ我心如秤、不能爲人作、低昂、唐朝會傳人啓曰、推諸葛之秤心、負姜維之斗膽、—、鶴林玉露に「孔明曰ク吾心如秤、不能爲人作、輕重ト、至レル哉言ヤ、信ニ此ヲ能クセバ吾ガ心即チ造化ナリ」

【吾ガ室ニ入リテ吾ガ戈ヲ操ル】 その道を學びながら却りてその道を攻撃する義（室ニ入リテ）を見よ、

【吾ガ室ニ入ル者ハ但清風アリ】（入吾室者、但有清風）南史の謝謫傳に「不妄交接、門無雜賓、有時獨醉

曰、—對吾飲者、唯當明月」

莫匪爾極。列子に「堯微服シテ康衢ニ遊ブ。兒童ノ謠ヲ聞クニ曰ク。立我蒸民。莫匪爾極。不識不知。順帝之則。」云云。蒸民は衆民なり、言ふ心は、此の衆民を立つるは、帝の徳にあらざるはなし、我は則ち知らず識らず、唯帝堯の法に順ふのみなりとの意。

【吾儕】 儕は輩なり、吾輩に同じ、左傳成二年に「文王猶用衆、況一乎」

【吾ガ手ニ落ツ】 (落吾手) 吾が物となりし義、杜甫の詩に「不意青草湖、扁舟一」

【吾ガ徒ニアラス】 (非吾徒) 吾徒とは、わが弟子なり、わが弟子にあらずといひて之を絶つなり、論語先進に「李氏富於周公、而求也爲之聚斂而附益之、子曰一也、小子鳴鼓而攻之可也」と、聚斂とは賦税を取り立つるの急なるなり、鳴鼓而攻之とは、眞に鼓を鳴して攻むるにはあらず、その不都合の罪を衆人に宣示して之を責むるなり、

【吾ガ膝鐵ノ如シ】 (吾膝如鐵) 一統志に「元ノ李齊、高郵ノ知府タリ、張士誠、ソノ城ヲ陷レ、之ヲ誘ヒテ跪カシム、齊曰ク、吾ガ膝ハ鐵ノ如シ、豈賊ノ爲メニ屈センヤト、齊嘗テ進士ニ擧ゲラレ、第一タリ、論者謂フ學ブ所ロニ負カズト」

【和光同塵】 和光とは、我が智の光を隠して、顯はざるをいひ、同塵とは、塵俗の中に混じて居るをいふ、老子に「和其光、同其塵」

【和敬】 「ヤハラギウヤマフ(和親)を見よ、【和協】 和睦協同するをいふ、左傳に「寡人有弟、不能一國語に「一輯睦、於是乎興」

【禍】 音クワ、マガゴト、禍の反なり、サイナン、説文に「害也、神不福也、禮記表記に「君子慎以避禍、史記龜策傳に「禍不妄至、福不徒來」と、また管晏傳に「因禍爲福、轉敗爲功、老子に「禍兮福之所倚、福兮禍之所伏、說苑の敬慎に「福生於隱約、而禍生於得意、左傳に「禍福無門、惟人所召」

【禍ヲ嫁ス】 (嫁禍) 己の禍を人に移すをいふ、史記の趙世家の字面、戰國策にも「張儀說魏王、一而安國此善事也」

【禍ヲ轉ジテ福ト爲ス】 (轉禍爲福) 禍をかへて、福とするなり、史記蘇秦傳に「古之善制事者、轉禍爲福、因敗爲功、禍(禍)を見よ、

【殃池魚ニ及ブ】 (殃及池魚) 「ワザハヒ」が他の物にまで及ぶをいふ、東魏の杜弼檄梁文に「楚國亡、猿禍延、林木、城門失火、一顧炎武の日知錄に「按

【我百年ノ命ヲ棄テテ公ガ一日ノ恩ニ報ユ】 太平記卷十に見ゆ、白氏文集卷の四、井底引銀瓶と題する詩中に「爲君一日恩、誤妾百年身、寄言癡小人家女、慎勿將身輕許人」

【和合】 兩家の男女を合せて婚姻せさす、易林に「使媒求婦、一姓二姓、周禮地官媒氏の疏に「三十之男二十之女、一使成婚姻、また互に「ナカヨキ義、管子に「畜之以道、則民和、養之以德、則民合、一故能習、習故能諧」

【吾ガ道東ス】 一番の高弟が、門下を辭し去りたるをいふ、後漢書に「鄭玄馬融ニ事ヘテ、門下ニ在リ、三年見ユルヲ得ズ、高業ノ弟子ヲシテ、玄ニ傳授セシム、玄日夜尋誦ス、辭シテ歸ルトキ、融喟然トシテ門人ニ謂ヒテ曰ク、鄭生今去ル、吾ガ道東スト」

【吾ガ道南ス】 高足弟子の、去りて南にかへるをいふ、圓機活法に「楊龜山、明道先生ヲ師トス、歸ルニ及ビ、之ヲ送リテ門ヲ出デ、座客ニ謂ヒテ曰ク、吾道南矣」

【和議】 宋史高宗紀に「紹興八年、以樞密院編修官胡銓上書直諫、斥一除名、昭州編管」

【和煦】 「アタタカ」にして「ヒヨリヨシ」謝靈運の山居賦に「當嚴勁而蕙帶、承一而芬腴」

ズルニ淮南子ニイフ、楚王ソノ猿ヲ亡ヒ、而シテ林木之ガ爲メニ殘セラレ、宋君ソノ珠ヲ亡ヒ、池中ノ魚之ガ爲メニ彈ク云云(池魚ノ)を見よ、

【禍常ニ蕭牆ノ中ヨリ起ル】 太平記卷九に見ゆ、禍は外より來らず、ただ近くわが住むところより起るとの義、蕭牆ノ憂を見よ、

【禍ハ懈惰ニ生ズ】 禍生於懈惰、禍は戒慎するところにて發せずして怠りて「ユルカセ」にするところより生ずるをいふ、韓詩外傳に「官怠於官成、病加於小愈、一孝衰於妻子」

【禍ハ口ヨリ生ズ】 (禍從口生) 釋氏要覽に「一切衆生、一、口舌者、鑿身之斧也、傅玄の口銘に「病從口入、禍從口出、文中子に「禍莫大於多言」

【和シテ同セズ】 (和而不同) 論語子路篇に「子曰、君子一、小人同而不和、和は義理に本づき、同は利益に本づく、君子の人と相與するは常に打ち和ぎて戻ることなけれども、義理の不可なるにあへば「ドコマデモ」論じつめて、彼に同ずることはせざるなり、小人は利のために交るものなれば、利のあるところは、是非善惡に關せず、彼に同じて比黨するものなりとの意、

【和輯】人の「ヤハラグ」をいふ、漢書南粵王趙佗傳に

「使^レ一^レ百粵^ニ和集^スに同じ

【和集】「ヤハラグ」史記衛世家に「武公即位、修^ス康叔

之政、百姓^一淮南子に「天下寧定、百姓^一

【和親】「ヤハラギ、シタシム」禮記の樂記に「是故樂

在^ル宗廟之中、君臣上下同聽之、則莫^レ不和敬、在^ル族長

郷里之中、長幼同聽之、莫^レ不和順、在^ル閨門之内、父子

兄弟同聽之、則莫^レ不^レ一^レ

【窩主】「ヌスピトヤド」未信編に「逃人、不宜有^レ一^レ窩

窩家に同じ、

【和順】「ヤハラギ、シタガフ」和親を見よ

【和スルコト琴瑟ノ如シ】夫婦のよく和合するをい

ふ、詩經棠棣篇に「妻子好合、如^シ鼓琴瑟、成語考に

「如^シ鼓琴瑟、夫妻好合之謂、琴瑟不調、夫妻反目之謂、

【續ラ 挾ム】(挾續)續ラを見よ、

【私】説文に「不公也」書經に「以^テ公滅^ス私、民其允懷

禮記に「天無私覆、地無私載、日月無私照、奉^ス三者

以^テ勞^ス天下、此之謂^ニ三無私^ニ漢書翟方進傳に「方進奏、

陳咸與逢信、邪枉貪汙、營私多欲、管子に「如^シ地如^シ天、

何私^レ何親^レ

【私ヲ忘ル】(忘私)己の私利を忘れて公上に盡すを

いふ、漢書賈誼傳に「爲^レ人臣者、主耳忘身、國耳忘家、

公耳^一

【和暖】天氣の「アタタカ」にして「ヤハラグ」王逸の九

思に「風習習、今百草萌、分華榮、

【和衷協同】中心より和睦して、共に力を合はす義、書

經皋陶謨に「同^ニ寅^ニ、協^ニ恭^ニ和^ニ衷^ニ哉、衷は中なり、一解

に善なり、

【僅ニ旋馬ヲ容ル】(僅容旋馬)宋史李沆傳に「沆治第

封^レ邸、門内應事前、一^レ一^レ、或言其太隘、沆笑曰、居

第當傳子孫、此爲^ニ宰相應事、誠隘、爲^ニ太祝奉禮應事、已

寬矣、馬ヲ旋ララス容シと讀む、

【和調】「ヤハラギ、トトナフ」史記陸賈傳に「將相^一

一、則士務附、易林に「麒麟風風、善政得祥、陰陽^一

國無災殃、

【倭奴】支那にて我が國を稱していふ、元史日本傳に

「日本國ハ、東海ノ東ニ在リ、古^一一國ト稱ス、或ハ云

フ、ソノ舊名ヲ惡ム、故ニ名ヲ日本ト改ム、其ノ國、日

ノ出ヅル所^ニ近キヲ以テナリ、

【和同】「ヤハラグ」禮記に「天地^一一、草木萌動、

【話頭】話の「イトグチ」陸游の詩に「不用^レ殷勤舉^レ一

【和南】致敬または恭敬と譯す、僧徒の敬禮なり、事

類全書に「僧家ニ、掌ヲ合セテ禮ヲ作スヲイヒテ、和南

トイフ」註に「此ニハ拱手ヲ以テ敬トナシ、外國ハ合

掌ヲ以テ敬トナス、合ハ散誕セズ、專ラ一心ニ至ルヲ

表ス」とあり、

【鱒ノ淵ヲ去ル】太平記卷二十八に見ゆ、韓愈の鱒魚

の文に「今與^ニ鱒魚約、盡^ニ三日、其率^ニ醜類^ニ南徒^ニ於海、

以避^ニ天子之命吏^ニとあり、かくて鱒魚は潮州を去り

て他に徙りしといひ傳ふ

【話欄】「ハナシ」の「タネ」談柄に同じ、羅湖野録に見ゆ、

【和買】「アヒタイガヒ」能改齋漫錄に「一^レ二字、見^レ孔

穎達左氏正義昭公十六年、宋史の許景衡傳に「極論

一^レ和糴鹽法之害、

【和盤】「スベテ」の義、乘獨譚に「近世ノ俗語ニ、一^レト

云フコトアリ、或ハ云フ一片婆心、一^レ都^レ托出^ト、或ハ一

一^レ妙蘊ト、西湖佳話ノ内ノ詩ノ句ニ、一^レ都^レ托出^ト、閨閣

惹^レ風流^ト、トイヘリ、畢竟器物食事ナド、ソノ臺盤トモニ

持チ出ルトイフコトニテ淵底ノコラズウチアラハス

コトナリ、拍案驚奇ニ、托出一^レ盤東西^ト、トイフコトア

リ、コレ等ニテ知ルベシ、東西トハ物ヲイフ、一^レヲリノ

物ヲ持チ出ルナリ、又人ヲモ東西トイフ、イヅレモ後

代ノ俗語ナリ、

【和風】「ヤハラカキ」春風をいふ、杜甫の詩に「吹^レ面受^レ

一^レ一^レ近思錄に「明道先生曰、仲尼天地也、顔子^一一慶

雲也、(先ツ^一一)を見よ、

【和平】「ヤハラギ、タヒラカ」詩經に「神之聽^レ之、終^レ和

且^レ平、

また後漢書桓帝紀に「大赦^ニ天下、改^ニ元^ニ一^レ

【和睦】「ヤハラギ、ムツマシ」孝經に「先王有^ニ至德要道^ニ

以順^ニ天下^ニ、民用^一一、上下無^レ怨、

【和民】(民ヲ和^スグ)左傳に「臣聞^ニ以德^ニ一^レ一^レ國語に「惠

所以^ニ一^レ一^レ

【盃】説文に「小孟ナリ」六書正譌に「俗ニ椀ニ作ル」漆

盃子は「クロスリ」の「ワン、

【智井】智は「メシヒ」一^レ一^レは水の枯れたる「キド」左傳

宣十二年に「目^一一^レ而拯^レ之、注に「廢井也」

【笑ヲ含ミ地ニ入ル】(含笑入地)安心して死するをい

ふ、宋紀に「唐重知^ニ京兆府^ニ、金將^ニ圍^ニ城^ニ、重度^ニ不^レ可^レ

支^レ、以^テ書^レ別^ニ、其父克臣^ニ曰^ク、忠孝不^レ兩^レ立^ニ、義不^レ苟^レ生^ニ、以^テ辱^レ

我父^ニ、克臣報^レ之曰^ク、汝能以^テ身殉^ニ國^ニ、吾含笑^ニ入^ニ地^ニ矣、

【笑ヒテ頤ヲ脱ク】(笑脱頤天に笑ふをいふ蘇軾の詩

に「撫掌^一一^レ頤^ヲ解^ク)を見よ、

【笑テ答ヘズ】(別ニ天地)を見よ、

【笑ノ中ニ刀ヲ礪グ】(笑中ニ刀アリ)を見よ、

【吾豈敢セシ】吾は何とてそれに當らんや、當らずと

の謙辭、論語述而篇に「子曰、若、聖與仁、則一」

【吾未ダ徳ヲ好ムコト色ヲ好ムガ如クナル者ヲ見ズ】

(吾未見好徳如好色者也)隨分徳を好む者はあれども

も誠心より之を好む者を見ずとて孔子の嘆息せられ

し語、論語子罕篇に出づ、好色は人心の底より出づ、

故に喩ふ、

【我ヲシテ身後ノ名アラシムルモ、即時一杯ノ酒ニ如カ

ズ】(使、我有身後名、不如即時一杯酒)(身後ノ名を

見よ、

【我ヲ知ル者ハ其レ天平】(知我者其天平)聖人の學の

上達する所ろはす、べて皆天道天理なれば、人我を知

らざるも、天はよく我を知らんとの義、論語憲問篇に

「子曰、莫我知也夫、子貢曰、何爲其莫知也、子曰、

不怨天、不尤人、下學而上達、一」

【我ヲ博ムルニ文ヲ以テス】(博我以文)論語子罕篇に

「夫子循循然、善誘人、一」

淵が孔子の教育法を嘆美せし語なり、文とは古今の

書籍をいふ、博のみにては用をなさず、故にその中よ

の岳陽樓記に「噫、微斯人、一」

【我ニ投ズルニ木瓜ヲ以テスレバ、之ニ報ズルニ瓊瑤ヲ

以テセン】(投我以木瓜)(木瓜)を見よ、

【我ハ夏日ノ長キヲ愛ス】(人ハ皆)を見よ、

【我深ク汝等ヲ敬シ、敢テ輕慢セズ】(我深敬汝等、不

敢敬慢)法華經の不輕品に「威音王、如來滅度、後、像法

中有、一菩薩比丘、名常不輕、是比丘凡有所見、皆悉

禮拜讚嘆、而作是言、一」

何、汝等皆行菩薩道、當得作佛(中略)常被罵詈、不

生、嗔恚、常作是言、汝當作佛、說此語時、衆人或以杖

木瓦石、而打擲之、逃走遠住、猶高聲唱言、我不敢輕於

汝等、汝等皆當作佛、この事、十訓抄第二可離、憍慢、

事の條下にも引用せり

【吾瘠タリト雖モ、天下肥ユ】(貌瘠セタリト雖モ)を見

【我ヨリ古ヲ作ス】(自我作古)我より故事となるべ

きことを創作する義にて、古禮に拘泥せざるをいふ、

宋史禮志に「孝宗欲不用、易月之制、曰、一」

【我ヨリ之ヲ得、我ヨリ之ヲ捐ツ】(自我得之、自我捐

之)我が得たるものを、我が失ふことなれば、他人に關

【我ヲ知ル者ハ其レ天平】(知我者其天平)聖人の學の

上達する所ろはす、べて皆天道天理なれば、人我を知

らざるも、天はよく我を知らんとの義、論語憲問篇に

「子曰、莫我知也夫、子貢曰、何爲其莫知也、子曰、

り我が身に切なる所ろを約取して實地に行はしむる

には、禮儀を以てせしむとの義、

【我ヲ劉豫ニセント欲スルナリ】(欲劉豫我)胡濙

庵の上高宗封事中の語なり、左傳定十年に「欲吳王

我乎」と同一の句法、劉豫字は彥游、景州阜城の人な

り、始め進士に擧げられ、宣和六年河北提刑に除す、金

人南侵し、豫官を棄て亂を避く、建炎四年七月、金人豫

を冊し皇帝と爲し、國を大齊と號し、大名府に都す、九

月豫僞位に即さ、境内に赦し金の正朔を奉じ、天會八

年と稱す、建炎七年十一月、豫を廢して蜀王と爲す、豫

王を僭する凡そ八年にして廢せらる、我を劉豫の如

くにせんと欲するの義、

【吾嘗テ終ヨ食ハズ、終夜寢ネズ、以テ思ヘドモ益ナシ、

學ブニ如カザルナリ】(吾嘗終日不食、終夜不寢、以

思無益、不如學也)論語衛靈公篇に見ゆ、孔子の語、吾

嘗て終日終夜寢食を忘れて考へたれども無暗に考へ

たるばかりにては何の益もなし、學問の上より考へ

たるにあらざれば不可なり、故に學問するに如かず

との意、

【吾誰ト與ニカ歸セン】(わが身の歸依する所ろに惑へ

るなり、禮記に「死者如可作、吾誰與歸、」また范仲淹

する所ろなく、心、イツバイなりといふ義、漢書竇嬰

傳に「嬰曰、侯、一」

其武安侯傳にも見ゆ、

【我、吾ヲ忘ル】己の存在するに氣付かざる義、深く思

に沈みし時などの「サマ」また無心無想の域に至りた

るをいふ、陸游の句に「草庵寂默我忘吾」

故事成語大辭典 終

孔子世家贊

司馬遷

太史公曰、詩有之、高山仰止、景行行止、雖不能至、然心嚮往之、余讀孔氏書、想見其爲人、適魯觀仲尼廟堂車服禮器、諸生以時習禮其家、余低回留之、不能去云、天下君王、至于賢人、衆矣、當時則榮、沒則已焉、孔子布衣、傳十餘世、學者宗之、自天子王侯、中國言六藝者、折衷於夫子、可謂至聖矣、

增修 故事成語大辭典拾遺

ア

【於皇】嘆美の聲にいふ、詩經周頌に「一一來牟」來牟は麥なり、
【愛育】「カハユガリ、ソダツル」北史鮑宏傳に「宏七歳而孤、爲兄泉之所、
【愛多則憎至】本編の(恩甚シケレバ)を見よ、
【埃瑾】瑾一音アイ瑾は俗字「チリホコリ」塵埃に同じ、班固の西都賦に「軼一之混濁、梅堯臣の詩に「一一生歸軌」
【愛好】「スキコノム」南史謝靈運傳に「出爲永嘉太守、郡有名山水、靈運素所一遂肆意遨遊、所至輒爲詩、詠以致其意」
【愛幸】「メデカハユガル」史記五宗世家に「膠西王端

アア—アイコ (拾遺)

有、一少年爲郎、
【愛姬】「カハユガルヒメ」史記孫子傳に「吳王從臺上觀見且斬一駭、姬は衆妾の總稱、
【哀矜】「カナシミ、アハレム」矜は憐なり、論語に「如得其情、則一而勿喜」
【愛玩】「カハユガリ、モテアツブ」晉書樂志に「一在乎雕章、また葛洪傳に「洪性寡欲、無所一盡」
【愛敬】「イツクシミ」と、ウヤマヒ」と、孝經に「一盡於事親、而德教加於百姓」
【相敬スル賓ノ如シ】(相敬如賓)左傳に「曰季使過冀、見冀缺耕耨、其妻饁之、
【愛古】古の道を愛する義、北史景穆十二王傳に「下帷讀書、篤志、
【愛護】「タイセツ」に「マモル」顏氏家訓に「借人典籍、皆須一、
【愛國】己の國を「タイセツ」に思ひて心を盡す義、戰國策の秦策に「明主愛其國、苟悅の漢紀に「親民如子、

【愛山】

山騎馬入山來蘇軾の詩に、多君貴公子、一一如愛色

【愛子】「カハユキ、コまた子をカハユガル」左傳に「臣

聞一、教之以義方」

【愛シテモ其ノ惡ヲ知ル】人を愛しても、その愛に溺

ることなく、その人の惡しき點を知るは心の公平

なるなり、(愛憎)を見よ、また本編の(愛シテハソノ醜

ヲ忘ル)を參看せよ、

【愛親】親を愛する義、孝經に「一、親者不敢惡于人、敬

親者不敢慢于人」

【愛酒】(酒ヲ愛ス)李白の月下獨酌詩に「天若不、一、

酒星不在天、地若不、一、地應無酒泉」

【哀楚】「カナシミ、イタム」梁簡文帝の法昂墓誌に「同

志酸傷、交朋一」

【愛憎】「カハユガル」と「ニクム」と、穀梁傳序疏に「信

意一、禮記に「愛而知其惡、惡而知其善」

【埃塵】「ホコリ」チリ塵埃に同じ、晉書儒林傳に「羸氏

慘虐、棄德任刑、煬填籍於一、杜甫の詩に「人生無

賢愚、飄飄若一」

【愛梅】王冕の詩に「平生一、頗成癖、踏雪行穿一雙

の勸學篇の語、本編の(青、藍ヨリ)を見よ、

【愛樂】「イツクシミ、タノシム」詩經鹿鳴篇の疏に「一、

一其賓客」

【愛憐】「カハユガリ、アハレム」史記趙世家に「太后曰、

丈夫亦一、少子乎」

【快快】心に満足せざる貌、アキタラズ、漢書蕭望之傳

に「塞其一、心」

【盜盜】「サカンナル」貌、杜牧の李賀文集序に「春之

一、不足爲其和也」

【鶯鶯】唐の崔氏の女の名、美色を以て聞ゆ、元稹の會

眞記に「張生遊於蒲、有崔氏孀婦、命女一、出拜、顔色

豔異、光輝動人、李紳の一、歌に「綠窓嬌女字一、金

雀鴉、年十七」

【鶯歌】「ウグヒス」の聲、李適の奉和聖製春日幸望春

宮、應制詩に「蝶舞飛行飄、御席一、一度曲繞仙杯」

【鶯哥】「インゴ」蓋し一、の唐音なるべし、印度地方

に産す、鶯鶯の屬、形小く亦人語を學ぶ、羽色赤綠紫

黒等ありて最も美なり、本草に「鶯鶯大者爲鶯鶯、小者

爲一、」

アイラ—アウテ (拾遺)

【愛撫】

「ナデカハユガル」宋史范仲淹傳に「仲淹爲將、將

號令明白、一、士卒」

【埃氣】塵の起るをいふ、宋史王素傳に「日甚熾、一、

醫空」

【鞋襪】次條を見よ

【襪襪】襪は鞋に同じ、カハグツ(襪ハ、クサグツ)襪

は足衣、タビ唐書儀衛志に「皆有行膝一、」

【愛別離苦】人の離別の苦をいふ、佛家八苦の一、法華

經譬喻品に「一、一、怨憎會苦、如是等、種種諸苦、本

編の(八苦)を見よ、

【曖昧】「ボンヤリ」として明かならざる義、晉書の杜

預傳に「請伐吳表曰、臣心實了、不敢以一、一、之見、自

取後累」

【哀鳴】「カナシミ、ナク」詩經に「鴻雁于飛、一、一、啓啓」

【愛欲海】愛情と慾心との積りて深廣なるをいふ、海

は衆水の聚る所、なれば喩ふ、文選の王巾の頭陀寺

碑に「愛流成海、情塵爲岳」李善注に「瑞應經曰、感傷

世間、沒於愛欲之海」

【愛欲莫其於色】本編の(色)を見よ、

【藍ヨリ出テテ藍ヨリモ青シ】(出于藍而青于藍)荀子

【鶯花】「ウグヒス」と花と、郎士元の詩に「車馬雖嫌

僻、一、不厭貧」

【鶯簧】鶯の聲の「ウツクシキ」を笛の音に喩へてい

ふ、歐陽修の詩に「煖入一、舌漸調」

【秋雞】「クヒナ」本草に「一、大如小雞、白頰長嘴短尾

背有白斑、多居田澤畔、夏至後、夜鳴達旦、秋後即止、そ

の聲、人の戸を叩くが如し、故にその鳴くを「タタク」と

いふ、

【鶯語】「ウグヒスノコエ」鶯聲、鶯歌、鶯吟、鶯啼皆同じ、

孫綽の蘭亭詩に「一、吟、脩竹、遊鱗、戲、瀾、濤」

【鶯兒】鶯の「ヒヨッコ」鶯雛に同じ、曹松の詩に「學、語

一、飛、未、穩、放、身、斜、墜、綠、楊、枝、薩、都、刺、の、過、孫、虎、臣、圖

詩に「一、老去空臺榭、燕子歸來無、主、家」

【鶯唇】「ウグヒス」の「クヒル」陸龜蒙の詩に「一、映

花、老」

【鶯雛】鶯の「ヒナ」鶯兒に同じ、馬臻の村中書事に「一

一、未、省、逢、人、避、直、向、路、傍、花、上、啼」

【鶯舌】「ウグヒス」の「シタ」沈與求の春意詩に「宿露園

林一、亂、暖、風、庭、院、蜜、脾、香」

【鶯啼】「ウグヒス、ナク」鶯鳴に同じ、杜甫の詩に「春日

一、脩、竹、裏、仙、家、犬、吠、白、雲、閒、孔、平、仲、の、春、日、行、に、一、一

【花笑清明天、黄金買酒十千】

【懐惱】「ウラミ、ナヤム」晉書樂志に「隆安初、有『一之曲』白居易の詩に「巴童蠻女竹枝歌、一何人怨咽多」

【秧苗】「イネナ」范成大の詩に「竹葉垂頭碧、一滿意青」

【泱泱】「廣く大いなる貌、司馬相如の上林賦に「經乎經林之中、過乎一之楚」張衡の西京賦に「山谷原濕、一無疆」

【鶯鳴】「ウグヒス、ナク」禽經に「一嘒嘒張華の答何劭詩に「屬耳聽、一、流目翫、條魚」

【鸚鵡】「鸚鵡の羽毛の綠色なるをいふ、陸游の詩に「一猩紅極天巧」

【蛙ヲ産ス】「次條を見よ」

【龍ヲ産ス】「産龍」カヘルが生れる、成廷珪の詩に「水滿行廚欲、一、苔封老屋亂啼鴉」本篇の「沈窳」を見よ、

【阿綺】「齊國の東阿縣より出づるよき絹、轉じて繪の精しさものをいふ、史記李斯傳に「一之衣、錦繡之飾」

【丫鬟】「年わかき侍女、類書纂要に「一、小女、垂鬟、小婢也」

【揚ラズ】「不揚本編の(鬪ラズ)を見よ、

【秋高ク馬肥ユ】「秋の氣は澄みて天も高く見え、馬も肥えて逞しくなるをいふ、馬は性寒を好む、故に匈奴この時に乘じて邊境を侵すと常なり、漢書趙充國傳に「匈奴到、秋馬肥、變必起矣、宜豫爲備」杜審言の詩に「雲靜、妖星落、秋高塞馬肥」

【惡ヲ作ス之ニ百殃ヲ降ス】「作惡降之百殃」本編の(善ヲ作ス)を見よ、

【惡ヲ見テハ農夫ノ務メテ草ヲ去ル如クス】「見惡如農夫之務去草焉」本編の(濫崇)を見よ、

【惡ヲ未萌ニ絶ツ】「絶惡於未萌」惡心を未だ萌さざる前に絶滅する義、本編の(冥冥)を見よ、

【惡行】「惡しきおこなひ、詩の鄙風桑中篇の傳に「有是一」

【惡鬼】「人に害をなす惡しき鬼、史記始皇紀に「以辟一」

【惡金】「アシキ質の金、國語の齊語に見ゆ、

【惡溪】「唐書地理志に「處州麗水東十里有一、多水怪、宣宗時、刺史段成式有善政、水怪濟去、民謂之好溪」孟浩然の詩に「欲尋華頂去、不憚一、名」また本編の(鱸魚ノ)を見よ、

【惡口】「人を惡しきまにいふ、漢書王尊傳に「一不

【厭クコト無シ】「無厭、慾深くして足ることを知らざるをいふ、左傳桓十年に「虞叔有玉、虞公求旃、中略獻之、又求其寶劍、叔曰、是、一也」

【惡瘡】「タチノ、ワルキ、デキモノ」西陽雜俎に「土檳榔狀如檳榔、在孔穴間、得之、相傳蟾蜍矢也、不常有之、主治、一」

【握麴】「本編の(僱促)を見よ」

【惡詩】「拙惡なる詩をいふ、蘇軾が徐凝の作りし廬山瀑布の詩を嘲るに「世傳徐凝瀑布詩云、一條界破青山色、至爲塵陋、乃戲作、一絶、帝遣銀河一條垂、古來惟有謫仙詩、飛流澌沫知多少、不與徐凝洗、一、謫仙は李白をいふ、本編の(廬山ノ)を見よ、

【惡疾】「アシキ質の病、大戴禮本命篇の「女有五不取」の第四に「世有、一、不取」とあり、孔子の語、小學明倫篇にも引けり、

【惡心】「惡しき心、國語の魯語に「妄善則、一、生」

【惡酒】「アシキサケ」蘇軾の詩に「一、如惡人、相攻劇、刀箭」

【握手】「手を、ニギル」親む時の動作、史記滑稽傳に「一、無罰、游目不禁、後漢書李通傳に「共語移日、一、

【極歡】「性質の惡しき少年をいふ、荀子修身篇に「無廉恥而嗜乎飲食、可謂、一、者」矣」

【渥然】「顔色の、ツヤある貌、歐陽修の秋聲賦に「宜其、一、丹者、爲、稿木、黝然、黑者、爲、星星」

【惡黨】「惡人の「ナカマ」東觀秦記に「誅鋤、一、無漏網者」

【惡女】「ミニクキ女、史記に「美人入室、一、之仇也」

【惡ニ從フ崩ルルガ如シ】「從惡如崩」本編の(善ニ從フ登ル)を見よ、

【惡馬】「惡しき性の馬、晉書載記に「如乘、一、而持矛也」

【帷幕】「帷は四方に引き廻す「トバリ」「ヒキマク」左傳昭十三年の音義に「四合象宮室曰帷、在上曰幕、帷幕に同じ、

【惡魔】「人に害をなす惡しき魔物、涅槃經に「遇、一、法苑珠林に「昔如來樹下、一、波旬、將八十億衆、欲來壞佛」

【惡名】「アシキ名、左傳に「增、其、一、」

【惡モ積マザレバ以テ身ヲ滅スニ足ラズ】「本編の(善モ積マザレバ)を見よ、

【娃】 娃は美女、髪は總髻(ワゲ)——は美女の義に用ふ、李賀の神仙曲に見ゆ。

【阿兄】 「アニ」古詩爲焦仲卿妻作詩に「——得聞之、悵然心中煩」

【亞卿】 亞は次なり、九卿に次げる官をいふ、史記の樂毅傳に「樂毅遂委質爲臣、燕昭王以爲——」

【勝】 道ヲ可カラズ (不可勝道) —— 擧げて言ふことの出來ぬ程、多くある、史記梁孝王世家に「孝王寶太后少子也、愛之賞賜——」

【亞獻】 祭祀の時に初獻に次ぎて飲食物を獻ずるをいふ、儀禮に「主婦洗爵于房、酌——」

【鼗鼓】 「カヘルノコエ」鼗は蛙の古字、鼗に作る同じ、僧惟則の師子林即景詩に「樹根——鳴、殘雨、恍忽南山水樂聲」

【鴉背】 鋤の一種、形の似たるによりていふ、陸游の詩に「采藥常攜——」

【鴉兒】 唐の李克用の幼名、五代史記の唐本紀に「李克用少驍勇、軍中號曰李——鴉兒」

【足ヲ忘ル】 本編の(忘足)を見よ、

【汗出テ背ヲ沾ス】 (汗出沾背) 極めて恥ぢ入る義、史記陳丞相世家に「周勃不能對——」また後漢書伏皇后紀に「操出顧、左右汗流浹背」

【注然】 穴の如くくぼめる貌、注は窪に同じ、滂なり、柳宗元の始得西山宴遊記に「其高下之勢、岈然——、若埳若穴、尺寸千里、攢蹙累積、莫得遁隱、繁青綠、白、外與天際、四望如一」

【婀娜】 「シナヤカニ美なる貌、洛神賦に「華容——、令我忘餐、婀娜——」

【阿黨】 互に「オモネリテ」相結ぶ、禮記に「是察——、則罪無有掩蔽、唐書魏徵傳に「左右有毀、徵——親戚、者」

【味ヲニセズ】 (不二味) 本編の(食、味ヲ)を見よ、

【買ヲ待ツ】 本編の(待買)を見よ、

【買ヲ待ツテ沾ル】 (待買而沾) 書言故事に「時ヲ待ツテ動クヲ——」

【玉於斯、鑑覆而藏諸】 求善買、而沾諸、子曰沾之哉、沾之哉、我待買者也、君子は仕ふるを欲せざるにあらざ、其の道に由らざるを惡むなり、士の禮を待ちて仕ふる事、猶ほ玉の善買を待ちて沾るが如しとなり、買は價に同じ、

【鴨路草】 和名「ツユクサ」又「ホタルグサ」原野に多し、莖幹地に布き、節毎に葉を互生す、葉は竹葉に似て厚し、夏月深碧色の花を開く、その液にて藍紙を製す、本草に「——一名竹雞草、一名耳環草、一名藍姑草」

【鴨頭】 「カモノクビ」水の綠色に喩ふ、李白の詩に「遙看漢水——綠、恰似葡萄初撥、陸游の詩に「一篇湖水——綠、千樹桃花人面紅」

【敢テ當ラス】 (不敢當) 自ら謙して敢てその事に當らざるなり、儀禮士相見禮の「非敢求、見」の注に「嫌、主人、——也」

【阿母】 母をいふ、阿は發語、親ひ意あり、通鑑晉紀に「潘岳謝母曰、負——李商隱の詩に「去應逢——」阿兄は兄なり」

【阿摩】 梵語、女をいふ、翻譯名義集に「——此云女母、名吉利、小字——曹孟德を參看せよ、

【阿瞞】 魏の曹操の幼字、三國志曹操傳の注に「太祖——また唐の玄宗の幼時の自稱、羯鼓錄の注に見ゆ、

【黯黯】 「クラキ」貌、陳琳の詩に「蕭蕭山谷風、——天路

【價ヲ待ツテ沾ル】 前條を見よ、

【鴉陣】 鴉の羣り飛ぶにいふ、陸游の詩に「亂鴉陣起霜天晚、落葉聲乾古渡秋」

【頭】 「カブ」少女をいふ、輟耕錄に「吳中呼女子之賤者曰——劉賓客寄贈小樊詩、花面——十三四、春來綽約向人時」

【豈敢定居一月三捷】 豈敢て定居せん、當に成功の速かならんことを期すべし(一月三捷)を見よ、

【豈辯ヲ好マンヤ】 (豈好辯哉) 「ナニトテ」辯舌を弄すること好まんや、好みはせずとの義、孟子滕文公下篇に「孟子曰、予——不得已也」

【姊ノ爲メニ粥ヲ煮ル】 本編の(李勣——)を見よ、

【鴉背】 「カラスノセナカ」温庭筠の春日野行詩に「蝶翎粉盡——夕陽多」

【阿父】 叔父、伯父をいふ、資治通鑑宋紀に「——在汝亦何憂」の胡三省註に「江南人士、呼叔父、伯父爲——、爲伯父、叔父者以自呼、また父をいふ、本編の(——)を見よ、

【阿附】 「オモネリツク」後漢書に「——宦官」

【鴨脚】 銀杏(イテフ)樹の異名、葉の形の似たるにより名づく、黄山谷の詩に「霜林收——」本編の(銀杏)

陰陸睡の思田賦に「風溜溜以吹際燈一而無光」

【安慰】「ヤスンジ、ナグサメル」唐書の宗室傳に分遣使者、綏輯一其款附者四十有九州

【安佚】「ナマケテ、クラス」孟子盡心下篇に「四肢之於一也佚は逸に同じ、勞することを爲さざるなり、

【安逸】前條に同じ、

【安穩】心安く「オダヤカ」に無事なる義、三國志董卓傳に「海内一無故移都、恐百姓驚動」晉書顧愷之傳に「行人一布帆無恙」

【安行】勉めずして「ヤスンジョコナフ」禮記に「或安而行之」

【安康】「ヤスラカ」易林に「天福吉祥、永得一」吳志孫綽傳に「扶危定傾、一社稷、功勳赫然」

【暗香】「ヤミニ、キク」花の香、許渾の詩に「高竹動疎翠、早連飄一」本編の(梅)の山園小梅詩を見よ、

【暗號】符牒もて定むる「アヒツ」のしるし、堯山堂外紀に「蜀中類試、主司多私意、與士人相約爲一」

【暗香浮動月黄昏】何處とも知れず、梅花の香が浮び動くは、正に是れ黄昏の月の出て居る時なりとの意、本編の(疎影橫斜水清淺)を見よ、

【安閑】やすく静かなり、白居易の詩に「隨緣逐處便

【安一】「ヤスキ」と「アヤフキ」と、晉書宣帝紀に「凡事置一之安地、則安、危地則危、故兵書曰、成敗形也、一勢也」

【安危此ノ一舉ニ在リ】(安危在此一舉)國の安危の分るはこの一戦に在る義、史記項羽本紀に「國家一

【安臥】安らかに寝る、梁書賀琛傳に「惡人日滋、善人日蔽、欲求一其可得乎」

【安坐】安らかに落ちつきてすわる、莊子に「一一定氣」

【安在】「イヅクニアル」と讀む、史記項羽紀に「沛公一」また文帝紀に「今法有肉刑三、而姦不止、其咎一」何在に同じ、

【暗慘】「ラグラク、カナシ」杜甫の漢陂行に「天地一忽異、色波濤萬頃堆、瑠璃」

【案山子】和名、カガシ、竹葉等にて人の形を作り、篋笠を著せ、弓矢などを持たしめ、田圃に立て鳥獸の威しとするもの、五燈會元の涪州雲居道膺禪師の條に「僧出問曰、某甲不會、師曰、面前一、也不會、傳燈錄道膺禪師傳にも見ゆ、

【安史】唐の安祿山と史思明と、唐書柳冕傳に見ゆ、本

【安石榴】「ザクロ」宋書張暢傳に「求甘蔗一、博物志に「張騫使西域、還得塗林安石榴種、以歸」本編の(石榴)を見よ、

【安全】「ヤスク、マツタシ」孝經に「安上全下、莫善於禮」後漢書夏恭傳に「擁兵固守、獨一」

【鞍韃】鞍は「クラ」、韃は鞍の下の被「シタグラ」杜甫の詩に「雪沒錦一」

【闇然】「隱晦の貌、クラシ」中庸に「詩曰、衣錦尚絀、惡其文之著也、故君子之道、一而日章、小人之道、的然而日亡」古の學者は己が爲めにす、故にその心を立つること此の如し、綱を尙ふ、故に「一たり、錦を衣る、故に日に章かなるの實あるなり」また單に暗き貌、神女賦に「一而冥、忽不知處、通じて暗に作る」

【黯黯】前條を見よ、

【黯然】心の鬱して愁ふる貌、文選の江淹の別賦に「一銷魂者、惟別而已矣、また暗黒なる貌、史記孔子世家に「一而黑、幾然而長」

【安息】「ヤスラカニ、イコフ」詩經小雅小明に「嗟爾君子、無恒一」易林に「年豐歲熟、民人一」

【安泰】「ヤスラカ」易林に「解釋倒懸、歷國一」

編の(安祿山)を見よ、

【弇州山人四部稿】一百七十四卷、續稿二百七卷、明の王世貞撰す、四部とは賦部、詩部、文部、說部なり、續稿は賦詩文の三部のみにて、說部を闕けり、簡明目録に「世貞初、羽翼李攀龍、後歸然獨存、爲時者宿、其聲價遂出攀龍上、而攀龍刺襲、流弊萬端、其受攻亦甚、於攀龍、要其才學、當瞻規模、廣闊實足、籠罩羣材、尊世貞而薄古人、固爲不可、必欲併廢世貞、亦非通論也、(王世貞)を參看せよ、

【闇室】「くらくして人なき室、正字通に「程子曰、學始于不欺一」

【安輯】「ヤスンジ、ヤハラグ」輯は和なり、後漢書高帝紀に「共定天下、同一之」

【安集】前條に同じ、漢書曹參傳に「齊國一」史記の曹參世家にも「一百姓集は安なり」

【安心】心の安らかなる義、易林に「屏藩自衛、一無患」

【案上】「ツクエノウ」韋應物の詩に「幸無職事牽、且覽一書」

【安處】「ヤスンジテ、アル」詩經に「嗟爾君子、無恒一管子に「使五穀桑麻各安其處」

【安處】「ヤスンジテ、アル」詩經に「嗟爾君子、無恒一管子に「使五穀桑麻各安其處」

【暗澹】「ウスグラシ」杜牧の詩に「一遮山遠、空濛著柳多」

【黯淡】「ウスグラシ」郭熙の山水訓に「山水之雲氣、四時不同、春融怡、夏蒼鬱、秋疎薄、冬一淡一澹に澹に作る、吳融の詩に「不奈春烟籠黯澹、可堪秋雨洗分明」

【黯澹】前條に同じ。

【安置】安らかにする置く、搜神記に「一几前、韓愈の石鼓歌に「一安帖平不煩」

【案頭】「ツクエ」の上なり、杜甫の題鄭著作度詩に「窮巷悄然車馬絕、一乾死讀書螢、皮日休の讀書詩に「一見蠹魚、猶勝凡儂侶」

【案牘】本編の(明月ノ珠閣ヲ)を見よ、

【案牘】「トリシラブベキ」文書、唐書の本李巽傳に「天資長於吏事、治家亦勾檢、一簿書如公府、劉禹錫の陋室銘に「無絲竹之亂耳、無一之勞形」

【鞍ニ據リテ顧盼ス】(據鞍顧盼)本編の(豐鏢)を見よ、

【安寧】「ヤスラカ」詩經に「既安且寧」史記周本紀に「成康之際、天下、刑錯四十餘年不用」

【鞍馬】「クラ」をつけたる馬、後漢書桓郁傳の注に「東觀記曰、皇太子賜、郁、一刀劍、殷堯藩の上巳日贈都上人詩に「一皆爭麗、笙歌盡闌奢」

いふ、韓愈の平淮西碑の儲同人の評に「段文昌以駢四麗六一一之音、易鈞天之奏、直不知人間有羞恥事」

【阿蒙】(復吳下)を見よ、

【阿爺】父をいふ、阿は發語、親みの意を帶ぶ、木蘭の詩に「一無大兒、木蘭無長兄、阿嬢は母をいふ、

【啞羊僧】戒の行あれども鈍根にして勇猛精進の力なき僧、大智度論に「釋初品是僧四種、有羞僧、無羞僧、一實僧、持戒不破、身口清淨、能別好醜、未得道、是名有羞僧、破戒身口不淨、無惡不作、是名無羞僧、雖不破戒、鈍根無慧、不別好醜、不知輕重、不知有罪無罪、若有僧事、二人共爭、不能斷決、默然無言、譬如白羊不能作聲、是名一一、若有學人、若無學人、住四果中、行四向道、是名實僧」

【過ヲ救テ贖ラス】(救過不贖)己の過を救ひ改むるに日も足らざる義、戰國策に「太后一一、何暇乃私魏醜夫乎」史記李斯傳に「救過不給」とあるに同じ、

【安排】安らかに程よくする置く義、侯鯖錄に「自韓王一一、また孟郊の詩に「弱力謝剛健、蹇策貴一一」

【安否】身の安康なると然らざると、禮記文王世子篇に「文王之爲世子、朝於王季、日三、鷄初鳴而衣服、至於寢門外、問内醫之御者曰「今日一一何如、内醫曰「安、文王乃喜」

【安貧】(貧ニ安ンズ)續漢書に「王苑字孫仲、茅屋蓬戶、藜藿不厭、陶潛の詠貧士詩に「一一守賤者、自古有黔婁」

【安眠】やすらかに眠る、北史韓麒麟傳に「顯宗曰、臣仰遭直筆、無懼、又不受金、一一美食、此優於遷固也」顯宗は麒麟の子なり

【晏眠】朝「オソクマデ、オムル」アサネ杜甫の詩に「安得廉頗將三軍、同一一王逢の詩に「橫草無功日一一」

【安樂】「ヤスク、タノシム」易林に「麟風所遊、一一無憂、國語の晉語に「民生一一、誰知其他」

【安樂窩】宋の大儒邵雍の書齋の名(酒ヲ飲ンデ)を見よ、

【蛙鳴蟬噪】蛙が鳴き、蟬が躁ぎて「ヤカマシ」蘇軾の詩に「蛙鳴青草泊、蟬噪垂楊浦」

また蛙蟬の鳴き噪ぐ如く「ツマラス」文章又は議論を

イ 丑

【醫】説文に「治病工也、増韻に「療也、或作醫」後漢書に「醫之爲言、意也、周禮天官に「食醫ハ王ノ六食六飲六膳百羞百醬八珍ノ齊ヲ和スルコトヲ掌ル」また「疾醫ハ萬民ノ疾病ヲ養フコトヲ掌ル」また「獸醫ハ獸病ヲ療シ、獸瘍ヲ療スルコトヲ掌ル」後漢書に「黃憲世、貧賤、父爲牛醫、戴良見憲歸、罔然若有失、其母問曰「汝復從牛醫兒來耶、乳醫は今の産科醫、漢書霍光傳の注に見ゆ、論衡に「堯之使禹治水、猶病水者之使醫也、然則堯之洪水、天地之水病也、禹之治水、洪水之良醫也、帝王世紀に「黃帝使岐伯嘗草木、典醫療疾、本草に「俗無良醫、枉死者半、拙醫療病、不如不療、楚辭に「九折臂而成醫、李商隱の詩に「懸頭仍苦學、折臂反成醫、禮記に「醫不三世、不服其藥、王建の詩に「隔簾教喚女醫人、史記に「扁鵲來入咸陽、聞秦人愛小兒、卽爲小兒醫、また扁鵲名聞天下、過邯鄲、聞貴婦人、卽爲帶下醫、帶下醫は今の婦人科、

【帷幄】幕なり、古は謀を幕の中にて畫するによりて、謀臣の義に用ふ、後漢書郎顛傳の注に、「謂謀謀之臣、本編の籌策ヲを見よ。」

【威アリテ猛カラズ】(威而不猛)威嚴あれどもアラアラシカラズ、論語述而篇に「子温而厲、一、一、恭而安、孔子中和の徳、容貌の閑に見はるるをいふ、

【待委】風に隨ひて靡く貌、文選の郭璞の江賦に「隨風一、一、」

【畏友】「オソレ、ウヤマフ友、舒頌の詩に「王君我一、一、」

【意到筆隨】詩文などの心に思ふまゝ自由に筆の運ぶをいふ、春渚紀聞に「東坡曰、吾生平作文、意之所到、則筆力曲折隨之、無不盡意、」

【伊尹聖之任者也】本編の(金聲玉振)を見よ、

【黜聖】「アラグロク」塗る、黜は黒色の微に青色を帯ぶるなり、李觀の袁州學記に「殿堂門廡、一、一、丹漆、」

【由夷】許由と伯夷と、本編の(隋和ノ材)を見よ、

【幽客】世を避けて閑居せる客、また蘭の異名、三餘贅筆に「蘭爲一、一、また山礬の異名、三柳軒雜識に見ゆ、」

【憂喜聚門兮】本編の(倚伏)を見よ、

【熊魚】二ツながら美味なり、范成大の丙午新正書懷に「鵬鷗相安無可笑、一、自古不容兼(熊魚)を見よ、」

【幽愁】「シヅカナル、ウレヒ」白居易の琵琶行に「別有一、一、關恨生、此時無聲勝有聲、幽憂、幽悲と略同じ、」

【幽愁暗恨】人に知れざる、ウレヒ」と「ウラミ」と、前條また本編の(琵琶行)を見よ、

【幽室】「シヅカ」に人なき、ヘヤ、後漢書張湛傳に「居處一、一、必自修整、」

【熊掌】「クマ」の「タナゴコロ」極めて美味なりといふ、孟子の告子上篇に「魚我所欲也、一、亦我所欲也、二者不可得兼、舍魚而取一、一、者也、生亦我所欲也、義亦我所欲也、二者不可得兼、舍生而取一、一、者也、」

【右丞】後漢書百官志に「尙書省左丞一人、正四品上、右丞一人、正四品下、掌辨六官之儀、糾正省内、劾御史舉不當者、吏部戶部禮部左丞總焉、兵部刑部工部一、一、總焉、」

【幽邃】「シヅカ」に「オクブカシ」王延壽の魯靈光殿賦に「洞房叫窻而一、一、孫綽の天台賦に「逸彼絕域、一、一、窈窕、」

【耽賢】「イボ」と「コブ」と、以て無用の冗物の義とす、贅疣とも用ふ、本編の(具然)を見よ、

【幽花】「シヅカ」なる花、幽葩に同じ、杜甫の詩に「一、一、欲滿樹、小水細通池、齋賦の題畫の詩に「瘦竹如幽人、一、一、如處女、」

【右券】證書なり、史記平原君虞卿傳に「事成操一、一、以責左券ともいふ、

【輜軒】輕き車、使者の乗用とす、唐書高馮傳に「歲出一、一、幽谷ヨリ出テテ喬木ニ遷ル」(出自幽谷遷于喬木)幽は深なり、喬は高なり、鳥の深き谷より出てて、高き木に飛び遷るをいふ、詩經の小雅伐木篇に「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶、一、一、嚶其鳴矣、求其友聲、」

【遊山船】遊客を載する船、三才圖會に「一、一、其制首尾相等、下可裝載、上可坐客、吳中往往用以載酒、故以遊山爲名、然止可供遊客若駕長風、則不堪破浪耳、寓圃雜記に「遊山之舫、載妓之舟、」

【右史】(左史一)を見よ、

【有司】官吏をいふ、書經に「惟一、一、之牧夫、」

【幽州】唐の河北道一、一、今の直隸順天府大興縣の西

【右族】「イヘガラ」晉書歐陽建傳に「世爲冀方一、一、本編の(名門)を見よ、

【有待之身】後日事を爲さんと時機を待ちつつある身、禮記に「愛其死、以有待也、養其身、以有爲也、」別解あり、本編の(有待)を見よ、

【有道ノ碑】後漢書の郭泰傳に「泰卒、同志共一、一、刻石碑ヲ立ツ、蔡邕文ヲ爲ル、既ニシテ盧植ニ謂ヒテ曰ク、吾碑銘ヲ爲ル多シ、皆徳ニ慙ヅルアリ、惟郭有道ノミ愧色ナキノミト、有道は泰の字、

【熊膽】熊の「キモ」薬用とす、唐書柳公綽傳に「仲郢の母の韓氏一、一、を和し丸となし、夜仲郢をして嚙ましめ、勤學の助とせし事見ゆ、仲郢は公綽の子、

【遊談士】遊説などする策士、蘇秦張儀の徒の如し、本編の(切齒搗腕)を見よ、

【郵置】宿驛の義、置も亦郵なり、置郵ともいふ、燕翼貽謀錄に「前代一、一、皆役民爲之、」

【憂ニ丁ル】喪に遇ふ義、北史李彪傳に「彪表曰、禮云、臣有大喪、君三年不呼其門、伏見朝臣丁、大憂者、假滿赴職、愚謂如有遭父母喪者、皆聽終服、」

【熊蹯】熊の「アシノハラ」極めて美味なりといふ、曹植の名都篇に「炙一、一、陸游の詩に「烹栗煨芋、美敵、」

【右族】「イヘガラ」晉書歐陽建傳に「世爲冀方一、一、本編の(名門)を見よ、

【有待之身】後日事を爲さんと時機を待ちつつある身、禮記に「愛其死、以有待也、養其身、以有爲也、」別解あり、本編の(有待)を見よ、

【有道ノ碑】後漢書の郭泰傳に「泰卒、同志共一、一、刻石碑ヲ立ツ、蔡邕文ヲ爲ル、既ニシテ盧植ニ謂ヒテ曰ク、吾碑銘ヲ爲ル多シ、皆徳ニ慙ヅルアリ、惟郭有道ノミ愧色ナキノミト、有道は泰の字、

【熊膽】熊の「キモ」薬用とす、唐書柳公綽傳に「仲郢の母の韓氏一、一、を和し丸となし、夜仲郢をして嚙ましめ、勤學の助とせし事見ゆ、仲郢は公綽の子、

【遊談士】遊説などする策士、蘇秦張儀の徒の如し、本編の(切齒搗腕)を見よ、

【郵置】宿驛の義、置も亦郵なり、置郵ともいふ、燕翼貽謀錄に「前代一、一、皆役民爲之、」

【憂ニ丁ル】喪に遇ふ義、北史李彪傳に「彪表曰、禮云、臣有大喪、君三年不呼其門、伏見朝臣丁、大憂者、假滿赴職、愚謂如有遭父母喪者、皆聽終服、」

【右文】 右は上なり、文を「タフトブ」宋史の禮志に「廣列聖崇儒」之聲、また同書徽宗紀に「政和五年四月庚戌改集賢殿爲一殿」また潘炎の君臣相遇樂賦に「或一而左武、或先吁而後唱」とあるは文武を左右にする義なり、

【幽渺】 張皇ス (張皇幽渺本編の「罅漏」を見よ、)

【遊牧記】 本編の(蒙古)一を見よ、

【幽約】 浮世を離れたる「シヅカ」に風流なる約束、陳高の送陸有章詩に「我性亦愛山、方期結一」

【牖ヨリス】 (自牖) (約ヲ納ルル)を見よ、

【井ヲ鑿チテ飲ミ、田ヲ畊シテ食フ】 (鑿井而飲) 本編の(擊壤ノ)を見よ、

【猗歎】 嘆美の聲「アア」文選の班固の東都賦に「一緝熙、允懷多福」

【伊皋】 殷の湯王の相伊尹と、唐虞の際の相皋陶と、共に古の良相、後漢書の班固傳に「將軍宜詳唐殷之舉、察一之薦、令遠近無偏幽隱畢達」

【異客】 異りたる地に客たる人をいふ、王維の九月九日憶山中兄弟詩に「獨在異鄉爲異客、每逢佳節倍思親」

【怡顏】 顔色を「ヨロコバス」陶潛の歸去來辭に「胸庭柯以」

【衣錦還郷】 富貴にして故郷に「カヘル」をいふ、南史柳慶遠傳に「爲雍州刺史、帝餞于新亭、曰、卿一、朕無西顧之憂矣、本編の(錦ヲ衣テ)を參看せよ、

【衣錦之榮】 富貴にして故郷に還る榮譽をいふ、歐陽修の相州書錦堂記に「仕宦而至、將相、富貴而歸、故郷、此人情之所榮、而今昔之所同也(中略)一介之士得志於當時、而意氣之盛、昔人比之、一者也」

【異郷】 他郷に同じ、異客を見よ、

【穢】 茂り盛んなる貌、詩經小雅信南山篇に「黍稷一穢」

【郁烈】 香氣の烈しき貌、文選の曹植の洛神賦に「踐椒塗之、一歩、薄而流芳」

【伊霍】 伊尹と霍光との二人をいふ、國家のために暗君を放ち若くは廢せし人なり、本編の伊尹)また(霍光)を見よ、轉じて逆臣が君主を廢立する義にも用ふ、晉書に「桓温陰蓄不臣之志、及枋頭之敗、威名頓挫、都超勸温行一之事、以立大威權、温遂入朝、白太后、廢帝」

【威權】 威光と權柄と、漢書異姓諸侯王年表に「用一

一爲萬世安」

【意言外ニ溢ル】 本編の(明ノ王鑿)を見よ、

【彙刻書目】 十卷、清の顧修(桐川)ノ人、葦屋ト號ス撰す、叢書の目錄なり、後ち朱記榮之を増續して二十卷として刊行す、また松澤老泉(江戸)ノ書肆、通稱和泉屋庄二郎、慶元堂ト呼ベリ)は顧氏本の遺を補ひて一一外集六卷を撰せり、別に續一一十二卷、清ノ傅雲龍ノ撰あり、

【遺恨】 「ザンネン」に思ふ、遺憾に同じ、唐の崔國輔の詩に「古人不達酒不足、一精爽傳此曲」

【異産】 他國に産せし動物、左傳僖十五年に「今乘一以從戎事」

【醫師】 醫者の「カシラ」師は長なり、また廣く醫者をいふ、周禮に「一掌醫之政令、聚毒藥以共醫事」

【衣食】 「キモノ」と「タベモノ」左傳に「一所安、弗敢專也、必以分人」儲光義の田家雜興詩に「一既有餘、時時會親友」

【委質】 初めて君に仕ふる義、質は贄なり、本編の(質ヲ委ス)を見よ、一解に質は形體なり、形體を君に委かする義、この説に従へば質の音シツなり、何れにしても質をチと讀むは妥ならず、

【遺矢】 大便をする、史記廉頗傳に「一飯三一一矢は屎なり、

【伊周】 殷の湯王の相、伊尹と、周の武王成王の相、周公旦となり、二人共に古の良相、故に併稱す、文選の潘岳の西征賦に「彼負荷之殊重兮、雖一一其猶殆」

【石ヲ見テ虎ト爲ス】 (見石爲虎) 本編の(李廣石ヲ)を見よ、

【石ヲ以テ水ニ投ズ】 (以石投水) 何の障りもなく「タヤスク」出来るに喩ふ、文選の李康の運命論に「張良受黃石之符、誦三略之說、以游羣雄也、如以水投石、莫之受也、及其遺漢祖也、其言也、如一一、莫之逆也」

【渭城】 本編の(咸陽)陽關ノ曲)を見よ、

【帷牆之制】 人君が左右の臣妾のために制御せらるるをいふ、帷は婢妾の止る所、牆は臣隸の居る所、故にいふ、鄒陽の獄中上梁王書に「今人主沈詔諛之辭、牽一一、使不羈之士與牛驥同皂」

【圯上老人】 楚の地方にて十橋を圯といふ、蘇軾の留侯論に「此一一所爲深惜者也(張子房)を見よ、

【遺珠】 拾ひ遺されたる「タマ」張籍の罔象得玄珠詩に「赤水今何處、一一已渺然」

また古人の詩文の未だ世に知られざる傑作に喩へてもいふ書名に文淵あり、
 【衣食於奔走】生活のために彼此と、ハシリマハル韓愈の與陳給事書に「貧賤也——これ奔走於衣食を倒装せし句なり、
 【夷齊】本編の(伯夷叔齊)を見よ、
 【衣帶】「オビ」漢書王莽傳に「亂首垢面、不解——連月古詩に「相去日以遠、——日以緩」
 【遺體】子たる者が己の身體をいふ、即ちこの身は父母の遺し置かれたるものなりとの義、禮記の祭義に「曾子曰、身也者、父母之——也、行、父母之遺體、敢不敬乎」
 【至哉天下樂終日在書案】本編の(書案)を見よ、
 【委遲】「グヅグヅ」して、物に躓き進み難き貌、世説容止篇に「——而歸」
 【倭遲】「同りて遠き貌、詩經小雅四牡篇に「四牡騤騤、周道——騤騤は行きて止まらざる貌、周道は大路なり、
 【一鑑】西京雜記に「遺黃金——演繁露の趙與蘇秦黃金百鑑の註に「二十兩ラー一ト爲ス」一解に二十四兩、また三十兩を鑑といふとあり、
 【遺箋】「テオチノハカリゴト」説苑權謀篇に「萬舉而

無——失策」遺策に同じ、
 【異中ニ同アリ】異りたる中にも同じき點あるをいふ、宋の黃庭堅の書法を論ずる語中に「同中有異、異中有同」
 【一槩】善さも悪しきも「スベテ」オシナベテ「——」にする義、楚辭に「——而相量」
 【一月九遷】一月中、九度官位の進むをいふ、文選の任昉の代范雲謝表に「千秋之——、荀爽之十旬遠至、方之微臣、未爲速達」千秋は前漢の人、高祖の寢郎たり、一月に九遷して丞相となれり、
 【二月三捷】戰勝の速なるをいふ、詩經小雅鹿鳴之什采芣篇に「戎馬既駕、四牡業業、豈敢定居、——」朱注に「戎馬既ニ駕シテ四牡盛ナリ、則チ何ゾ敢テ以テ定居センヤ、庶クハ一月ノ間、三戰シテ三捷センノミ」
 【一言半句】少しばかりの「コトバ」明心寶鑑に「——」
 【一言半辭】前條に同じ、史記信陵君傳に「公子曰、侯生曾無——送我」
 【一事ヲ生ズルハ一事ヲ減ズルニ若カズ】(生一事不若減一事)本編の(一利ヲ興スハ)を見よ、
 【一日再晨ナリ難シ】本編の(盛年重ネテ)を見よ、

【一日敵ヲ繼スハ數世ノ患ナリ】一日たりとも敵をゆるし置くは數世まで患を遺すとの意にて、古語なり、左傳僖三十三年に「先軫曰、秦不哀吾喪、而伐吾同姓、秦則無禮、何施之爲、吾聞之、一日縱敵、數世之患也、云」
 【一代】一世に同じ、漢書曹參傳に「何參擅功名、位冠羣臣、聲施後世、爲——之宗臣、何は蕭何、參は曹參、
 【一場春夢】人生の榮枯盛衰は、春の夢の忽ちに「ナムル」如く「ハカナキ」をいふ、侯鯖錄に「東坡行歌、田間、
 儲婦曰、內翰昔日富貴、——、坡然之人呼此婦曰、
 春夢婆、
 【一條】一件の事をいふ、晉書劉實傳の「撰春秋條例二十卷」の顔師古の注に「凡言條者、一一而疏舉之、若木條焉」
 【一年ノ計ハ春ニ在リ】一年中の計畫は、春の初に於て豫定すべし、然らざれば空しく何事も爲さずして歲月を過すに至るべしとの義、梁元帝の纂要に「一年之計在于春、一日之計在于晨(四計)を參看せよ、
 【一瓣香】「ヒトツマミ」の香を焼く義、人を敬ふに用ふ、書言故事に「宋陳思道、字無己、號后山、詩曰、向來——、敬爲會南豐」

【一暴十寒】本編の(一日之ヲ暴メ)を見よ、
 【一枚】一箇に同じ、我が國にては紙または板の如き薄き物を數ふるに用ふれども、支那にては廣く物を數ふるに用ふ、説文に「枚ハ幹ナリ、又箇ナリ、樹枝ヲ條トイヒ、幹ヲ枚ト曰フ、故ニ凡ソ事ヲ數フルヲ條ト曰ヒ、物ヲ數フルヲ枚トイフ」史記田完世家に「梁王曰、若寡人國小也、尙有徑寸之珠、照車前後各十二乘者十枚」
 【一面】一方面の略、史記留侯世家に「良曰、漢王之將、獨韓信、可屬大事、當——」
 【一沐ニニタビ髮ヲ捉ル】本編の(吐哺)を見よ、
 【一沐ニニタビ髮ヲ捉ル】本編の(吐哺)を見よ、
 【一沐三握髮】本編の(饋ニタビ)を見よ、
 【一樣】「オシナベテ」同じき義、章碣の詩に「九陌煙花一——飛」
 【幃帳】幃は帷に同じ、「トバリ」大方便佛報恩經に「生長深室、臥則——、幃幃、幃幕、幃幔皆同じ、
 【一勞永逸】一度、ホネヲリテ永く安樂する義、齊民要術に「首着長生、種者——、榆砍後、復生、不煩耕種、所謂——」
 【一里一塚】一里塚をいふ、北史韋孝寬傳に「孝寬爲雍州、改路側一里置一土塚、處植槐木、代焉、周文帝令

天下效之。一里植一木、二里植二木、百里植百木、字典に「塚ハ土ヲ封ジ、壇ト爲シ、以テ里ヲ記スルナリ」とあり。

【一惡ヲ以テ衆善ヲ忘レズ】 (不以一惡忘衆善) 本編の(明王ノ人ヲ)を見よ。

【佚遊】 怠りて「キマリナク、アツブ」論語季氏篇に「樂驕樂、樂一、樂宴樂、損矣、佚は逸に通ず」。

【汨汨】 水の盛んに流るる貌、楚辭に「浩浩沅湘兮、分流汨兮、轉じて文章の滞りなく、サラサラ」と勢よきに「もいふ、韓愈の答李翊書に「當其取於心而注於手也、一然來矣」。

【一ヲ以テ萬ヲ知ル】 (以一知萬) 二理を推して萬理を知るをいふ、荀子非相篇に「以近知遠、一、一、以微知明」。

【一箇】 一個に同じ、箇一に個に作る、揚子方言に「箇、枚也、また荀子議兵篇に「負矢五十箇」个は古字、經典皆之を用ふ、箇は六國の時より、個は漢末より用ひらる、

【一階半級】 僅ばかりの官位をいふ、顔氏家訓勉學篇に「或因家世餘緒、得一、一、及公私宴集、談古賦詩、塞默低頭、欠伸而已」一資半級に同じ、

【一箇】 (半箇)を見よ、

【一箇】 (半箇)を見よ、

【一箇】 (半箇)を見よ、

【一箇】 (半箇)を見よ、

【一箇】 (半箇)を見よ、

【一箇】 (半箇)を見よ、

【一箇】 (半箇)を見よ、

【一箇】 (半箇)を見よ、

【一箇】 (半箇)を見よ、

【一箇】 (半箇)を見よ、

【一箇】 (半箇)を見よ、

【一箇】 (半箇)を見よ、

【一箇】 (半箇)を見よ、

【一箇】 (半箇)を見よ、

【一箇】 (半箇)を見よ、

【一箇】 (半箇)を見よ、

【一行吏ト爲ル】 (一行爲吏) 他事をなげうちて一意官吏となるをいふ、文選の嵇康の與山巨源絶交書に「遊山澤、觀魚鳥、心甚樂之、一、一、此事便廢」。

【一寒】 甚しく貧寒なる義、史記范雎傳に「范叔一、一、如此」。

【一竿、風月】 一本の釣竿にて風月を樂むをいふ、陸游の感舊詩に「回頭壯遊眞昨夢、一、一、老南湖」。

【一射】 兩手にて、スクフを射といふ、掬に同じ、詩經小雅采芣篇に「終朝采芣、不盈一、一、綠は王芻(カリヤス)なり、一名青芣」。

【一掬】 前條を見よ、

【一琴、一鶴】 清廉なる人を稱していふ、琴鶴を見よ、

【一炬】 一の「カガリビ」南史沈慶之傳に「慶之討諸山蠻、連營山下、令諸軍各穿池於營內、朝夕不、外汲、兼以防、蠻之火、頃之風甚、蠻夜下山人提、一、燒營、火至輒以池水灌滅之、楚人一、一、を見よ、

【一局、碁】 一の「ゴパン」の圍碁、許渾の詩に「醉斜烏帽髮如絲、曾看仙人一、一、李遠の詩に「長日惟消一、一、温庭筠の詩に「一局殘碁千點雨」。

【一區】 一の區劃ある場所、史記孟荀傳に「騶衍以爲中國名曰赤縣神州、中國外、如赤縣神州者九、有裨海」。

【一切藏經】 すべて七千餘卷、略して一切經ともいふ、佛書の經律論の三藏をすべて稱す、南北朝以後世世選定して、時の天子の勅によりて、經藏の中に收むることとせり、我が邦にては、宇治の黃蘗寺にて翻刻せり、

【逸材之獸】 「スグレテ勢の猛さ、ケダモノ」司馬相如の諫獵上疏に「今陛下好陵阻險、射猛獸、卒然遇一、一、駭、不存之地、犯屬車之清塵、云云」一本逸材を軼才に作る、

【軼才之獸】 前條を見よ、

【一壯】 灸一、一、するを一、一、といふ、三餘贅筆に「醫家用艾一、一、謂之一、一、」。

【一雙】 一對なり、「ヒトソロヒ」史記の項羽本紀に「白壁一、一、欲獻項王」。

【一山】 本編の(一、一)を見よ、

【一祭】 一笑に同じ、祭は鮮明の義、よりにて白き齒を「アラハシ」て笑ふ意とす、穀梁傳昭四年に「軍人祭然皆笑注に「盛笑ノ貌」己の作りたる詩文などを人に示すを謙して「博一、一、」などと書く、

【逸事】 人の行事の、未だ世人に知られざるものをいふ、柳宗元に「段太尉一、一、狀」方苞に「左忠毅公一、一、の」。

文あり、本編の(軼事)を參看せよ、

【軼詩】 本編の(逸詩)を見よ、

【壹是】 「モツバラ」是は助辭なり、大學に「自天子至庶人、一皆以修身爲本」

【聿修】 聿は述なり、祖先を思ひてその徳を述べ、修むる義、詩經大雅文王篇に「無念爾祖、聿修厥德」一解に聿は發語、

【一視同仁】 平等に慈愛するをいふ、韓愈の原人に「聖人、一而一、篤近而舉遠」

【一資半級】 僅かばかりの官位をいふ、柳氏家訓に「急於名宦、匿近權要、一雖或得之、衆怒羣猜、鮮有存者、一階半級に同じ、

【一舍】 三十里をいふ(三舍ヲ)を見よ、

【一餉】 一飯に同じ、一時は「イチド」飯を「タベル」閉にて、僅少の時間をいふ、韓愈の詩に「雖得一樂、有如聚飛蚊」

【一觴一詠】 酒を飲みながら詩を詠する義、王羲之の蘭亭集序に「雖無絲竹管弦之盛、一亦足以暢敘幽情」

【一首】 詩文を數ふるにいふ、猶ほ一篇といふ如し、日尾荆山の說に、首とは各篇首尾相具するの略言なら

白詩に「何時一酒、重與細論文」

【一刀兩斷】 情實などに「ヒカサレズ」斷然たる處置をする義、朱子語錄に「克己者、是從根源上、一便斬絶了」

【一簞食一豆羹】 少しばかりの食物、孟子告子上篇に「一得之、則生弗得則死」

【一致】 「オモムキ」を同する義、易の繫辭に「天下同歸而殊塗、一而百慮、陸機の秋胡行に「道雖一、塗有萬端」

【一籌ヲ輸ス】 (輸一籌) 籌は「カズトリ」輸は負くるなり、人に一籌負くる義、喬宇の遊嵩山記に「至日鶴觀、觀去山絶頂、尚二三里、君采素清驪、至觀前、已疲甚、不能至、絶頂予歸、顧而笑曰、若輸我一籌矣」

【一張】 琴を數ふるにいふ、宋書陶潛傳に「蓄素琴一張、

また被皮、紙等のうすきものを數ふるにも用ふ、劉禹錫の詩に「一隻短舫艇、一斑鹿皮」

また一たび張る、禮記雜記に「一弛文武之道也」本編の(二張一弛)を見よ、

【乙鳥】 「ツバメ」本編の(燕)を見よ、

【一朝一夕】 少しの時間をいふ、易の文言傳に「臣弑其

んといへり、晝簪錄に「史記田儼傳贊、嗣通者、善爲長短說、論戰國之權度、爲八十一首、首之字始見于此、其後揚子太玄有八十一首、猶易之六十四卦也、後世詩文、一篇稱一首、恐出於此」

【一瞬】 一度「マタタキ」する間に、極めて短き時間の義とす、前赤壁賦に「天地曾不能以一瞬」

【一曙】 一旦に同じ、呂氏春秋孟春紀に「一失之、終身不復得」

【一齊】 平等の義、莊子に「萬物一、孰長孰短」

【一隻眼ヲ具ス】 (具一隻眼) 一の「メダマ」を具ふ、一見識を有するにいふ、滄浪詩話に「大曆以前、分明別是一副言語、晚唐分明別是一副言語、本朝諸公、分明別是一副言語、如此見、方許一」

【一雲】 「コサメ」の一過する義にて、極めて短き時間の義とす、鄭谷の垂楠の詩に「一菱荷雨、幾回簾幕風」孟郊の詩に「昨夜一雨」

【一則】 一條に同じ、もと佛書にていふ、後世は儒書にてもいふ、容齋隨筆に「卷第一、二十九則、卷第二、二十四則」

【一尊】 一ツの「サカダル」尊は樽また罇に同じ、白居易の酒功讚に「孕和者何、濁醪一」杜甫の春日憶李

君子弑其父、非一之故、其所由來、者漸矣、一

一の解、本編にも出づ、併看せよ、

【一鳥不鳴山更幽】 王安石の鍾山即事に「湖水無聲繞竹流、竹西花草弄春柔、茅簷相對坐終日、一王籍の「蟬噪林逾靜、鳥鳴山更幽」を翻案せしなり、

【一擲】 一度抛ち捨つる義、生命を捨つるには、李白の結襪子樂府に「感君恩重許君命、太山一輕鴻毛」また金錢を捨つるには、晉書袁耽(字彦道)傳に「就局十萬、一直上百萬、また何無忌傳にも「劉毅家無儻石之儲、擲蒲一百萬」本編の(一擲乾坤)を參看せよ、

【一杯水】 一ツの「サカツキ」の水、少量の水をいふ、孟子告子上篇に「以一救一車薪之火」

【一方之任】 一方面を統へ治むる任、漢書終軍傳に「不足抗一」

【一髮】 遠方に見ゆる青山に喩ふ、蘇軾の澄邁驛通潮閣詩に「杳杳天低鶴沒處、青山一」是中原、虞集の詩に「青山一」是江南、白頭不歸神獨往、

【一半】 半分をいふ、李白の短歌行に「麻姑垂兩鬢、一已成霜、李益の登天壇詩に「九州下視杳未旦、一

浮生皆夢中

【飯ニニタビ嘔ヲ吐ク】本編の「饋二十タビ」(吐嘔)を見よ。

【一噸一笑ヲ愛ム】(愛)一噸一笑、噸は聲に同じ、憂ひて顔をひそむるなり、少しの憂喜にても外面にあらはすことを愛みてせざる義、韓非子内儲説上に「韓昭侯曰、明主一噸一笑有爲、笑、梁簡文帝の龍笛曲に「金門玉堂臨水居、一噸一笑千萬餘」

【一白】白居易の對酒詩に「人生一歲、通計三萬日」

【婦織ラザレバ天下其ノ寒ヲ受ク】(一夫耕サザレバ)を見よ。

【夫耕サザレバ天下其ノ飢ヲ受ク】(一夫不耕天下受其飢)潘夫論に見ゆ、下に「婦不織、天下受其寒」とあり。

【餅】「ヒトカタマリ」の金、後漢書樂羊子妻傳に「得遺金一餅」

【片】「ヒトキレ」後漢書周燮等傳序に「日買猪肝一」

【一畝之宮】一畝ばかりの貧しき家、禮記の儒行篇に「一畝之宮、環堵之室、華門圭竇、蓬戶甕牖」

また「ヒトヒラ」杜甫の曲江詩に「一花飛滅、御春」

【遺金】「ヒトカタマリ」の金、後漢書樂羊子妻傳に「得遺金一餅」

【片】「ヒトキレ」後漢書周燮等傳序に「日買猪肝一」

【一畝之宮】一畝ばかりの貧しき家、禮記の儒行篇に「一畝之宮、環堵之室、華門圭竇、蓬戶甕牖」

また「ヒトヒラ」杜甫の曲江詩に「一花飛滅、御春」

【遺金】「ヒトカタマリ」の金、後漢書樂羊子妻傳に「得遺金一餅」

【片】「ヒトキレ」後漢書周燮等傳序に「日買猪肝一」

【一畝之宮】一畝ばかりの貧しき家、禮記の儒行篇に「一畝之宮、環堵之室、華門圭竇、蓬戶甕牖」

また「ヒトヒラ」杜甫の曲江詩に「一花飛滅、御春」

【遺金】「ヒトカタマリ」の金、後漢書樂羊子妻傳に「得遺金一餅」

【片】「ヒトキレ」後漢書周燮等傳序に「日買猪肝一」

【一畝之宮】一畝ばかりの貧しき家、禮記の儒行篇に「一畝之宮、環堵之室、華門圭竇、蓬戶甕牖」

また「ヒトヒラ」杜甫の曲江詩に「一花飛滅、御春」

【遺金】「ヒトカタマリ」の金、後漢書樂羊子妻傳に「得遺金一餅」

【片】「ヒトキレ」後漢書周燮等傳序に「日買猪肝一」

【一畝之宮】一畝ばかりの貧しき家、禮記の儒行篇に「一畝之宮、環堵之室、華門圭竇、蓬戶甕牖」

また「ヒトヒラ」杜甫の曲江詩に「一花飛滅、御春」

【遺金】「ヒトカタマリ」の金、後漢書樂羊子妻傳に「得遺金一餅」

【片】「ヒトキレ」後漢書周燮等傳序に「日買猪肝一」

【一畝之宮】一畝ばかりの貧しき家、禮記の儒行篇に「一畝之宮、環堵之室、華門圭竇、蓬戶甕牖」

【逸豫】「アツビタノシム」本編の「戸位素餐」を見よ。

【逸樂】遊びて「タノシム」史記伯夷傳に「終身一富厚」

【出ルヲ量リテ以テ入ルヲ制ス】(量出以制入)支出の金額を計りて、それに應ずべき收入の道を定むる義、通鑑唐德宗紀に「楊炎建議、作兩稅法、先計州縣每歲所應費用、及上供之數、而賦於人、一」

【出必告反、必面】子たる者の家を出入する心得、本編の(面)を見よ。

【威斗】王莽の作りし器の名、漢書王莽傳に「鑄作一」

【一者】以五石銅爲之、如北斗、長二尺五寸、欲以厭勝衆兵、既成、命司命負之、莽出在前、入在御傍、李奇曰、五色ノ藥石及ビ銅ヲ以テ之ヲ爲ル、其ノ羣雄ヲ威禦スルヲ以テ、故ニ一ト曰フ

【古之遺直】本編の(遺直)を見よ。

【狗吠深巷中】本編の(陶淵明)を見よ。

【遺芳】「ノコレル、ニホヒ」また後世に残れる美名、また德、張華の詩に「誰與觀」

【傳に后承前訓、奉述一】行立獨咨嗟、晉書后妃傳に「后承前訓、奉述一」

【曰ク言ヒ難シ】(曰難言)「ナカナカ」容易には言ひ難しとの義、孟子公孫丑上に「敢問、何謂浩然之氣、曰難

【遺乘】「トリノコシタル」禾の「タバ」乗は刈り取りたる禾の「タバ」詩經小雅大田篇に「彼有一一、此有滯穗」

轉じて前人の未だ氣附かざる經說史論などを補ふを「一」を拾ふといふ、書名に、荀子「一」あり。

【家徒ニ四壁】本編の(壁立)を見よ。

【家富疎族聚】本編の(富貴ナレバ他人)を見よ。

【未ダ曾テ到ラザルノ山水ヲ歷】(歷未曾到之山水)本編の(未ダ曾テ見ザル)を見よ。

【未ダ嘗テ城府ニ入ラズ】(未嘗入城府)片田舎に隠れ居りて未だ一度も城下に至らず、後漢書龐公傳に「居峴山之南、一」

【未ダ學ビズト曰フト雖モ吾ハ必ズ之ヲ學ビタリト謂ハン】(雖曰未學、吾必謂之學矣)本編の(賢ヲ賢トシテ)を見よ。

【未ダ鹿ノ誰ノ手ニ死スルヲ知ラズ】(未知鹿死誰手)未だ天下が誰に歸するかを知らざる義、鹿を以て天下に比す、晉書石勒載記に「勒曰、朕若逢高皇、當北面而事之、脱遇光武、當竝驅中原、一」

【今ノ學者ハ祿ニ渴ス】本編の(古ノ學者ハ)を見よ。

【異味ヲ嘗ム】(嘗異味)常に異りたる珍味を食ふ、本

【威武モ屈スル能ハズ】本編の(貧賤モ)を見よ。

【移文】移書に同じ、フレブミ、また「シラセブミ」本編の(北山)を見よ。

また文移に作る、後漢書光武紀に「於是致僚屬、作文移、注に「文書ヲ屬縣ニ移スナリ」

【威武モ屈スル能ハズ】本編の(貧賤モ)を見よ。

【移文】移書に同じ、フレブミ、また「シラセブミ」本編の(北山)を見よ。

また文移に作る、後漢書光武紀に「於是致僚屬、作文移、注に「文書ヲ屬縣ニ移スナリ」

【威武モ屈スル能ハズ】本編の(貧賤モ)を見よ。

【移文】移書に同じ、フレブミ、また「シラセブミ」本編の(北山)を見よ。

また文移に作る、後漢書光武紀に「於是致僚屬、作文移、注に「文書ヲ屬縣ニ移スナリ」

編の(未ダ曾テ見ザル)を見よ、

【意味深長】詩文等の義理の深きをいふ、論語の序説に「程子曰、爾自十七八、讀論語、當時已曉文義、讀之愈久、但覺(イニシ)——(イニシ)——」

【隱】本編の(隱語)を見よ、

【淫淫】流るる貌、楚辭に「涕——其若(淫)——」

【陰陰夏木轉(黄鷄)】本編の(漠漠水田)を見よ、

【淫雨】「ナガアメ」淫は霑に同じ、本編の(霏雨)を見よ、

【陰雨】天「クモリ」て雨降る、詩經小雅黍苗に「芄芄黍苗——膏之、爾風鷓鴣に「迨天之未(イニシ)——、徹彼桑土、

綱繆庸戶」

【溼鬱】溼は埴に通ず、本編の(溼鬱)を見よ、

【陰翳】樹などの「カゲ」の薄き義、朱德潤の石榴詩に「雨餘鳴(鷓鴣)——(イニシ)——」

【因緣】「ユカシ」名義集に「因謂先無其事、而從彼生也、緣謂素有其分、而從彼起也、故因親而緣疎、譬ば穀を地に植うれば、稻を生ず、穀は因なり、地は緣なり、稻は果なり、而して之を行ふを業といふ、人事は皆この因緣、因果、因業の關係によりて成るなり、

【印可】許す義、允可に同じ、論語の皇侃の義疏に「皆被(孔子)——」

而後充、其操者也、

【禪祀】潔齋(モノイミ)して行ふ祭、左傳隱十一年に「而況能(イニシ)——許乎」

【飲食ヲ菲クシテ孝ヲ鬼神ニ致ス】(菲飲食、而致孝乎鬼神)本編の(閉然スルナシ)を見よ、

【陰陽】陰は定なり、天が冥冥の中に在り、默してその民を安定するをいふ、書經洪範に「惟天——下民——」

【引伸】文字などの本義より、他の意味に引き伸して轉用するをいふ、易經に「引而伸之、觸類而長之、天下之能事畢矣」

【印書】版本をいふ、道山清話に「張文潛嘗言、近時——盛行、而(印)書者、往往皆士人、躬自負擔、

【飲食男女ハ人ノ大慾存ズ】飲食物と男女の情とは、人の大いなる欲情の存するものなれば、謹むべしとの義、禮記の禮運篇に「飲食男女、人之大慾存焉、死亡貧苦、人之大惡存焉、

【陰石】本編の(陰陽石)を見よ、

【允當】よくその事に「アテハマル」左傳僖二十八年に「軍志曰、——、則歸、軍志は兵書なり、後漢書張衡傳に「百揆——、庶績咸熙、

【引導】人を導き案内する義、佛者が衆生を案内して

【姻家】親類をいふ、後漢書蔡邕傳に「與羊陟——」

【隱行アル者ハ必ず昭名アリ】(有隱行者必有昭名)隱れたる善行ある者は、必ず顯れたる名譽あるをいふ、本編の(陰德陽報(陽報)を見よ、

【飲河之願】願ふところの僅少なるをいふ、本編の(偃鼠河)を見よ、

【飲器】酒器なり、淮南子道應訓に「大敗智伯、破其首、以爲(イニシ)——一解に洩溺の器とあれども非なり、

【殷勤】本編の(懇懃)を見よ、

【允恭】「マコト」に「ウヤウヤシ」允は信なり、書經堯典に「——克讓、光被四表、格于上下、」

【隱君子】獨り徳を修め、隠れて世に出てさる人、蘇軾の留侯論に「秦之世有(イニシ)——者、出而試之、」

【蔭官】本編の(蔭補)を見よ、

【引業】前世に爲したる行事の報が今世に發するをいふ、俱舍論に「若由宿世善業引發、生於人中、則得珍寶、足多受快樂、若由宿世惡業引發、生於人中、則感貧窮困苦、受諸苦惱、是名(イニシ)——」

【蚘操】蚘は蚯蚓、操は執り守る所あるなり、「ミサヲ」(ミミツ)は土を食ひ、水を飲み、清廉にして求なきもの、以て小節に喩ふ、孟子滕文公下に「若(仲子)者、蚘

善道に入らしむるに用ふ、法華經に「無數方便、以(イニシ)——衆生、また導引とも倒用す、淨飯王涅槃經に「佛乃執香爐、在(イニシ)——導引而行、」

【隕豫】隕は墜なり、豫は落なり、また稿なり、草木の凋落するをいふ、詩經爾風七月篇に「十月——」

【飲中八仙歌】唐の杜甫が當時の豪飲家たる賀知章、汝陽王、崔宗之、蘇晉、李白、張旭、焦遂の八人の醉趣を敘へたる詩にて、七言二十二句より成り、毎句に押韻せり、唐詩選の七言古詩に收む、八酒仙の姓名は唐書李白傳にも見ゆ、

【隱田】隱して税を納めざる田地、宋史食貨志に「丁謂會計錄云、總得一百八十六萬餘頃、以是歲七百二十二萬餘戶計之、是四戶耕田一頃、由是而知天下(イニシ)——多矣、」

【飲德】徳を隠して顯はさざるをいふ、漢書游侠傳に「終不伐其能、飲其徳、」

【隱忍】苦しき事を「ガマン」する義、史記伍子胥傳に「——就功名、」

【陰房】暗くして深き「ヘヤ」杜甫の玉華宮詩に「——鬼火青、壞道哀湍瀉、また牢獄の義に用ふ、文天祥の正氣歌に「——閔鬼火、春院闕天黑、」

【印板】 書を板に刻むをいふ、儒書一の事、唐人は尚ほ未だ盛んに之を爲さず、五代の馮道が始めて五經を印せしより後ち典籍皆板本と爲す由、沈存中の筆談に見ゆ。

【允武】 武德の「マコト」に盛なる義、張衡の東京賦に「好樂無荒、允文一」本編の「允文」を見よ。

【殷阜】 「サカンニシテ、ユタカ」晉書食貨志に「粟斛直錢二十、草樹一、牛羊彌望、また時和年豊、百姓樂業、穀帛一、幾乎家給人足」。

【陰府】 地獄の閻魔王の居所、雲笈七籤に「重泉曲者、魔王之一也」。

【陰謀】 秘密に「ハカル」史記の齊世家に「一修徳以傾一國」。

【引滿舉白】 「滿ヲ引キ白ヲ舉グ」ナミナミとつぎたる酒杯を引き、白は杯なり、漢書敘傳に見ゆ。

【墮滅】 本編の「墮滅」を見よ。

【院落】 「ザシキ」詩詞中に「一村落等の語あり、博雅に「落ハ居ナリ、綱目集覽に「人所聚居、故謂之村落屯落、聚落、本編の「一刻千金」を見よ。

【淫亂ナレバ貧賤ヲ生ズ】 本編の「富貴ナレバ驕」を見よ。

【軒轅】 軒は屈なり、心の「フサガリ、ムスボルル」義楚辭に「志一其難解」。

【于越】 吳越に同じ、淮南子原道訓に「一生葛絺」の注に「于吳也」一解に「于」は發聲、「一」は越の國をいふと、荀子勸學篇に「一」出貉之子、生而同聲、長而異俗」。

【魚ヲ以テ食ト爲ス】 (以魚爲食) 本編の「船ヲ以テ」を見よ。

【魚枯レテ蠹ヲ生ズ】 本編の「肉腐リテ」を見よ。

【魚ハ我が欲スル所ロナリ、熊掌モ亦我が欲スル所ロナリ】 (熊掌) を見よ。

【羽翮肉ヲ飛バズ】 本編の「叢輕軸ヲ」を見よ。

【烏鬼】 夢溪筆談に「按、夔州、峽中人、養鷓鴣爲一、蜀人臨水居者、皆養鷓鴣、其頸、使之捕魚、得魚則倒提出之、至今如此云云」(鷓鴣) を參看せよ。

【烏巾】 「クロイロ」の頭巾、法書要録に「張弘、吳人工書、喜戴一、人名之曰張一」。

【雨脚】 「アメアシ」雨の絲の如きをいふ、雨足に同じ、杜甫の寄岑參詩に「出門復入門、一但如舊」。

【雨具】 「アマグ」笠笠の類、論衡明雩篇に「孔子出、使子路齋、一有頃天果大雨」。

【迂言】 「マハリ」遠き「コトバ」呂氏春秋に「寡人以爲一」。

【陰霖】 「クモリ」て「ナガアメ」が降る、魏書崔楷傳に「江淮之南、地勢沍下、雲雨一、動一彌旬月」。

【引領】 本編の「領ヲ引ク」を見よ。

【芋ヲ煨ク】 (煨芋) 芋を焼くなり、牟獻の詩に「爐頭一、火、相對各欣然」。

【衣紋】 衣服をいふ、紋は紋様、アヤモヤウの義、畫史に「蘇氏古賢像十一人、一自非晉筆、畫鑿に「善畫作人物一」。

【頤養】 「ヤシナフ」本編の「美祿」を見よ。

【醫藥ノ始】 (神農氏) を見よ。

【慰勞】 「ナグサメ、ネギラフ」晉書秦特載記に「持節一、且監察之」。

【色ヲ以テ交ル者ハ華落チテ愛淪ル】 (以色交者) 本編の「色」を見よ。

【怡和】 心、ヨロコビ、ヤハラグ」任昉の書に「神慮氣燃、無待一」。



【牛ヲ桃林ノ野ニ放ツ】 (放牛于桃林之野) 本編の「牛」を見よ。

【牛ト呼ビ馬ト呼ブ】 (呼牛呼馬) 毀譽は人の評するに任せて、己は之に關らざるをいふ、莊子天道篇に「呼我牛也、而謂之牛、呼我馬也、而謂之馬」。

【羽人】 本編の「羽客」を見よ。

【羽書之警】 「イクサノ、イマシメ」楊億の論、靈州事宜狀に「朝廷無旰食之憂、疆場無一」。

【雨聲】 「アメノオト」杜甫の晴詩に「一衝塞盡、日氣射江深」唐彦謙の詠竹詩に「月明午夜生、虛鎖、悞聽風聲、是」。

【烏筈】 射干(ヒアフギ)の一名、廣雅、釋草に「一射干也」。

【烏孫】 本編の「伊犁事件」を見よ。

【烏臺】 六帖に「御史大夫ヲ一トイフ」通典に「漢ノ御史府亦之ヲ憲臺ト謂フ、其ノ府中柏樹ヲ列ス、嘗テ野鳥數千アリ、其ノ上ニ棲宿ス、晨ニ去リ暮ニ來ル、號シテ朝夕烏ト曰フ」。

【歌永言】 本編の「永言」を見よ。

【内ニ贈ル】 (贈内) 己の妻に言を贈る義、本編の「夫婦」。

を見よ、

【中ニ誠アレバ外ニ形ハル】(誠於中形於外)本編の(思内ニ在レバ)を見よ、

【鬱紆】紆鬱と同じく、心の結ばれて舒びざる貌、曹植の贈白馬王彪詩に「將何念親愛在離居」

また山路などの屈曲せる貌、魏徴の述懐詩に「一陟高岫、出沒望平原」

【鬱金香】「ウツコンカウ」と讀む、百合の類にて香のよき草、祭祀のとき酒に和して、神に奉る、梁書の扶南國傳に「天監十八年、遣使獻火齊珠鬱金香、蘇合等香」李白の詩に「蘭陵美酒一玉碗、盛來琥珀光」

【鬱結】心ふさがりて舒びざる義、本編の(紆軫)を見よ、

【蔚然】本編の(一)を見よ、

【鬱林】西漢音南齊の郡名、今の廣西潯州府桂平縣の東、隋の揚州一郡、唐の嶺南道貴州一縣は今の廣西潯州府貴縣の南

【烏鳥私情】鳥はその母に反哺す、以て母に孝養せんとする私情に喩へていふ、李密の陳情表に「臣密今年四十有四、祖母劉今年九十有六、是臣盡節於陛下之日長、報劉之日短也、願乞終養(烏鳥反哺)」

【雲安】明一統志に「夔州府ノ郡名、杜甫の撥悶詩に「聞道一麴米春、纔傾一盞即醺人」

【雲雨】雲と雨と、本編の(蛟龍一)を見よ、

また文選の宋玉の高唐賦に見えたる故事によりて、男女の契にいふ、本編の(巫山之夢)を見よ、

【雲影】「クモ」の「カゲ」盧綸の詩に「斷來峰影出林花落盡、草花生、齊己の喜夏雨詩に「四郊一合、千里雨聲來」

【雲煙】「クモ、ケムリ」劉孝孫の詩に「飛軒俯松柏、抗殿接一」

また筆跡の立派なるに喩ふ、杜甫の飲中八仙歌に「揮毫落紙如一」

【雲霞】「クモ、カスミ」新序に「一充咽、則奪日月之明、白居易の送毛仙翁詩に「肌膚冰雪瑩、衣服一鮮」

【雲海】雲の「ハルカ」に「ヨコタハレル」ウナバラ沈佺期の詩に「何堪萬里外、一已冥茫、劉長卿の詩に「萬里一、空孤帆向何處」

【芸香】芸草に同じ、香のよき草、書中に入れて、蠹魚を防ぐ、本草に山礬の一名とす、洛陽宮殿簿に「含英殿前一、二株(芸閣)を參看せよ、

【運行】「メグリ、ユク」易經繫辭に「日月一」

を見よ、

【雨天】雨の降る日といふ、杜荀鶴の詩に「忽地晴天作一、全無暑氣似秋間」

【烏頭】「ウツ」といふ毒草の名、爾雅釋草に「葦、葦草註に「即、一也、江東呼爲葦、和名、トリカブト」また「カブトギク」本編の(烏喙)を見よ、

【孟方水方】孟は鉢なり、韓非子外儲説に見ゆ、本編の(水ハ方圓ノ)を見よ、

【馬ハ家門ヲ過グレドモ入ラズ】(三タビ其ノ門)を見よ、

【馬ヲ相スル之ヲ瘦ニ失ス】(相馬失之瘦)本編の(馬)を見よ、

【馬ヲ立ツ吳山ノ第一峯】(立馬吳山第一峯)金の廢帝亮が宋の都臨安の地圖の上に題せし詩なり、曰く「萬里車書合混同、江南那有別提封、移兵百萬江湖上、一有補治道」

【馬ハ必ズシモ驥驥ナラズ】(垢ヲ去ル)を見よ、

【海ヲ煮ル】(煮海海水を煮て鹽とする義、吳都賦に「一爲鹽採山鑄錢」本編の(山ニ鑄)を見よ、

【蘊奥】奥深きところをいふ、奥義に同じ、宋史の理宗紀に「朕觀朱熹集注大學論語孟子中庸、發揮聖賢一、有補治道」

【雲霞之交】世外の交をいふ、俗氣を脱して「クモ、カスミ」の境に相交るをいふ、南史謝潛傳に「結爲一」

【雲錦裳】「スグレテ」綺麗なる衣裳、道書の太上飛行羽經に「七色夜光一」

また蘇軾の潮州韓文公廟碑に「天孫爲織一」とあるは、織女が文公の爲めに一を織成すとの意にて、公の文章の外に見はるるに象りていふ、

また雲錦は朝霞の美しきに喩へていふ、文選の木華の海賦の注に見ゆ、

【運斤成風】(斤ヲ運ラシテ風ヲ成ス)巧みなる工匠の手段をいふ、莊子徐無鬼篇に「郢人堊漫、其鼻端若蠅翼、使匠石斲之、匠石一、聽而斲之、盡堊而鼻不傷、郢人立不失容、云云」この故事によりて、詩文の添削を乞ふに「乞郢斤」または「成風」などと書するは、名手の斧正を請ふとの義なり、

【雲外】雲の「ウヘ」元稹の玉泉道中作に「遐想一、寺峯巒渺相望」

【蘊藏】「ツツミ、ヲサメル」詩經の序の「在心爲志」の疏に「一在心、謂之爲志」

【雲山】雲の「カカレル」遠き山、宋史の樂志に「一浩

【雲安】明一統志に「夔州府ノ郡名、杜甫の撥悶詩に「聞道一麴米春、纔傾一盞即醺人」

【雲雨】雲と雨と、本編の(蛟龍一)を見よ、

また文選の宋玉の高唐賦に見えたる故事によりて、男女の契にいふ、本編の(巫山之夢)を見よ、

【雲影】「クモ」の「カゲ」盧綸の詩に「斷來峰影出林花落盡、草花生、齊己の喜夏雨詩に「四郊一合、千里雨聲來」

【雲煙】「クモ、ケムリ」劉孝孫の詩に「飛軒俯松柏、抗殿接一」

また筆跡の立派なるに喩ふ、杜甫の飲中八仙歌に「揮毫落紙如一」

【雲霞】「クモ、カスミ」新序に「一充咽、則奪日月之明、白居易の送毛仙翁詩に「肌膚冰雪瑩、衣服一鮮」

【雲海】雲の「ハルカ」に「ヨコタハレル」ウナバラ沈佺期の詩に「何堪萬里外、一已冥茫、劉長卿の詩に「萬里一、空孤帆向何處」

【芸香】芸草に同じ、香のよき草、書中に入れて、蠹魚を防ぐ、本草に山礬の一名とす、洛陽宮殿簿に「含英殿前一、二株(芸閣)を參看せよ、

【運行】「メグリ、ユク」易經繫辭に「日月一」

浩歸何處、但聞空際絲鸞聲、蘇頌の扈從郭杜詩に「

一一看皆美、竹樹蕭蕭畫不成」

【雲棧】雲に入る如き、高さ「カケハシ」李質の良嶽賦

に「升一而心驚、白居易の長恨歌に「一紫紵登劍

閣」

【云爾】「シカイフ」と讀む「カクカクデア」と、上文を

收むる辭、論語述而篇に「不知老之將至一」

【雲岫】雲の「カカレル」ミネ岫は洞穴ある山をいふ、

陶潛の歸去來辭に「雲無心以出岫、鳥倦飛而知還」

陸游の感舊詩に「憶昔初乘上峽船、雪灘一過聯翩」

【蘊藉】心廣くして穩かなる義、史記酷吏傳に「義縱敢

行少一蘊一に醜に作る、本編の「蘊藉」を見よ、

【運掌】「掌ニ運ラス」事の極めて成し易きをいふ、孟

子の梁惠王上に「治天下、可運之掌上」

【雲驤】雲の高く「アガル」如く勢の強きをいふ、梁書

武帝紀贊に「一雷駭、剪暴夷凶」

【雲樹】雲の「コメタル」樹をいふ、王維の詩に「天長一

一微」

【雲蒸龍變】英雄が時運に乗じて崛起するをいふ、

史記彭越傳に「得尺寸之柄、一」

【雲霄】「アラダモノアル、ソラ」晉書陶侃傳に「志凌一

一、また高さ地位に喩へていふ、朱慶餘の送李處士詩に

「一未得路、江海作閒人」

【雲濤】雲の「ハルカニ」ヨコタハレル海波をいふ、孟

浩然の宿天台桐柏觀詩に「日夕望三山、一空浩浩」

白居易の海漫漫の樂府に「一煙浪最深處、人傳中有

三神山」

【蘊蓄】物を「ツミ、タクハフ」義、左傳に「子家子曰、衆怒

不可蓄也、蓄而弗治、將繇一民將生、心蘊は一

音ラン積なり、聚なり、蓄なり、

【運動】「メグリ、ウゴク」董仲舒の雨雹對に「一抑揚

一、以紫雲爲蓋、青雲爲城、白居易の詩に「訪僧紅

葉寺、題句白雲房」

【雲帆】雲間に「ホノミユル」帆、李白の行路難に「長風

破浪會有時、直挂一濟滄海」

【運開】俗にいふ「ウンガヒラク」といふに同じ、晉の

謝靈運の詩に「一申悲涼」

【雲表】「クモノウヘ」また雲外に同じ、魏志衛覲傳に

「昔漢武信、求神仙之道、謂當得一之露、以餐玉屑、

故立仙掌、以承高露」

【雲母】和名「キララ」山洞の石に著きて産す、色白く

「キラキラ」と光る、火に焼けず、舶來の上品は透明にし

て水晶の如く、剝けば薄紙の如し、漢書王莽傳に「常翳

一屏面、非親近、莫得見也、李商隱の嫦娥詩に「一

屏風燭影深、長河漸落曉星沈」

【雲崩】「クモガ、クヅル」水勢の激しさに喩ふ、皮日

休の詩に「嚴陵灘勢似一、釣具歸來放石層」蘇軾の

詩に「淵潭初鏡淨、勢轉忽一」

【雨餘】雨後に同じ、唐德宗の重陽日詩に「炎節在重

陽、物華新雨餘、韋應物の詩に「冰泮寒塘始綠、一百草

皆生」

【羽流】仙術を修むるもの、米芾の西園雅集圖記に「雄

豪絕俗之姿、高僧一之輩」

【雨笠烟蓑】烟雨にうるほふ「ミノ」カサ「陳泰の漁父詞

に「君不見長安康莊九復九、一難入手」

【羽林軍】漢書天文志に「北宮虛危、其南有衆星、曰羽

林大軍、東西爲壘、唐書兵志に「高宗龍朔二年、始取府

兵、越騎射置、左右一」

【羽林郎】後漢書百官志に「一比三百石、掌宿衛侍

從、常選漢陽、隴西、安定、北地、上郡、西河、凡六郡良家、

補、庾信の詩に「今年喜夫婿、新拜一」

【憂ヲ銷スルハ酒ニ若クハ莫シ】(銷憂莫若酒)本編の

「愁ヲ忘ル」を見よ、

【雨露】「アメ」と「ツユ」と、大戴禮曾子天圓篇に「陽氣

勝則散爲一、禮記祭義に「春一既濡、君子履之、必

有怵惕之心、如將見之」

また雨露の萬物を養ふ如き大いなる恩澤をいふ、羅

鄴の登凌歊臺詩に「四海已歸新、一六朝空認舊江山」

謝枋得の卻聘書に「某與太平草木、同沾聖朝之一」

三

【英雄淚滿襟】後に出でたる英雄が、前代の英雄の功

業の成らざりしを悲みて、同情の涙にむせぶをいふ、

本編の「長ク英雄ヲシテ」を見よ、

【英雄未死心】英雄が志業成らず、中道にして死せし

にいふ、その心は未だ死せずとの意、馬子才の岳王墓

の詩に「落盡青松、百草深、鶯鷓斜日叫寒林、可憐一片

西湖土埋卻一」

【英雄人ヲ欺ク】英雄が術策を以て人を欺くをいふ、李攀龍の唐詩選序に「太白李白」縦横、往往疆弩之末、開、難、長語、英雄欺人耳」

【英雄人ヲ忌ム】英雄は己より優れたる者を忌み嫌ふ、三國志に「孫策曰、劉豫州英雄忌人」

【榮耀】「ハデヤカ」文選の曹子建の雜詩に「一難久持」

【瀛海】大海をいふ、本編の(大瀛)を見よ、

【營求】度り求む、書經の序に「高宗夢得、使百工」

【諸野】得諸傳、作說命三篇、北史柳蚪傳に「衣不過適體、食不過充饑、孜孜一徒、勞思慮耳」

【翳朽】翳は木自ら死するなり「タチガレ」朽は「クツル」なり、柳宗元の石渠記に「捲去一、決疏土石」

【詠懷】心に思ふことを詩に詠ずる義、祕府論に「一詠、其懷抱之事也」

【盈貫】罪惡の多さにいふ、左傳宣五年に「中行桓子曰、使疾、其民以盈、其貫、將可殲也」焦循の説に「貫ハ錢貝ノ貫ナリ、繩ヲ以テ錢ヲ貫キ、一ノヲ重ネテ盈満ニ至ル如ク、一次ノ戰ヲ多クスレバ、一次ノ民疾ヲ多クス、コレヲ盈貫、爲スナリ」貫盈とも用ふ、書經泰誓に「商罪貫盈」

記「至小邱西小石潭記」袁家渴記「石渠記」石渠記「小石城山記」是れなり、文は唐宋八家文讀本に載せたり、【英俊豪傑】「スグレテエラキ」人、淮南子秦族訓に「智過萬人者、謂之英、千人者謂之俊、百人者謂之豪、十人者謂之傑」

【鄧書燕説】書を讀むに、牽強附會して、道理に合せしむる義、韓非子の外儲篇に「鄧人有遺燕相國書者、夜書、火不明、因謂持燭者曰、舉燭云、而過書、舉燭、燭非書意也、燕相受書而説之、曰、舉燭者、尚明也、尚明也者、舉賢而任之、燕相白王、王大説、國以治、治則治矣、非書意也、今也舉學者、多似此類」

【榮達】高き位に進むをいふ、亢倉子に「窮厄則以命自寬、一則以道自正」

【永歎】長き息をつきて「ナゲク」詩の大雅公劉に「既順適宜、而無一」

【羸顛劉蹶】羸は秦の姓、劉は漢の姓、秦も漢も共に顛蹶して滅亡せし義、韓愈の桃源圖の詩に「一一了」

【羸得】「カチエタリ」と讀む、詩に用ふる語、秉燭譚に「詩ニ一トイフハ、羸ハ羸餘、羸利ナドトツヅキテ利得アルコナリ、コレヲ詩ニ用ヒテハ、何事モヨキ事ハ

また弓を十分に引きしぼる義、莊子の田子方篇に「引之」

【瀛奎律髓】四十九卷、元の方回撰す、唐宋兩代の詩を合編し、分ちて四十九類と爲す、録するところ皆五七言の近體なり、故に律髓といふ、十八學士登瀛州、五星聚奎の義を兼取して瀛奎と名づく、大旨西崑體を排して、江西派を主とし、一祖三宗の説を唱ふ(一祖トハ杜甫、三宗トハ黃庭堅、陳師道、陳與義ナリ)生硬粗野を以て老境と爲し、又多く字眼の説を標す、續仄に涉ると雖も、我が國にては、足利氏の世、五山僧徒の間に、行はれ、藤原惺窩も初學必讀の書と評せり、清の紀昀の「一一」刊誤四十九卷を參考すべし、

【翳桑】桑の木の茂り掩ふをいふ、左傳宣二年に「舍于」

【詠史】古來の史事を題として己の意を寫すをいふ、明の鍾惺曰く「古人一、不指定一事、寫意而已」

【永州八記】唐の柳宗元の作りし八篇の山水遊記なり、永州は今の湖南省永州府なり、宗元、貞元中、監察御史裏行となり、王叔文と善し、叔文の貶せらるるや、宗元も亦永州司馬に貶せらる、八記はこの間に成れり、八記とは「始得西山宴遊記」「钴鉅潭記」「钴鉅潭西小邱

ナキガ、コレバカリガ利得チヤト云フコナリ云云」とて蘇軾の詩の「一兒童語言好、一年強半在城中」杜牧の詩の「一青樓薄倖名」等を引證せり、【榮任】光榮なる任務の義、吳志魯肅傳の注に「委以腹心、遂荷一一」

【英髦】英俊ニ同じ「スグレタル」賢士、李白の詩に「陸氏世一一(時髦)を見よ、

【英武】「スグレテ、タケシ」晉書何無忌傳贊に「安城一一繼、茲忠烈、無忌、安城郡公に封せらる、故にいふ、唐書太宗紀に「太宗爲人聰明一一有大志、而能屈節下士」

【榮名】「ホマレ」史記游俠傳に「與世浮沈而取一一」

【榮養】「ヨキヤシナヒ」晉書趙至傳に「至年十三、詣師受業、聞父耕叱牛聲、投書而泣、師怪問之、至曰、吾小未能一一使老父不免勤苦、師甚異之」

【永樂三大全】五經大全、四書大全、性理大全書の三種

は共に明の永樂年中の勅撰に係る、故にいふ、

【永樂大典】明の永樂元年、成祖が解縉等に勅し、經史子集より、醫卜僧道技藝等に至るまでの言を蒐輯して、この書を成さしむ、もと二萬二千八百七十七卷あり

りしが、明末の亂に燬亡し、僅にその十分の一を存せり。この書は洪武正韻を以て綱と爲し、全く韻府の體をなせり、その書割裂龐雜條理なしと雖も、この書に頼りて元以前の佚文祕典の復、世に見はるるに至りしは、大幸と謂ふべし。清初是に據りて哀輯せしもの經部六十六種、史部四十一種、子部一百三種、集部一百七十五種、共に四千九百二十六卷の多きに達せりと

【叡覽】 叡は明なり、通なり、よりに天子の御覽になるをいふ、錢起の蓋地圖賦に「資重華之一」ニ

【營壘】 陣營、トリデ、後漢書公孫瓚傳に「盛修」ニ

【榮祿】 「アツキ」秩祿なり、蔡邕の釋詁に「才美者荷」ニ

【而蒙賜】

【搖曳】 「ウゴカシヒク」李白の詩に「一滄洲傍」ニ

【姚姬傳】 本編の(姚姬)を見よ、

【瑤琴】 「スグレテ」ミゴトなる琴、宋之間の上陽宮侍宴應制詩に「微臣一何幸、再得聽」ニ、唐彦謙の詩に「松風四山來、清宵響」ニ

【瑤玉】 美しき「タマ」江淹の傷友賦に「帶」ニ、而爭光、握隋珠、而比麗

【瑤瓊】 「ウルハシキ」タマ、秦嘉の答婦詩に「詩人感」

木瓜、乃欲答、白居易の白牡丹詩に「折來比玉色、一種如」ニ

【窈窕】 本編の(窈窕)を見よ、

【瑤質】 美しき玉の如き、ウマレツキ、梁簡文帝の明妃詞に「玉豔光瑤質、金鈿婉黛紅」

【要津】 「カナメナル、ミナト」津は舟の渡場なり、古詩に「先據要路津、杜甫の詩に「賓從雜選賢」ニ

【瑤笙】 「タマ」にてつくれる、「ウツクシキ、シヤウノフ」戴叔倫の詩に「更弄」ニ、秋空鶴又鳴

【搖旌】 風に「ヒラ」動く、「ハタ」心の動くに喩ふ、本編の(心搖旌トシテ)を見よ、

【遙青】 「ハルカニ、ミユル」山をいふ、孟郊の詩に「開窗納」ニ

【姚宋】 本編の(漢ノ丙魏)房杜(一)を見よ、

【幼稚】 「イトケナシ」漢書王莽傳に「君年」ニ

【妖氛】 「アシキ」氣なり、戰亂などにいふ、李白の詩に「横行負勇氣、一戰淨」ニ

【香渺】 「ハルカニ、ハテシナキ」義、司馬相如の大人賦に「紅」以眩潯兮、焱風涌而雲浮、白居易の詩に「拳石若蒼翠、尺波烟」ニ

【釋釋】 絶えざる貌、詩經魯頌閟篇に「以車」思無

【奕葉】 累世に同じ、曹植の王仲宣誄に「伊君顯考、一佐時」

【奕碁】 奕は碁を圍むこと、碁は「ゴイシ」左傳襄二十五年に「奕者舉棋不定、不勝其耦、而況置君而弗定乎」西京雜記に「杜陵杜夫子、善」ニ、爲天下第一

【驛騷】 詩經の「徐方釋騷」の箋に「釋當に驛ニ作ルベシ」とあり、本編の(釋騷)を見よ、

【釋史】 一百六十卷、清の馬驥(字ハ宛斯、山東ノ人、順治十六年ノ進士)撰す、開闢より秦末に至る間の事を纂録す、首に世系圖年表あり、次に太古十卷、次に夏殷周三代二十卷、次に春秋七十卷、次に戰國五十卷、次に外錄十卷あり、その事毎に各標題を立て、紀事本末體に仿ひて敘述せり、援據浩博考證詳密大に史學に益あり

【驛使】 飛脚なり、荊州記に「陸凱與范曄相善、自江南寄梅一枝詣長安、與曄并詩折花逢」ニ、寄與隴頭人、江南無別信、聊贈一枝春」

【益者三友】 本編の(益友)を見よ、

【易水歌】 駱賓王の詩に「白雪梁山曲、寒風」ニ、本編の(風蕭蕭)を見よ、

【驛長】 宿驛の長なり、亭長に同じ、唐律に「一私借、人馬驢者」

【驛亭】 宿驛をいふ、齊書の晉安王子懋傳に「行視」ニ、また宿驛にて人をとめる「タテモノ」杜甫の秦州雜詩に「今日明人眼、臨池好」ニ、釋名に「亭、停也、道路所舍、人停集也」

【驛馬】 宿驛にて旅客の用に供ふる馬、史記鄭當時傳に「每五日洗沐、常置」ニ、長安諸郊、請謝賓客」

【易林】 十六卷、漢の焦贛(字ハ延壽)撰す、易の八卦を以て演じて六十四卦とし、各、繇詞(判斷ノ詞)を繫く、その文古奥、トムところも亦驗あり、然れども漢易の流れ、術數と爲りしは、延壽より始まる、簡明目録にこの書を子部の術數類に入れたるは當れり、

【噦噦】 本編の(驛路ノ)を見よ、

【噦噦噦噦】 噦は「シヤクリ」噦は「オクビ」噦は「クサメ」噦は效に同じ、セキ禮記の内則に「不敢」ニ

【謁者】 秦の世、天子の宮中に在りて賓客を掌る官、史記始皇紀に見ゆ、謁は名刺なり、漢書高帝紀に「使」ニ、隨何之九江王布所、また百官公卿表の注に「謁請也、白也」

【曰若稽古三萬言】 經義を解くことの煩冗に失する

をいふ、漢書藝文志の師古の注に、桓譚新論云、秦近君能說堯典篇目兩字之說至十餘萬言、但說——

【越絶書】十五卷、漢の袁康撰す、その友吳平の同定に係る、隋志に子貢の作と稱するは謬なり、原本二十五篇、今五篇を佚す、その記事吳越春秋と相出入す、而かも文章の博奥偉麗は趙煜(吳越春秋の撰者)の及ばざる所なり、

【噎ニ因リテ食ヲ廢ス】(因噎廢食)噎は食物の「ノ」に塞がり「ムセブ」それによりて食事を「ヤメル」以て少しの障礙によりて大切なる事を廢するに喩ふ、淮南子説林訓に「有以噎死者而禁天下之食則悖矣」

【閱武】軍隊の状況を檢閲する義、晉書虞溥傳に「專心填籍時疆場——人爭視之溥未嘗寓目」校武に同じ、

【悅服】心から喜びて服従する、書經に「大賚于四海而萬姓——禮記に「近者——而遠者懷之此大學之道也」

【悅豫】「ヨロコブ」後漢何敞傳に「恩澤下暢黎庶——上天聰明、必有立應」

【閱歴】月日の「タツ」をいふ、舊唐書の吐蕃傳に「——

【煙雨】「ケムリ」が「コメテ」靜にふる雨、臥遊錄に「彭城佳山水魚蟹寓居去江無十步、風濤——曉夕百變、江南諸山在几席、杜牧の江南春に「南朝四百八十寺、多少樓臺——中」

【煙雲】「ケムリ」「クモ」林泉高致に「春山——連綿人欣欣、夏山嘉木繁陰人坦坦、唐高宗の謁大慈恩寺詩に「寥廓——表、超然物外心」

【烟箴】「ケムリ」と「ホノホ」と、齊書褚淵傳に「嘗失火——甚逼」

【淵海】「フチ」と「ウミ」と、宋書武帝紀に「若涉——罔知攸濟」

また物の極めて深く大いなるに喩ふ、抱朴子に「五經爲道義之——子書爲増深之河流」

【偃蓋之松】俗にいふ笠松なり、本編の(松)を見よ、

【沿革】始より今に至るまで相沿ひて動かざるを沿といひ、始め作したる事を今改むるを革といふ、ウツリカハリ柳宗元の陳京行狀に見ゆ、

【猿鶴】「マシラ」と「ツル」と、抱朴子に「周穆王南征、一軍盡化、君子爲——小人爲沙蟲、宋史石揚休傳に「平居養——玩圖書吟咏自適、與家人言、未嘗及朝廷事」

【越王怒蛙ニ式ス】本編の(怒蛙ニ)を見よ、

【餌ナキノ鈎ハ以テ魚ヲ得ベカラズ】(無餌之鈎不可)以得魚本編の(一目ノ羅ハ)を見よ、

【葉水心】水心は葉適の號、本編の(葉適)を見よ、

【魘】説文に「夢驚也」睡中に「オソハルル」義、韓愈の詩に「猶疑在波濤、恍悞夢成」權徳輿の文に「舟有溺騎有墜、寢有——飲有醉、食有餒、行有歷、無非危機」

【煙霽】「ケムリ」「モヤ」唐の徳宗の重陽日即事詩に「令節曉澄霽、四郊——空、方千の中秋月詩に「涼宵——外、三五玉蟾秋」

【鴛鴦繡出君ノ看ルニ從ス】秘訣を人に授くるを惜む義、元の元好問の論詩絶句に「鴛鴦繡出從君看、莫把金錢度與人」

【園囿】連文釋義に「有藩曰園、有墻曰囿、園は草木を種うるところ、囿は禽獸を畜ふところ、孟子の滕文公下に「——汗池沛澤多而禽獸至」

【猿狖不能攀】極めて崖壁などの「ケハシキ」にいふ、本編の(崖壁)を見よ、

【延引】「ヒキノベル」通鑑唐の懿宗紀に「——歲月、賊勢益張」

【假革】(革ヲ假ス)戦やみて甲冑を藏めて用ひざる義、假武に同じ、史記高祖紀に「殷事已畢、武王——爲軒」

【圓覺大師】本編の(達磨)を見よ、

【燕雁代飛】燕と雁と互に代り合ひて異なる方向に飛び去る、以て人の互に隔絶し在るに喩ふ、淮南子の注に「燕春分來、雁春分去、北詣漢中也、燕秋分北、雁秋分而南、詣彭蠡也、故曰代飛」

【袁簡齋】本編の(袁枚)を見よ、

【圓機活法】圓機詩學活法全書の略、二十四卷、明の王世貞校と題す、天文、時令、節序以下四十四門に大別し、更に各部門を細分し、故事成語を類聚し、作詩者の便覽に供す、我が國にも盛行し、數種の翻刻本あり、

【燕許大手筆】大文章をいふ、唐書蘇頌傳に「頌自景龍後與張説以文章顯、稱望略等、故時號——蘇は許國公に封ぜられ、張は燕國公に封ぜらるる故にいふ、

【烟火】人民の寇の烟をいふ、史記律書に「——萬里可謂和樂者乎」

またノロシをいふ、王粲の從軍詩に「四望無一」但見林與丘

また花火をいふ、月令廣義に「宛署記蕪城」諸製有聲者曰響炮高起曰起火、起火中帶炮連聲者曰三級浪不響不起旋繞地上者曰地老鼠云云

【鉛華】 婦女の顔に塗る「オシロイ」康熙字典に「鉛粉亦名胡粉、即一也鄭史の詩に「最愛一薄薄妝」

【宴會】 「サカモリ」世説に「謝萬北征、未嘗招慰衆士、謝公謂萬曰、汝爲元帥、宜數一以悅衆心」

【圓活】 圓く轉がり活動する義、自由自在なる意、類書纂要に「一不拘執也」

【烟管】 「キセル」本艸會纂に「凡食煙者、將烟納入一大頭内、點火燒吸滿口、吞嚥頃刻而周一身」

【烟景】 春の景色、李白の春夜宴桃李園序に「陽春召我以一、大塊假我以文章」

【燕語】 「ツバクラメ」の雌雄語るが如く鳴くをいふ、杜甫の發潭州詩に「岸花飛送客、橋燕語留人」王涯の閨人贈遠詩に「鶯啼綠樹深、一雕梁晚」

【鹽菜】 「シホ」と野菜と禮記の樂記の「大羹不和」の注に「不調以一、後漢書和熹皇后紀に「晝夜號泣、終三年不食、一憔悴毀容、親人不識之」

【怨刺】 「ウラミ」て人を「ソシル」漢書禮樂志に「周道始缺、一之詩起」

【燕子】 「ツバクラメ」玄鳥また乙鳥ともいふ、戴叔倫の葦溪亭詩に「一不歸春事晚、一汀煙雨杏花寒」本編の「一樓」を參看せよ

【燕脂】 「クチベニ」臙脂に同じ、本編の「臙脂」を見よ

【臙脂】 「クチベニ」本編の「臙脂」を見よ

【怨管】 「ウラミ、ソシル」汲冢周書に「善至於四海、曰天子、達於四荒、曰天王、四荒至、莫有、一乃登爲帝」

【遠邇】 遠きと近きと、邇は近なり、書經に「四夷咸賓、無有、一遐邇に同じ」

【袁子才】 本編の「袁枚」を見よ

【沿習】 古よりの「ナラハセ」避暑錄話に「士大夫家祭多不同、蓋五方風俗、一與其家法所從來、各異」

【掩襲】 敵の不意に乗じて襲ひ撃つ義、晉書羊祜傳に「祜每與吳人交兵、不爲、一之計」

【延壽】 「ナガイキ」蘇軾の與李公擇書に「口體之欲、何窮之有、每加節儉、亦是惜福、一之道」

【延壽客】 菊の異名、本編の「菊」を見よ

【淵靜】 「フチ」の靜かなる義、柳貫の答吳立夫詩に「玉

【豔妻】 美しき妻なり、詩經小雅十月之交篇に「一煽方處、疏に「晉秦ノ閒ニ、美色ヲ豔トイフ」この一は褒姒を斥す

【假草】 風に「ナビキフス」草、民の德政に「ナビク」に喩ふ、晉書潘尼傳に「學猶蒔苗、化若、一本編の「君子ノ德」を見よ

【煙草】 「ケムリ」を帯びたる「クサ」李益の送人歸岳陽詩に「一連天楓樹齊、岳陽歸路子規啼」また「タバコ」をいふ、秉燭譚に「沈穆ガ本草洞詮九卷ニ、煙草一名相思草、言人食之、則時時思想不能離也ト、マタ四五十年前ニ朝鮮人ノ撰スル芝峰類說十九卷ニ、淡婆姑草名亦號南靈草、近歲始出、倭國云云、或傳南蠻國有女人淡婆姑者、患痰疾、積年服此草得瘳、故名ト(中略)コレヨリ淡婆姑ノ名世ニ弘マレリ、近年清人陳浪子ガ花鏡一套東來シ、金絲烟擔不歸等ノ名サマザマノセ置ケリ、擔不歸モ「タバコ」ノ唐音トミエタリ(中略)マタ唐詩紀ノ内、李白ガ詩ニ、想思如烟草、歷亂無冬春ト云ヘリ、相思草ト名ヅクルハ、コレヨリ出ヅルニヤ、偶然ニ符合セルニヤ、李ガ詩ハ本ヨリ烟ト草トノコトナリ」

【遠山黛】 うすくして美しくしき眉、本編の「遠山ノ眉」を全遺別見、一得藏珍

また淵の靜かなる如く、極めて「モノシヅカ」なる義、莊子の天地篇に「無爲而爲物化、一而百姓定」

【演說】 道理を演べひろげて説く、周書熊安生傳に「一而成就」また風の吹き、ナビカス貌、本編の「掩苒」を見よ

【奄冉】 進み行く、陶潛の閒情賦に「行雲逝而無語、時一而就過」また風の吹き、ナビカス貌、本編の「掩苒」を見よ

【宛然】 「サナガラ」また「アタカモ」詩の秦風蒹葭篇に「宛在水中央」の注に「一坐見貌」

【園蔬】 「ハタケ」の「ヤサイ」後漢書吳祐傳に「自免歸、不復仕、躬灌、一以經書教授」

【鼯鼠】 「ドブネズミ」「モグラモチ」の類、莊子逍遙遊に「偃鼠飲于河、不過滿腹、偃は鼯に同じ、一に鼯に作る、本草に「一一名隱鼠、形如鼠而無尾、黑色長鼻、本編の「偃鼠河」を見よ

【淵藪】 「フチ」と大澤と、轉じて物の多く「アツマル」にいふ、後漢書伏湛傳に「杜詩疏、薦湛曰、智畧謀慮、朝之一、魏志高柔傳に「博士者道之一、六藝所宗、本編の「淵藪」を見よ

【猿猴】 「サル」猿は一音ジウ「テナガザル」李白の蜀道

【鉛刀ヲ銛ト爲ス】 鉛にてつくりし鈍刀を「スルドシ」と爲すは道理の顛倒せるにいふ、銛は鋭なり、利なり、賈誼の弔屈原賦に「莫邪、頓兮、鉛刀爲銛」、范成大の詩に「鉛刀曾齒莫邪銛」

【袁耽】 本編の(袁彦道)を見よ、

【園池】 史記王翦傳に「請美田宅」甚衆、宋書竟陵王誕傳に「一之美冠、冠于一時」

【炎帝】 夏を司る神をいふ、(神農氏)本編の(夏)を見よ、

【猿鳥】 「マシラ」と、トリと、王融の巫山高曲に「烟雲乍卷舒、一時斷續、吳筠の遊廬山五老峰詩に「雲外聽一一、烟中見、杉松」

【炎天】 南方の天をいふ、淮南子に「南方曰一一、呂覽の有始にも出づ、また夏の熱さ、ソラ」

【延登】 初めて仕官せし時、天子が其の人を延き入れ殿に登らしめ、親ら詔せらるるをいふ、漢書五行志に「一一受策」

【烟波】 河海等に水烟のこめて明かならざる波をいふ、宋之問の秋蓮賦に「海沂兮江沱、萬里兮一一」

【煙波】 前條に同じ、崔顥の黃鶴樓詩に「日暮鄉關何處是、一一江上使人愁、劉禹錫の淮陰行に「一一與春草」

【煙浪】 煙の「コメタル、ナミ」劉禹錫の詩に「白首相逢處、巴江一一深」

【園林】 「ソノ」ハヤシ、宋史向拱傳に「拱尹河南、十餘年、專治一一第舍、好聲伎、縱酒爲樂、劉駕の讀史詩に「萬金買一一、千金修池館」

【炎涼】 「アツイ」と「スズシイ」と、齊書樂志に「裁化變、寒燠、布政司一一」

また人情の「アツキ」と「ウスキ」と、李白の詩に「一別隔、千里、榮枯異一一」

オヲ

【嘔啞】 音樂などの「ヤカマシキ」をいふ、杜牧の阿房宮賦に「管絃一一多於市人之言語」

【謳鴉櫓】 「ギチギチ」と音する櫓は船に同じ、船を進むる具、蘇舜欽の淮上喜雨聯句に「繁聲過沙頭、上下一一、謳鴉は櫓の聲、一一に嘔啞に作る、

【歐九】 歐陽修の輩行は第九に當る、故にいふ、劉克莊

の詩に「一一平生許可難、劉原父は「一一不讀書」と譏れり、

【謳吟】 天子の徳を稱詠して心これに歸嚮する義、謳歌に同じ、漢書敘傳に「民皆一一思漢」

また廣く歌を「ウタフ」をいふ、蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人帝悲傷、一一下招遣、巫陽」

【翁然】 草木の盛んに「シゲル」貌、蘇軾の詩に「詩書好在、家四壁、蒲柳一一城、一隈」

【應酬】 人より寄せ來りし書に答ふるをいふ、陸游の詩に「老來萬事懶、不獨廢一一」

【區脫】 次條を見よ、

【區脫】 胡人、境上に土室を作り、漢人を伺ふもの、史記匈奴傳に「東胡與匈奴、間中有棄地、莫居、千餘里、各居、其邊、爲一一、漢書蘇武傳に「區脫捕得雲中生口、區區通ず、

【鷓鴣】 「カモメ」魏志高柔傳の注に「機心萌則一一不、下、列子に「海上人好鷓鴣、每日之海上、從一一遊、一一之至者百數、其父曰、取來、吾玩之、明日之海上、一一舞而不、下、江淹の詩に「物我俱忘懷、可以狎一一、本編の(鷓鴣)を見よ、

【甕天】 「カメ」の中を天地とする義にて、見る所ろの

千里同一色

【閻百詩】 本編の(閻若環)を見よ、

【假武】 (武ヲ假ス) 戰亂するに平ぎ、武器を藏めて用ひざるなり、世の治平になりし義、書經に「一一修文」

【園圃】 連文釋義に「樹ヲ種ウルヲ園トイヒ、菜ヲ種ウルヲ圃トイフ」周禮冢宰の「以九職任萬民、二曰、一一毓草木」の注には「果、蔬ヲ樹ウルヲ圃トイフ、園ハ其ノ樊、(木)ガナリ」とあり、

【緣木求魚】 決して得べからざるに喩ふ、孟子梁惠王上篇に見ゆ(木ニ緣リ)を見よ、

【圓滿】 「マドカニ、タラヒタル」義、功德一一などと用ふ、南史梁武帝紀に「中大通五年、祀南郊、奏樂迎神、畢有神光一一壇上、朱紫黃白雜色」

【煙霧】 「ケムリ」キリ、楊炯の青苔賦に「肅兮若、遠山之松柏兮、汎兮若、平郊之一一、溫庭筠の白鶴觀詩に「仙境日月外、帝鄉一一中」

【猿鳴】 猿聲に同じ、水經の注に「巴東三峽、巫峽長、一一三聲、淚沾裳、陸游の詩に「三聲最怖聽、一一」

【烟滅】 「ケムリ」の如く消え滅ぶる義、文選の陳琳の檄に「隨波漂流、與烟俱滅者、亦甚衆多」

【閻茂】 茂なり、本編の(十一)支を見よ、

【狹小なるをいふ、黃庭堅の詩に「醜雞守」】本編の(「獲狸」)を見よ、

【甕頭】始めて熟せし酒をいふ、法書要録に「河北稱」

「甕頭」謂初熟酒也、劉禹錫の酬樂天偶題酒甕見寄詩に「門外紅塵人自走、一甕新酒我初開」

【應變】勢の變化するにつれて適當なる處置をする

義、臨機——と連用す、晉書孫楚傳に「廟算之勝、一應無窮」唐書李勣傳に「其用兵籌算、料敵——皆契事機」

【鷓鴣盟】鷓鴣の間に沙洲に羣れ居る如く、浮世の外の會盟をいふ、朱熹の詩に「浩蕩——久未寒、征騶聊此駐、江干葉顛の詩に「有幸——君與我、無情鶴髮古猶今」

【歐冶】古の名高き鍛工の名、越絶書に「吳有干將、越有——吳越春秋に「干將者吳人也、與歐冶子同師、俱能爲劍」また韓非子顯學に、歐を區に作る、同じ、

【歐陽永叔】本編の(歐陽修)を見よ、

【鷺鷥】「カモメ」と「サギ」と、白居易の閑居自適詩に「波閒鷺鷥風靜、下——温庭筠の西江上送漁父詩に「不見水雲應有夢、偶隨——便成家」黃庚の漁隱詩に「不羨魚蝦利、惟尋——盟」

【屋稅】家屋にかかる稅、宋史李處耘傳に「奏減城中

居民——民皆悅服」

【億測】「オシハカル」後漢書李通傳論の字面、億度に同じ、

【屋鼠熏セス】熏は燻に作る、火氣盛んなる貌、「クユラ」本編の(社鼠)を見よ、

【億度】「オシハカル」唐書江夏王道宗傳に「不宜輕——使自猜危」

【億中】心に「オシハカリ」たる事の善く「アタル」をいふ、論語先進篇に「賜不受命而貨殖焉、億則屢中」また憲問篇の「有德者必有言」の注に「德不可以億中、故必有言」

【億丈之城】極めて高き城、賈誼の過秦論に「據——臨不測之谿、以爲固」

【億兆】すべての國民をいふ、晉書周嵩傳に「上爲宗廟無窮之計、下收——元元之命」

また數の極めて多きをいふ、戰國策に「蘇秦說楚威王曰、從親則諸侯割地、以事楚、橫合、則楚割地、以事秦、此兩策、相去有——之數、大王何居焉」

【億萬斯年】億萬年なり、斯は助辭、宋史樂志に「嘉壇竝侑、——」

【屋梁落月】本編の(落月屋梁)を見よ、

【後ルレバ人ノ爲メニ制セラル】(後則爲人所制)本編の(先ズレバ)を見よ、

【屋漏】爾雅釋宮に「西北隅謂之——」詩經大雅に「尙不愧于——」箋に「漏ハ隱ナリ」

また「ヤネ」の漏る義、南史江子一傳に「——在上、知之在下」

【鳥詩】異物志に「——南夷別名也」

【教ハ學ノ半】本編の(數ハ)を見よ、

【教亦多術矣】本編の(不術之)を見よ、

【圻人】「サクワン」本編の(圻者)を見よ、

【惡阻】「ツハリ」胸惡くして吐氣を催し酸味を欲する病にて、婦人懷妊して二三月目に起る、回春に「——者惡心阻、其食飲也」

【多ク聞キテ疑ハシキヲ闕ク】本編の(闕疑)を見よ、

【温雅】温和にして「ミヤビヤカ」南史王泰傳に「通和——家人不見喜温之色」

【音樂】樂器に合せて歌ふをいふ、漢書史丹傳に「好——有——」

【恩惠】「イツクシミ、メグム」漢書郗吉傳に「吉視遇甚——有——」

【温厚】温和にして篤實、禮記に「天地——之氣、始於

東北而盛於東南、此天地之盛德氣也、此天地之仁氣也、

【恩讎分明】恩を受けたる者には恩を以て報い、讎ある者には讎を以て報ゆることを「——ハツキリ」とするをいふ、呂氏童蒙訓に「——此四字非有道者之言也」

【温習】復習なり、温は焠温(アタタム)の義、袁凱の詩に「朝向春園恣游衍、暇歸雪案同——」

【温藉】本編の(温藉)を見よ、

【恩獎】「メグミ、タスクル」五代史馮玉傳に「詔笑自言、願得持晉玉璽、獻契丹、以冀——」

【恩賞】「メグミ」を加へて賞賜する、後漢書彭寵傳に「有重功而——竝薄」

【恩典】「メグミ」の法、韓琦の表に「被——之特優」

【音吐】音聲をいふ、南史齊鬱林王傳に「少美容止、進退——甚有令譽」宋史王沔傳に「——明暢」

【恩波】「メグミ」恩澤に同じ、阮咸の謝狀に「調鼎之功、未施於毫髮、登俎之美、屢決於——」

【温飛卿】本編の(温庭筠)を見よ、

【温李】本編の(李商隱)を見よ、

【思ヒテ學バザレバ則チ殆シ】本編の(學ンデ思ハ)を

見よ、
 【思湧泉ノ如シ】 文思の泉の湧く如くなる義、湧、涌同
 じ、本編の(文、春、華)を見よ。
 【親ヲ敬スル者ハ敢テ人ヲ慢ラズ】 (敬親者不敢慢於人) 本編の(親ヲ愛スル者)を見よ。
 【汗邪滿車】 本編の(鬪、塞、滿、善)を見よ。
 【親疾アリ、藥ヲ飲マバ子先ヅ之ヲ嘗ム】 本編の(醫ハ三世)を見よ。

カ

【下帷】 室内に居て「トバリ」を垂れて讀書する義、本編の(帷ヲ下ス)を見よ。
 【海溢】 「ツナミ」泊宅編に「一又謂之海嘯、吏只云海、毀、河決湍水卷岸而入海、但潮侵陸地爾」
 【艾艾】 本編の(期、期)「(鄧、艾、ノ)を見よ、
 【偕行】 「トモドモニオコナハル」易に「凡益之道、與時偕行、
 一」また共に行く義、詩經秦風無衣篇に「王于興師、修我甲兵、與子一」東京九段阪上なる「一」社の名

蓋し此に取る。
 【蟹行】 「カニノユク」をいふ、郭索を見よ。
 【蟹螯】 蟹の「ハサミ」その中の肉美味なり、晉書の畢卓傳に「卓嘗謂人曰、得酒滿數百斛船、四時、甘味、置兩頭、右手持酒杯、左手持「一」、拍浮酒船中、便足了一生矣」
 【海嶽】 思の高く且つ深さに喩ふ、羅隱の詩に「思如「一」、何時報恨似、煙花觸處生」
 【凱樂】 「カチイクサ」の時、奏する音樂、周禮大司馬に「一」獻于社、本編の(凱歌)を見よ。
 【開闔】 「アケタテ」本編の(五寸ノ鍵)を見よ。
 【解顔】 本編の(顔ヲ解ク)を見よ。
 【蟹眼】 茶の湯の沸き立つをいふ、蔡襄の茶錄に「候湯最難、未熟則沫浮、過熟則茶沈、前世謂之「一」者、過熟湯也、また魚眼ともいふ、蘇軾の煎茶詩に「一」已過魚眼生、颺颺欲作松風鳴」
 【涯岸】 水の「キシ」通典に「漲海無「一」」
 【階級】 「キザハシ」の「ダン」をいふ、轉じて官位の等級をいふ、吳志の顧譚傳に「異、尊卑之禮、使高下有差、一」逾選」
 【開化】 教化を開きて世運の進歩をはかる義、晉の顧

頭之の定命論に「建極「一」、樹聲貽則」
 【海闊天空】 心の廣く大いなるに喩へていふ、本編の(海闊クシテ)を見よ。
 【改觀】 今までとは「サツバリ」と面目を改むる義、北夢瑣言に「朱溫盛禮郊迎、人士「一」」
 【解元】 一國にて第一等の學生、珠璣藪に「郷試中頭、名曰「一」、又曰解首、領解、拔解、發解」
 【開國】 諸侯を封ずる義、易の師上六に「大君有命、一」承家」
 【界紙】 線を引きたる紙、ケイシ、朱熹の與方伯護書に「更欲篆六十四卦名及一等小字數十、其「一」又作一封、請并書之」
 【海事】 海上にて爲すべき事、韓愈の南海神廟碑に「人既貴而富、且不習「一」」
 【孩兒】 二三歳の幼兒をいふ、墨子明鬼篇に「殷紂賊誅「一」本編の(咳嬰)を參看せよ、
 【孩兒】 前條に同じ、書經康誥の「若保赤子」の注に「赤子「一」」
 【涯淡】 「ミツギバ」淡も水の涯なり、三輔黃圖に「照燭「一」」また「カギリ」の義に用ふ、韓愈の柳子厚墓誌銘に「務記覽、爲詞章、汎濫停蓄、爲深博、無「一」」涯岸に

同じ。
 【芥舟】 「チリノフネ」莊子逍遙游に「覆杯水於坳堂之上、則芥爲之舟、置杯焉則膠、水淺而舟大也」一解に芥は「カラシナ」の子、
 【開春】 「ハツハル」纂要に「初春曰「一」也楚辭九章に「一」發歲兮」
 【介紹】 紹介に同じ、禮記聘儀に「一」而傳「命」本編の(紹介)を見よ、
 【階前盈尺之地】 「キザハシ」の前の一尺ばかりの場所、貴人の前に出る義、李白の與韓荆州書に「今君侯何惜「一」」不使白揚眉吐氣、激昂青雲耶」
 【階前梧葉已秋聲】 本編の(一寸ノ光陰)を見よ、
 【階前萬里】 地方の政事の得失は、遠方の處にても、すべて天子の知るところとなり、臣の上を欺くを得ざるをいふ、唐書宣帝紀に「宣宗以子延陵爲建州刺史、入謝、上曰、去京師幾何、曰、八千里、上曰、卿到彼、善惡朕皆知之、勿謂其遠、此階前即萬里也」一「一」はもと管子の語、萬里も近く階前に在るが如く明知するをいふ、
 【解題】 書籍の題目を解説する義、その著者卷數及び内容沿革等を説明するを主とす、宋の陳振孫の直齋

【海内】 國內をいふ。戰國策に「今欲併天下、凌萬乘、誦強國、制一子、元元、臣諸侯、非兵不可」

【解嘲】 人の嘲笑(アザケリ、ワラフ)するを辨解する

義、漢の揚雄の作りし文章の名、續文章軌範に載す、その序に「人有嘲雄以、玄之尙白、雄解之、號曰『嘲通音、テウ』」

【效唾珠ヲ凝ス】 極めて寒くして效(シハブキ)唾ツバキ)が皆凝りて珠となる義、抱朴子に「嚴冬之夜、素雪隨于上、玄冰結于下、寒風催條而宵駭、效唾凝珠于唇、物本編の咳唾自ラを參看せよ、

【街談巷語】 市中の「ツマラス」「ハナシ」をいふ、漢書藝文志に「小説家者流蓋出於稗官、一、道聽塗說者之所造也」また曹植の與楊修書には「街談巷說必有可采、

【解紐】 結びたる「ヒモヲ、トク」事の「ユルビタル」に喩ふ、干寶の晉紀總論に「名實反錯、天綱一、

【階梯】 「ハシゴダン」易の繫辭に「亂之所生也、則言語以爲階」の疏に「階梯也、言亂之所生、則由言語以爲亂之一也」也す、べて事の起る基となる義、また學藝などの「テビキ」の義に用ふ、韓愈の詩に「將舉汝愆尤、以

顧炎武の日記録と略相似たり、
【炕】 正字通に「北地煖牀曰」北盟會編に「環爲土屋牀、熾火其下、相與寢食起居其上、謂之一、以取其煖」
【夏雨】 「ナツノアメ」皎然の詩に「前林一歇爲我生涼風」
【項羽】 漢書項籍傳に「籍字羽、下相人」晉書吐谷渾傳に「吐延雄姿魁傑、羞虜憚之、號曰一、本編の四面楚歌)を見よ、
【行雲流水】 一定せし形質なく、種種に移り行きて滯ることなきに喩ふ、宋史蘇軾傳に「一、一、初無定質」文章の「スラスラ」と、滯りなきに喩ふ、
【膏ヲ焚キ晷ニ繼グ】 (焚膏繼晷)晷は日影なり、油を「モヤシ」て日に繼ぎて勤むるをいふ、韓愈の進學解に「焚膏油以繼晷」
【肮ヲ搯シ背ヲ拊ツ】 (搯肮拊背)本編の(其ノ肮ヲ搯シ)を見よ、
【高歌】 大聲にて歌ふ、舊唐書裴度傳に「一、一、放言以詩酒琴書自樂」
【豪家】 富みて勢力ある家、史記呂不韋傳、趙一、女也、
【豪街】 蠻夷の邸のある處、漢書甘延壽陳湯傳に「縣頭一、蠻夷邸間」注に「一、一、ハ街名、蠻夷ノ邸、此ノ街

爲己一、
【階梯】 本編の(凱弟)を見よ、
【海土】 海内の土地をいふ、說苑貴德篇に「武王以積德有」
【解頭】 一國一州にて第一等の學生をいふ、事文類聚に「黃魯直得洪州一、赴省試、解元、發解に同じ、
【海濱】 「ウミベ」書經禹貢に「厥土白墳、一、廣斥濱は涯なり、
【崖蜜】 「ガケ」の巢中に醸せる蜂蜜、演繁露に「一、者蜂之釀蜜、即峻崖懸壁、其窠不可攀取、人伺其窠蜜成、熟用長杆繫木桶、度可相及、則以杆刺窠、窠破、蜜注桶中、南方草木狀に「楊梅青時極酸、既紅味如」
【開洋】 「フナデ」俗にいふ、出帆なり、圖書編に「遼河口一、順風、一日至鐵山、開江ともいふ、龍圖公案に「登舟開江」
【陰餘叢考】 四十三卷、清の趙翼著す、その小引に「余黔西ヨリ養歸ヲ乞ヒ、問視ノ暇、仍ホ故業ヲ理メ、得ル所ヲアレバ、輒チ別紙ニ割記シ、積ミテ四十餘卷ヲ得タリ、其ノ陰ニ循ヒシ時ニ輯セシヲ以テ一、一、ト曰フ」と、陰とは詩經の南陔の序に「南陔、孝子相戒以養也」の義に取る、書中史學に關する考證多し、その體は

ニ在ルナリ、邸ハ今ノ鴻臚客館ノ若キナリ、豪は亦豪に作る、
【愴慨】 感激して「ナゲク」本編の(四面楚歌)を見よ、愴慨に同じ、
【慷慨死ニ赴クハ易シ】 憤を發して死に就くは容易なりとの義、宋の謝枋得(疊山)の御聘書に「司馬子長有言、人莫不有一死、或重於泰山、或輕於鴻毛、先民程子を斥す、語は近思錄に出づ、廣其說曰、慷慨赴死、易從容就義、難云云」
【航海梯山】 海をわたり、山に「ハシゴ」を架けて登る、海山の險を越えて外國へ使するにいふ、梁の簡文帝の大法頌序に「一、一、奉白環之使」
【好漢】 「ヨキヲノコ」「ヒトカド」の役に立つ好き人物をいふ、舊唐書狄仁傑傳に「則天嘗問仁傑曰、朕要一、一、一、任使、有乎、仁傑曰、荊州長史張柬史、其人雖老、真宰相才也」
【綱鑑易知錄】 九十二卷、清の吳乘權字ハ楚材撰す、別に朱國標の編せし明鑑易知錄十五卷あり、今之を合刻して一部と爲す、この書は編年體の歴史にして、通鑑の煩を刪り、歷代の事實を知り易からしめんとために作る、和版あり、

【抗顔爲師】「タカブリ」たる顔にて人の師となる、柳宗元の答韋中立論師道書に、今之世、不聞有師、有師、譁笑之、以爲狂人、獨韓愈奮不顧流俗、收召後學、因抗顔而爲師

【郊寒島瘦】唐の孟郊(字東野)の詩は寒乞の相あり、賈島(字浪仙)の詩は瘦衰の氣あるをいふ、蘇軾の祭柳子玉文に見ゆ、本編の「元輕白俗」を見よ、

【香氣】「ヨキニホヒ」大智度論に、譬如妙高、一人賣、一人買、旁人在邊、亦得「一」

【浩氣】盛大流行せる正氣をいふ、本編の「浩然」(丹心萬古)を見よ、

【康熙字典】四十二卷、清の聖祖の康熙五十五年(1700)に成る、大學士張玉書等勅を奉じて撰す、凡そ十二集、一百十九部に分つ、簡明目録に、六書ニ根據シ、百氏ヲ蒐羅シ、字毎ニ其ノ聲音訓詁ヲ詳ニス、皆今ノ韻ヲ先ニシ古ノ韻ヲ後ニシ、正義ヲ先ニシ旁義ヲ後ニス、又備サニ古文ヲ載セ、以テ其ノ本ニ遡リ、兼ネテ俗體ヲ列シ、以テソノ譌ヲ訂ス、義例精密、考證賅洽、説文玉篇ヨリ以下歷代ノ字書、此レ其ノ總匯ナリ

【皋夔稷契何ノ書ヲカ讀ムベキ】皋陶、夔、稷、契の四人は堯帝の時の名臣なり、この時、文籍未だ備はらずし

【高克明】絳州の人、宋の大中祥符中、藝を以て進みて

鳳凰子「宿麒麟于西園」
圖畫院に入り、遷りて待詔となる、釋道人物花竹草蟲鳥獸皆精妙にいたる、喜みて佳山水の間に遊び奇を搜り古を訪ひ、幽を窮め、絶を探り、終日歸を忘る、故に筆を落せば、則ち胸中の邱壑盡く目前に在り、是を以て諸家の美を採擷し、參して一藝の精を成す、時人勢力を以て其の筆を求むる者、未だ必ずしも答せず、人と爲り端愿謙厚、矜持を事とせず、且つ財を疏んじ、義を好む、畫流輩にありて未だ得易からざるなり(畫史彙傳)

【康濟】民を安んじ、スクフ、書經蔡仲之命に、以蕃王室、以和兄弟、「一」小民

【行裝】旅支度なり、墨客揮犀に「行李、謂行人也、今人乃謂「一」爲行李、非也」

【行藏】出でて道を行ふと、退きて隠ると、本編の「用舍「一」」を見よ、

【巧詐ハ拙誠ニ如カズ】(巧詐不如拙誠)巧に詐るは、拙くとも誠なるに及ばずとの義、魏志劉曄傳に引ける諺

【香山】舊唐書白居易傳に、會昌中以刑部尙書致仕、

て讀むべき書あらず、されば人は讀書のみに依頼すべきにあらざるをいふ、宋史、參政趙抃、無如王安石、何、惟稱「苦苦而已、安石折朴、曰、君輩坐不讀書耳、抃曰、皋夔稷契何書可讀、安石亦不能對、早は皋の俗字、

【豪舉】盛んなる「フルマヒ」史記信陵君傳に「平原君之遊、徒「一」耳」班固の西都賦に「鄉曲「一」游俠之雄」

【高科】高尚なる試験の科をいふ、舊唐書元載傳に「天寶初、下詔求明、莊老文列四子之學者、載策入「一」

【膏火】「アブラノヒ」莊子に「山木自寇也、「一」自煎也」蘇軾の詩に「十年讀易費「一」盡日吟詩愁肺肝」

【講貫】業を習ふ義、講習に同じ、國語に「士朝而受業、晝而「一」爾雅釋詁に「貫、習也」

【膏血】人の「アブラ」と血と、唐書陸贄傳に見ゆ、宋史王禹偁傳に「竭、生民「一」以奉無用之土木」

【皓月】明かに輝る月、開見前録に「一」夜盈、軒李白の友人會宿詩に「良宵宜清談、「一」未能寢」

【康健】身體の「スコヤカ」なる義、金史張行信傳に「初至汴、父暉以御史大夫致仕、猶「一」

【高彦敬】本編の「高克恭」を見よ、

【巧言如簧】本編の「誰カ知ラン」を見よ、

【高梧】「セイノタカキ、アヲギリ」後漢書馬融傳に「棲

與「一」僧如滿、結香火社、每肩輿往來、白衣鳩杖自稱

「一」居士、本編の「香爐峰」を參看せよ、

【香山居士】本編の「白居易」を見よ、

【高山之巔無美木】本編の「大樹ノ下ニ」を見よ、

【仰止】瞻望なり、仰ぎ慕ふ義にも用ふ、詩經小雅車棗篇に「高山「一」景行行止、止は助辭なり、景行は大道なり、

【皓齒】白く美しくし齒、韓非子に「曼理「一」悅情、而損精、司馬相如の美人賦に「雲髮豐豔、蛾眉「一」本編の「明眸「一」」を見よ、

【高士】志高くして、仕官せざる士、史記魯仲連傳に「齊國之「一」

【講習】學業を修むる義、講も亦習なり、易の下象傳に「麗澤兌、君子以朋友「一」

【校人】池沼を主る小吏、孟子萬章上篇に「子產使「一」畜之池」

【考信錄】三十六卷、考信翼錄十卷、清の崔述(字ハ武承東壁ト號ス、直隸省大名ノ人、嘉慶二十一年卒ス、年七十七)撰す、古代儒教の史論なり、「一」は前録四卷、正録二十卷、後録十二卷に分つ、前録には「一」提要及び補上古「一」あり、正録には唐虞夏商周の事を載

す文武周公孔子の事は最も詳述せり。後録には周代の政事の盛衰及び制度等を論じ、孔子の門人の事、孟子の傳記等を述べ、翼録は一一の羽翼たるべき考證を述べ、引據洽博儒學に補益するもの多しとす。自序に「居今日、欲考唐虞三代之事、是非必折衷於孔孟、真偽必取信於詩書、而聖人之真可見、聖人之道可見也」と、以て書に名づけたる所以を知るべし。

【香車】「スグレテ、ウツクシキ」車、李邕の春賦に「跨浮雲之寶騎、頓流水之——」陳嘉元の上元夜詩に「寶馬金爲絡、——玉爲輪、香輦は天子の車をいふ。

【衡湘】衡山と湘水と、韓愈の柳子厚墓誌に「——以南、爲進士者、皆以子厚爲師、歐陽修の送廖倚序に「元氣之融結、爲山川、山水之秀麗稱、——」

【綱常ヲ扶植ス】(扶植綱常)三綱五常の道を「タスケ」タツル、本編の(南八、男兒)を見よ。

【高尚書】本編の(高克恭)を見よ。

【交讓木】本編の(——)を見よ。

【好爵】「ヨキクラキ」易の中孚の九二に「我有——、吾與爾靡之。」

【皓首】白首に同じ、李陵の答蘇武書に「丁年奉使、——而歸。」

【篙手】舟子をいふ、篙は舟を行る「サ」ヲ鼠璞に「海濤呼——爲長年、按杜詩長年三老歌聲裏、白晝擲錢高浪中、古今詩話謂、川陝以——爲三長老、蓋推——船之最尊者、言之篙人、篙子、篙工皆同じ、本編の(篙師)を見よ。

【孝筍】(孟宗竹)を見よ。

【好色】美色なり、大學に「如好、好色、また女色を好む」とす、本編の(賢ヲ賢トシ)を見よ。

【巧拙】巧みなるを拙きと、魏の曹丕の論文に「至于引氣不齊、——有素、雖父兄不能以遺子孫。」

【香雪】香ある雪、花に喩へていふ、韓偓の白菊詩に「正憐——飛千片、忽訝殘紅覆一叢、黃庚の春寒詩に「怪得曉來風力勁、滿階——落梨花。」

【交睫】(睫ヲ交フ)睫は「マツゲ」——は寐ぬる義、漢書爰盎傳に「盎曰、陛下居代時、太后嘗病三年、陛下不——解衣。」

【交代】官吏任滿ちて甲乙交代する義、漢書蓋寬饒傳に「及歲盡、——自請願復留。」

【巧智】巧みに「スグレタル」智識、莊子天道篇に「——神聖之人。」

【交質】(質ヲ交フ)互に人質を取りかはす義、左傳隱

三年に「周鄭——」を見よ。

【高枕】本編の(枕ヲ高クシ)を見よ。

【更張】琴の調子の合はざるをば、あらためて張りかふる義、轉じて弛び廢れたる事を盛んに興すに用ふ、漢書董仲舒傳に「竊譬之琴瑟不調、甚者必解而——之、適可、鼓也。」

【考亭】もと地名、朱子の住せしにより、朱子の異稱ともす、宋史の朱子傳に「少依父友劉子羽、寓建之崇安、後徙建陽之——、箴瓢屨空晏如也」本編の(——書院)を見よ。

【高弟】優れたる弟子、史記禮書に「子夏聖門之——也。」

【好鳥】「ヨキネノトリ」吳均の與朱元思書に「泉水激石、冷泠作響、——相鳴、嚶嚶成韻、唐庚の醉眠詩に「餘花猶可醉、——不妨眠。」

【高鳥盡良弓藏】本編の(狡兎死シテ)を見よ。

【鋼鐵】「ハガネ」本草に「以生柔相雜和、用以作刀劍、鋒刃者、爲——。」

【香南雪北】香山の南、雪山の北にて佛の居る地をいふ、傳燈錄に「問金粟如來爲什麼、卻降釋迦會裏、曰香山南、雪山北、長水金剛窟裏、南瞻部洲、從中向北、有

九里山、次有大雪山、次有香醉山、於雪北香南、有阿耨池。

【康寧】患難なく「ココロヤスシ」書經洪範に「九五福、一曰壽、二曰富、三曰——、四曰攸好德、五曰考終命、易林に「冠帶垂衣、天下——。」

【高年】高壽に同じ、漢書武帝紀に「于鄉里、先者艾、奉——古之道也。」

【衡茅】衡門(カブキモン)茅屋なり、貧者の住居をいふ、陶潛の詩に「養真——下、白居易の詩に「吾亦忘青雲、——足容膝。」

【孝ハ妻子ニ衰フ】本編の(禍ハ懈惰)を見よ。

【好文木】梅の異名、晉の起居注に「晉武好文、則梅開、廢學、則梅不開。」

【首ヲ俛シ耳ヲ帖ル】(俛首帖耳)人の卑屈にして他の憐を乞ふ狀を大に喩へていふ、本編の(尾ヲ搖シ)を見よ。

【濠濮閒想】世俗を離れて仙境に在る如き想、世説に「簡文入華林園、顧謂左右曰、會心處、不必在遠、翳然林木、便自有——、覺鳥獸禽魚、自來親人。」

【夏雲】「ナツノクモ」宣和書譜に「釋懷素觀——隨風頓悟筆意、自謂得草書三昧、本編の(春水滿)を見よ。

【高名】 高き名、後漢書嚴光傳に「少有^一、與光武^一、同遊學^一」

【膏藥】 「アブラグスリ」後漢書段翳傳に「翳明^一、風角^一、有^一、一生來學積年、自謂略究^一、要術^一、辭歸^一、鄉里^一、翳爲合^一、并以^一、簡書^一、封^一、于筒中^一」

【行餘】 人の道を行ひし餘力をいふ、論語學而篇に「子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、行有餘力、則以^一、學^一、文^一」

【行樂】 本編の(人生ハ—)を見よ、

【康樂】 「ヤスク、タノシム」周禮小行人に「—和親^一」

【蛟龍】 「ミヅチ」四足ありて頸細く鱗あり、本編の(應龍)を見よ、

【網領】 「オホヅナ」と衣の「エリ」と、すべて物事の大體本領をいふ、また文章などの主要なる處をいふ、魏志陳矯傳に「摻^一、—舉^一、大體^一、晉書刑法志に「較^一、舉^一、上下^一」

【香爐】 香を焼く器、西京雜記に「丁緩作^一、九層博山^一、—、鏤^一、以^一、奇禽怪獸^一」

【行路難】 道路の艱難を以て世渡りの困苦に喩へていふ、晉書袁山松傳に「因^一、舊歌^一、有^一、—、乃^一、文^一、其辭^一、每醉^一、

【呵呵大笑】 大に笑ふ、晉書石季龍載記に「直言^一、呵呵^一、使^一、舉^一、會^一、看^一、尸^一、大笑^一、而去^一、傳燈錄にも「—の語見ゆ、

【驚眼】 錢の異名、唐書食貨志に「兩京錢有^一、—、吳萊^一、の古錢詩に「五銖半兩日以變、榆莢^一、—、爭^一、相^一、緣^一、宋書顏竣傳にも見ゆ、

【嘉氣】 「メデタキ」氣、李商隱の文に「歡聲雷動、—、雲^一、高^一、

【下九】 毎月十九日をいふ、採蘭雜志に「九爲^一、陽數^一、古人以^一、二十九日^一、爲^一、上^一、九^一、初九日^一、爲^一、中^一、九^一、十九日^一、爲^一、下^一、九^一、毎月十九置酒、爲^一、婦女^一、之^一、歡^一、(藏^一、鉤^一)を見よ、

【家畜】 家に飼ふ動物、犬牛の類、大學に「伐^一、冰^一、之^一、家^一、不^一、畜^一、牛^一、羊^一」

【家禽】 家に畜ふ鳥なり、梁書何胤傳に「胤常^一、禁^一、殺^一、有^一、異鳥^一、如^一、鶴^一、紅^一、色^一、集^一、講^一、堂^一、馴^一、狎^一、如^一、—、焉^一」

【河魚之疾】 腹の疾をいふ、左傳宣十二年に「河魚^一、腹^一、疾^一、奈何^一、河魚^一、の腐^一、るは内よりして外に及ぶ、故に喩ふ、

【閣下】 「タカドノ」の「モト」漢書嚴延年傳に「免^一、冠^一、頓^一、首^一、—、良久^一、また大臣の尊稱、因話錄に「古者三公開閣^一、郡守比^一、古^一、諸^一、侯^一、亦^一、有^一、閣^一、故^一、皆^一、稱^一、—、也^一」

【構和】 構一音コウ和睦なり、互に怨をすてて相親しむ義、構一に講に作る、説文に「講^一、和^一、解^一、ナリ^一、史記平原君虞卿傳に「不如^一、發^一、重^一、使^一、而^一、爲^一、構^一、注に「和ヲ求ムルヲ構トイフ^一、唐書に「講^一、和^一、以^一、休^一、息^一、胡銓の上高宗封事に「檜^一、曰^一、虜^一、可^一、講^一、和^一、近亦曰^一、可^一、和^一」

【荷葉】 「ハチスノハ」王勃の夏日登韓城樓序に「—、滋^一、而^一、曉^一、露^一、繁^一、竹^一、院^一、靜^一、而^一、炎^一、氣^一、息^一、高^一、適^一、の^一、漁^一、父^一、歌^一、に^一、笛^一、皮^一、笠^一、子^一、—、衣^一、心^一、無^一、所^一、營^一、守^一、釣^一、磯^一」

【夏屋】 大なる家屋、詩經秦風權輿篇に「—、渠^一、渠^一、夏^一、は^一、大^一、な^一、り、渠^一、渠^一、は^一、深^一、廣^一、の^一、貌^一、

【可^一、ヲ^一、獻^一、ジ^一、否^一、ヲ^一、替^一、ツ^一】 (獻可替否)左傳昭二十二年に「臣^一、獻^一、其^一、可^一、以^一、去^一、其^一、否^一、國語に「史^一、黯^一、謂^一、趙^一、簡^一、子^一、曰^一、事^一、君^一、者^一、諫^一、過^一、而^一、賞^一、善^一、薦^一、可^一、以^一、替^一、否^一、獻^一、能^一、而^一、進^一、賢^一、本編の(獻替)を見よ、

【河ヲシテ帶ノ如クナラシム】 (使河如帶)本編の(山厲河帶)を見よ、

【牙牙】 女子の「カハユラシキ」聲、司空圖の文に「女則—、學^一、語^一、元^一、好^一、問^一、の^一、詩^一、に^一、—、嬌^一、語^一、總^一、堪^一、誇^一、」

【鶴駕】 皇太子の車をいふ、列仙傳に「王子喬^一、周^一、靈^一、王^一、太^一、子^一、晉^一、也^一、吹^一、笙^一、作^一、鳳^一、鳴^一、後^一、於^一、緱^一、氏^一、山^一、乘^一、白^一、鶴^一、而^一、去^一、故^一、太^一、子^一、之^一、駕^一、曰^一、—、也^一」

【學宮】 學舎なり、漢書に「何^一、武^一、行^一、部^一、先^一、卽^一、—、見^一、諸^一、生^一、試^一、其^一、誦^一、論^一、問^一、以^一、得^一、失^一、也^一」

【學窮】 「ツマラス」學者をいふ、自警編に「宋^一、太^一、宗^一、欲^一、相^一、趙^一、普^一、或^一、譖^一、之^一、曰^一、普^一、山^一、東^一、—、惟^一、能^一、讀^一、論^一、語^一、耳^一」

【角巾】 隱者の「カブル」頭巾、郭林宗が途にて雨に遇ひ、頭巾の一角が折りて林宗巾と曰ひしこと、後漢書に「頭巾の一角が折りて林宗巾と曰ひしこと、後漢書に見ゆ、この故事に本づく、

【學科】 學藝の種類、唐書儒學傳序に「優^一、—、先^一、經^一、義^一、黜^一、進^一、士^一、後^一、文^一、辭^一」

【格外】 例外なり、「ナミハヅレ」南史王綸之傳に「—、之^一、官^一、便^一、今^一、日^一、爲^一、重^一、」

【鶴脛】 「ツルノハギ」皮日休の小松詩に「葉^一、健^一、似^一、虬^一、鬚^一、枝^一、脆^一、如^一、—、本^一、編^一、の^一、(鶴^一、脛^一)を見よ、

【格言】 法則とすべき言、法言に同じ、三國志崔季珪傳に「此^一、周^一、孔^一、之^一、—、また孔子家語五儀篇に「口^一、不^一、吐^一、訓^一、格^一、之^一、言^一、」

【格五】 圍碁の類、「ゴモクナラベ」漢書に「吾^一、丘^一、壽^一、王^一、以^一、

【客歲】 前年の義、劉世教合刻李杜全集序に「南邁

【學者】 學問する人、孟子滕文公上篇に「北方一、未

能之先也」

【樂章】 音樂に用ふる歌禮記曲禮に「復常讀」

【客舍青柳色新】 本編の(陽關)ノ曲を見よ、

【鶴書】 「メシブミ」鶴頭書ともいふ、文選李善の注に

「一ハ招版ノ用フル所、漢ニ在リテハ之ヲ尺一簡

トイフ、鶴頭ニ髣髴タリ故ニ稱ス」孔稚圭の北山移文

に「鳴騶入谷、一赴隴、張九齡の詩に「聖朝巖穴、選應

待、一微鶴版また鶴簡ともいふ、

【學生】 生徒なり、後漢書靈帝紀に「光和二年始置鴻

都門一、

【愕然】 「オドロク」貌、史記留侯世家に「良一欲、

【閣道】 二階作りの廊なり、史記秦始皇紀に「周馳爲

一、自殿下、直抵南山、また「カケハシ」の如く高く

つくりし道、岑參の送郭僕射節制劍南詩に「劍門乘

險過、一踏、空行」

【愕眙】 「オドロク」後漢書班固傳答賓戲に「雖輕信與

標、猶一而不敢階」

【學長】 學生の長をいふ、能改齋漫錄に「真宗乃命張

者爲一、

【學積ミテ聖ヲ成ス】 本編の(土積ンデ)を見よ、

【樂ニ成ル】 (成於樂)本編の(詩ニ興リ)を見よ、

【是ノ如ク我レ聞ク】 本編の(如是我聞)を見よ、

【鶴髮】 白髪をいふ、庾信の竹枝賦に「一難皮、蓬頭

歷齒、歐陽修の詩に「錦衣白日還、家樂、一高堂獻、壽

時本編の(年年歳歳)を見よ、

【學費】 學校の入費、廣治平略に「宋朝郡縣田租屋課息

錢之類、以爲一、

【鶴眠】 李白の尋雍導師隱居詩に「花暖青牛臥、松高

白一、

【家訓】 一家の訓戒なり、後漢書邊讓傳に「鬻、風、孤、

不盡、一北齊書顏之推傳に「之推有文三十卷、撰、一

二十篇、竝行於世、庭訓に同じ、

【鶴鳴】 「ツルノナキゴエ」墨子に「禽子問曰、多言有益

乎、對曰、蝦蟇日夜鳴、口乾而人不聽、之、鶴雖、時夜鳴、而

天下振動、多言何益乎、張籍の詩に「月出溪路靜、一雲

樹深、本編の(鶴九皋)を見よ、

【樂羊】 本編の(子ヲ食ヒ)を見よ、

【閣老】 大臣をいふ、唐は中書舍人、また給事中をい

に「小兒輩、一、皆學、逸少書、法書苑には、

厭を輕に作る、本編の(家雞ヲ)を見よ、

【家雞野鷲】 家に飼ふ雞と、野に棲む「アヒル」と、以て筆

蹟などの平正なるものと、珍異なるものとに比す、蘇

軾の書劉景文所藏王子敬帖、絕句に「一、一、同登

組、春蚓秋蛇、總入、本編の(家雞ヲ輕ンジ)を見よ、

【雅潔】 「ミヤビ」にて「イサギヨシ」元史戴表元傳に「其

文清深、一化、陳腐、爲、神奇、

【影ニ愧ヂズ】 (不愧影)獨行影ニ)を見よ、

【影ノ形ニ從フガ如シ】 (如影之從形)事の速かなるに

喩ふ、本編の(響應)を見よ、

【嘉言】 「ヨキコト」書經伊訓に「聖謨洋洋、一孔彰、

【雅言】 雅は常なり、常に口にせる語、論語述而篇に

「子所、一詩書執禮、皆、一也、また「タダシキコト」

出師表に「咨、詔、善道、察、納、一、

【家公】 己の父をいふ、易林に「卒成禍亂、災及、一、

【佳公子】 品格の良き「ワカト」史記平原君傳贊に「平

原君翩翩濁世之、一也、

【餓虎之蹊】 「ウエタル」虎の往來する「コミチ」極めて危

險なる處に譬ふ、史記刺客傳に「是謂、委、肉、當、一、

禍必不振矣」

ひ、明は宰相をいふ、國史補に「宰相相呼爲、堂老、兩省

相呼爲、閣老、唐書楊綰傳に「故事、舍人年久者爲、一、

【鶴林寺ノ杜鵑花】 本編の(殷七七)を見よ、

【角力】 力を「クラブル」韓非子外儲說に「少室周爲、趙

襄王力士、與、中牟徐子、一、不若也、

【角力戲】 事物紀原に「史記ニ秦二世甘泉宮ニ在、樂

ヲ作シ、角力併優ノ戲ヲ爲ス、其ノ後、漢武帝此ノ戲ヲ

好ム、即チ今ノ相撲ナリ、文獻通考に「壯士裸袒シテ相

搏チテ勝負ヲ角ス(中略)角力ノ遺ナルカ、

【鶴唳】 鶴の「ナキゴエ」晉書陸機傳に「歎曰、華亭一、

豈可復聞乎、本編の(風聲)一)を見よ、

【嶽蓮】 華山また衡山をいふ、本編の(華山)また芙蓉

峯を見よ、杜甫の詩に「雲斷、一臨、大路、天晴、宮柳暗、

長春、我が國にては富士山を稱す、

【雅懷】 「ミヤビナル」心、李白の春夜宴從弟桃園序に

「不有佳作、何申、一、

【娥皇女英】 堯の二女の名、書經の「觀、厥刑、於、二女、の

疏に「劉向列女傳云、二女長曰、娥皇、次曰、女英、舜既升

爲、天子、娥皇爲、后、女英爲、妃、博物志に「舜、二妃、一、

一、爲、湘水神、

【家雞ヲ厭ヒテ野雉ヲ愛ス】 (厭家雞愛野雉)晉中興書

【佳作】 詩文のよく出来たるをいふ、北史馮熙傳に「賈

元壽撰北芒寺碑、孝文稱爲

【夏山蒼翠如滴】 本編の(春山笑)を見よ、

【下視】 高さ處より下を視る、舊唐書王方慶傳に「山徑

危險、石路曲狹、上瞻駭目、一寒心、魏瓘の詩に「側

聆天上語、一飛鳥背」

【賈子】 一に新書ともいふ、十卷、漢の賈誼撰す、原本

五十八篇ありしも、散佚して傳はらず、後の好事者、誼

の本傳に載する所を取り、その文を離析し以て五

十八篇の數に足ししならん、朱熹曰く「賈誼新書、除

了漢書中所載、餘亦難得粹者、看來只是賈誼一雜記

稿耳、本編の(賈誼)を參看せよ、

【遐邇】 遐は遠、邇は近なり、文選司馬相如の難蜀父

老に「一一體、中外禮福」

【佳人】 美人をいふ、淮南子に「一不同體、美人不同

面、而皆悅於目、蘇軾の薄命一詩に「自古一多命

薄、閉門春盡楊花落、本編の(漢ノ李夫人)を見よ、

【家信】 故郷の家より來りし信書、獨異志に「晉陸雲在

吳、久不得一

【下情】 下民の「ヤウス管子明法篇に見ゆ、

【家常飯】 俗にいふ茶漬飯といふ如し、造作なき義に

喻ふ、獨醒雜志に「范文正公云、一好喫、また五燈會

元に「佛祖言句、如家常茶飯」

【家塾】 古者二十五家を閭とし、同じく一巷に住す、閭

門の側の堂を塾といひ、閭中の道德ある者を左右兩

塾の師とし、朝夕出入に教を受けしむ、禮記學記に「古

之教者、家有塾」

【嘉瑞】 「メデタキ、キザシ」吉兆なり、春秋の「西狩獲

麟」の注に「麟者仁獸、聖王之也」

【歌吹海】 歌舞音曲などの盛んなる場所、陸游の詩に

「憶在錦城一、七年夜雨不曾知、笙歌海に同じ、

【河水清、マント欲スレバ沙石之ヲ穢ス】 本編の(日月

明カナラン)を見よ、

【家數】 人の一家を成せるをいふ、墨子尚同篇に「天下

爲一也、甚多」

【麗億ノミナラズ】 (麗不億) 其の數の極めて多きをい

ふ、詩經大雅文王篇に「商之孫子、其」

【風ヲ係影ヲ捕フ】 (係風捕影) 「ツカマヘドコロ」な

く到底得べからざるに喩ふ、係は繫に同じ、漢書郊祀

志に「求之盪盪如」終不可得」

【風ニ御シテ行ク】 (御風而行) 風に乗りて空を行く、本

編の(風穴)を見よ、

【風ニ順フ】 (順風) 風の吹く方に従ふ、史記游俠傳に

「如一而呼、聲非加疾、其勢激也」

【假設】 「タトヒ」と讀む、現在に有る事にてはなけれ

ども、假ニ設ケテイフ、辭なり、漢書賈誼傳に「一陛下

居齊桓之處」

【佳節ニ逢フ毎ニ倍親ヲ思フ】 (每逢佳節) 本編の(遙ニ

知ル)を見よ、

【迦葉】 本編の(拈華)を見よ、

【嫁鼠】 「ネズミノヨメイリ」清の梁玉繩の清白士集の

「一詞の自注に「俗傳除夕鼠嫁女、竊履爲、輒、戲作

此詞」

【家屬】 家内の人人をいふ、史記盧縮傳に「燕王許論

他人、以脱張勝一

【加餐】 餐一音、サン「ノミクヒ」は多く飲食する

義にて、身を大切にすることをいふ、後漢書桓榮傳に「願君

慎疾、一重愛玉體、古詩に「努力加餐飯」

【形格勢禁】 本編の(元ヲ批キ)を見よ、

【夏蟲不可以語於冰】 本編の(井底ノ蛙)を見よ、

【葛衣】 「クズカタビラ」史記の自序に「夏日一、冬日

鹿裘、白居易の夏日作に「一疎且單、紗帽輕復寬」

【渴驥】 「ノドノカワケル」駿馬、本編の(怒猊ノ)を見よ、

【葛巾】 「クズ」にてつくりし頭巾、宋書陶潛傳に「郡將

候潛、值其酒熟、取頭上一漉酒、畢還復著之、李白

の詩に「素琴本無絃、漉酒用一」

【褐寬博】 褐は毛布、寬博は寛大の衣、賤民の服、より

て下賤なる者をいふ、孟子公孫丑上篇に「不受於一

一亦不受於萬乘之君、視、刺、萬乘之君、若刺褐夫、

【渴】 力盡きて「ツマツク」なり、荀子議兵篇に「遠者

一而趨之」

【葛洪】 本編の(抱朴子)を見よ、

【渴者易爲飲】 本編の(飢エタル者)を見よ、

【合戰】 兩軍相「タタカフ」荀子に「一用力而敵退」

【葛天氏】 支那の太古に於ける人皇氏以後に君臨せし

もの、史記三皇紀に「自人皇已後、有燧人氏、渾沌氏、有

巢氏、一、無懷氏、斯蓋三皇已來、有天下者之號」

【褐夫】 毛布を被る賤しき者(褐寬博)を見よ、

【家庭】 家の内をいふ、李攀龍の報吳濟南書に「翁撫

之膝下、經學相難、異聞互發、一之美、室構之樂、快何

如哉、熙朝樂事の除夜の條に「一舉、燕則長幼咸集、兒

女終夜博戲、藏鉤、謂之守歲、また欽定書經に引くとこ

ろ宋の時瀾の堯典解に「四岳之舉、指一之事、而

言之、堯之試舜、亦於一之事、而觀之」

【河圖】 本篇の(洛書)を見よ。

【河豚】 フグ。宋史張根傳に「性至孝、母嗜河豚及蟹、母終、根不復食、輟耕錄に「水之鹹淡相交處、產河豚、魚類也、中略味極佳、煮治不精、則能殺人、浙西惟江陰人尤珍之。」

【嘉納】 「ヨロコビテ、キキイレル」後漢書朱暉傳に「深見、嘉納」

【鼎銘】 禮記に「夫鼎有銘、銘者自名也、自名以稱揚其先祖之美、而名著之後世者也」左傳に「正考父佐戴武宣、三命滋益共、故其一云、一命而僂、再命而偃、三命而俯、循牆而走、亦莫予敢侮、饁於是、鬻於是、以餬予口」

【鵝ニ換フ】 (換鵝)王和論書表に「義之性好鵝、山陰曇嶺村有一道士、養鵝十餘、王清旦、乘小船、故往、意大願樂、乃告求、市易、道士乃言、性好、道久欲寫、河上公老子、而無人能書、府君若能屈書、道德經兩章、便合、羣以奉、義之便住半日、爲寫畢、籠鵝而歸」本編の(王羲之)を見よ。

【合一】 合せて一となる義、唐書地理志に「至隋滅陳、天下始合爲一」

【峽雨】 峭しき山と山との間を峽といふ、ハザマその

【甲首】 甲を被る者の首にて、雜兵の首と異り、左傳桓六年に「獲其二帥、大良、小良、一三百、以獻於齊」

【甲冑】 カツチウと讀む、甲は、ヨロヒ、鎧なり、冑は、カブト、兜蓋なり、易の説卦傳に「離爲甲」

【峽中】 「ハザマ」の「ナカ」杜甫の苦熱詩に「一都似火、江上只空雷」

【合肥】 漢書地理志に「九江郡、縣一、李鴻章の郷里、

【合璧】 漢書律歷志に「日月如一、五星如連珠」

【甲螺】 首領また頭目の義、國語の「カシラ」を支那人が漢字に當てたるなり、清の林謙光の臺灣紀略序に「天啓改元有、顏思齊者、爲日本國一、引、倭會歸一、屯臺灣、閩人鄭芝龍附之」

【歸リテ細君ニ遺ル】 本編の(東方朔)を見よ。

【加俸】 俸給を増す、會典に「匠官一、

【嘉謀】 「ヨキハカリゴト」本編の(嘉猷)を見よ。

【巖峯先生】 本編の(孫奇逢)を見よ。

【鷺毛雪】 鷺鳥の毛の如き白雪をいふ、白居易の詩に「可憐今夜一、引得高情鶴鷺人」

【上漏下濕】 上は雨漏り、下は濕る、貧家をいふ、莊子讓王篇に「原憲居環堵之室、一、匡坐而鼓、淮南

處の雨をいふ、杜甫の晚晴詩に「江虹明遠飲、一、落餘

【流焉】 流は急なり、事の速なる貌、楚辭に「寧溘死以流亡、文選江淹の恨賦に「朝露溘至、握手何言」

【閣下】 身分の高き人を敬ひていふ辭、韓愈の與于襄陽書に「謹奉書尚書一、坊本閣を閣に作る、五雜組に「閣ト閣ト、世人多ク之ヲ混用ス、閣ハ夾室ナリ、板ヲ以テ之ヲ爲ル、亦樓觀ノ別名ナリ(中略)閣ハ門旁ノ小戸ナリ、漢ノ公孫弘、東閣ヲ開キテ以テ賢人ヲ延ク、蓋シ庭門ニ當ルヲ避ケ、而シテ東向シテ一小門ヲ開キ、賓客ヲ引キ、以テ屬官ニ分ツ、然レバ則チ夾室之ヲ閣トイヒ、門ニ傍フ之ヲ閣ト爲ス、義自ラ昭然タリ」

【合格】 一定の格式に叶ふ義、易林に「鳴鑿四牡、駕出行狩、一、有獲、獻公飲酒」

【假婦戲】 俳優が婦人の服装をなして演ずる戲、今の歌舞伎なり、文獻通考に「一、唐太中以來、孫乾飯、劉璃瓶、郭外春、孫有態、善爲此戲」

【歌舞伎】 舞曲をする人、後世、カブキ、シバキの略語に用ふ、唐書宗室傳に「一、百餘假婦戲とも書く、

【甲科】 試験の成績を甲乙丙に分つ、一、は最優等なり、漢書何武傳に「武詣博士、受業治、易、以射策、一、

【巖邑】 巖は險なり、險要の「ムラ」左傳隱元年に「制一也、號叔死焉」

【紺宇】 寺をいふ、宋之問の幸少林寺應制詩に「一、横天室」

【含英咀華】 本編の(英ヲ含ミ)を見よ。

【顔ヲ歸フノ人ハ亦顔ノ徒ナリ】 (歸顔之人) 本編の(顔ノ徒)を見よ。

【姦ヲ發シ伏ヲ擿ス】 (發姦擿伏) かくれたる姦惡の罪を「アバキ」出す、本編の(發擿)を見よ。

【寒溫】 時候見舞をいふ、寒暄に同じ、晉書王獻之傳に「獻之與、徽之、俱詣、謝安、二兄多言、俗事、獻之、而已」五代史孫晟傳に「爲、人口吃、遇人不能、道寒暄、已而坐定、談鋒鋒生」

【干戈】 干は盾、戈は矛(ホコ)詩經の大雅公劉篇に「弓矢斯張、一、威揚、爰、方啓行、威は小き斧、揚は大なる斧、

また轉じて戰爭の義に用ふ、本編の(干戈ヲ)を見よ。

【坳坳】 平かならざる貌、又「フシアハセ」ナヤム論衡に「夷、一、爲、均平、坎坳に同じ、

【坳坳】 前に同じ、馮衍の顯志賦に見ゆ、坳坳に同じ、